

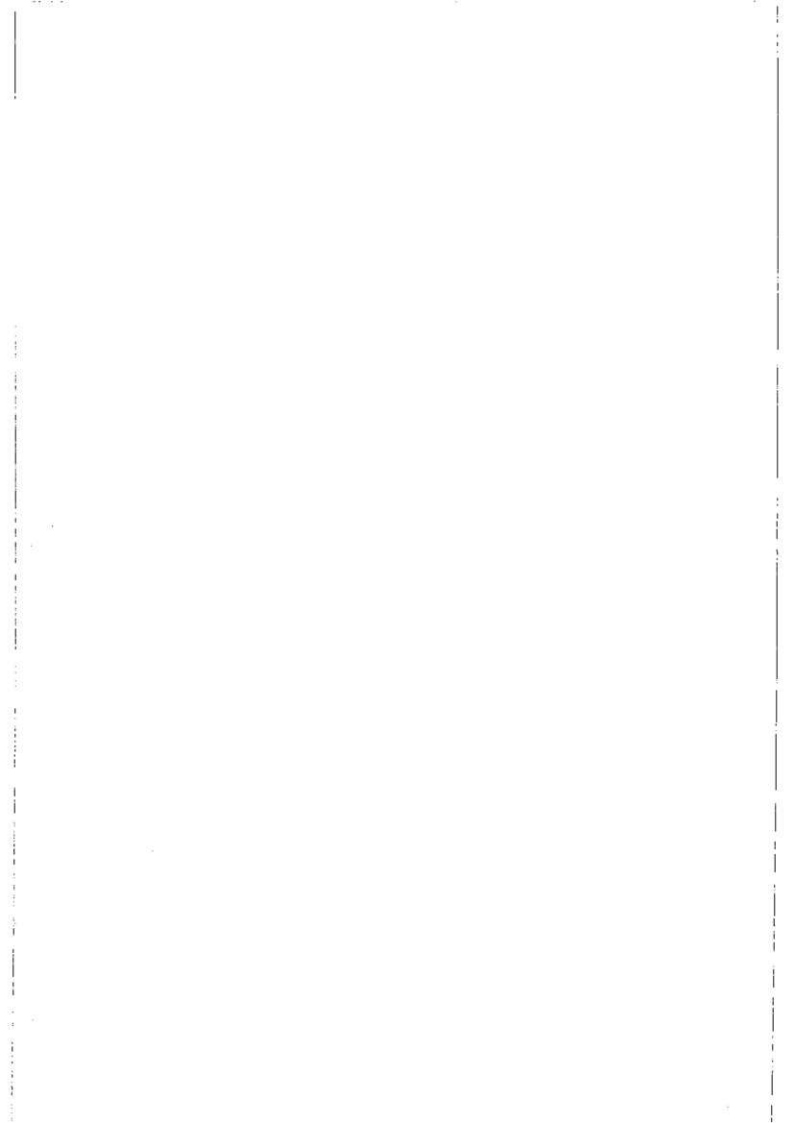
函館市

中野 A 遺跡

—函館空港拡張工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

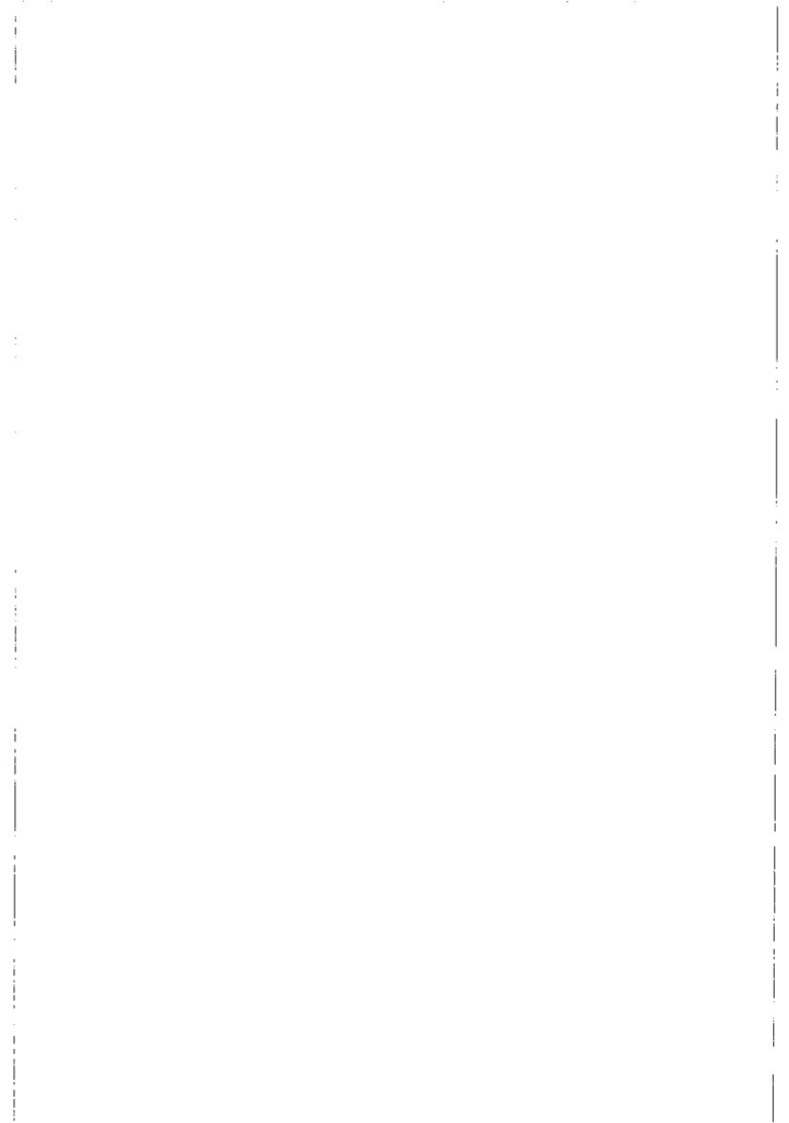
平成3年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



平成3年度 中野A遺跡報告書正誤表

頁	行	誤	正
100	7	18は、	21は、
154	8	見られる。	見られる。5は砥石。
177	右下	□ 礫	□ 安山岩
"	"	● 石器	● 片岩
"	"	▲ 土器	▲ 玄武岩
"	"	★ 磨製石器	★ 蛇紋岩
215	3	109点と少ない。	107点と少ない。
"	31	36点を認めた。	37点を認めた。
221	32	118点出土	119点出土
224	12	50点、	51点、
"	16	39個体	30個体
226	34	頁岩(2点)・材質不明	頁岩(2点)・砂岩(2点)・ 軽石(2点)・安山岩(1点) ・材質不明
286	表1	(H-9合計)1762	1763
"	"	(H-11砥石)11	10
"	"	(H-11石鏃)3	4



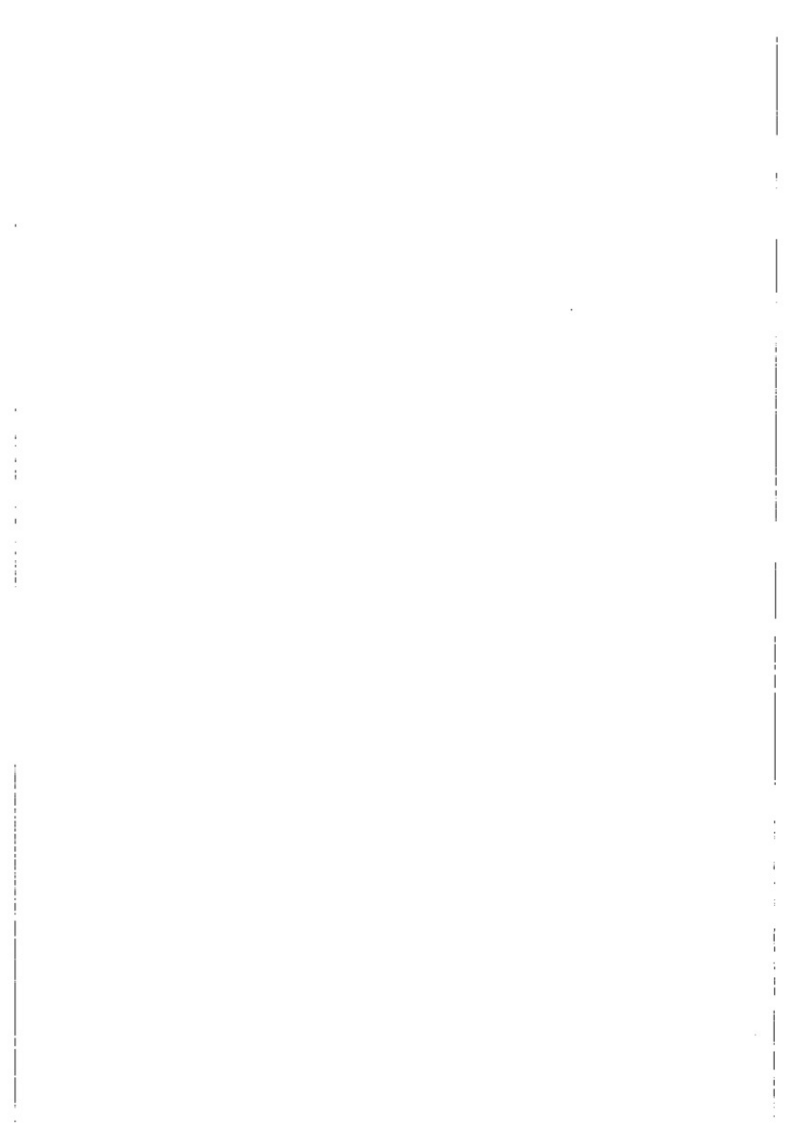
函館市

中野 A 遺跡

— 函館空港拡張工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 3 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





遺跡周辺の空中写真（東から）



住居跡群（手前からH-3・6・1：南東から）



縄文時代早期の貝殻文土器



研磨石材・擦切残片・磨製石器

例 言

1. 本書は、平成3年度に、函館空港拡張工事用地内において、財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査を実施した、函館市中野A遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 調査および報告書の作成は、調査部調査第4課が行った。図版作成、原稿執筆等の分担については、遺構のうち堅穴住居跡は、精査を担当した調査員が、それぞれ検出状況等の説明を執筆(H-4・5・7・10・12; 和泉田毅、H-2・9・13・14; 熊谷仁志、H-8・11; 森岡健治、H-1・3・6; 西脇対名夫)、遺構出土の土器については遠藤香澄が、石器については西脇対名夫が分担、執筆した。そのほかの各章・節の執筆の担当は、以下のとおりである。

I 1~3, II 2・3・6, IV 3, VI 2(1), あとがき 高橋和樹、I 5(1), III 4, V 1 和泉田毅、I 4(3)・5(2)i), IV 1, V 2 遠藤香澄、I 4(1)(2), II 1, III 2, 熊谷仁志、III 3 森岡健治、I 4(3)・5(2)ii), III 5 西脇対名夫

3. VI章の各種分析・同定は下記のとおり委託した。

1 "C年代測定; 山田 治(京都産業大学理学部)、2 炭化植物種子分析の一部;(有)道南文化財研究所、3 脂肪の分析;(株)ズコーシャ

4. VI章の各種分析・同定のうち下記については、次の方々に学術的解析をお願いし、報告をご執筆いただいた。

2 炭化植物種子の同定; 吉崎昌一・榎坂恭代(北海道大学埋蔵文化財調査室)

5. 火山灰の分析および石材鑑定は、花岡正光(調査第2課)が行った。

6. 現地の写真撮影は、和泉田毅・熊谷仁志・森岡健治・西脇対名夫が、遺物の写真撮影は、森岡健治が行った。写真台帳・アルバムの整理、写真図版の作成は、主に尾美里子が従事した。

7. 遺構図は、調査員が作成したものを、和泉田毅が整理し、トレースした。

8. 遺物分布図、集計表等の整理・作成には主に小杉敏子・田川幸子・山木良子・大坂篤美・前川紀子が従事し、熊谷仁志が統括した。

9. 土器の接合、復元、拓本には、主に種市伊津子・貝田和子・山木良子・高橋慶子・手嶋敦子・前川紀子が従事し、土器の実測・トレースは、小林晴美・山下かず子が行い、これらの作業は遠藤香澄が統括した。

10. 石器の接合、計測、集計等には、主に千田照子・波多野にな子・岡田千秋が従事し、石器の実測・トレースは、小林晴美・山下かず子・木下昭仁・藤内まゆみ・高田京子・岡崎ゆかり・千田照子・波多野にな子・岡田千秋・栗山麻子が行い、これらの作業は西脇対名夫が統括した。

11. 一部のフローテーション試料の大まかな選別作業には、大坂篤美・前川紀子が従事した。

12. 口絵1の航空写真は、シン航空写真株式会社より提供を受けた。

13. 調査にあたっては、下記の機関および人々の指導ならびに協力を得た(順不同、敬称略)。

文化庁 井上和人・原田昌幸・土肥 孝、奈良国立埋蔵文化財研究所 佐原 真・牛嶋 茂、東京国立博物館 松浦有一郎、福島県文化財保護審議会 中村五郎、北海道教育委員会 木村尚俊・畑 宏明・種市幸生・大沼忠春・長沼 孝・田中哲郎・森 秀之、函館市教育委員会 波佐谷慶雄・清水廣美・中村公宣・佐藤智雄・高橋光博・池田敏春、函館市土木部空港対策課 木村孝男・磯部憲一、市立函館博物館 田原良信、函館市北方民族資料館 長谷部一弘、函館市立図書館、七飯町教育委員会 石本省三、上磯町教育委員会 森 靖裕・落合治彦・松野儀一・野辺地初雄・大矢内

愛史、戸井町教育委員会 古屋敷則雄、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田裕二・山口 敦、木古内町教育委員会 鈴木正語・菅野文二・三上英則、森町教育委員会 藤田 登、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一、知内町教育委員会 高橋豊彦、松前町教育委員会 久保 泰、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斎藤邦典、乙部町教育委員会 森 広樹、江差町教育委員会 藤島一巳、今金町教育委員会 寺崎康史、寿都町教育委員会 内山真澄、俱知安町教育委員会 矢吹俊男、余市町教育委員会 宮 宏明、小樽市教育委員会 大島秀俊、札幌市教育委員会 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久、千歳市教育委員会 田村俊之・高橋 理・豊田宏良、恵庭市教育委員会 上屋真一・松谷純一、江別市教育委員会 高橋正勝・直井孝一・園部真幸・野中一宏・稻垣和幸、石狩町教育委員会 石橋孝夫・工藤義衛、苫小牧市教育委員会 佐藤一夫・宮夫増夫・工藤 肇・渡辺俊一・二階堂啓也・鈴木耕栄・赤石慎二・大泉博嗣、静内町教育委員会 古原敏弘、三石町教育委員会 前田正憲、浦河町教育委員会 谷岡康孝、旭川市教育委員会 齊藤 傑・瀬川拓郎・友田哲弘、富良野市教育委員会 杉浦重信、名寄市教育委員会 氏江敏文・鈴木邦輝、枝幸町教育委員会 佐藤隆広、紋別市教育委員会 佐藤和利、常呂町教育委員会 武田 修、斜里町教育委員会 金盛典夫、羅臼町教育委員会 涌坂周一、浦幌町教育委員会 後藤秀彦、帯広百年記念館 北沢 実、釧路市立郷土博物館 澤 四郎・西 幸隆・松田 猛・石川 朗、北海道開拓記念館 野村 崇・平川善祥・山田悟郎・右代啓視・手塚 薫・三野紀雄・赤松守雄・小林幸雄、国立歴史民俗学博物館 西本豊弘、東京大学常呂研究室 宇田川洋、同大学院 新美倫子、早稲田大学 金子浩昌、慶応大学 江坂輝弥・阿部祥人、国学院大学 小林達雄、北海道教育大学函館分校 千代 肇、札幌大学 木村英明、札幌医科大学 百々幸雄・大島直行・石田 肇、北海道大学 吉崎昌一・椋坂恭代・菊池俊彦・林 謙作・天野哲也、青森県教育委員会 三宅徹也、青森県立郷土館 福田友之、青森県埋蔵文化財調査センター 成田滋彦・三浦圭介、八戸市博物館 大野 亨、八戸市教育委員会 小笠原善範、函館中部高校 原田 豊、亀田中学校 畑中義和、札幌市 横山英介、函館市 石田昭男

凡 例

1. 遺構は、以下の記号によって表記し、原則として発掘調査順に番号を付した。

H：竪穴住居跡 P：土壇・土墳墓 T：Tピット F：焼土 X：礫の集中
F・C：剝片集中 HF：住居に伴う炉跡 HP：住居に伴う小ピット SP：小ピット

2. 遺構図中の方位は真北を、レベルは標高（単位 m）を示す。

3. 実測図等の縮尺は原則的には以下のとおりで、変則的なものについては随時スケールをいれた。

遺物分布図	発掘区	1：80	遺 構	1：40	遺構実測図	1：40
土器実測図		1：4			土器拓影図	1：3
石器実測図	剝片石器	1：2	礫石器	1：3	土 偶	1：1

4. 遺構の規模は、以下のように計測値を表示した。

確認面での長軸長/床(墳底)面での長軸長×確認面での短軸長/床(墳底)面での短軸長×確認面での最大深さ（単位 m）

5. 土層図中では、土層の混合状態を表現するため、以下の記号を使用した。

A≈B；AとBがほぼ同量混じる。 A>B；AにBが少量混じる。
A>>B；AにBが微量混じる。

目 次

口絵 1～4 (カラー)

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	1
4 調査の方法	9
(1) 発掘区の設定	9
(2) 発掘調査の方法	9
(3) 整理の方法	10
5 遺構・遺物の分類	11
(1) 遺構	11
(2) 遺物	11
i) 土器	11
ii) 石器	12
6 遺跡の概要	15
II 遺跡の位置と環境	19
1 位置と周辺の遺跡	19
2 地形・地質	22
3 土層	25
III 遺構と遺構出土遺物	31
1 竪穴住居跡	31
2 土壇	152
3 Tピット	164
4 焼土	169
5 その他の遺構	171
IV 包含層出土の遺物	189
1 土器	189
2 石器	215
3 土・石製品	251
V まとめ	253
1 遺構	253
2 土器	257
VI 自然科学的分析	267
1 液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定結果	267
2 炭化植物種子	268

(1) 試料の採取と分析の依頼について.....	268
(2) 中野A遺跡から発掘された縄文時代早期の炭化植物種子.....	269
3 中野A遺跡の土壌に残存する脂肪の分析.....	275
4 中野A遺跡の火山灰の対比と明赤褐色土の成因(予察)	281
あとがき.....	283
引用・参考文献.....	284
一覧表.....	286
写真図版(モノクロ)	301

挿 図 目 次

図 I - 1	遺跡の位置	2	図 III-24	遺物接合図	69
図 I - 2	函館空港用地内の遺跡の位置	4	図 III-25	H-4 出土土器 (1)	73
図 I - 3	函館空港用地内の遺構の分布	5	図 III-26	H-4 出土土器 (2)	74
図 I - 4	平成3年度中野A遺跡発掘調査 区設定図	8	図 III-27	H-4 出土土器 (3)	75
図 I - 5	地形測量図・遺構位置図	17	図 III-28	H-4 出土土器 (1)	76
図 II - 1	周辺の遺跡	20	図 III-29	H-4 出土土器 (2)	77
図 II - 2	発掘調査区の位置と周辺の地形	23	図 III-30	H-4 出土土器 (3)	78
図 II - 3	遺跡周辺の地形と地質	24	図 III-31	H-4 出土土器 (4)	79
図 II - 4	基本土層模式図	25	図 III-32	H-4 出土土器 (5)・石製品	80
図 II - 5	土層断面図 (N-6-68区西壁 ～N-7-63区西壁)	27	図 III-33	H-5 実測図	83
図 II - 6	土層断面図 (M-7-47区北壁 ～M-7-77区北壁)	29	図 III-34	遺物分布図	85
図 III - 1	住居跡の位置図	31	図 III-35	遺物接合図	87
図 III - 2	H-1 実測図	33	図 III-36	H-5 出土土器	89
図 III - 3	遺物分布と接合図	35	図 III-37	H-5 出土土器 (1)	90
図 III - 4	剥片集中	38	図 III-38	H-5 出土土器 (2)	91
図 III - 5	H-1 出土土器	39	図 III-39	H-5 出土土器 (3)	92
図 III - 6	H-1 出土土器	39	図 III-40	H-6 実測図	95
図 III - 7	H-2 実測図	41	図 III-41	遺物分布図 (1)	96
図 III - 8	遺物分布と接合図	43	図 III-42	遺物接合図 (2)	98
図 III - 9	H-2 出土土器	45	図 III-43	遺物接合図	99
図 III - 10	H-2 出土土器 (1)	46	図 III-44	剥片集中	101
図 III - 11	H-2 出土土器 (2)	47	図 III-45	H-6 出土土器	102
図 III - 12	H-3 実測図	49	図 III-46	H-6 出土土器 (1)	103
図 III - 13	遺物分布図	51	図 III-47	H-6 出土土器 (2)	104
図 III - 14	遺物接合図 (1)	52	図 III-48	H-6 出土土器 (3)	105
図 III - 15	遺物接合図 (2)	53	図 III-49	H-7 実測図	107
図 III - 16	H-3 出土土器展開図	57	図 III-50	遺物分布と接合図	109
図 III - 17	剥片集中	58	図 III-51	H-7 出土土器	110
図 III - 18	H-3 出土土器	59	図 III-52	H-7 出土土器	110
図 III - 19	H-3 出土土器 (1)	60	図 III-53	H-8 実測図	112
図 III - 20	H-3 出土土器 (2)	61	図 III-54	遺物分布と接合図	113
図 III - 21	H-3 出土土器 (3)	62	図 III-55	H-8 出土土器	114
図 III - 22	H-4 実測図	65	図 III-56	H-8 出土土器	114
図 III - 23	遺物分布図	67	図 III-57	H-9 実測図	117
			図 III-58	遺物分布と接合図 (1)	118
			図 III-59	遺物分布と接合図 (2)	119

図III-60	H-9	出土土器 (1).....	123	図III-97	遺物分布と接合図.....	173
図III-61	H-9	出土土器 (2).....	124	図III-98	X-1 出土土器.....	173
図III-62	H-9	出土土器 (3).....	125	図III-99	X-1 出土土器.....	174
図III-63	H-9	出土土器 (4).....	126	図III-100	X-2 実測図.....	176
図III-64	H-9	出土土器 (1).....	127	図III-101	遺物分布と接合図 (1).....	177
図III-65	H-9	出土土器 (2).....	128	図III-102	遺物分布と接合図 (2).....	178
図III-66	H-9	出土土器 (3).....	129	図III-103	X-2 出土土器.....	178
図III-67	H-10	実測図.....	131	図III-104	X-2 出土土器 (1).....	180
図III-68		遺物分布と接合図.....	132	図III-105	X-2 出土土器 (2).....	181
図III-69	H-10	出土土器.....	133	図III-106	剥片集中位置図.....	182
図III-70		剥片集中.....	134	図III-107	剥片集中 (1).....	184
図III-71	H-10	出土土器.....	134	図III-108	剥片集中 (2).....	185
図III-72	H-11	実測図.....	136	図III-109	剥片集中出土遺物.....	186
図III-73		遺物分布と接合図.....	137	図IV-1	発掘区別出土遺物点数.....	190
図III-74	H-11	出土土器 (1).....	140	図IV-2	発掘区別出土土器点数.....	191
図III-75	H-11	出土土器 (2).....	141	図IV-3	包含層出土復元土器接合図.....	193
図III-76	H-11	出土土器 (1).....	141	図IV-4	I群B類土器 (1).....	201
図III-77	H-11	出土土器 (2).....	142	図IV-5	I群B類土器 (2).....	202
図III-78	H-12	実測図.....	143	図IV-6	I群B類土器 (3).....	203
図III-79	H-13, 14	実測図.....	146	図IV-7	I群B類土器 (4).....	204
図III-80		遺物分布と接合図.....	147	図IV-8	I群A類・B類 (5)土器.....	205
図III-81	H-13	出土土器.....	149	図IV-9	I群B類土器 (6).....	206
図III-82	H-14	出土土器.....	150	図IV-10	I群B類土器 (7).....	207
図III-83	H-13, 14	出土土器.....	151	図IV-11	I群B類土器 (8).....	208
図III-84		土壌実測図と出土遺物 (1).....	157	図IV-12	I群B類土器 (9).....	209
図III-85		土壌出土遺物 (2).....	158	図IV-13	I群B類土器 (10).....	210
図III-86		土壌実測図と出土遺物 (3).....	159	図IV-14	I群B類 (11)・C類 (1)土器	211
図III-87		土壌実測図と出土遺物 (4).....	160	図IV-15	I群B類 (12)・C類 (2)・ D類土器.....	212
図III-88		土壌出土遺物 (5).....	161	図IV-16	II群土器 (1).....	213
図III-89		土壌実測図と出土遺物 (6).....	162	図IV-17	II群土器 (2)・III群土器.....	214
図III-90		土壌出土遺物 (7).....	163	図IV-18	発掘区別出土土器等総数 (1).....	216
図III-91	Tピットの分布図と実測図 (1)		165	図IV-19	発掘区別出土土器等総数 (2).....	217
図III-92	Tピット実測図 (2).....		166	図IV-20	分類別分布・接合関係図 (1).....	218
図III-93	Tピット実測図と出土遺物 (3)		167	図IV-21	分類別分布・接合関係図 (2).....	219
図III-94	Tピット実測図と出土遺物 (4)		168	図IV-22	分類別分布・接合関係図 (3).....	220
図III-95		焼土実測図.....	170	図IV-23	石鏃・石槍・石錘.....	229
図III-96	X-1 実測図.....		172	図IV-24	篋状石器.....	230
				図IV-25	掘器・削器 (1).....	231

図IV-26	削器 (2).....	232
図IV-27	削器 (3).....	233
図IV-28	削器 (4)・挟入石器.....	234
図IV-29	石匙・石匙形石器.....	235
図IV-30	未分類剥片石器 (1)非調整品	236
図IV-31	未分類剥片石器 (2)非調整・ 背面調整・腹面調整品.....	237
図IV-32	未分類剥片石器 (3)両面調整品	238
図IV-33	磨製石斧 (1).....	239
図IV-34	磨製石斧 (2).....	240
図IV-35	磨製石斧 (3)・擦切残片.....	241
図IV-36	研磨石材.....	242
図IV-37	たたき石・すり石 (1).....	243
図IV-38	すり石 (2).....	244
図IV-39	すり石 (3).....	245
図IV-40	砥石 (1).....	246
図IV-41	砥石 (2).....	247
図IV-42	石鏃・未分類鏃石器.....	248
図IV-43	石鏃 (1).....	249
図IV-44	石鏃 (2).....	250
図IV-45	土偶.....	251
図IV-46	その他の遺物.....	252
図V-1	住居跡の新旧関係図.....	254

図V-2	柱穴状小ピットの位置と傾き (1)	254
図V-3	柱穴状小ピットの位置と傾き (2)	255
図V-4	H-4 出土の植物遺体と 炭化材分布図.....	256
図V-5	I群B類土器集成 (1)	260
図V-6	I群B類土器集成 (2)	261
図V-7	I群B類土器集成 (3)	262
図V-8	文様模式図.....	263
図V-9	I群B類土器集成 (4)	265
図VI-1	キハダ属・クルミ属検出遺構 分布図.....	268
図VI-2	出土炭化植物種子.....	274
図VI-3	土壌試料採取地点.....	275
図VI-4	土壌試料に残存する脂肪の 脂肪酸組成.....	276
図VI-5	土壌試料に残存する脂肪の ステロール組成.....	277
図VI-6	試料中に残存する脂肪の 脂肪酸組成樹状構造図.....	278
図VI-7	試料中に残存する脂肪酸組成 による種特異性相関.....	279
図VI-8	試料採取地点の地質柱状図.....	282

表 目 次

表I-1	遺構規模一覧.....	16
表II-1	周辺の遺跡一覧.....	21
表III-1	剥片集中集計表.....	38
表III-2	H-3 覆土2層剥片集中 集計表.....	56
表III-3	H-3 覆土3層剥片集中 集計表.....	57
表III-4	小ピット一覧.....	72
表III-5	小ピット一覧.....	92
表III-6	H-6 剥片集中集計表.....	101
表III-7	小ピット一覧.....	108
表III-8	小ピット一覧.....	133

表III-9	H-10 剥片集中集計表.....	135
表III-10	小ピット一覧.....	144
表III-11	Tピット一覧.....	164
表III-12	剥片集中集計表.....	187
表III-13	剥片集中集計表.....	187
表III-14	剥片集中集計表.....	187
表III-15	剥片集中集計表.....	187
表III-16	剥片集中集計表.....	188
表III-17	剥片集中集計表.....	188
表V-1	分類別個体数.....	258
表VI-1	1991年度函館市中野A遺跡出土 炭化植物遺体表.....	270

表VI- 2	1991年度函館市中野A遺跡	
	H-4 出土炭化植物遺体表	271
表VI- 3	土壌試料の残存脂肪抽出量	276
表VI- 4	土壌試料に分布するコレステロール とシトステロールの割合	277
表VI- 5	火山灰・土壌の構成粒子	
表 1	遺構の出土遺物一覧	286
表 2	包含層の出土遺物一覧	286

表 3	遺構別出土遺物一覧	287
表 4	遺構の掲載土器一覧	290
表 5	遺構の掲載石器一覧	292
表 6	包含層の掲載土器一覧 早期	296
表 7	包含層の掲載土器一覧 前期・晩期	297
表 8	包含層の掲載石器一覧	298
表 9	包含層の掲載土・石製品一覧	

図 版 目 次

図版 1	遺跡の遠景	303
1	遺跡の遠景 (南西から)	
2	遺跡周辺の空中写真 (東から)	
図版 2	調査風景 (1)	304
1	表土除去・杭打ち作業 (東から)	
2	調査区東側斜面の調査 (北から)	
3	遺物取り上げ作業 (南東から)	
図版 3	調査風景 (2)	
図版 4	住居跡群	306
1	H-3・6・1 全景 (南東から)	
2	H-5・4・7 全景 (南東から)	
図版 5	H-1 の調査 (1)	307
1	床面の遺物出土状況 (南西から)	
2	完掘 (北東から)	
3	柱穴 (西から)	
図版 6	H-1 の調査 (2)	308
1	HP-1 完掘 (北東から)	
2	剥片集中出土状況 (北東から)	
3	調査状況 (北東から)	
図版 7	H-2 の調査	309
1	遺物出土状況 (北西から)	
2	完掘 (北西から)	
図版 8	H-3 の調査 (1)	310
1	検出 (南西から)	
2	セクション (南から)	
3	セクション (北西から)	
4	セクション (西から)	
図版 9	H-3 の調査 (2)	311

1	一括検出土状況 (南西から)	
2	壁際の剥片集中出土状況 (北から)	
3	床面の剥片集中出土状況 (北東から)	
4	遺物出土状況 (南東から)	
図版10	H-3 の調査 (3)	312
1	HP-9 セクション (西から)	
2	HP-9 完掘 (南東から)	
3	床面出土の遺物 (北西から)	
4	土壌サンプリング風景 (南東から)	
5	完掘 (南東から)	
図版11	H-4 の調査 (1)	313
1	遺物出土状況 (西から)	
2	床面出土の遺物 (南西から)	
図版12	H-4 の調査 (2)	314
1	壁際のセクション (西から)	
2	壁際の遺物出土状況 (西から)	
3	HF-1 セクション (南西から)	
4	完掘 (南東から)	
図版13	H-5 の調査	315
1	完掘 (南東から)	
2	床面出土の遺物 (北東から)	
3	遺物出土状況 (北東から)	
4	HF-1 セクション (南から)	
図版14	H-6 の調査 (1)	316
1	遺物出土状況 (南東から)	
2	石鏝出土状況 (南東から)	
3	剥片集中出土状況 (北東から)	
4	剥片集中の遺物	

図版15 H-6の調査(2) 317

- 1 HP-1, HF-1 検出 (東から)
- 2 HP-4 の遺物出土状況 (南東から)
- 3 完掘 (南東から)

図版16 H-7の調査 318

- 1 遺物出土状況 (西から)
- 2 完掘 (北から)

図版17 H-8の調査 319

- 1 完掘 (東から)
- 2 HF-1 セクション (西から)
- 3 HP-1 セクション (南から)
- 4 HP-2 セクション (南から)
- 5 HP-6 セクション (南東から)
- 6 HP-7 セクション (東から)

図版18 H-9の調査 320

- 1 遺物出土状況 (南から)
- 2 完掘 (南から)

図版19 H-10の調査 321

- 1 完掘 (南東から)
- 2 遺物出土状況 (南東から)
- 3 床面出土の遺物 (北から)
- 4 HF-1・2 のセクション (南西から)

図版20 H-11の調査(1) 322

- 1 遺物出土状況 (西から)
- 2 セクション (北から)
- 3 セクション (北から)

図版21 H-11の調査(2) 323

- 1 HP-1 の遺物出土状況 (南東から)
- 2 HP-1 周辺の柱穴 (南東から)
- 3 完掘 (北西から)

図版22 H-12の調査 324

- 1 完掘 (南東から)
- 2 HF-1 セクション (南西から)

図版23 H-13・14の調査 325

- 1 完掘 (北西から)
- 2 H-14遺物出土状況 (南東から)
- 3 H-14完掘 (南から)
- 4 H-13遺物出土状況 (西から)

図版24 土壌(P)の調査(1) 326

- 1 P-1 遺物出土状況 (南から)

- 2 P-1 完掘 (南から)
- 3 P-2 完掘 (南東から)
- 4 P-3 完掘 (南東から)
- 5 P-3 遺物出土状況 (東から)

図版25 土壌(P)の調査(2) 327

- 1 P-4 完掘 (南西から)
- 2 P-5 完掘 (西から)
- 3 P-6 遺物出土状況 (北東から)
- 4 P-6 完掘 (北西から)
- 5 P-7 遺物出土状況 (南東から)
- 6 P-7 完掘 (北西から)

図版26 土壌(P)の調査(3) 328

- 1 P-8 セクション (北から)
- 2 P-8 完掘 (北から)
- 3 P-9 セクション (南西から)
- 4 P-9 完掘 (北西から)
- 5 P-10 セクション (南西から)
- 6 P-10 完掘 (南から)

図版27 Tピットの調査(1) 329

- 1 Tピット列(T-1・5・3・2:北西から)
- 2 T-2 検出 (南西から)
- 3 T-2 完掘 (西から)
- 4 T-1 セクション (南から)
- 5 T-1 完掘 (南西から)

図版28 Tピットの調査(2) 330

- 1 T-3 完掘 (南から)
- 2 T-4 完掘 (南東から)
- 3 T-5 完掘 (西から)
- 4 T-6 完掘 (東から)

図版29 Tピットの調査(3) 331

- 1 Tピット列(T-7・8・4:東から)
- 2 T-7 完掘 (北から)
- 3 T-8 完掘 (北東から)
- 4 T-9 完掘 (北東から)
- 5 T-10 完掘 (東から)
- 6 T-11 完掘 (東から)

図版30 焼土(F)・礫の集中(X)の調査
..... 332

- 1 F-1 検出 (南から)
- 2 F-1 セクション (南東から)

3	F-2 検出 (南西から)	4	H-5 の土器 (図Ⅲ-36-4)
4	F-2 セクション (南西から)	5	H-6 の土器 (図Ⅲ-45-1)
5	X-1 遺物出土状況 (南西から)	6	H-6 の土器 (図Ⅲ-45-2)
6	X-2 遺物出土状況 (北から)	図版37	H-6・7 の土器 339
図版31	剥片集中の調査 333	1	H-6 の土器 (図Ⅲ-45-4)
1	剥片集中4の出土状況 (北東から)	2	H-6 の土器 (図Ⅲ-45-5)
2	剥片集中5の出土状況 (東から)	3	H-6 の土器 (図Ⅲ-45-3)
3	剥片集中3の出土状況 (西から)	4	H-6 の土器 (図Ⅲ-45-6)
4	剥片集中出土の石器	5	H-7 の土器 (図Ⅲ-51-1)
5	剥片集中3の被熱した遺物	6	H-7 の土器 (図Ⅲ-51-2)
図版32	H-1・2 の土器 334	図版38	H-9 の土器 (1) 340
1	H-1 の土器 (復元前)	1	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-1 a)
2	H-1 の土器 (図Ⅲ-5-1 a)	2	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-2)
3	H-2 の土器 (図Ⅲ-9-1 a)	3	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-4)
4	H-2 の土器 (図Ⅲ-9-1 b)	4	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-3)
図版33	H-3 の土器 335	5	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-6)
1	H-3 の土器 (図Ⅲ-18-1)	6	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-5)
2	H-3 の土器 (図Ⅲ-18-2)	図版39	H-9 の土器 (2) 341
3	H-3 の土器 (図Ⅲ-18-3)	1	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-7)
4	H-3 の土器 (図Ⅲ-18-4)	2	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-8)
5	H-3 の土器 (図Ⅲ-18-5)	3	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-9)
6	H-3 の土器 (図Ⅲ-18-6)	4	H-9 の土器 (図Ⅲ-60-10)
図版34	H-3・4 の土器 336	5	H-9 の土器 (図Ⅲ-61-11)
1	H-3 の土器 (図Ⅲ-18-7)	6	H-9 の土器 (図Ⅲ-61-12)
2	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-1)	図版40	H-9~11・13・14 の土器 342
3	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-2)	1	H-9 の土器 (図Ⅲ-61-13)
4	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-3)	2	H-9 の土器 (図Ⅲ-61-14)
5	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-4 a)	3	H-10 の土器 (図Ⅲ-69-1)
6	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-5)	4	H-11 の土器 (図Ⅲ-74-1 a)
図版35	H-4 の土器 337	5	H-11 の土器 (図Ⅲ-74-2)
1	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-6)	6	H-14 の土器 (図Ⅲ-82-1 a)
2	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-7)	7	H-13 の土器 (図Ⅲ-81-1)
3	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-8)	図版41	H-14, P-1 の土器 343
4	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-9)	1	H-14 の土器 (図Ⅲ-82-2)
5	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-10)	2	H-14 の土器 (図Ⅲ-82-3)
6	H-4 の土器 (図Ⅲ-25-11)	3	H-14 の土器 (図Ⅲ-82-4)
図版36	H-5・6 の土器 338	4	H-14 の土器 (図Ⅲ-82-5)
1	H-5 の土器 (図Ⅲ-36-1)	5	H-14 の土器 (図Ⅲ-82-6)
2	H-5 の土器 (図Ⅲ-36-3)	6	P-1 の土器 (図Ⅲ-84-1)
3	H-5 の土器 (図Ⅲ-36-2)	図版42	P-3・7, X-2 の土器 344

1	P-3の土器 (図Ⅲ-85-1)	
2	P-3の土器 (図Ⅲ-85-2)	
3	P-7の土器 (図Ⅲ-87-1)	
4	P-7の土器 (図Ⅲ-87-2)	
5	X-2の土器 (図Ⅲ-103-1)	
6	X-2の土器 (図Ⅲ-103-2)	
図版43	H-2・3の土器片	345
1	H-2の土器片	
2	H-3の土器片	
図版44	H-4の土器片 (1)	346
図版45	H-4の土器片 (2)	347
図版46	H-5・6の土器片	348
1	H-5の土器片	
2	H-6の土器片	
図版47	H-7~9の土器片	349
1	H-7・8の土器片	
2	H-9の土器片	
図版48	H-9の土器片	350
図版49	H-9・10の土器片	351
1	H-9の土器片	
2	H-10の土器片	
図版50	H-11の土器片	352
図版51	H-13・14, P-3の土器片	353
1	H-13・14の土器片	
2	P-3の土器片	
図版52	P-9, T-6・7・9, X-1の土器片	354
1	P-9の土器片	
2	T-6・7・9, X-1の土器片	
図版53	H-1・2の石器	355
1	H-1の石器	
2	H-2の石器	
図版54	H-2の石器	356
図版55	H-3の石器 (1)	357
図版56	H-3の石器 (2)	358
1	H-3の石器	
2	HP-9出土の石器	
3	剥片集中の遺物	
図版57	H-4の石器 (1)	359
1	H-4の石器①	
2	H-4の石器②	
図版58	H-4の石器 (2)	360
図版59	H-4の石器 (3)	361
図版60	H-4の石器 (4)	362
1	H-4の石器	
2	H-4の石製品	
図版61	H-5の石器 (1)	363
図版62	H-5の石器 (2)	364
図版63	H-6の石器 (1)	365
1	H-6の石器①	
2	H-6の石器②	
図版64	H-6の石器 (2)	366
図版65	H-6の石器 (3)	367
図版66	H-7・8の石器	368
1	H-7の石器	
2	H-8の石器	
図版67	H-9の石器 (1)	369
図版68	H-9の石器 (2)	370
図版69	H-10の石器	371
1	H-10の石器	
2	床面出土の剥片	
図版70	H-11の石器	372
1	H-11の石器①	
2	H-11の石器②	
図版71	H-11・13・14の石器	373
1	H-11の石器	
2	H-13・14の石器	
図版72	P-3・7の石器	374
1	P-3の石器	
2	P-7の石器	
図版73	P-8・10の石器	375
図版74	X-1の石器	376
図版75	X-2の石器	377
図版76	包含層の土器 (1)	378
1	包含層の土器 (図IV-4-1 a)	
2	包含層の土器 (図IV-4-2)	
3	包含層の土器 (図IV-4-3)	
4	包含層の土器 (図IV-4-4)	
5	包含層の土器 (図IV-4-7)	
6	包含層の土器 (図IV-4-5)	

図版77 包含層の土器 (2)	379	図版85 包含層の土器片 (4)	387
1 包含層の土器 (図IV-4-6)		図版86 包含層の土器片 (5)	388
2 包含層の土器 (図IV-4-8)		図版87 包含層の土器片 (6)	389
3 包含層の土器 (図IV-4-9)		図版88 包含層の土器片 (7)	390
4 包含層の土器 (図IV-5-13)		図版89 包含層の土器片 (8)	391
5 包含層の土器 (図IV-5-14)		図版90 包含層の土器片 (9)	392
6 包含層の土器 (図IV-5-15)		1 縄文時代早期の土器底部	
図版78 包含層の土器 (3)	380	2 縄文時代前期の土器片	
1 包含層の土器 (図IV-5-11)		図版91 包含層の土器片 (10)	393
2 包含層の土器 (図IV-5-10a)		図版92 包含層の石器 (1)	394
3 包含層の土器 (図IV-5-12)		1 石鏃・石槍・石錐	
4 包含層の土器 (図IV-5-16)		2 笥状石器	
5 包含層の土器 (図IV-5-17)		図版93 包含層の石器 (2)	395
6 包含層の土器 (図IV-5-18)		1 搔器	
図版79 包含層の土器 (4)	381	2 挟入石器	
1 包含層の土器 (図IV-5-19)		図版94 包含層の石器 (3)	396
2 包含層の土器 (図IV-5-20)		図版95 包含層の石器 (4)	397
3 包含層の土器 (図IV-5-21)		1 石匙	
4 包含層の土器 (図IV-6-24)		2 石匙形石器	
5 包含層の土器 (図IV-6-25)		図版96 包含層の石器 (5)	398
6 包含層の土器 (図IV-6-28)		図版97 包含層の石器 (6)	399
7 包含層の土器 (図IV-6-27)		図版98 包含層の石器 (7)	400
図版80 包含層の土器 (5)	382	図版99 包含層の石器 (8)	401
1 包含層の土器 (図IV-6-26)		図版100 包含層の石器 (9)	402
2 包含層の土器 (図IV-6-31)		図版101 包含層の石器 (10)	403
3 包含層の土器 (図IV-6-29)		図版102 包含層の石器 (11)	404
4 包含層の土器 (図IV-7-33)		図版103 包含層の石器 (12)	405
5 包含層の土器 (図IV-6-32)		図版104 包含層の石器 (13)	406
6 包含層の土器 (図IV-7-34)		図版105 石器の使用痕	407
図版81 包含層の土器 (6)	383	1 笥状石器	
1 包含層の土器 (図IV-7-35)		2 たたき石	
2 包含層の土器 (図IV-7-36)		3 すり石①	
3 包含層の土器 (図IV-7-43)		4 すり石②	
4 包含層の土器 (図IV-6-30)		5 すり石③	
5 包含層の土器 (図IV-7-47)		6 すり石④	
6 包含層の土器 (図IV-16-18)		図版106 土・石製品	408
図版82 包含層の土器片 (1)	384	1 土偶・焼成粘土塊	
図版83 包含層の土器片 (2)	385	2 石製品①	
図版84 包含層の土器片 (3)	386	2 石製品②	

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 函館空港拡張工事用地内埋蔵文化財発掘調査
 委託者 函館開発建設部
 受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター
 遺跡名 中野A遺跡（北海道教育委員会登録番号：B-01-40）
 所在地 函館市中野町100-1, 2
 調査面積 5,500㎡
 調査期間 平成3年7月1日～平成4年3月27日（現地調査7月15日～10月30日）

2 調査体制

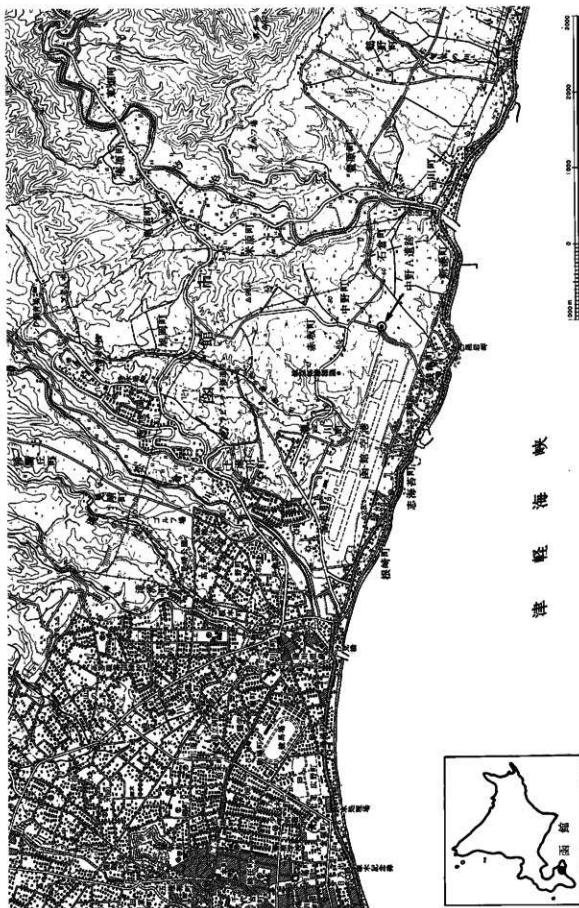
理事長 寺山 敏保
 専務理事 永田 春男
 常務理事 中村 福彦
 業務部長 伊藤 庄吉
 調査部長 森田 知忠
 調査第4課長 高橋 和樹（発掘担当者）
 主任 和泉田 毅（発掘担当者）
 主任 遠藤 香澄
 主任 熊谷 仁志
 文化財保護主事 森岡 健治
 嘱託 西脇対名夫

3 調査の経緯

函館空港は、運輸大臣を設置管理者とする第2種(A)空港で、昭和36年4月滑走路1,200mで供用開始された（函館開発建設部，1991）。昭和42年には滑走路を800m延長して2,000mとし、管制塔や新空港ターミナルなどを設置しようという、第1次空港整備5ヵ年計画が打ち出された。これに伴って用地内に発見された函館空港第1遺跡の発掘調査が、函館開発建設部から文化財調査委員武内収太に委託され、昭和42年9月から10月にかけて調査が実施された。

その結果、函館空港第1遺跡は、分布範囲を若干異にして、大きく3時期に区分できることが推定され、I-A遺跡からは、縄文早期末葉の東釧路Ⅲ式系土器を伴う、隅丸方形プランと思われる竪穴住居跡が1軒検出され、I-B遺跡からは縄文土器片や石器等が採集された。I-C遺跡からは土師器や北大式土器などが出土している。このほかGトラップ（重力ワナ）の可能性が説かれた狭長な穴が54基発見され、Tピットと命名された。（武内，1967）。

続いて、翌43年11月から12月にかけて、市立函館博物館学芸員吉崎昌一を発掘担当者に、消滅済の



第7地点を除く、残る第2地点から第9地点まで、計7地点の発掘調査が実施され、特に第4地点と第6地点では大きな成果が得られた。約15,000㎡にわたって調査された第4地点からは、縄文前期中葉の円筒土器下層式を伴う竪穴住居跡が60軒以上、貯蔵穴と思われる遺構20基、Tピット56基などが発見された。また、第6地点の調査では、絡条体圧痕文が付されたものなど、7個体分の縄文早期中葉の古い段階の貝殻文尖底土器や石器などが検出されている（函館市教育委員会、1969）。

昭和46年11月には滑走路が2,000mに延長され、東京―函館間にB727型機が就航、空港施設も整備されたが、利用客は増加する一方で、引き続き第2次空港整備5ヵ年計画が開始された。これは昭和50年までに滑走路を2,500mに延長して、エアバスの就航を可能にしようというものである。これに伴い、拡張工事区域内の遺跡について、北海道開拓記念館に遺跡分布と発掘調査の基礎調査が依頼され、昭和47年5月現地調査が実施された。その結果、工事区域内に第4地点遺跡、中野A遺跡、中野B遺跡の3ヵ所の遺跡があることが報告された（千代編、1977）。

昭和48年には北海道教育庁に文化課が新設され、主任文化財保護主事が配置されるなど、文化財保護サイドの事前協議対応も本格化、文化課による現地調査が行われた。同年11月には市立函館博物館による函館空港周辺の遺跡の状況調査が進められ、昭和49年3月函館市教育委員会と市立函館博物館による発掘調査団組織が編成された。第4地点、中野A、Bの3ヵ所の遺跡、計23,000㎡を2ヵ年で調査する当初予定計画が決定したのである（千代編、1977）。

函館空港第4地点遺跡の調査は、昭和49年4月から11月まで実施され、昭和43年度調査区の南に隣接する地区10,153㎡を発掘、縄文前期中葉の円筒土器下層式を伴う竪穴住居跡55軒、土壇31基、Tピット61基などが精査された。昭和50年には4月から6月まで、残る2,697㎡の調査がなされ、土壇4基、Tピット47基などが検出された。第4地点の調査面積は、合わせて12,850㎡となった。

中野A遺跡は昭和49年9月の試掘調査を受けて、昭和50年5月から11月まで12,400㎡の発掘調査が実施され、昭和51年には、市道長坂1号線の移設に伴う調査が新たに組み込まれた。この2年次にわたる調査によって、調査区の南側ではグループIと呼ばれる、縄文早期末葉の梁川町式土器を伴う竪穴住居跡8軒と屋外の石組炉1基などから成る集落跡が検出され、そこから60m程北東に離れた地区では、縄文早期中葉の物見台式土器を伴う竪穴住居跡6軒、土壇12基などから構成される集落跡が発見され、グループIIと呼称された。中野A遺跡では75基のTピットも調査されている。グループIIは、今年度の調査区に検出された集落跡とは、南西に約150m離れて営まれたものである（図I-3）。

中野B遺跡は進入灯工事区域1,920㎡を対象に、昭和50年7月から11月にかけて調査され、翌51年3月、未了分の調査が継続された。中野B遺跡からは合わせて竪穴住居跡21軒、土壇15基から成る集落跡と、22基のTピットなど、豊富な遺構、遺物が検出されている（千代編、1977）。

さらに昭和51年に開始された第3次空港整備5ヵ年計画に伴って、昭和52年10月、中野A遺跡のうち、昭和51年度までは未買収だった地区の拡張工事に係る事前協議が提出された。11月には北海道教育庁文化課による遺跡範囲確認調査が実施され、昭和53年8月、函館市教育委員会が357.5㎡の発掘調査を実施、7基のTピットが検出された（田原、1979）。

昭和53年12月には2,500mに延長された滑走路が供用開始となり、昭和54年4月トライスター機が就航した。その後も航空便の需要は増加の一途をたどり、函館空港の整備は、昭和56年開始の第4次空港整備5ヵ年計画へと継続され、昭和57年7月にはジャンボ機の就航をみた。昭和61年には第5次空港整備5ヵ年計画が策定され、同年11月、滑走路を再度500m延長して3,000mとすることが、閣議決定された。

このような動きのなかであって、埋蔵文化財保護についての対応は遅れぎみで、昭和63年5月、函

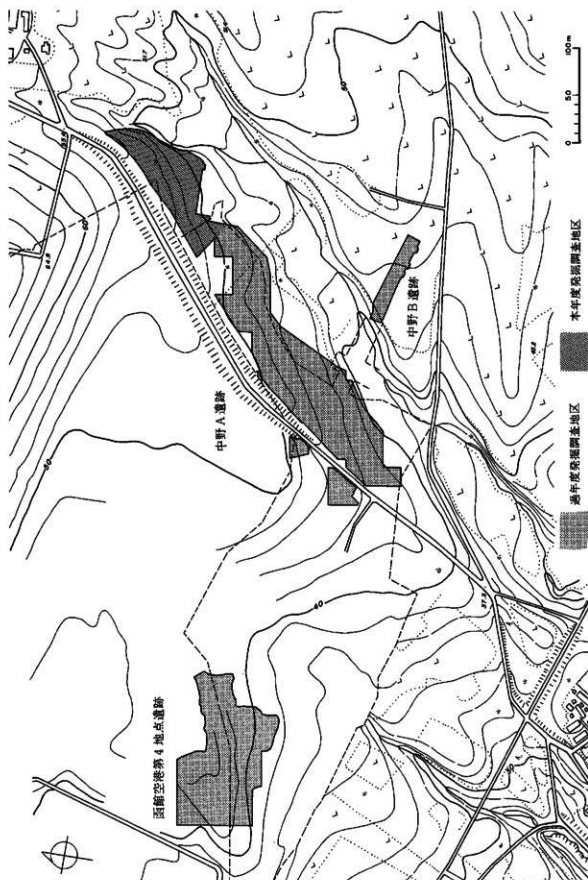


図 I-2 函館空港用地内の遺跡の位置

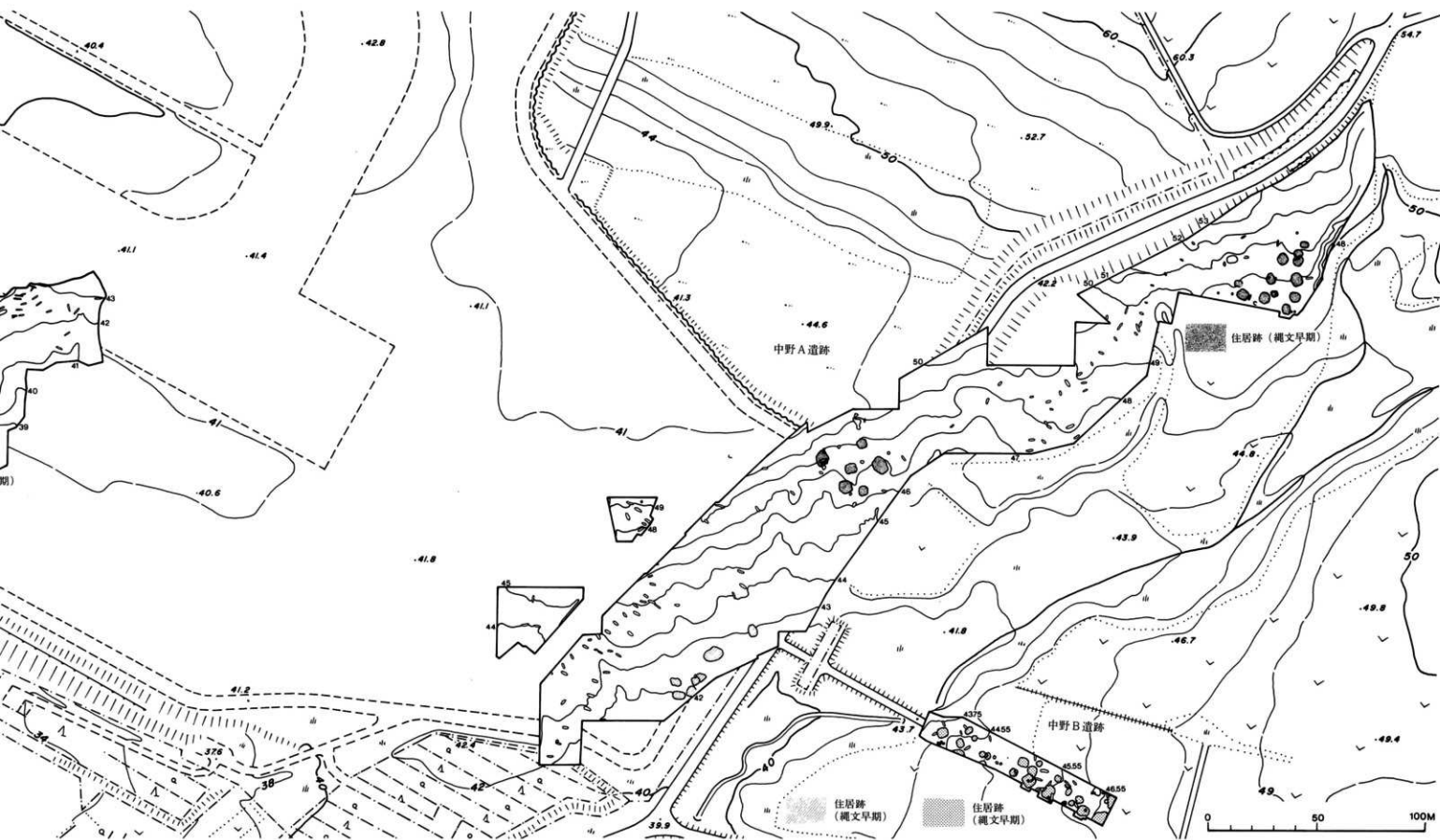


図1-3 函館空港用地内の遺構の分布

館開発建設部から北海道教育庁文化課あて、滑走路延長工事の事前協議書が提出された。この工事は、滑走路本体500mの延長工事のほか、市道長坂1号線や石倉1号線など道路の切替工事、銭亀宮の川の河川切替工事を伴う大規模なもので、平成2年には、平成7年度の供用開始に向けて、工事が着手された。

北海道教育庁文化課は、平成2年8月に遺跡所在確認調査を実施、工事区内に中野A遺跡、中野B遺跡、石倉貝塚および新発見の遺跡があることが報告された。引続き10月には、文化課による第1回目の遺跡範囲確認調査が実施され、翌平成3年4月から11月まで、平成3年度中に都合4回の遺跡範囲確認調査が繰り返された。しかしながら、用地は広大で、未買収地への立入りや農作物の収穫など、クリアすべき問題が多かったため、未だ遺跡範囲確認調査は完了していない。

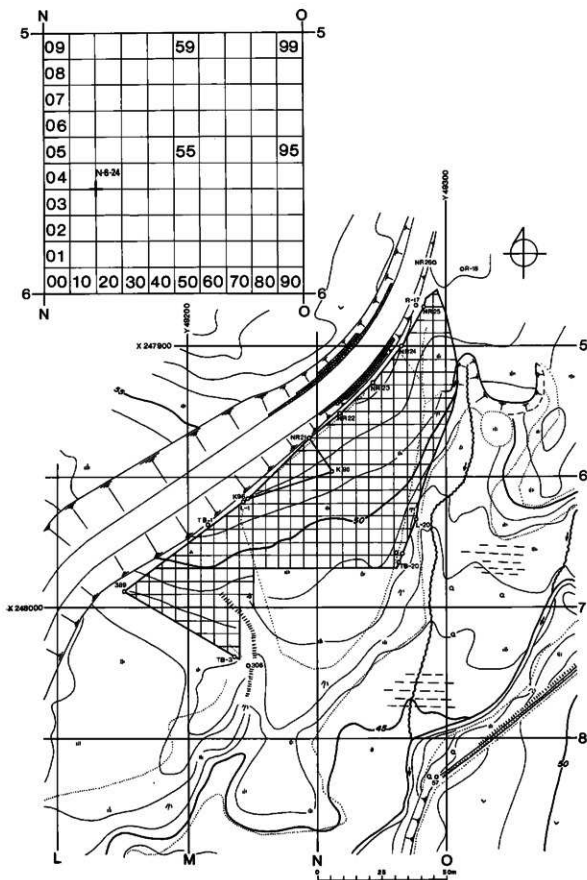
このように、一方で遺跡の範囲確認調査が断続的に続けられている状況の下、とりあえず切替工事が優先される、市道長坂1号線の用地にかかる中野A遺跡の発掘調査が当埋蔵文化財センターに委託された。発掘調査は平成3年7月15日に開始し、10月末まで続けた。当初の発掘予定面積は4,200㎡であったが、遺構・遺物の希薄な地区での効率アップなどがあり、平成3年度の最終的な発掘面積は5,500㎡となった(図I-4)。

なお、中野A遺跡の発掘調査必要面積は、平成3年度の発掘期間中には12,200㎡とされていたが、平成3年10月に文化課が実施した、調査未了だった沢沿い部分の遺跡範囲確認調査の結果、1,800㎡が追加となり、最終的には、14,000㎡となった。

本報告書の掲載図における中野A遺跡の発掘調査区の範囲は、この追加部分を加える前の原図を利用して、沢沿い1,800㎡の追加部分は線引きのうちに含まれていない。

註 本節の経緯の記載に際し、空港の整備計画の沿革については、函館開発建設部・函館港湾事務所が平成3年度に発行したパンフレットなど、埋蔵文化財に関する事項等については、これまでに出版された発掘調査報告書など、主に下記の文献等を参照した(出版年次順)。

- | | | |
|----------|------|--|
| 武内収太 | 1967 | 函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告書
—函館空港第1遺跡— |
| 函館市教育委員会 | 1969 | 函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告書 |
| 千代 肇 編 | 1977 | 函館空港第4地点・中野遺跡 函館市教育委員会 |
| 田原良信 | 1979 | 中野A遺跡発掘調査報告書 函館市教育委員会 |
| 函館開発建設部 | 1991 | 函館空港パンフレット
—今、飛躍のとき・滑走路、3,000mに向けて— |



図I-4 平成3年度中野A遺跡発掘調査区設定図

4 調査の方法

(1) 調査区の設定

今回の調査では、道南新座標系（第Ⅺ系）を基準に、まず、基本となる50m区画の大グリッドを設定した。

図I-4に示すように、道南新座標系（第Ⅺ系）のX軸を利用した南北方向では、50m毎に、北から南へX=-247900.000が5、-247950.000が6、-248000.000が7となるようにアラビア数字を付し、東西方向はY軸を用いて、西から東へY=49200.000がM、49250.000がN、49300.000がOとなるようにアルファベットを順に付した。この50mメッシュの南西側の交点の表示をもって、それぞれの大グリッドの呼称とした。代表的な大グリッドの基軸交点の座標値は、下記のとおりである。

M-6区	X=-247950.000	Y=49200.000
M-7区	X=-248000.000	Y=49200.000
N-6区	X=-247950.000	Y=49250.000
N-7区	X=-248000.000	Y=49250.000

さらに、この50m四方の大グリッドを5m毎に100分割し、5m四方の小グリッド単位で調査を進めた。この小グリッドを表示するため、大グリッドの南西隅が00、大グリッドの北東隅が99となるように、00から北へは01、02、03…、東へは10、20、30…と番号を与えた。N-6-24区のグリッド杭は、太い+で例示した位置となる。

調査の必要に応じて、さらに任意の小さな区画を設定した場合もある。

(2) 発掘調査の方法

文化課による遺跡範囲確認調査によって、調査区内には、縄文時代早期の貝殻文尖底土器を伴う竪穴住居跡があることや、多量の遺物の遺存が予想されていたが、範囲確認調査の結果では、遺構・遺物は、基本土層のⅠ層（耕作土・表土）やⅡ層には殆どなく、主な検出・出土層位はⅢ層であることが確認されていた。そこで、Ⅱ層の下に分布する赤褐色土層（P.D.3）を目安に、Ⅰ層・Ⅱ層については、重機を利用して除去した。

その後、調査区の全体をほぼ4地域に分け、まず25%程度を掘開、その結果をもとに遺構・遺物の出現状況や排土の運搬路などを勘察し、順次、掘開調査を進めた。

遺構の遺物については、可能な限り詳細に出土状況を記録、図化したのち取りあげた。また、包含層の遺物についても、基本的に全点、小グリッド単位で各層毎に、出土位置、出土レベルを測定、記録した。

焼土や住居跡の床面、土壌内の土層など、遺構に関連する土壌はできるだけ採集し、炭化植物遺体等の検出のため、フローテーションを実施した。住居跡の床面の土壌については、なるべく1×1m単位の小区画毎に試料を採集するよう努めた。

剥片集中については、10×10cm単位の小区画で土ごと取りあげ、篩分けやウォーター・セパレーションによって、微細な遺物を分離、採集した。

また、火山灰や、これまで火山灰起源とされていた土壌をサンプリングし、供給源の解明や成分分析などを行なった。

包含層調査終了後、調査区の全域に、ほぼ10m間隔で1×2mのテスト・ピットを設定してV層を掘り下げ、旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認したが、結果的には何も発見されなかった。

(3) 整理の方法

i) 土器

現地では、水洗後大分類を行い、遺物台帳・カードを作成し、注記作業までを終了した。注記は、遺跡名の中野AをナAと略記したのち、グリッド名や遺構名、遺物番号、出土層位の順で、それぞれ簡略に記入した。

現地での整理をおえた遺物は、グリッド毎、遺構毎に仮収納し、現場終了後、札幌に搬送して本格的な整理作業を開始した。

接合・復元作業では、遺構間、遺構と包含層間との接合関係を把握することに努め、接合資料については、全てカードに接合状況を記載し、整理した。器形の復元が可能なものについては、接合作業の段階で展開図の作成と、同一個体の破片（未接合資料も含む）の識別に努めた。

最終的な復元個体数は、縄文早期・前期のものを合わせて約100個体であり、これらについては実測図を作成した。断片的な資料については、口縁部の文様をもとに、個体識別に努め、文様構成が想定できるものを中心に拓影図を作成した。

実測図では、文様構成が復元可能な部分は、欠損部についても細い実線で文様を表現した。断面図は、最も器形の特徴をあらわしている部分を実測するために、90度あるいは180度回転させたものもある。

復元作業終了後の資料は、報告書掲載資料、遺構、グリッド別に収納した。

ii) 石器

石器等も取り上げと並行して現場で水洗・分類と遺物台帳への登記を進めた。遺構覆土内および包含層内で検出された剥片集中は一部を除いて周囲の土壌ごと採集し、水洗を兼ねて1.4mm目の篩による遺物の回収をおこなった。札幌の本部へ搬入後は全点について分類を再検討するとともに磨製石器・礫石器・礫を中心に注記をおこなって破片の接合を試みた。各遺構内・遺構間・同一グリッド包含層内・隣接グリッド包含層間について接合を点検したが、時間と整理スペースの制約から離れたグリッド間での接合は徹底できなかった。剥片石器片と剥片は基本的に集計をおこなったのみであるが、剥片集中出土の剥片は一点づつ計測と観察を実施して集中の性格解明に努めた。また遺構出土の石器等は剥片・礫を含めて全点の重量・最大長・石質などを計測・観察し、出土状況の把握のための資料とした。石器・石核・土製品・石製品は遺構出土品を優先して実測図を作成し、包含層出土のものも完形品を選んで出土地区・類型に偏りのないよう配慮しながら図化をおこなった。剥片も剥片集中出土のものの一部を図化している。実測図に掲載した遺物数は遺構出土の石器355点（遺構出土点数の5.5%）、包含層の石器等304点（包含層出土点数の1.6%）の計659点（石器等出土総点数の2.6%）である。また並行して写真撮影を進め、遺構出土品については実測図掲載遺物の全て、包含層では約半数を写真図版に収録した。報告の記述は製作の特徴を中心におこない、必要に応じて使用の痕跡などにも触れた。石質・計測値は実測図掲載品についてのみ一覧表を作って収録した。石質については花岡正光が表面観察・薄片資料の検鏡によって岩石名を同定した遺物を標本として、西脇が肉眼で判断した結果を記入したものであり、一応の目安に過ぎない。

5 遺構・遺物の分類

(1) 遺構

遺構は、住居跡、土壇、焼土、遺物集中に大きく分け、土壇はさらに土壇とTピット、遺物集中は礫の集中と剥片集中に分けた。住居跡はH、土壇はP、TピットはTP、焼土はF、礫の集中はX、剥片集中はF・Cと記号を付した。

住居跡としたものは、床面に炉（火を焚いた痕跡が認められるものも含む）を有するものか、または上屋を想定しうる柱穴があるものなど、そこで人が生活することが可能であった遺構である。本年度の調査で発見された住居跡は、全て地面を掘り窪めてつくられた、いわゆる竪穴住居跡である。

土壇としたものは、人為的に地面を掘り窪めた遺構で、平面形、断面形に特にこれといった規則性はみられず、規模や構造などもいろいろで、機能や性格などは殆ど不明である。ただ調査の過程で、平面形、断面形、覆土の堆積状況、遺物の出土状況などから、墓の可能性があると考えられた、いわゆる土壇墓の類もこれに含めている。

Tピットとしたものは、細長く、深い溝状の土壇で、小判型に近い小型のものも含めている。Tピットの覆土は自然堆積で、墳底直上に黒色腐植土が見られるという特色がある。

焼土としたものは、住居跡に伴わず、単独に検出されたものであり、屋外炉の可能性もある。

礫の集中としたものは、明確な掘り込みはなく、その性格は定かではない。窪みにただ礫など（土器片や石器の破片なども混入している）が投棄されたことも考えられる。

剥片集中としたものは、遺構中や包含層から大量の剥片（石器などの製作過程で出る剥片）がかたまつて出土したものである。なお、包含層中で検出された剥片集中については、出土遺物の集計では、包含層出土遺物の項で扱っている。

(2) 遺物

i) 土器

I群 縄文時代早期の土器群

A類 胎土に繊維が混入する。縄文を地文とし、平行沈線文が施されるもので、日計式押型文土器に伴うとみられるもの。H-1とその周辺の包含層から出土している。

B類 貝殻腹縁文、沈線文、刺突文、腹縁圧痕文等で文様が構成されるもので、物見台式に相当するもの。尖底が主で、平底のものもある。本年度調査区の主体をなす土器である。

C類 物見台式と住吉町式の中間に位置づけられるもの。

D類 貝殻腹縁文、沈線文等で文様が構成されるもので、住吉町式に相当するもの。

E類 沈線文、刺突文で文様が構成されるもので、ムシリI式に相当するもの。

II群 縄文時代前期の土器群

胎土に繊維が混入する。押し引き文、斜行・縦行縄文が施されるもので、前期前半の春日町・トドホッケ式に相当するもの。尖底が主体であるが、平底のものもある。

III群 縄文時代晩期の土器群

縦行縄文が施されたもので、大洞式に相当するもの。

なお、I群土器の文様については、繁雑さを避けるために、次のように簡略して表現した。

貝殻腹縁圧痕文：貝殻の腹縁部を器面に押圧することで得られる文様。

腹縁文：沈線で先に施文した後、貝殻腹縁圧痕文で縁取り、或いは重ねる手法で得られる文様。

連続波状文；貝殻の腹縁部を器面に押しあて、上下に支点を変えて移動させることによって得られる文様。

ii) 石器

石器の分類は広義の製作技術を基準としておこなった。広義の製作技術とは剥離や研磨の技術だけを言うのではなく、大きさや形など形態的な特徴や石材・素材の選択も含み、製作時に決定される特徴の全てが問題になる。これに対して使用時の痕跡は分類の基準とはならない。ただし製作の結果と使用痕との区別は報告者の主観的な判断による場合がある。

石器をまず剥片石器群、礫石器群、磨製石器群に大別する。この3群はそれぞれ異なる製作の体系に属しており、原則的には石材を共有しない。各石器群は主に刃部・機能部を作り出す技術の差によっていくつかの器種に細別される。器種名は従来の報告書で使われたものを踏襲したが、その内容は改めて定義し、本報告書のみに限って用いるものとする。なお刃部・機能部の特定し難い遺物を石器から区別して石製品という。

I 剥片石器群

剥片石器群は硬質頁岩ないし流紋岩、稀に黒曜石と玄武岩を用い、剥片石器・剥片・石核のほか硬質頁岩などの礫、被熱割れた岩片などを含む。

a. 剥片石器

剥片石器とは連続した細部調整を施された剥片を言う。連続細部調整を受けた縁辺のうち比較的鋭い部分を刃部と呼ぶ。剥片石器を次のように9器種に分け、それ以外を未分類石器とする。

石 鏃 刃部は尖端をなして扁平。線対称形の輪郭をもち、縁辺は平坦。小さい。

石 槍 石鏃と同じ。大きい。

石 錐 刃部は尖端をなして厚手。

筈状石器 両縁の全体を整形して線対称形の輪郭を作り、一端（ないし両端）はこの対称軸に直交する直線形を呈する（長方形ないし楕形の輪郭）。直線形の端部は細部調整を受けて刃部となる場合と素材の縁辺を保存する場合がある。

掻 器 片面細部調整によって弧形に張り出した刃部を作る石器。従来スクレイパーと呼ばれてきたものの一部。

削 器 直線形かそれに近い刃部をもち、刃部は素材の二分の一以上の長さがある石器。従来スクレイパーと呼ばれてきたものの一部。

石 匙 対向する挟りを備えた削器。

石匙形石器 対向する挟りを備えるが削器の刃部をもたない石器。

挟入石器 対向しない挟りを有する石器。

未分類剥片石器 以上の9器種に当てはまらない石器。従来ナイフと呼ばれてきたものの多く、スクレイパーと呼ばれてきたものの一部などがこれに属する。

石 器 片 破損などのため分類の困難な剥片石器。

b. 剥片

連続細部調整のない剥片がすべて含まれ、細部調整のない狭義の剥片と、非連続な細部調整を持つ剥片に分かれる。微細な剥離痕のみをもついわゆるUフレイクもここに属する。微細剥離痕と細部調整の区別は状況に左右されるが一応幅1mm以上のものを細部調整とみる。

c. 石核

製作の末期に大きくてネガティブな剝離面が形成されている遺物。

d. 珪質岩片

加撃による剝離を確認できない硬質頁岩・流紋岩などの破片。材質は剥片石器と共通する。被熱割れで生じたものも多い。

e. 珪質岩礫

遺跡に搬入された硬質頁岩などの礫。材質は剥片石器と共通する。

II 磨製石器群

磨製石器群は蛇紋岩・泥岩などを用い、磨製石器とその素材および廃材を含む。

a. 磨製石器

研磨によって鋭い刃部を作る石器。縄文時代の通例として器種はほとんど磨製石斧一種に限られ、中野A遺跡もその例に漏れない。

磨製石斧 一端に両面を研磨した刃部を持ち、他の部分にも研磨を加えた石器。刃部のない破片も完形品との比較によって磨製石斧に含める。

b. 擦切残片

擦切技法によって折断された石材。折断面は研磨を受けない。

c. 研磨石材

蛇紋岩など磨製石器特有の石材を研磨したもの。擦切溝をもつ場合もある。

d. 未分類磨製遺物

上記のa～cのいずれかに当てはめることの困難な破片。

III 礫石器群

礫石器群の石材は多様であるが、内容は礫石器と礫の二者に限られる。

a. 礫石器

限られた範囲に加工のある礫を礫石器と呼び、加工された部分を機能部と称する。この加工は大部分が使用痕であるとみられ、礫石器の製作技術は機能部の加工自体よりも素材となる礫の選択、礫の中で機能部として選ばれる部位などに多く示される。機能部の特徴によって礫石器を次の6器種に分ける。

たたき石 集中した敲打痕とそれにとりまわす剝離面をもつ礫。機能部は通常突出した部位（側面・端面）にあるが、平坦な面に敲打痕が集中して挟れているものもある（くぼみ石と呼ばれるもの）。両者を別の器種として扱うことはしない。

すり石 礫の主面が側面に弱く突出したすり面をもつ礫。散在する敲打痕がすり面と複合する場合がある。

砥石 窪んだすり面をもつ礫。機能部の位置は多様である。

石錐 側面に強く突出した狭いすり面をもつ礫。ほとんど例外なく砥石と複合している。

石皿 窪んだ広いすり面を主面にもつ礫。大きい。

石錘 対向する挟りをもつ礫。

以上の6器種が同じ礫に複合している場合は、転用が明瞭な場合を除いて、ここでより下位に記した方の器種に分類するものとする。

未分類礫石器 以上の6器種に該当しない礫石器。

b. 礫

礫は円礫と角礫に分ける。

円 礫 表面が丸味を帯びている礫。そのような礫の破片も含む。機能部以外の礫石器の破片は大多数ここに分類される。

角 礫 表面が割れ面で被われ角ばっている礫。

なお石器等の記載のために次のような規定を設けている。いずれも本書に限定されたものである。

1. 剥片石器・剥片における2つの主面（先行剥離面と主剥離面と）は「背面」および「腹面」とよび、「表面（おもてめん）」「裏面」とはよばない。
2. 「右縁」「左縁」は剥片石器・剥片の主面を観察者の正面に正位に置いたときの位置を示す。「背面右縁」と「腹面左縁」は同じ縁辺の両面である。
3. 遺物の計測は次のような基準によった。

石鏃・石槍・鏃・笥状石器・石匙・磨製石斧

これらは器軸（部分的にしか設定できない場合もあるが）をもつ石器である。石器の輪郭上の各点を器軸に投影したとき、最も離れた二点間の距離が石器の長さになる。いっぽう器軸と直交する直線に投影された輪郭からは石器の幅が求まる。厚さはこれらと異なり、長さ・幅に垂直な方向で求めた石器の各部位の厚さのうち、最も大きいものを採用する。

掻器・削器・石匙形石器・抉入石器・剥片

これらは器軸を持たない剥片石器群である。剥離軸を設定して遺物の輪郭上の各点を剥離軸に投影したとき、最も離れた二点間の距離が遺物の長さ、剥離軸と直交する直線に投影された輪郭からは幅が求まる。

未分類剥片石器

基本的には掻器・剥片等に準ずる。剥離軸の不明なものについてのみ、器軸を設定して石鏃等と同様の方法を取る。

石核

主要と思われる作業面を一つ選定し、この作業面に見られる剥離軸に投影された石核の輪郭上の各点のうち最も遠い2点間の距離を石核の長さとする。これに直交して幅が求まり、作業面に垂直に計測された厚さの最大値が石核の厚さとなる。

擦切残片・研磨石材

擦切溝に平行な直線を設定して長さ計測の投影軸とする。両縁に擦切溝のある場合は器軸を設定して石鏃等と同様に計測する。擦切溝のない研磨石材の計測は礫に準ずる。

すり石・石鋸

側面の発達した機能部の輪郭（通常ゆるい弧をなす）に弦を張るように軸線进行、これを長さの投影軸とする。側面の機能部が不明瞭なすり石ではたたき石・礫等に準ずる。

石鏃

一対の抉りの深部を結んだ直線を長さの投影軸とする。抉りが二対あるときはより間隔の広い方の一対を選んで長さの軸を定める。

たたき石・砥石・石皿・未分類礫石器・礫

遺物を水平に置き、その水平面上で長さが最大となるように長さの投影軸、これに直交して幅の軸を定めて計測する。

6 遺跡の概要

中野A遺跡は函館市街地の東方約8km、津軽海峡に注ぐ小河川、銭亀宮の川の右岸段丘上に位置する。対岸の銭亀宮の川左岸には、中野B遺跡が所在する(図I-2)。

3節の経緯で説明したように、中野A遺跡は過去昭和50・51年度および53年度にも函館空港拡張工事に伴う発掘調査が実施され、これらの調査では、縄文早期中葉の貝殻文尖底土器を伴う竪穴住居跡6軒などから構成される集落跡や、縄文早期末葉の中茶路式土器期の、竪穴住居跡8軒などから成る集落跡のほか、合計82基のTピットなどが検出されている(図I-3)。

市道長坂1号線の切替工事に係る今回の調査区は、中野A遺跡の過去の調査区の北東に隣接する地域で、現海岸線からは内陸へ1.2km程入った、標高48～53mの緩斜面に設定された(図I-5)。調査の結果、竪穴住居跡14軒、土壇10基、Tピット11基、焼土2ヵ所(表I-1)のほか、礫の集中2ヵ所、剥片集中11ヵ所などの遺構や、縄文早期中葉を主体とする多数の遺物が出土した。

竪穴住居跡などTピット以外の遺構は、N-7区を中心に広がる、発掘終了面の標高が49～51くらい、沢寄りのごく緩やかな傾斜面に群在しており、遺物の大部分もこの一帯から得られている。

P.D.3を剥いだIII層上面でのコンタをみると(図I-5左上)、結果的には、下に竪穴住居跡が検出された所では、この段階で既に幾分かの凹みを指摘できそうである。また、特にH-2, 3, 6, 9, 13, 14などが分布する地区には、断続的に、橙赤褐色を呈するP.D.3の厚い堆積がみられ、遺構上部の凹みに重なるものと期待された。しかし、P.D.3の分布域は、必ずしも下の遺構の位置とはピッタリ重ならず、これらを目安に、下の遺構を的確に捉えることは予想以上に困難であった。

ともあれ、住居跡の検出が予想された地域では、できるだけP.D.3を残して精査を進めた結果、P.D.3内の下部に春日町式やトドホッケ式など縄文前期前半の土器や石器、石片が包含されていることが確認できた。土層の項で説明するように、竪穴住居の掘り込み面はIII b層中と思われる。

竪穴住居跡は、平面形が隅丸長方形や台形状を呈し、地床炉を有する例が多い。主柱は2本ないし4本で、壁沿いにも柱穴のめぐるのが通例である。H-1以外の住居跡出土の貝殻文尖底土器は、相互にさほど大きな型式的な差はみられないが、個々の竪穴住居の平面形や長軸方向、構造等を比較すると、2～3軒単位のみとまりが考えられ、集落の変遷が推定可能であった。H-1に伴出した土器は、口唇に押圧が加えられ、平行沈線文帯が2段に施されたもので、縄文を地文としている。これは、他の貝殻文尖底土器とは異なり、より古い段階に位置づけられるものとして注目される。竪穴住居跡は、今回の調査区の南方、平成4年度調査予定地区にも広がっているものと予測される。

土壇の規模や平面形などは、必ずしも一様ではないが、遺物を伴出する例には、墓壇の可能性が高いものがある。Tピットは、他の遺構より新しい時期の所産で、発掘区の西縁沿いにほぼ等間隔で並ぶもの、T-6, 9など長いタイプ、T-7など等高線に直交して掘られたものなど、いくつかのグループが認められる。焼土は、屋外炉の可能性が考えられ、礫の集中や剥片の集中は、道具の加工や石屑の廃棄といった行動に伴うものかと思われるが、必ずしも性格は明らかではない。

出土遺物は約37,000点で、内訳は土器片が12,000点余、石器約1,300点、剥片約19,000点、礫約4,000点、その他である。土器には、貝殻文尖底土器のほか、上述の春日町式やトドホッケ式などがあり、僅かに縄文晩期の破片も採集されている。石器は各種あり、特に礫石器の類や擦切磨製石斧などの豊富さが重視される。土・石製品としては、北海道では最古と考えられる土偶の出土が特記されよう。

また、遺構に関連する土壌はできるだけ採集し、フローテーションによる炭化植物遺体の検出、炭化種子の同定を委託した。その結果、クルミ殻片やキハダ、ミズキなどの種子が検出されている。

住居跡

単位 m

遺構番号	平面形	長 (上場/下場)	軸 ×	短 (上場/下場)	軸 ×	深さ
H-1	隅丸長方形	5.43/5.26	×	3.40/3.03	×	0.38
2	台形	5.04/4.78	×	4.35/4.06	×	0.19
3	台形	5.18/4.96	×	4.93/4.82	×	0.23
4	台形	6.36/5.98	×	5.53/5.24	×	0.33
5	台形?	5.39/5.20	×	4.90/4.70	×	0.20
6	台形	4.14/3.84	×	3.30/3.10	×	0.12
7	台形	4.27/4.07	×	3.56/3.38	×	0.25
8	台形?	4.54/4.31	×	—/—	×	0.17
9	楕円形?	5.62/5.40	×	5.55/5.38	×	0.20
10	隅丸方形	4.58/—	×	4.18/—	×	0.10
11	台形	4.08/3.85	×	3.30/3.00	×	0.37
12	隅丸方形	5.22/5.02	×	—/—	×	0.08
13	不明	2.70/2.32	×	—/—	×	0.23
14	台形?	3.10/2.94	×	2.63/2.46	×	0.25

Tピット

単位 m

遺構番号	平面形	長 (上場/下場)	軸 ×	短 (上場/下場)	軸 ×	深さ
T-1	溝	1.66/1.67	×	0.65/0.10	×	1.06
2	溝	1.79/1.93	×	0.52/0.12	×	0.77
3	溝	1.87/2.00	×	0.48/0.14	×	0.84
4	溝	1.75/1.75	×	0.68/0.15	×	1.23
5	溝	1.60/1.70	×	0.55/0.14	×	0.98
6	溝	3.32/3.33	×	0.64/0.23	×	0.77
7	溝	3.00/3.23	×	0.55/0.18	×	0.63
8	溝	2.88/2.90	×	0.56/0.16	×	1.07
9	溝	3.33/3.73	×	0.48/0.08	×	0.98
10	溝	0.95/1.02	×	0.33/0.20	×	0.55
11	溝	2.00/1.85	×	0.33/0.18	×	0.57

土 壇

単位 m

遺構番号	平面形	長 (上場/下場)	軸 ×	短 (上場/下場)	軸 ×	深さ
P-1		1.02/0.77	×	0.69/0.40	×	0.15
2		0.98/0.46	×	0.92/0.42	×	0.21
3		1.75/1.40	×	—/—	×	0.33
4		2.08/1.45	×	0.43/0.18	×	0.24
5		1.85/1.08	×	0.98/0.44	×	0.25
6		0.68/0.56	×	0.56/0.58	×	0.34
7		1.35/0.76	×	0.85/0.55	×	0.33
8		0.58/0.33	×	0.56/0.23	×	0.29
9		0.68/0.54	×	0.53/0.35	×	0.12

表 I-1 遺構規模一覧

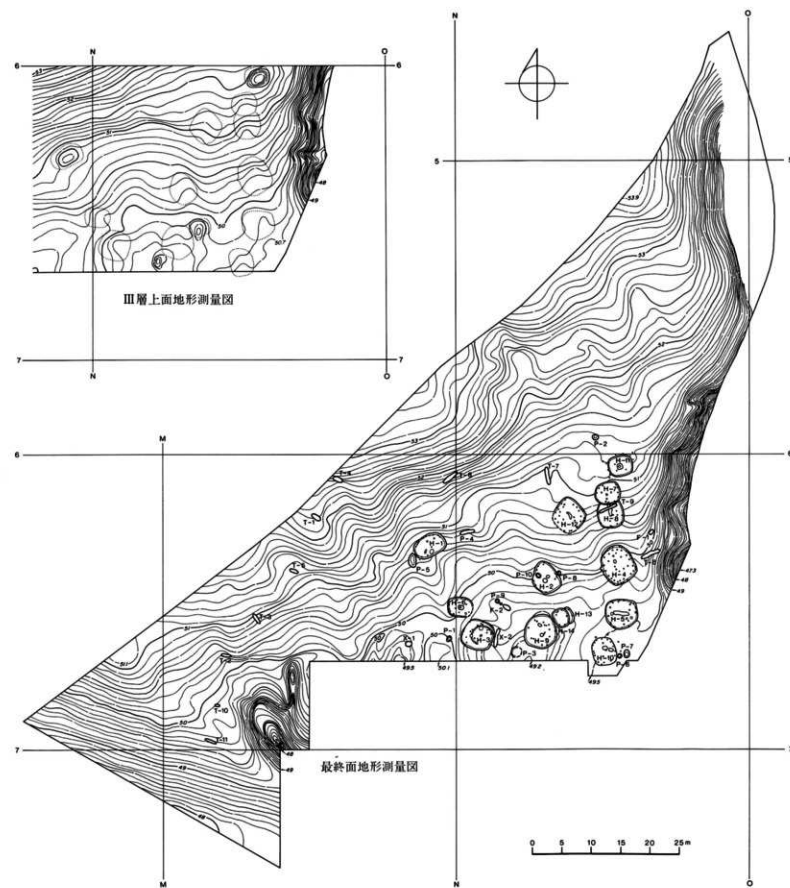


図 I-5 地形測量図・遺構位置図

II 遺跡の位置と環境

1 位置と周辺の遺跡(図II-1)

函館市内の遺跡は、北海道教育委員会の遺跡台帳では117ヵ所登録されている。遺跡には旧石器時代、縄文時代、続縄文時代、擦文時代、中世・アイヌ文化期、近世のものがある。

本遺跡は、函館市街地の東方約8km、海岸線に沿って発達している赤川段丘の裾野部に相当する日吉町段丘上にある。今回の調査区は、津軽海峡に注ぐ銭亀宮の川右岸、海岸線より約1.2km内陸にあり、標高は48～53mである。本遺跡は昭和50・51、53年にも調査が行われ、今回の調査結果と同様に物見台式土器を主体とする遺物・遺構が発見されている。

本遺跡の対岸に銭亀宮の川左岸には中野B遺跡があり、縄文時代早期の貝殻文尖底土器(住吉町下層式土器)の住居跡とTピット等が発見されている。中野B遺跡は住吉町下層式土器を、対岸の本遺跡は物見台式土器を主体とし、隣接する遺跡の土器群に違いが認められる。この違いは住吉町下層式土器と物見台式土器との系統的帰属や編年の位置付け、また、本遺跡の性格を把握する上でも重要である。本遺跡に近い函館空港4遺跡では、東北地方北部の円筒土器下層式の住居跡・時期不明のTピット群が発見されている。また、周辺の同段丘上には縄文時代、続縄文時代、中世・アイヌ文化期、近世の多くの遺跡が知られている。

本遺跡周辺の縄文時代早期の遺跡には、梁川町遺跡・函館空港6遺跡・東山A遺跡等が、縄文時代前期の遺跡には、滝ノ沢H遺跡、豊原1遺跡等が、縄文時代中期の遺跡には、見晴町B遺跡・深堀町遺跡・東山E遺跡等が、縄文時代後期の遺跡には、湯川貝塚・上湯川遺跡・日吉町A遺跡・日吉町C遺跡等が、縄文時代晩期の遺跡には、高丘町遺跡・日吉町I遺跡・女名沢遺跡・東山D遺跡等がある。いずれも、日吉町段丘上ないし、松倉川・湯川や同段丘を寸断する多くの小沢の河岸段丘上にある。

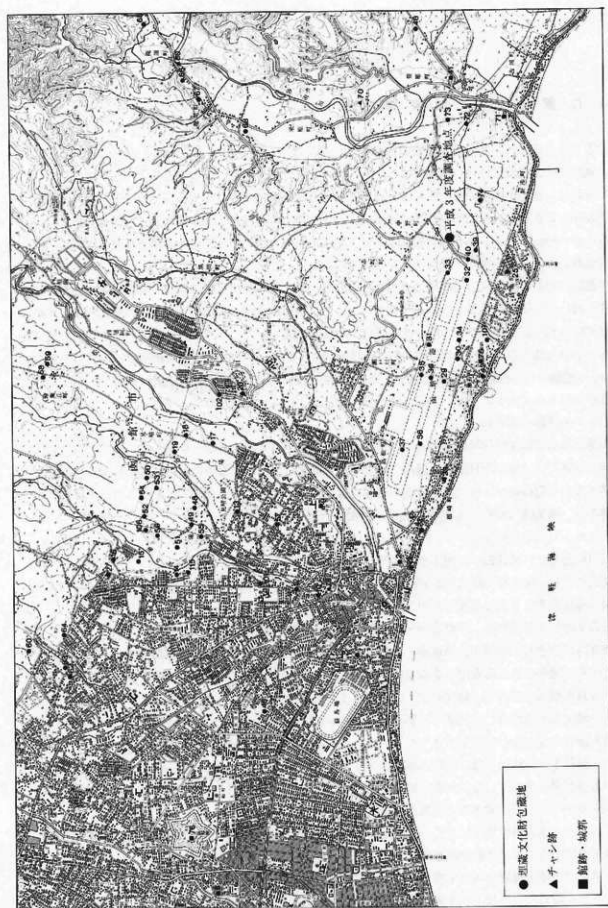
梁川町遺跡は、昭和25年に児玉作左衛門、大場利夫両氏等によって調査が行われた。その結果、貝殻文尖底土器(住吉町下層式)と住吉町上層式(梁川町式土器、東釧路IV式土器)が層位的に出土し、土器の編年を考える上で貴重な資料となった。

続縄文時代の遺跡には、戸倉遺跡・見晴町A遺跡・見晴町B遺跡等がある。

擦文時代の遺跡には湯川土師遺跡・汐泊遺跡・函館空港1遺跡・函館空港2遺跡等が、中世・アイヌ文化期の遺跡には、志苔館・志海苔中世遺構・亀尾神社チャシ跡・鯉川チャシ跡・湯倉神社チャシ跡・与倉前館跡等がある。擦文時代や中世・アイヌ文化期の遺跡は、津軽海峡に面した海岸段丘上に多い。湯川土師遺跡は、昭和36年に調査され、住居跡から土師器が出土している。この土師器は、北海道の最古の良好なセットと考えられている。志苔館跡は、昭和9年に国指定史跡に指定され、隣接する志海苔中世遺構からは、昭和43年に大甕3個にぎっしり詰められた3,744,436枚(重量1,621kg)もの古銭が発見されている。大甕は越前産や珠洲産で、道南地方と北陸地方については京都や大阪との日本海ルートの交易を考える上で貴重な資料といえる。

このように本遺跡の周辺に多くの各時期・各時代の遺跡が存在する。各時期・各時代の遺跡は出土遺構・遺物からつねに津軽海峡を挟んで東北部との影響関係が想定されている。

本遺跡の主体土器群であるI群B類土器(物見台式系土器群)の標識遺跡は、下北半島の物見台遺跡である。晴れた日には下北半島を望むことができ、遺跡の近さが感じられる。



表Ⅱ-1 周辺の遺跡一覧

[illegible]

2 地形・地質

函館空港の滑走路は、津軽海峡に面する根崎町から志海苔町、銭亀町へと至る海岸線に平行して、海成段丘上を西北西―東南東に延びている。段丘上からは、約20km隔てた対岸の下北半島を間近に眺望でき、夕暮時には西陽を反射して、家並がくっきりと浮びあがって見えるほどである。

津軽海峡を太平洋へと東流する津軽暖流(対馬暖流の分流)は、潮流が強いことで知られているが、中野A遺跡の調査によっても、貝殻文尖底土器を伴う文化が、対岸の下北半島の文化などと密接な関係にあることが窺われ、津軽海峡が縄文時代の古くから、本州と北海道との交流を阻む存在ではなかったことが理解される。

中世の渡島半島では道南十二館の築造があり、渡党など本州からの渡来者が定着、蝦夷交易などによって繁栄していた。函館空港近傍の志海苔館もその一つで、一帯の海岸線は宇賀昆布の特産地として有名であり、昭和43年、国道拡張工事の際に志海苔町から発見された37万枚余の古銭は、館主小林氏などが、昆布交易の利益を蓄財したものではないかと推定されている(市立函館博物館, 1973)。現在でも、この海岸の昆布やウニは、特産の海産物として重要な資源に数えられている。

さて、中野A遺跡は、ほぼ北東から南西方向へと、津軽海峡へ向かって流下する、銭亀宮の川の右岸に所在し、左岸には中野B遺跡が分布している。中野A遺跡の平成3年度の発掘調査区は、昭和50・51年度の調査区の北東に隣接する、銭亀宮の川の河口からは約1.2km遡上した、標高48～53m程の地点で、一帯は牧草の採草地として利用されていた(図II-2)。

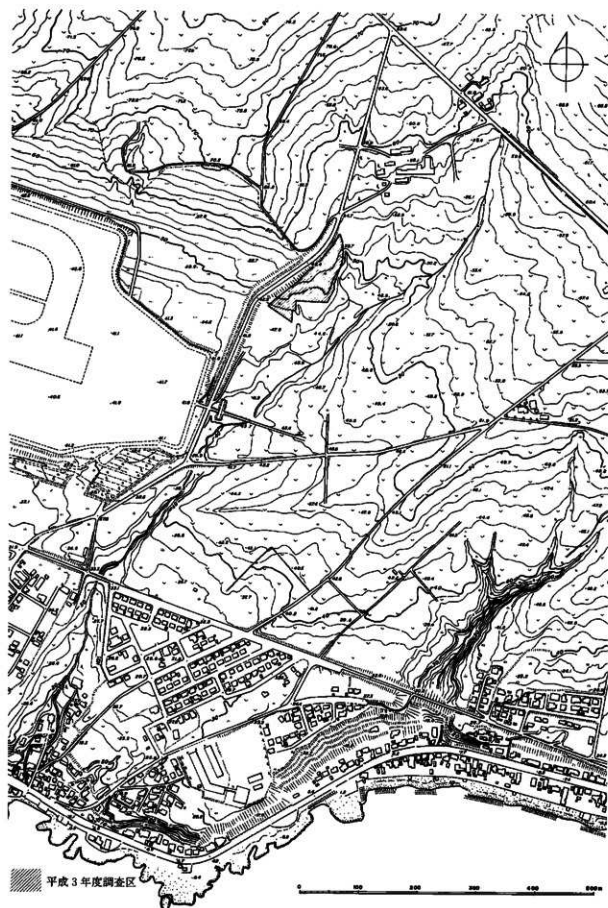
瀬川(1974a, b・1980)によれば、函館付近の平坦面は、高位から低位に鳴川面(460～360m)、鱒川面(200m±)、赤川段丘(鈴蘭丘面170～100m、中野町面100～90m)、日吉町段丘(60～50m)、函館段丘(17～8m)、沖積段丘(5m±)に分けられ(図II-3上)、このうち日吉町段丘は関東地方の下末吉段丘に、鈴蘭丘面は多摩丘陵のT₁面に、中野町面は多摩丘陵のT₂面に対比されるという。

函館空港周辺に分布する諸遺跡は、日吉町段丘に立地する例が多く、中野A遺跡の昭和50・51年度の調査区もほぼ日吉町段丘上の上のっていた。今回の調査区は、主に日吉町段丘の北縁部から中間地域を経て中野町面の南端部に至る緩斜面に位置しており、20万分の1地質図・函館及び渡島大島(地質調査所, 1984)でみると、大部分が礫・砂及び泥から成る、第四紀更新世の高位段丘堆積物(t₁)の分布域に相当する。

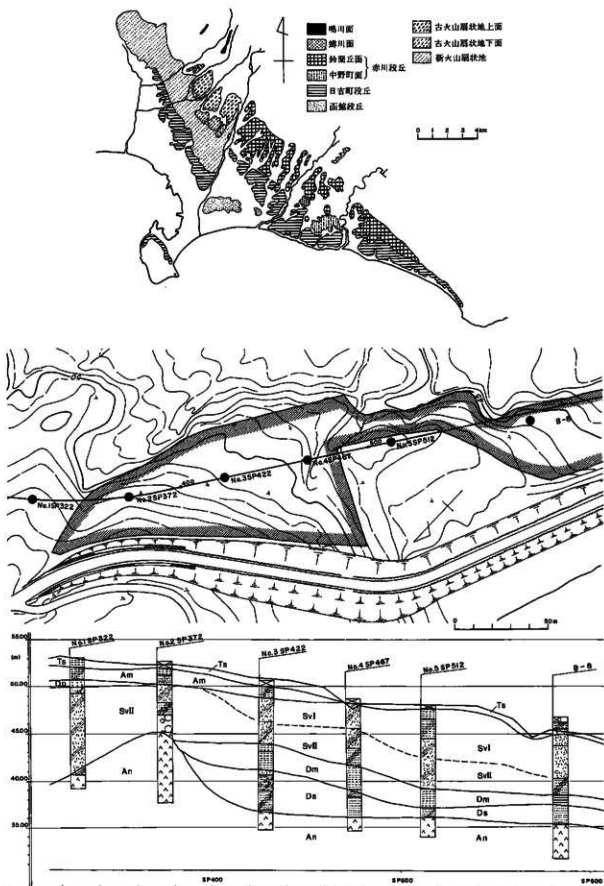
函館開発建設部が平成2年度に実施した地質調査では、より詳細なデータが得られており(図II-3下)、それによれば、No. 2, 3など、平成3年度の発掘調査区内に穿たれたボーリング成果では、最上に、層厚0.8m前後の、畑の耕作土や、沢の表層の腐植土から成る表土層(Ts)が分布し、その下に層厚1.5m内外の、黄褐～灰褐色を呈する砂質シルト層(Am)がみられる。つづいて褐灰～灰白～乳白色の色調を呈する、層厚2.5m強の粗粒火山灰層(Sv I)や、層厚3m以上に及ぶ粗粒火山灰層(Sv II)が堆積し、さらにその下には、層厚2m程のシルト層(Dm)、層厚2～4mの隣泥り砂層(Ds)などがみられ、基盤の、輝石安山岩(An)から成る新第三紀層に達する(函館開発建設部, 1991)。

これらの堆積物のうち、発掘調査の対象は主として表土層(Ts)に相当する土層であり、土壌的には、厚層黒色火山性土と呼ばれる、腐植含量が多く、かつ腐植層の厚い火山灰土壌(北海道農業試験場編, 1985)や、その直下の漸移的な土壌部分が含まれよう。

また、粗粒火山灰層(Sv I・Sv II)は、従来は銭亀沢火砕流堆積物、今は銭亀一女那川テフラ(Z-M)と呼ばれているもので、沙泊川河口の沖合約2.5kmの海底に発見された火口を給源とし、その噴出年代は、33,000年前から45,000年前までの間と考えられている(山縣ほか, 1989)。



図II-2 発掘調査区的位置と周辺の地形



図II-3 遺跡周辺の地形と地質

上：函館付近の海岸段丘（瀬川、1974より転載）

下：函館空港地質調査結果（抜取1号線）（函館開発建設部、1990より転載）

3 土 層

発掘区における土層堆積観察のため、今回の調査区では、地形等を勘案しつつ予め40mメッシュでメインセクションラインを設定、以下の4本の断面実測図を作成した。

〈南北方向〉① M-6-81区西壁からM-7-83区西壁まで

② N-6-68区西壁からN-7-63区西壁まで

〈東西方向〉③ N-6-35区北壁からN-6-95区北壁まで

④ M-7-47区北壁からN-7-77区北壁まで

このうち、基本的な土層堆積と、竪穴住居跡などの掘り込みとの関係が観察できた②と④を代表例として実測図を掲載した(図II-5, 6)。これらの図を中心に、土層堆積の様相を以下に説明する。なお、今回の調査区における土層堆積は、昭和50・51年度の調査に際して確認された土層堆積(千代編, 1977)と本質的に同一であり、土層の名称などは、先の呼称をほぼそのまま踏襲した(図II-4)。

I層 表土。やや砂質がちな黒色土。本来的なI層はN-7-77区北壁などで耕作土の下部に僅かに残存が観察された程度で、I層の大部分は耕作され、暗褐～黒褐色を呈する耕作土(Ia)に変わっている。耕作土には火山灰を混在させる、主にII層を母材とする黒色土(Ib)もあり、さらにP.D.3を不整に混合する暗赤茶褐色の耕作土(Ic)もみられた。

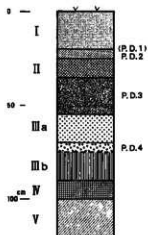
P.D.1 灰白色の火山灰で、従来駒ヶ岳d火山灰に対比されている。今回の調査区では単一の土層としては傾斜地などのごく一部でしか観察されていない。

P.D.2 黄灰色の火山灰で、層厚5～6cm程度。二次的に動いて黒色土などと不整に混合した所も少なくない。P.D.2は従来駒ヶ岳e火山灰に対比されているが、花岡の予察的分析では白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)である可能性が高いという(VI章参照)。

II層 黒色土。粒子が細かく軟らかい。耕作土中に攪拌されて失われてしまったり、P.D.1やP.D.2の微粒や小ブロックを不整に混在させる部分が少なからずみられる。

P.D.3 従来、銭亀沢層火山灰と呼ばれてきた赤褐色土。P.D.3中の下部には、縄文時代前期前葉の土器や石片などが包含されていた。予察の段階だが花岡は、厚い赤褐色土が突然に途切れるといった堆積状況や、必ずしも近傍の遺跡では見られないという分布の偏り、炭化物の含有が比較的多いこと、上下の土層と組成上大きな差はないという土壌試料の分析結果などから、火山灰説には疑問を呈し、火山灰ではなく焼土であろうと考えている(VI章参照)。

結論の出ていない今の段階では、この赤褐色土をそのままP.D.3と呼称し、記述を進めるが、



図II-4 基本土層模式図

P.D.3には、腐植土化の進み具合や、二次的に動いた状態などによって、色調等に様々な変化が認められ、大別して以下のP.D.3(2)からP.D.3(7)まで、分層が可能であった。(2)P.D.3が途切れたとき、その層準の大部分をカバーしている、ほぼ純一な黒色土層。やや灰茶褐色がちな色調を帯び、僅かに赤褐色土粒の混在が認められるが、II層やIIIa層との境界を明確に指摘することは難しい。(3)腐植土化がやや進んだ、P.D.3主体の暗赤褐色土。(4)P.D.3と黒褐色土が混合した状態の暗赤褐色土。(5)部分的な濃淡はあるが、全体的にはP.D.3の混在が目立たない暗赤褐色土。(6)N-7-77区北壁にみられた崩落土層で、(2)とほぼ同様の黒色土。ボソボソと軟らかく、やや暗灰色がちな色調を呈する。(7)P.D.3を不整に混在させる、(6)とほぼ一体の黒褐色土。

Ⅲa層 中野A遺跡の主要な遺物包含層であるⅢ層は、P.D.4の介在により、上方のⅢa層と下方のⅢb層とに二分される。P.D.4の介在がない所では、両者の境界は漸層的で不明瞭な場合が多い。Ⅲa層は湿った状態ではやや軟らかな黒色土で、乾くと堅くしまり、細かな亀裂を生ずる。一部では、暗褐色がちの堅くしまった土層に移移している。なお、N-7-68区南壁では、ⅢaとⅢbが混合した感じの、二次的な、黒褐色土層がみられた(Ⅲa・b)。

P.D.4 暗黄灰色火山灰。掲載図中には出てこないが、M-7-83区などやや沢地形の発達した凹みに沿って堆積がみられた断続的な薄層で、最大厚4~5cm程度。二次的に動いているらしく、やや不純な火山灰混りの土壌という状態が一般的な在り方であった。P.D.4はH-3,4など堅穴住居跡の覆土中にもみられ、そこではより鮮明な色調を留める傾向が認められた。

Ⅲb層 やや灰褐色がちな黒色土で、やや粘性強く、乾くと亀裂を生ずる。一部では、暗灰色がちな褐色粘質土に移移している。覆土中にP.D.4がみられることなどから、堅穴住居跡など貝殻文尖底土器を伴う遺構の掘り込み面は、Ⅲb層中の上部にあることはほぼ確実である。

なお、先の調査ではⅢb層を上下にⅢb₁層とⅢb₂層とに分層しており(千代編, 1977)、今回の調査でもⅣ層直上の一部にⅢb₁層に相当すると思われる灰黒色がちな粘質土の分布がみられたが、局所的で、境界も不明瞭なためⅢb層に包括し、敢えて分離はしていない。

このⅢb₁層とⅢb₂層の認識とは別に、堅穴住居跡などの周辺では、堅穴を掘りあげた揚土を基準に、Ⅲb層を揚土の上のⅢb₁層と、その下のⅢb₂層とに分けた所があり、それらについては各遺構の項で説明する。

Ⅳ層 暗黄褐色粘質土。いわゆる新移層。やや砂質がちで、赤茶褐色の酸化鉄の結核の混在が目立つ所もある。一部では灰黄褐色がちの色調の、粘質の強い土層(Ⅳ')に変化している。

V層 黄褐色ローム。砂質シルトがちで、粘性が強い。小礫の点在が顕著な所も少なくない。次に、各種の攪乱層について簡単に触れておきたい。

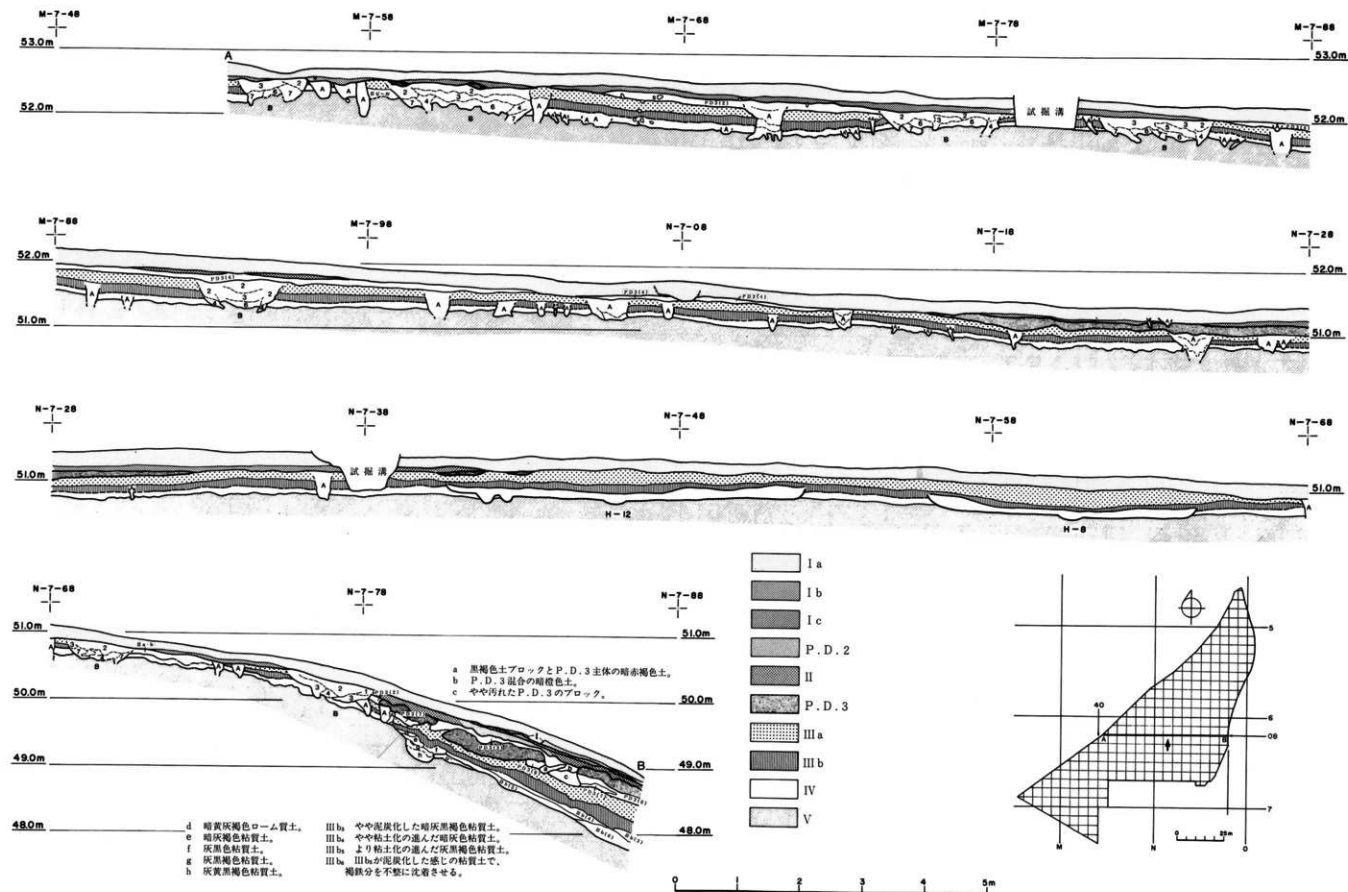
A層 木の根による攪乱に由来すると思われる土層を、A層として一括表示する。Ⅳ層中にみられる古いものから、新しくはⅡ層の形成後に生じたものまで、各段階の攪乱がある。基本的には周囲の標準的な層堆積と逆転することなく、新しい例で見ると、黒色土に富む上方から、黄褐色がちの粘質土に推移する下方まで、樹木が生育していた時点に既に堆積していた土層が、不整に攪乱されながらも順に認められるのが一般的であり、個々の説明は省略する。

B層 いわゆる風倒木現象に伴う攪乱層をBにまとめる。これにも古いものから新しいものまで各段階のものがあがり、必ずしも一様ではないが、記載の煩雑を避けるため、やや模式的に以下のB₁~B₇に大きく分層、表示した。古いものほど、分層相互や周囲の標準的な土層との等質化が進む傾向が認められ、それぞれの土層の境界が明瞭には捉えがたい場合が多かった。

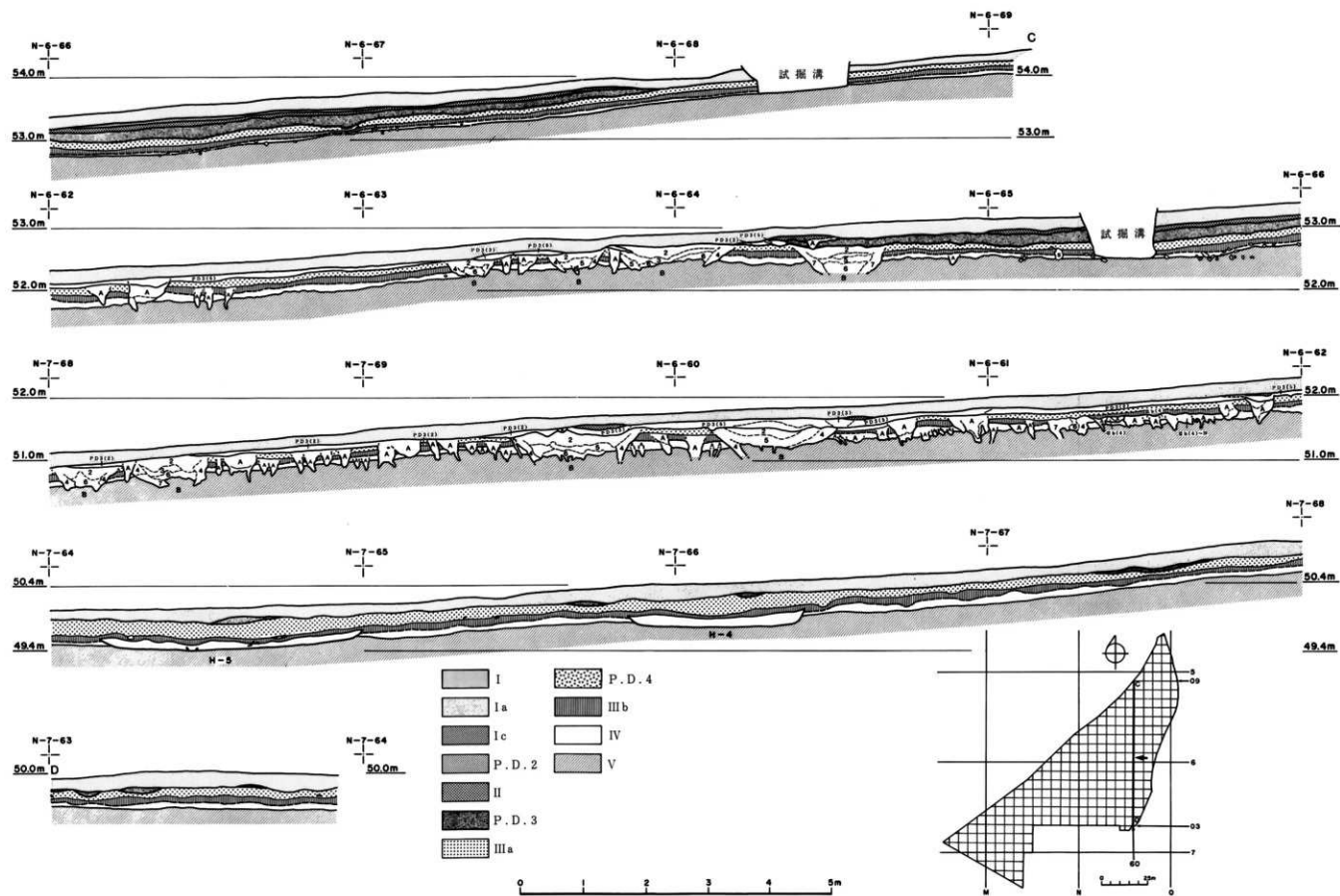
B₁はⅡ層に由来すると思われる、灰白色の火山灰を点在させる黒色土。B₂はⅢaとほぼ同一の、やや灰黒色がちの黒色土。B₃はⅢbとほぼ同様の黒褐色土で、下方ほど色調が淡くなる。B₄はB₃に近い、やや砂質がちな淡い黒褐色土。B₅は黒色土を不整に混合する暗黄灰茶褐色の粘質土。B₆は黄灰茶褐色の粘質土。B₇は暗灰茶褐色土で、上方ほど黒く、下方では殆どⅣ層と変わらない粘質土に移行する。

以上のほか、N-7-77区北壁では、崖沿いの崩落部を充填するa~c層や、Ⅲb層の変異(Ⅲb₃~Ⅲb₆)、崖下のえぐられた攻撃面に堆積した、黄灰色の砂質ロームを混合するd~h層がみられたが、個々の説明は断面実測図に付記する。

また、北海道教育庁文化課の範囲確認調査に伴う攪乱土層については、T.P.と表示した。



図II-5 土層断面図 (M-7-47区北壁~N-7-77区北壁)



図II-6 土層断面図 (N-6-68区西壁～N-7-63区西壁)

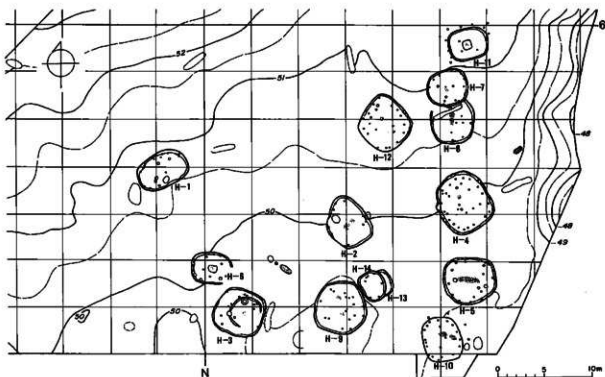
III 遺構と遺構出土の遺物

遺構は住居跡、土壇、Tピット、焼土、礫の集中、剥片集中の順に記載し、いずれも番号順に説明している。住居跡は位置、規模、平面形、床面積、長軸方向、確認・調査・土層、床面、壁、炉跡、付属ピット、重複関係、遺物出土状況、時期、出土遺物の順、土壇は位置、規模、平面形、確認・調査・土層、墳底、壁、遺物出土状況、性格、時期、出土遺物の順で説明する。Tピットは分布、規模、平面形、形態などから類型化して説明する。焼土、礫の集中、剥片集中は位置、確認・調査、遺物出土状況、性格、時期、出土遺物の順で説明する。出土遺物は、住居跡は住居跡別、土壇、Tピット、焼土ではそれぞれの事実記載のあとに各遺構毎にまとめて作成し、掲載している。

出土遺物は、実測土器、土器拓本、石器、石製品の順に掲載する。遺構の規模はII章「遺跡の概要」の項、出土遺物と掲載土器の発掘区、出土層位、出土点数、掲載石器の発掘区、出土層位、大きさ、重量などは一覧表にして巻末に掲載している。

1 住居跡

本年度の調査で14軒の住居跡が発見されている。これらは調査区の南半分にあたる6ラインから7ラインの間で、ほぼNラインから東側のところにまとまっている。この辺りは北西から南東に向けてゆるやかに傾斜する標高49.50m～51.10mの緩斜面となっている。これら14軒の住居跡には、Nライン周辺に見られる浅い沢状地形付近と東側の平坦地上にまとまりが見られる。H-1は覆土などの出土遺物から見て縄文時代早期前葉、そのほかについては縄文時代早期中葉の時期と考えられる。なお南側調査区外にも遺構が続くものと思われ、遺跡の全体像はもう一つ明らかではない。



図III-1 住居跡の位置図

H-1 (図Ⅲ-2~4 図版5・6)

位置：M-7-86・87・96・97 縄文早期遺構群の北西端を占め、P-4・5に隣接。

規模：5.63m/5.26m×3.40m/3.03m×0.38m。

平面形：不整な楕円形 床面積：13.85㎡ 長軸方向：N-60°-E

確認・調査・土層：Ⅲ層の除去後、Ⅳ層上面で不整形の黒色土落ちこみを検出し、二方向にトレンチを入れた結果、木根痕等に重複して平坦な底面を持つ遺構があることを確認した。

覆土の下部は腐植質土とⅣ・Ⅴ層の混合した3層、壁ぎわにあってより均質な4層からなる。この上はかなり純粋な腐植質土の2層、Ⅳ・Ⅴ層由来の腐り礫を含む1層が堆積し、さらにⅢb層が流入する(Ⅲb1層)。Ⅴ層を主体とする5層は竪穴の廃棄後に堆積したものかどうか判断としない。竪穴中央部ではⅢb1層の上部にP.D.4とみられる火山灰がもぐり込んでいるのを認めた。なお覆土下部に炭化物が認められたので覆土3・5層の一部を浮遊選別処理し、炭化植物遺体の同定(Ⅵ章 節)と放射性炭素による年代測定(Ⅵ章 節)を依頼した。また花粉分析に供するため土層断面から覆土各層の土壌試料を採取している(分析未了)。

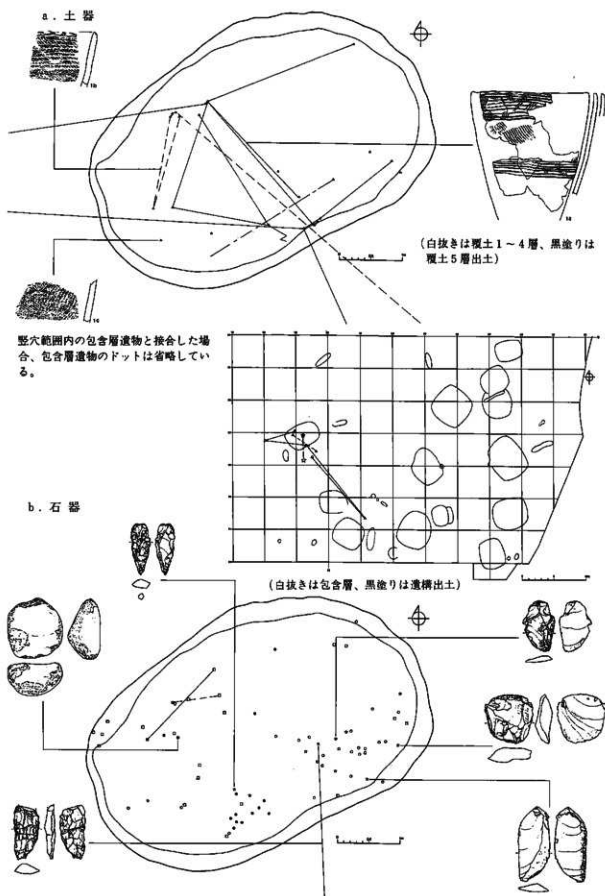
床面：覆土5層の上面あるいは下面が床面と思われ、いずれも概ね平坦だが踏み固めは目立たない。北から南へ緩い傾斜を示す。

壁：斜めに立ち上がっており、かなり崩壊した印象。遺構の北側では床と壁裾の境界が不明瞭になる。炉跡：竪穴内で焼土は確認されなかった。浅く大きめの落ち込みであるHP-1(図版6-1)はあるいは炉跡かもしれないが、壁に近すぎる感がある。

付属ビット：遺構の北西側では壁際に0.5~1m程度の間隔で底径5cm足らずの柱穴が8基確認された(HP-5~8・11・12・17・23)。床面からの深さは30~50cm、いずれも竪穴中央に向かって少し傾いている(図版5-3)。垂木のようなものを打ち込んだ痕かと思われるが、先細りの形状や南東側に見出されないことなどからみて、竪穴中央付近に生えた木が南東側へ倒れた際に根が引き抜かれた痕ではないかとの疑いも残る。この他深さ10cm程度の小柱穴(HP-3・9・19)が同様な位置で検出されている。それ以外の竪穴内の小さな落ち込みは配置に規則性もなく人為的なものかどうか疑問。竪穴外の柱穴は確認できていない。

遺物出土状況：遺物総数は793点、しかし土層断面の層位に対比して取り上げた遺物は54点にとどまる。28点出土した土器の多くがI群A類で、1個体の破片が床面から覆土にかけて散在していた。竪穴北西側の壁寄りに土器片がやや集中し、これらと遺構内外の破片が接合する状況が見られる(図Ⅲ-3-a)。石器等は765点出土、うち剥片石器群は741点を占め、すべて硬質頁岩製で石器12点を含む。728点出土した剥片の大半は覆土下部で検出した剥片集中(図Ⅲ-4)の水洗篩い分けて得たもの(682点)である。礫石器群は24点、計7.1kgを量るが礫石器は1点のみ、また磨製石器群は出土していない。覆土5層出土の石器群としては剥片・珪質岩片・角礫の他にたたき石(図Ⅲ-6-6)1点がある。他の遺構の遺物と接合できた例はない。斜面下手の13mほど離れた地点の包含層土器1例のほかは土器・石器とも遺構内ないし付近のⅢ層出土品と接合していて、孤立した遺構という印象が強い。

剥片集中：竪穴南側の壁寄りに形成され、斜めに堆積した覆土の上に投棄されたような状況で幾つかの小さなまとまりを見せていた(図版6-2)。いずれも覆土3層ないし4層中に位置すると思われる。まとまりごとに遺物番号を付けて土とともに採取し、1.4mm目の篩で水洗して遺物を回収した。総重量は97.5g、石核を交えず石器も一点のみ。少なくとも3個以上の母岩に由来するらしい。遺物番号46・52の二つのまとまりは上下に重なっており、剥片集中全体が必ずしも一時期のものではない可能性を示している。また茶褐色の特徴的な頁岩が遺物番号46と52にやや多く、番号47~51からなる西側の集



図Ⅲ-3 遺物分布と接合図

中から区別することもできる。総数682点のうち番号46が333点(cm^2 あたり約1.85点)を占め、番号47が144点(約3.80点/ cm^2)でこれに次ぐ。番号49・52はそれぞれ64点・29点(0.26点/ cm^2 ・0.93点/ cm^2)と面積の割に少なく、概して斜面上手のまとまりの方が密度が高い。重量を指標として剥片の大きさを検討すると、多くのまとまりでは0.01g以下のものが半数以上を占めているが、遺物番号49だけは0.4g未満のものでようやく半数を超え、重さの上限も4.0gに達して、比較的大きい遺物で構成されることがわかる。番号49は剥片の形状から見ても特殊で、長幅比1以上のものが遺物番号46～48・52ではほぼ6割になるのに、49では長幅比1未満の剥片が約3分の2を占める。礫面を残す遺物は稀で、特に礫打面は一切ない。打面の種類では平均して1割近く現れる点打面がやはり遺物番号49にだけ欠落し、逆に切子打面(竹岡 1989:59)の比率は49だけが目立って高い。番号49は上手にある47・48などの遺物が再堆積したものではなく、異質な遺物を含んだまとまりであるとみてよい。腹面と逆方向の剝離痕(対向剝離)を背面にもつものを数えてみると、遺物番号46～48・52など細かい剝片を主体としたまとまりで約2～9%あり、同様な観察をおこなった十勝管内清水町共栄3遺跡P-4・F-8出土遺物(北海道埋蔵文化財センター 1991:68・113)に近い比率を示している。対向剝離のある小剝片は剝片石器の調整作業で普通に生じると考えられ、共栄3の遺物は両面調整の石器との共存からもそのような作業の産物であると推定されている。またH-1剝片集の場合、長さ1cm以上の剝片に限定すると対向剝離をもつものの比率は16.9%になるが、これは木村ら(1989:225)による両面調整尖頭器の製作実験で報告された比率(17%)に近い。以上を総合して、この剝片集中は主に石鏃・石槍・石匙など調整を有する石器の細部調整に由来するものとみられる。かなり濃密な剝片のまとまり方から集めて捨てたことも考えるべきであろう。やや異質な番号49の理解は難しいが、番号47・48とはかなり石材の共通するらしい印象を受けるので、やはり石鏃等の製作に関連しながらも作業の段階を異にする遺物であるかもしれない。

時期・性格：I群A類土器がI群B類を交えずに出土したことから、他の住居跡との間に明確な年代差をもつものと考えられる。覆土3層の炭化物を試料とした放射性炭素年代は $7,700 \pm 350 \text{y.B.P.}$ (KSU-2171)と報告された(VI章 節)。覆土の試料なので住居の年代を直接示すものとは言えず、由来の異なるものを浮遊選別で収集したためか測定誤差も大きい。測定値自体はH-4床面下の炭化物によるI群B類土器期の年代($7590 \pm 80 \text{y.B.P.}$:KSU-2172)より古くなっている。

なお柱穴の特殊性、焼土の不在など住居跡として認定するには疑問の点も残るが、北西側だけに垂木尻を降ろした片屋根状の構造もありえないわけではない。その場合はHP-1を炉跡とみなすこともそれほど無理ではなくなる。

遺物

土器(図Ⅲ-5 図版32)

1は覆土・覆土3・4・5層(22点)出土の破片とM-7-86・96、N-7-05・14出土の破片(19点)が接合したものである。1a～cは同一個体。口縁部から底部下半までの2分の1程が残存する。胴部から直線的に開き、口縁部でわずかに内湾する深鉢形土器、色調は口縁部から胴半ばまでは黒褐色、下半部は黄褐色である。内面の胴下半部には炭化物が付着する。胎土には鉄粒が混じる。又、石英粒も多く、焼成が良い硬質の土器である。器壁は7・8mm、口唇は尖り気味で、指頭によるとみられる圧痕を斜めに加える小波状口縁となっている。器面にはRの原体による無節の斜行縄文が胴半ばまで3・4段、帯状に浅く施文されている。ところによってはLの原体による縄文が施され、羽状縄文になっている。器面が磨滅しているため羽状縄文が全面に展開されているかどうかはわからない。縄文

施文後、口縁部と胴下半部にそれぞれ9条、7条の平行する幅1・2mmの沈線文をめぐらせている。沈線の間隔は不揃いで波打っているところもある。沈線はへら状工具をやや斜めにねせて施文しているが、ところによっては太さが異なっている。口唇部の整形は沈線施文後とみられ、沈線上に粘土が被さっている部分がみられる。包含層で報告した土器(図Ⅳ-8-49a~d)は、H-1周辺の包含層から出土した土器であるが、同一個体とみられ、乳房状の尖底部になると思われる。

石器(図Ⅲ-6 図版53)

1は覆土3層出土の石錐。素材の打面付近を折り取って細長く整形し、背面を調整する。折面を利用した分厚い尖端の右縁に錯向剝離状の細部調整。2は撚器。刃部は素材の打面付近背面にあり、その対縁にも細かい細部調整が続く。3・5は縦長の削器。3は腹面右縁に刃付け、5は背面両縁の刃部が丸く収斂する。4は両面調整の未分類剝片石器。M-7-96区Ⅲ層出土の両面調整品と接合。調整中に折れたらしい。5は亜角礫のほぼ全周にわたって敲打痕が見られるたたき石。7~12は剝片集中出土の遺物で、7~11は剝片。いずれも対向剝離をもち、9の背面には礫面、7の末端には両面細部調整を受けた石器の縁辺らしいもの(あるいは切子打面をもつ剝片の打面付近)が取り込まれている。12は背面左縁に浅い細部調整のある未分類剝片石器。

8. 点数・密度・重量

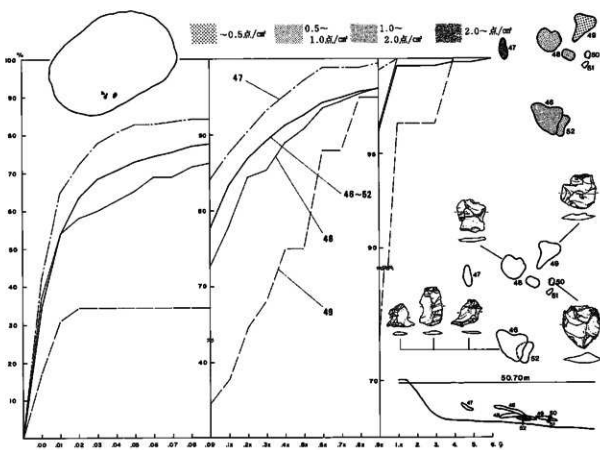
遺物番号	品名	面積 (cm ²)	密度 (g/cm ²)	重量 (g)	備考
45	253	182	1.9	37.3	1094
47	144	38	3.8	12.7	80
48	110	149	8.7	10.3	41
49	59	118	0.9	10.8	5
50	1	—	—	6.8	0.77
51	1	—	—	4.0	4.00
52	54	68	0.9	3.6	23
合計	682	547	1.2	87.6	234

b. 遺物の観察

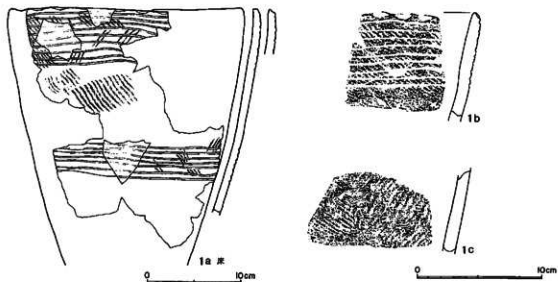
長さまたは幅が1cm以上のものを観察の対象とし、さらに打面が現れているものの表面観察を算出した。

遺物番号	観察点数	長短比 (点/%)			観察面 (点/%)	打面の分類 (点/%)				打面割合 (点/%)	打面割合 (点/%)	打面割合 (点/%)
		0.5	1.5	2.0		縦打面	平打面	斜打面	打面不明			
45	215	76/35.0	110/51.0	4/2.1	1/0.5	0/0	25/7.5	79/36.8	45/15.0	34/15.6	5/0.9	125/58.9
47	128	27/21.0	38/29.6	1/1.5	2/1.5	0/0	12/9.5	28/22.0	18/14.3	6/4.8	4/3.2	60/47.8
48	56	21/38.0	30/54.0	5/9.0	5/9.0	0/0	18/32.0	22/39.0	13/23.0	7/12.5	0/0	44/78.5
49	20	11/55.0	9/45.0	0/0	1/5.0	0/0	1/5.0	10/50.0	6/30.0	0/0	0/0	3/15.0
50	1	—	—	—	0/0	—	—	—	—	—	—	—
51	1	—	—	—	0/0	—	—	—	—	—	—	—
52	19	11/58.0	5/26.0	0/0	0/0	0/0	7/37.0	12/63.0	8/42.0	7/37.0	3/16.0	13/69.0
合計	619	149/24.0	212/34.0	7/1.0	7/1.0	0/0	55/8.9	151/24.4	94/15.2	54/8.7	9/1.5	288/46.4

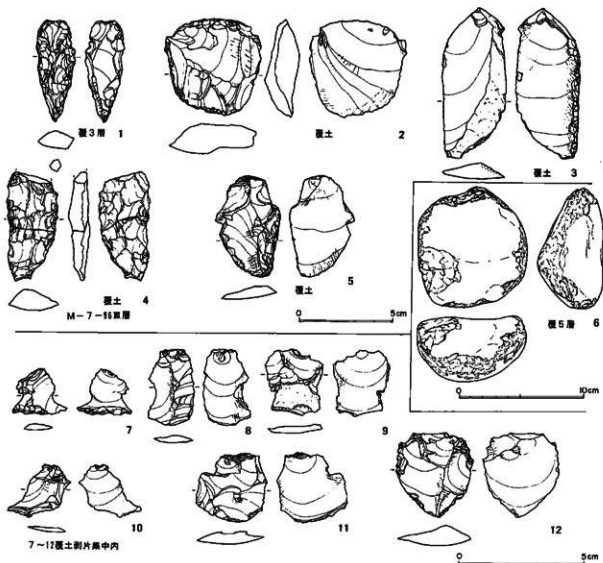
表Ⅱ-1 H-1 剥片集中算出表



図Ⅳ-4 剥片集中



図III-5 H-1出土土器



図III-6 H-1出土石器

H-2 (図III-7・8 図版7)

位置：N-7-25、26、35、36住居跡群のほぼ中央、標高50mの緩斜面上に位置する。

規模：5.04m/4.78m×4.35m/4.06m×0.19m

平面形：隅丸台形 床面積：15.75㎡ 長軸方向：N-30°-W

確認・調査・土層：Ⅲ層中位の調査中にP.D.3の落ち込みを確認した。また、周辺から比較的大きな土器片や礫片・剥片がまとまって出土したことから、ベルトを残しトレンチ調査を行った。トレンチ調査の結果、北西側に壁の立上りが明瞭に認められたが、南側は不明瞭であった。トレンチのほぼ中央に焼土・炭化物の集中が確認された。P.D.3直下の覆土1層(暗赤褐色土)はP.D.3が混じり、軟らかい。覆土1層の下はⅢ層で、P.D.4は認められなかった。覆土2層(暗黄褐色土)は本来の覆土と思われ、粘性が強く、少量の炭化物が混じる。遺物は覆土2層上面から多く出土した。覆土3層は焼土である。本遺構の掘り込み面は、明確に確認することができなかったが、第Ⅲ層中と思われる。床面：床は、北西側に低いベンチ状の段をもつがほぼ平坦である。床面はやや汚れたような第Ⅴ層が認められたため、床面精査を行い、P-8、P-10とHP-10を検出した。P-8、P-10はH-2に壊されたものと思われる。

壁：住居跡断面形は浅い皿状で、北西側に明瞭な立ち上がりが認められる。

炉跡：焼土は地床炉で、住居跡のほぼ中央部分から2ヵ所検出された。F-1北側に炭化物の集中が認められた。焼土中・周辺炭化物のいずれからも植物種子の遺存体は検出されなかった。

付属ピット：柱穴状の小ピットは15ヵ所検出された。ほとんどのものは壁ないし壁付近から検出されている。主柱穴は不明である。

遺物出土状況：遺物は167点出土し、土器は103点、石器等は64点である。その内訳は、土器はすべてⅠ群B類土器で、石器等は石鏃(2)、削器(3)、未分類剥片石器(1)、剥片(32)、珪質岩片(3)、磨製石斧(1)、すり石(3)、砥石(1)、石鏃(7)、未分類礫(2)、円礫(5)、角礫(4)である。

遺物は覆土2層上面と床面から出土している。床面出土遺物は少ない。HP-10覆土中からすり石が出土している。北東壁付近で、土器片・剥片石器・石鏃・礫等がⅢ層から覆土2層かけて、壁側から堅穴中央に向かって流れ込みを思わせる状態で出土している。

北西壁付近の遺構外から1個体分の無文の土器が出土している。しかしながら、小片で極めて脆く、復元できなかった。

接合関係は、遺構間接合は、土器の覆土1層とH-5の覆土上面Ⅲ層、覆土下位とH-9(覆土5層)、覆土1層とH-9の覆土5層、X-2の暗褐色土層の土器との包含層ではN-7-24(Ⅲ層)、26(Ⅲ層)、36(Ⅲ層)、56(Ⅲ層)との接合が認められている。石器は覆土とN-7-04・14との接合が認められている。

時期：縄文時代早期中葉、Ⅰ群B類土器の時期

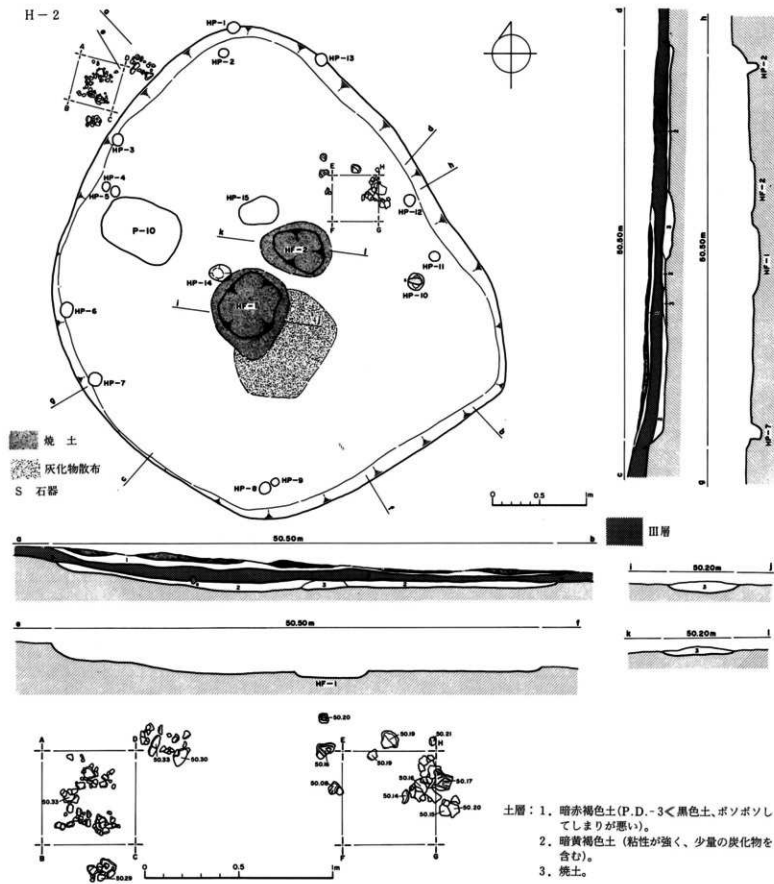
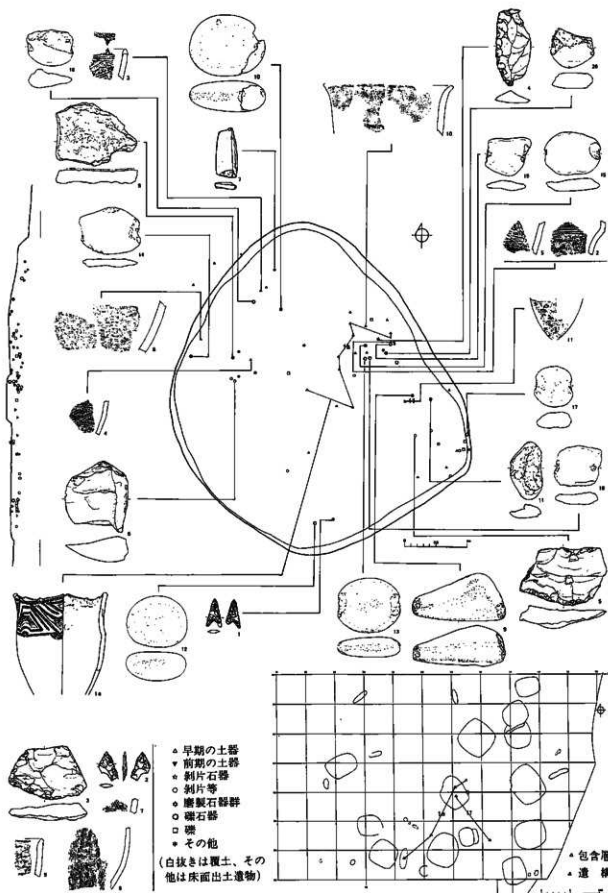


图 III-7 H-2 实测图



図III-8 遺物分布と接合図

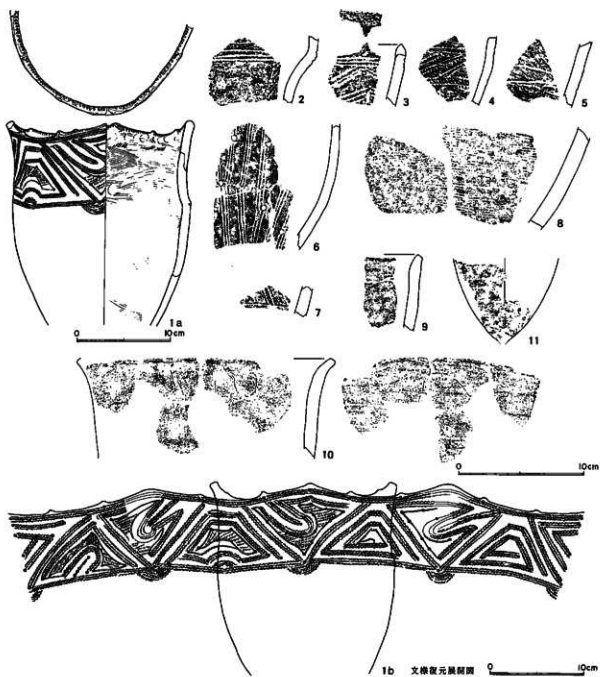
遺物：

土器（図Ⅲ-9 図版32・43）

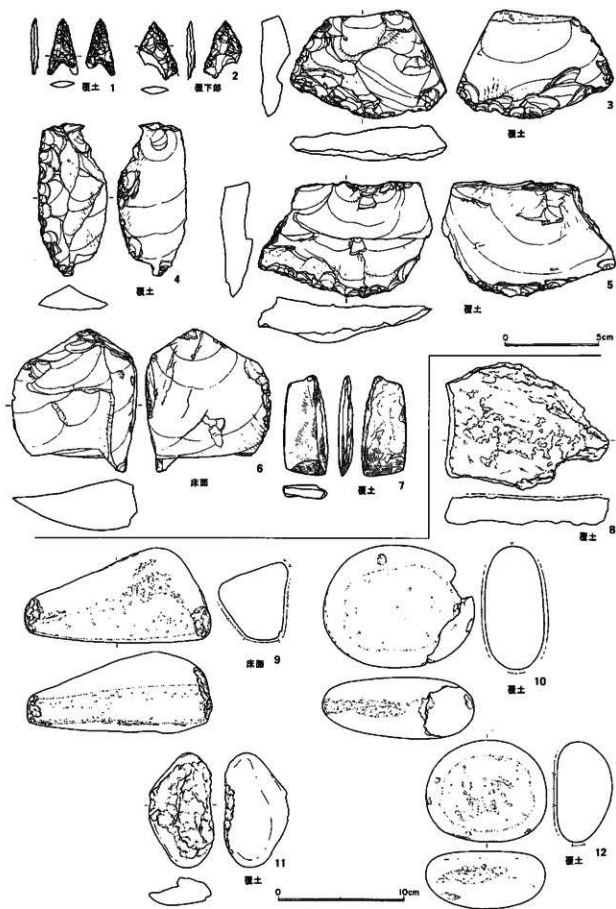
1は覆土（31点）出土の破片とX-2の暗褐色土層（8点）と周辺の包含層N-7-24・36（2点）出土のものが接合したものである。底部は粘土帯の接合面で割れて欠損しているが5分の4以上が残存する。焼成の良好できめの細かな粘土が使われている。胴部がわずかに張り出し、口縁部がやや外反する深鉢形土器。口縁の4カ所に緩やかな山形の波頂部があり、それぞれの両側に小さな副突起がある。平面形は隅丸方形である。口縁部と胴部に3条一単位の腹縁文をめぐらせ区画し、更に副突起から配した腹縁文で、三角形、台形に8単位に区画している。区画内には、腹縁文により「舌状」の空間を形成する文様や台形の区画文様が交互に描かれている。沈線で縁取られた最後の区画には腹縁文が充填されている。また舌状の区画には腹縁文が3条施されている。胴部の腹縁文では、波頂部の下に位置する部分を内面から指で押して小さく突起状にして、その上に円形刺突文を加えている。この小突起は弧状の腹縁文で囲まれている。円形刺突文は波頂部、沈線上、3条単位の腹縁文ではその中央のものに施されている。口唇内側角には腹縁圧痕文が施されているが圧痕が深く刻み目状になっている。その下位には爪の圧痕がところどころに残っている。胴部の無文部と内面には横方向に細かい条痕がある。2～7は腹縁文、沈線文、刺突文で文様が構成されるものである。2はキャリパー状の器形のもの。口縁の波頂部下に対応する位置に垂下する帯状の文様が描かれているとみられる。3は小突起部。内面に腹縁圧痕文がつけられている。4は細長く区画された中に腹縁圧痕文を疏らに充填させている。内面には炭化物が付着する。6は覆土下層から出土した破片とH-9覆土5層、10m程東方のN-7-56出土の破片が接合したものである。3条一単位の腹縁でクランク状の文様が縦位に施されている。8は覆土1層出土の破片とH-9覆土5層出土の破片が接合できたもので、包含層で報告した土器（図Ⅳ-5-21）と同一個体である。この土器の破片は、H-3・5・6・13、X-2の覆土、周辺の包含層からも出土している。胴下半部付近のもの。内外面に横方向の条痕がある。9・10は無文のもの。10は覆土出土のものがH-5の覆土3層、包含層N-7-26・36区出土の破片と接合したものである。同一個体の破片はN-7-45・55からも出土している（図Ⅳ-14-156）。口唇断面は角形で外反する。内・外面に横方向の条痕がある。11は底部の破片。

石器（図Ⅲ-10・11 図版53・54）

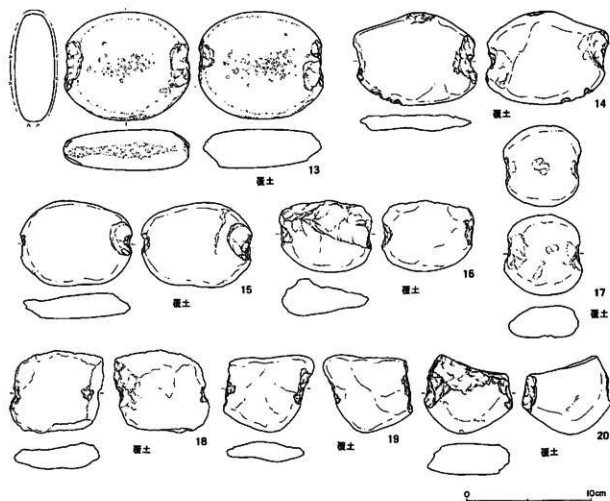
1・2は両面調整の石鏃、2は石槍の可能性もある。4は縦長の削器で背面左縁に刃付けする。3・5は横長の削器。3は礫打面、5は作業面を転移したらしい大振りの切子打面を残し、ともに素材末端に両面細部調整による凸形の刃部、3は背面左縁にも細部調整がある。6は調整のない未分類剥片石器。撚器に近い。7は研磨石材の縁から素材を取った偏刃、片刃の擦切石斧。折面は研磨されない。8は砥石、凹凸の激しい割れ面で研磨がおこなわれている。9・10・12はすり石。9、主要なすり面は広く平滑、断面右上の稜に新たな機能部が作られる途上らしい。集中した敲打痕が両端をはじめ数箇所にある。10、両主面ともきわめて平滑、12、平坦な方の主面に発達したすり面があり、散在した敲打痕がこれに切られる。11・12とも側面のすり面は軽微。11は未分類剥片石器。円礫の両側面を打ち欠いたもので、石鏃の可能性もある。13～19、石鏃。13はすり石を改作したらしい大型のもの、一方の側面には平滑なすり面、他方には帯状の敲打痕が見られる。14・15は薄手で鉤向剝離状の打ち欠き。19の一端では折面に打ち欠きを加えている。20は両端に打ち欠きのある未分類礫石器。石鏃かたき石とみられる。



図III-9 H-2出土土器



図III-10 H-2出土石器 (1)



図Ⅲ-11 H-2 出土石器 (2)

H-3 (図III-12~15 図版8~10)

位置：N-7-03・04・13・14区にまたがり、X-2に隣接。住居跡群の南西部、H-6に近い。なお住居跡内に設けた土層観察用の畦で剥片集中3を検出している。

規模：5.18m/4.96m×4.93m/4.82m×0.23m。

平面形：隅丸方形ないし台形 床面積：20.80㎡ 長軸方向：N-63°-W

確認・調査・土層：III層上面の検出中にP.D.3層が堆積した不整形の落ちこみを認め、遺構を想定して二方向にトレンチを設定した。覆土が薄く認定にやや手間だったが、堅穴住居跡の窪みにP.D.3層が流入したものであることを確認し、主に壁の立ち上がりを取りに輪郭を検出した。想定される床面・構築面の2回にわたって柱穴の検出を試み、すべて断ち割って調査している。

覆土は床面の土壌を別にして4つに分層した。腐植土とIV・V層の混じった4層が床面を薄く覆い、壁ぎわには崖錐状に比較的均質な褐色土(2層)が堆積する。腐植がちの1層も壁付近では細分できるが、堅穴中央部は大半が流入したIIIb層(IIIb1層)で埋積されている。堅穴の南東寄りでは1・4層間にやや色調の異なる褐色土(3層)の介が見られる。なお堅穴内ではP.D.3層の下に薄いIIIa層を挟んでP.D.4層が明瞭に認められた(図版8)。

住居跡の周囲、北側から東・南側にかけては覆土に類似した暗褐色土が分布し、これを境にIIIb層は上下に二分される(IIIb1・2層)。当初はこれを堅穴の掘り揚げ土ではないかと考え、褐色土とIIIb2層との層界面に遺物が目立つのを旧地表に散布した状態であるとみなした。しかし堅穴内の調査を終えて暗褐色土を除去してみると、その下面は堅穴へ向かって落ちこむすり鉢状をなし、IV・V層が顔を出している部分もあって、住居跡が埋没する際に周囲の土壌が侵蝕された状況を示唆していた。結局、褐色の土壌そのものは主に掘り揚げ土に由来するかもしれないが、層序の上ではむしろ堅穴覆土の一部とするのが妥当のように思われる。暗褐色土下面の遺物は侵蝕面に集まったもので、必ずしも旧地表ないし生活面を示すわけではない。

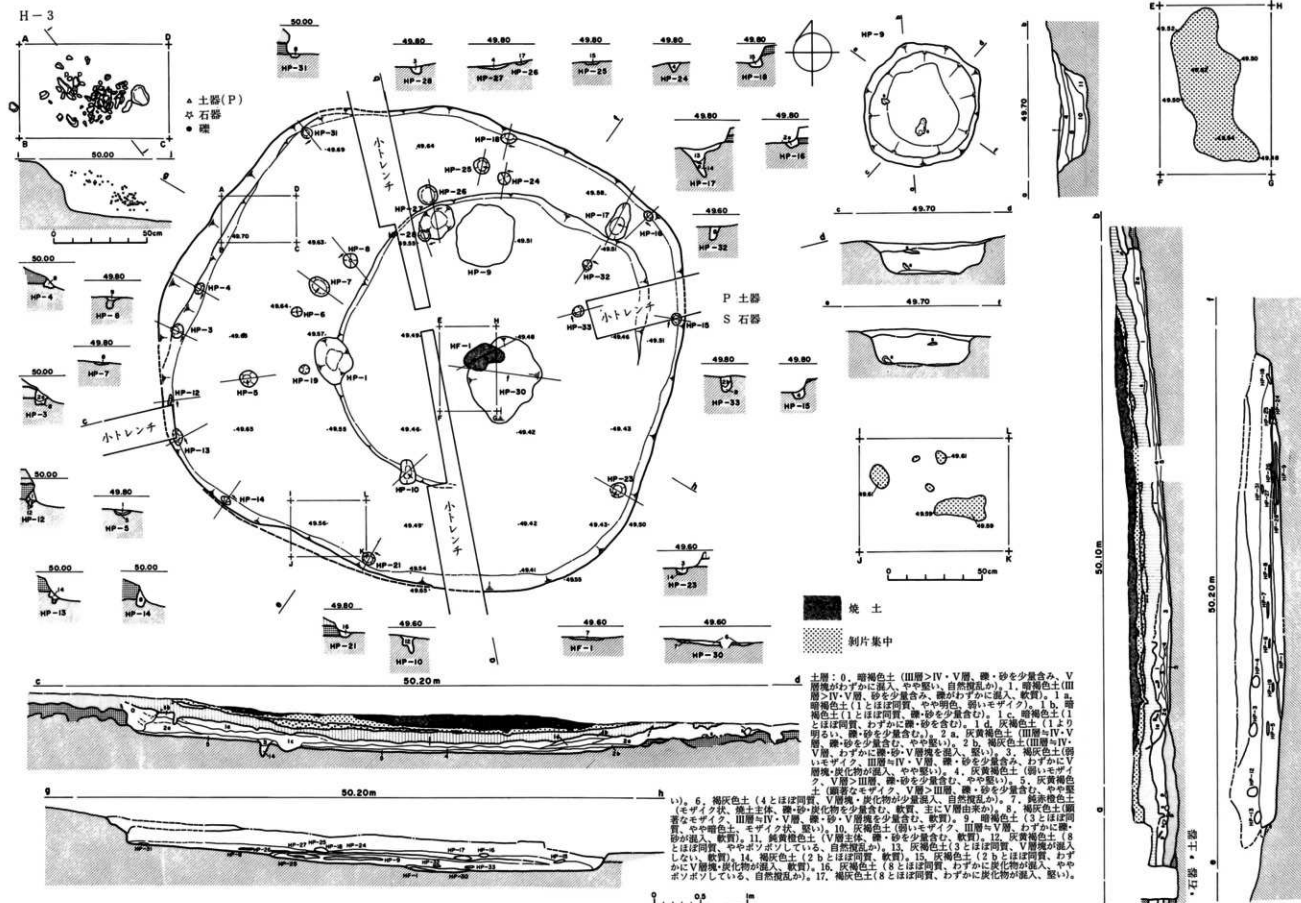
床面付近の土壌は1mメッシュを設定して全量採取し(図版10-4)、炭化物の浮遊選別をおこなった(VI章2節)。また堅穴内の土壌HP-9の土壌を試料として残存脂肪の分析を依頼し、高等動物由来の脂肪を確認している(VI章3節)。土層断面からは覆土各層について花粉分析用の土壌を採取し、分析を依頼中である。

床面：床面はV層に掘り込まれ、腐植・炭化物の踏み込みがある(5層)。北西から南東へゆるく傾斜し、踏み固めは顕著でない。堅穴の中央からやや南東寄りに楕円形の浅い掘り込みが見られ(HP-2)、覆土4層がこれを埋めている。4層は掘り込みの外へも薄く続いているので必ずしも遺構の重複を考えなくてよいが、住居の拡張などがおこなわれた可能性が残る。4層が住居の廃絶後のものかどうか、生活時の床面に段差があったかどうかは判断が難しい。

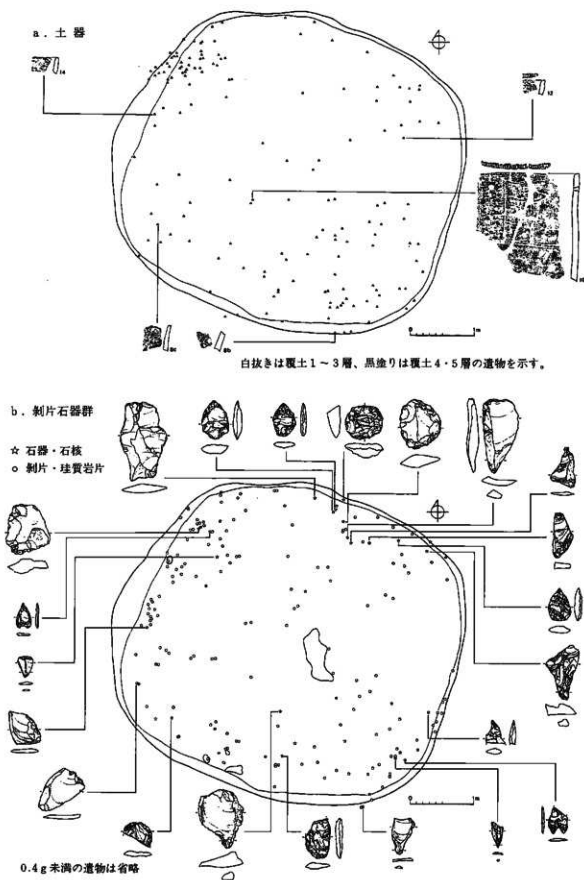
壁：床面から最大25cmほどの立ち上がりが遺存しているが、上記の褐色土が廃絶後の堆積であるとなると、東南側では10cm足らずの高さが残っているに過ぎない。堅穴北隅付近で幾分オーバーハングしているのが注意をひく。

炉跡：HP-2中央の床面に小規模な焼土溜りが見られた。焼土の浮遊選別をおこなったが微量の炭化材を検出したのみである(VI章2節)。

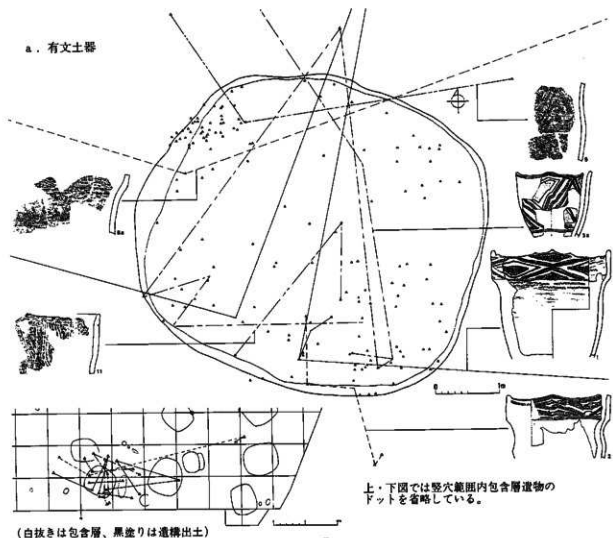
付属ピット：壁際にあるHP-3・4・14~16・18・21・23・31はいずれも径10cm余りで底面の明瞭な掘り方を持ち、弱く住居跡中央の方に傾くなど規則性が感じられる。それ以外の小穴は個別の変化に富み、柱穴を認定することは難しい。HP-1・10・17・30など不整形で倒木痕など自然の擾乱かと思われるものもある。なおHP-2内の床面から楕円形の土壌が掘り込まれており(HP-9)、大



図III-12 H-3実測図

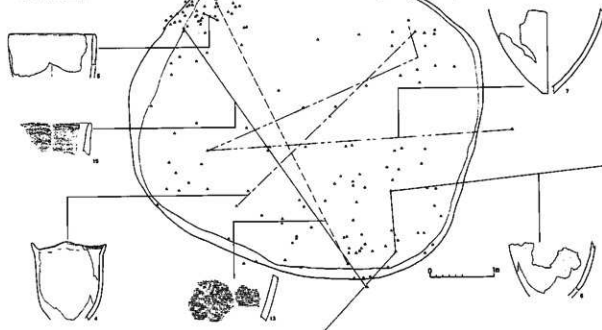


図III-13 遺物分布図

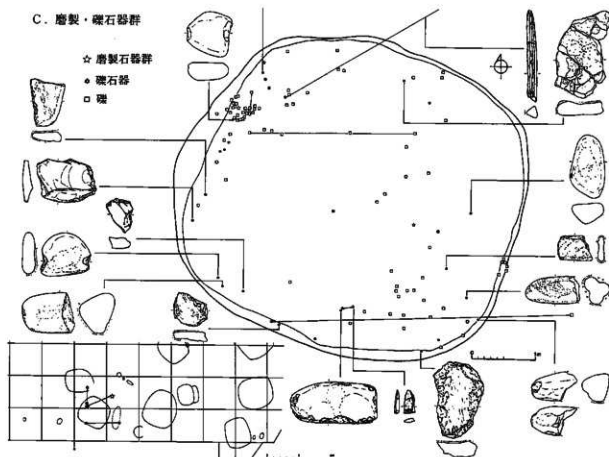


(白抜きは包含層、黒塗りは遺構出土)

b. 無文土器



図Ⅲ-14 遺物接合図(1)



図Ⅲ-15 遺物接合図(2)

型の末分類刮片石器2点が出土した(図版10-2)。その上部には竪穴の覆土が落ち込んでいたが、土壌上面に貼り床を施した痕跡がある(図版10-1)。類似の土壌はH-6内にもあり、住居に先行する別遺構とするよりも、住居での生活期間中に構築・埋め戻されたものとみるのが自然のように思われる。

遺物出土状況：遺物総数2729点のうち土器は247点、I群B類単純の資料である。大半は覆土1・2層の出土でやや壁寄りの位置に多く、北西側では礫の集中に重なるように比較的多数が検出された(図Ⅲ-13)。床面とみられる覆土4・5層出土の土器は9点と少ないが図Ⅲ-18-10などは竪穴中央にあって周囲の包含層と接合せず、廃絶に近い時期のものの可能性が高い(図版10-3)。

覆土1・2層の土器は遺構内および付近の遺構・包含層との間できちんと接合しているが、注意されるのは竪穴の中央を隔てて両側の土器片が接合する例の多いことで(図Ⅲ-14)、単に周囲から流れ込んだものとしてはやや異様である。本来まとまって分布していた土器が竪穴の構築時に周囲に掘り揚げられて拡散し、住居の廃絶後に再び流れ込んだものではないかとも思われる。接合土器を共有する遺構として隣接のH-6・X-2のほかH-9があり(図Ⅲ-58)、H-9覆土下部の遺物がH-3覆土1層のものと接合する例(図Ⅲ-60-1)が注意されるが、上記のような掘り揚げ・再堆積の問題があるので出土層位を遺構の先後関係の判断材料とすることは容易でない。

石器等は2482点、うち2338点は刮片石器群で2287点までが刮片で占められる。ほとんど硬質頁岩ないし流紋岩製だが黒曜石製品も4点ある。刮片石器群の8割以上(2089点)は刮片集中の水洗で得たもので、これ以外では竪穴壁際に石器が集まる傾向(図Ⅲ-13b)が注意を引く。46点ある刮片石器のうち壁付近に堆積する覆土2層で検出したものが36点。これに対し覆土4・5層から出土し竪穴の時

期に近いと判断できるものは挟入石器1点(図Ⅲ-19-7)など僅かである。また磨製石器群が5点、礫石器群は137点の出土をみたがやはり大半(磨製石器群3点、礫石器群123点、礫石器では24点の全て)が覆土1・2層の遺物で、北西側壁付近では小さい礫の集中を検出した(図Ⅲ-12、図版9-1)。白色半透明の珉岩を石材とする礫石器群が5点(未分類礫石器1点、円礫・角礫各2点、計105.4g)出土しており、後述するH-6・9などの珉岩製礫石器群との関連が問題になる。礫石器群についても土器と同様竪穴両側の遺物が接合する例が注意される(図Ⅲ-15)。

剥片集中: 南西側壁際の覆土2層(遺物番号413~422)と竪穴中央の覆土3層(遺物番号423~435)で確認し、任意に設定した20cm四方の区画を単位として約1~2cmの厚さで土壌ごと採取、1.4mm目の篩で水洗した。覆土2層ではこのほか北西側の壁際でもごく狭い範囲に集中した剥片が検出されている(遺物番号576)。南西壁際の集中(図版9-2)は総数303点と少なく、計68.1g、すべて硬質珉岩製で最低3種類以上の石材が区別される。灰色で細かい斑紋の入る特徴的な石材が遺物番号421・422だけに見られ、集中の内部は必ずしも均質ではない。遺物密度は概して低く、0.5点/㎡を超えるのは番号413のみ。重量別の累積百分率折線(図Ⅲ-17)はH-1の集中によく似た形を示すが、0.01g未満の微細な遺物がかなり少ない。水による淘汰を受けた可能性なども考慮される。縦長の剥片が6割を超え、礫面が稀で小打面が多く、対向剝離が相当の頻度で見られるなど、遺物の特徴は石器の調整作業を暗示し、特に切り打面の多さ、背面に素材剥片の腹面とみられるものを取り込んだ遺物(図Ⅲ-21-41・42)の存在は両面調整ないし腹面調整品の製作を示唆している。遺物番号417・419に含まれていた未分類石器(同図50・51)はこのような剥片の特徴によく対応していると言えよう。なお北西壁際の遺物番号576は重さを点検したのみであるが、番号413~422に比べ小さい遺物で構成されることがわかる。(図Ⅲ-17)。

竪穴中央部の剥片集中(図版9-3)は剥片以外の遺物を含まず、総数1623点に達するが重量は計37.6gと僅かで、微細な剥片が多いことは累積度数折線からも確かめられる。遺物の大半が4種類程度の硬質珉岩で作られ、遺物番号428・432・433に各1点の黒曜石製剥片が混じっていた。剥片の特徴は覆土2層の例やH-1剥片集中と類似しており、やはり主に石器の調整作業に由来するものと思われる。遺物の密度は低めで、集中の位置からしても小型の遺物だけが流水に運ばれて住居跡の窪みに溜ったものではないかとの疑いが生じるが、この集中では焼けて変色・破砕を生じた剥片がかなり目につき、番号432・433などHF-1に重なる区画で顕著である。従って焼土を住居の施設と考える限りはこの集中も居住期間中に形成されたものとみるのが自然であり、例えば大型の遺物を拾い集めて住居外に廃棄した結果、微細なものだけが炉辺に遺存した可能性などを考えてみるべきであろう。

時期・性格: 縄文時代早期中ごろ、I群B類土器期の遺構である。覆土4層の土器がH-6覆土1層の遺物と接合している(図Ⅲ-18-9)、おそらくH-6より新しいものとみられる。隣接するX-2との先後が決定できればX-2と接合遺物を共有するH-2・5・9などとの関係も判断できると思われるが、なお検討を要する部分がある。

遺物:

土器(図Ⅲ-18 図版34・43)

1~4は4ヵ所に緩やかな波頂部があるもの。1~2はキャリパー状の器形のもので口縁部はほぼ直立する。1は覆土1層(2点)出土の破片と周辺の包含層M-7-94、N-7-03・04・13(6点)出土の破片、東方へ10m程離れたN-7-33・34・35出土の破片(3点)が接合したものである。山形の波頂部の両端に副突起がある。頸部のくびれ部に腹縁文が1条めぐり、区画された口縁部には、突起部の下で「X」字状に交叉させる3条一単位の腹縁文を施し、三角形と菱形の区画文を構成して

いる。区画内は1条の腹縁文で再区画し腹縁瓦痕文を斜位に充填させている。胴部の無文部には、鋸歯状の沈線文が途切れ、途切れに2列めぐらされている。比較的大きな円形刺突文が腹縁文上につけられている。内外面に条痕がある。2は覆土上面・1層(2点)出土の破片と包含層N-7-03出土の破片(3点)が接合したもの。口縁の平面形は隅丸方形である。口縁部と頸部に3条一単位の腹縁文をめぐらせ区画し、口縁の波頂部の中間から斜めに腹縁文でクランク状の文様を施し三角形に区画し、全体として点対称の構成となっている。区画内は腹縁文を弧状に継ぎ、その中に腹縁瓦痕文を疎らに充填させている。胴部には、波頂部下位に、内面から指で押して形成されたとみられる小さな突起がある。内面にはケズリの痕跡がある。3は覆土2層出土の破片(2点)とH-6の覆土1層(2点)、包含層N-7-03・04・14(13点)出土の破片が接合したものである。口縁部がわずかに外反する中型の深鉢形土器。胴下半の無文部分は粘土帯の接合面で欠損しており、残存するのは文様帯の3分の1程である。上下を3条一単位の腹縁文で区画された幅の広い文様帯に、2条あるいは3条の腹縁文で入組文を斜位に施し、三角形・台形等、幾何学文的に区画している。区画内は貝殻腹縁部の押し引き文が充填されている。刺突文は腹縁文上加えられているが、3条一単位のものでは、中央の条につけられている。円形あるいは楕円形で、波頂部にはほかのものより大きい円形刺突文が施されている。1~3は口唇内側角に腹縁瓦痕文がつけられている。1・2には施文の際に残されたとみられる爪形の瓦痕がその下位にあるが、2は規則正しく残されていることから文様として意識したものかもしれない。4・5は無文のもの、4は胴下半部は丸味を帯び、直線的に立ち上がり、口縁部が外反する波状口縁の深鉢形土器、内面は凹凸が著しく、斜め方向にケズリの跡がある。口唇内側には長めの腹縁瓦痕文が刻み目状に粗くつけられている。上半部は茶褐色、下半部は赤味を帯びている。5は内外面ともに磨減が著しい。胎土には小砂利が多い、6は、胴部のみのも、内外面に横方向条痕がある。7は覆土1層出土の破片(4点)とX-2の暗褐色土層(1点)、N-7-14(2点)出土の破片が接合したもの。底部付近には同心円状の擦痕がある。内面にはヘラ状工具による調整痕がある。胎土には2・3mm前後の小砂利が多い。7~11は、腹縁文・沈線文・刺突文を組合せて文様を構成しているもの、8a~cは同一個体の破片、8aは覆土2層出土のものと北東に20m程離れたN-7-45・55出土の破片が接合したものである。この土器の破片はH-9の覆土からも出土しており(図III-60-18)、包含層においても広範囲に分布している(図IV-8-59a~e)。キャリパー状の器形のもの。焼成が良く色調はにぶい橙色で、他の多くのI群B類土器とはやや異なる。腹縁文の間には細い棒状工具による円形刺突文が密に施されている。胴上半部には貝殻腹縁による連続波状文が器面をめぐっている。9はH-6覆土1層、N-7-14出土の破片が接合したもので、器形、文様構成ともに3の土器と類似している。10は平縁になると思われる。口縁部と胴部に3条・2条の腹縁文をめぐらせ、上下を繋ぐ様に鋸歯状の沈線文を1条と2条、交互に施している。沈線文の上端は短い弧状の腹縁文で繋がれている。口縁部には円形刺突文がめぐっている。11は波状口縁のもの。1条ないし3条一単位の太い沈線で三角形、方形に区画されていると思われる。P-3出土の土器(図III-85-7)に類似の文様構成とみられる。区画内には7mm程の長めの腹縁瓦痕文が粗く充填されている。内側には斜めに条痕がある。7・9には口唇内側に腹縁瓦痕文が刻み目状に施されている。13はH-6覆土1層出土の破片と接合できたもので、この土器片は、H-3・6・13、X-2、包含層から出土し復元された土器(図IV-5-21)と同一個体である。13・14は無文の口縁部。14の内面には細かい条痕とヘラ状工具による幅10mm程の調整痕がある。

g. 点数・密度・重量

番号		点数	密度	重量	長さ (g)																									
番号	点数	密度	重量	(g)	0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.10	0.20	0.30	0.40	0.50	0.60	0.70	0.80	0.90	1.00	2.00	3.00	4.00	5.00	6.00	
423	3	238	0.0	0.0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
424	25	300	0.1	0.5	12	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
425	9	400	0.0	0.1	3	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
426	37	400	0.1	1.0	29	14	3	0	0	0	2	1	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
427	253	400	0.8	5.2	131	48	18	5	4	3	5	5	3	1	9	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
428	454	400	1.0	7.7	250	68	32	10	2	8	3	6	3	1	19	4	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
429	62	400	0.2	1.6	47	25	5	2	0	1	2	0	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
430	89	400	0.2	4.5	43	12	8	8	1	0	1	1	0	0	1	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
431	172	420	0.4	5.1	95	42	12	13	8	1	3	0	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
432	258	400	0.8	4.2	120	56	12	19	2	5	3	1	1	9	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
433	171	400	0.4	4.5	99	31	15	6	2	2	3	1	1	2	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
434	87	400	0.2	1.8	41	11	3	3	0	0	0	0	1	0	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
435	55	400	0.1	0.4	40	5	3	2	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	1655	4900	5.3	27.6	958	333	96	60	15	18	22	16	11	31	45	14	12	4	3	1	2	0	1	2	1	0	0	0	0	

b. 遺物の概要 長さまたは幅が4cm以上ある遺物を観察の対象とし、うち打面が露出しているものを長短比を計算した。

遺物番号	観察点数	長短比 (点/%)			厚 度			打面打角 平均打角					打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角			打面打角 平均打角		
------	------	-----------	--	--	-----	--	--	-----------	--	--	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--	-----------	--	--

表Ⅱ-3 H-3 遺土層別集計表

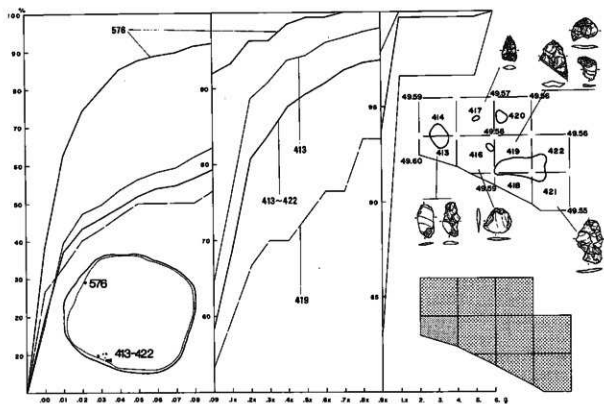
しているようである。37は長手の円礫を用いる類。38・40は石錘、39も石錘の破片かと思われる未分類礫石。40は砥石と複合している。

41～51は剥片集中の遺物である。41～49は剥片、41・42・47は石器腹面の調整によって生じたと思われるもので背面に石器の素材となった剥片の主剝離面を取り込んでいる。43は剝離角の大きい切子打面をもつ。44、背面に多方向からなされた調整の痕を取り込む。45・46・48は線打面、対向剝離のある剥片。49、礫打面をもつ唯一の遺物。50・51は未分類剥片石器で、50は石錘未製品と思われる両面調整の石器、51は背面調整品で腹面も調整する途中らしい。

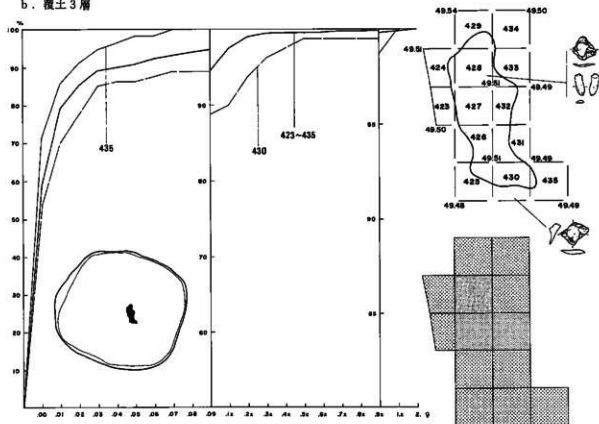


図Ⅱ-16 H-3 出土石器展開図

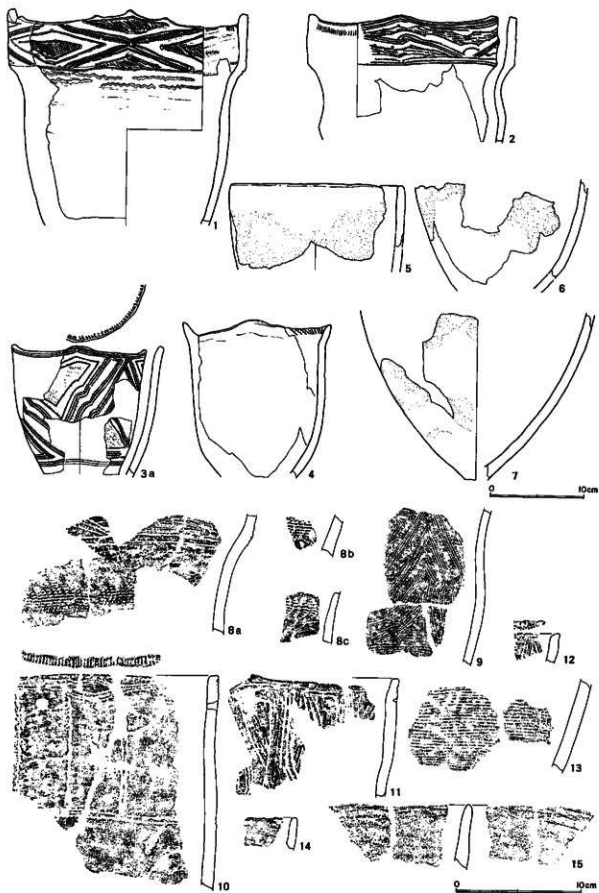
a. 覆土2層



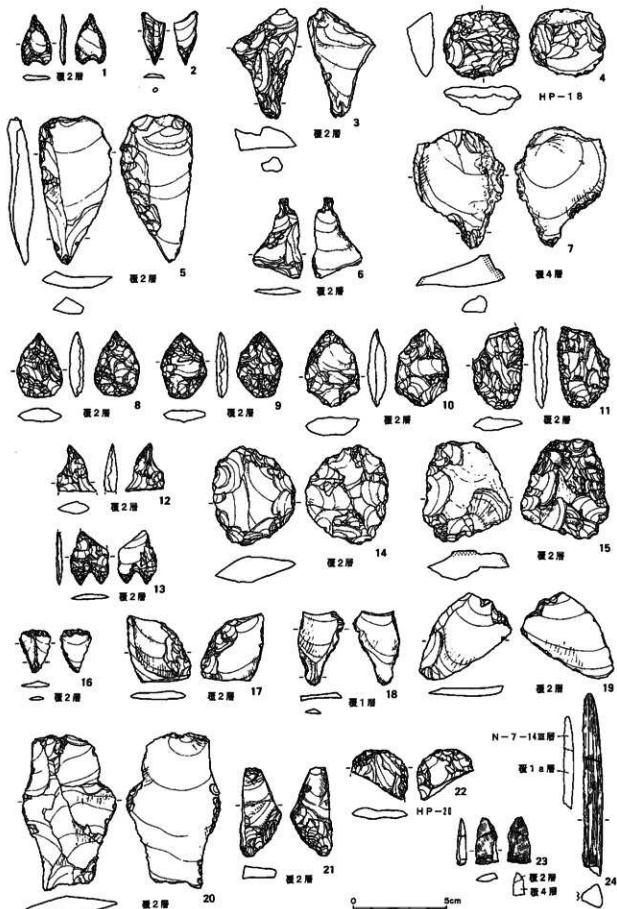
b. 覆土3層



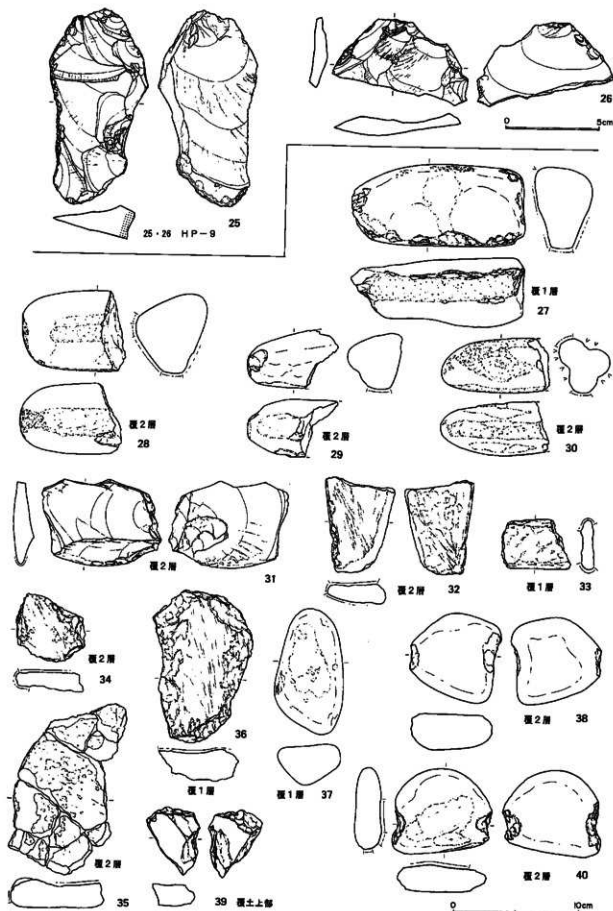
図III-17 剥片集中



図Ⅲ-18 H-3 出土土器



図Ⅲ-19 H-3 出土石器 (1)



図III-20 H-3 出土石器 (2)



図Ⅲ-21 H-3 出土石器 (3)

H-4 (図Ⅲ-22・23・24 図版11・12)

位置：N-7-46・55・56・65・66 ほぼ北から南へ傾斜する標高49.80m～50.30mの緩斜面上に位置している。本住居跡の東約5mのところは沢地形になっている。北にH-7・8、南にH-5、東にF-1、TP-6、西にH-2が近接する。

規模：6.2m/5.8m×5.5m/5.3m×0.36m

平面形：丸味をもつ隅丸長方形 床面積：25.87㎡ 長軸方向：N-35°-W

確認・調査・土層：N-7-66の包含層調査中、南西隅のIV層上面で暗茶灰色土の落ち込みを検出した。この暗茶灰色土を約10cmほど掘り下げるとやや堅い面があり、炭化物が散在しており、土器片や石鏃片も出土した。周辺に遺構があることも予想されたため、N-7-55、56、65のIII層を、遺構検出作業を行いつつ掘り下げる。IV層上面で北西-南東を長軸とする約6m×5.5mの長円形状の落ち込みを確認した。東西、南北にそれぞれ土層観察用の土手を設定し、順次掘り下げて調査を行った。III層を除去すると若干汚れた暗茶灰色土系の土があり、この層から遺物が多量に出土した。この層の下には軟質の黒褐色土が薄く堆積し、これを除去するとほぼ平坦となり、炭化物が多く認められた。またこの面で焼土が検出されたため、床面と想定した。この上面まで掘り下げて壁の立ち上がりを検出した。覆土は大略3層に分けることができる。覆土1層は暗茶灰色土系の土で、層厚は約10cmである(土層図1、2)。覆土2層は暗茶灰色土とローム土が混り合った土で、壁周辺に三角堆積状に見られる(土層図5、6、7)。覆土3層は軟質の黒褐色土で層厚は5cm～10cmである。ローム土が少量混入し、汚れている(土層図9)。構築面と覆土3層間には淡茶灰色土+ローム土の汚れた土が2cm～3cm程堆積している(土層図11)。土層図11の上面で焼土が検出されており、遺物の出土状況、炭化物の残存状態などから見て、この面が最終的な生活面であろうと思われる。

床面：V層を約10cmほど掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、北西から南東に向けてやや傾斜している。焼土(HF-1)の東側には楕円形状(1m×1.8m)の浅いくぼみがある。床面は、焼土より北側が堅く、南側がやや軟質である。

壁：全体に急傾斜で立ち上がっている。とくに北～西壁は垂直的である。壁高は20cm～30cmである。炉跡：床面中央部のやや北寄りに50cm×30cmの広がりをもつ焼土が検出されている。地床炉である。明瞭な掘り込みは認められない。なお HF-1 の東側にある浅いくぼみ中にも焼土が検出されている。付属ピット：柱穴状小ピットは、最終生活面と構築面から74個検出されている。これらには①壁面にあるもの、②壁際から30cm～50cmほど内側をめぐるもの、③焼土と浅いくぼみの周辺にあるもの、というまとまりがある。①は29個あり、すべて内傾している。おおむね先端部が細くなっている。②は直立しており、全体に細く、浅いものが多い。屋根材の支柱穴であろう。③は14個あり、直立している。主柱穴と考えられる。これらには最終生活面で検出したものと構築面で検出したものがあり、建て替えが行われたものと思われる。また南西壁のやや北側で長方形状（60cm×40cm）の段状の張り出しが検出されている。HP-51・52は先端部が細く、枕状の直立する小ピットである。底面は堅く、南側が若干くぼんでいる。出入口ではないかと思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は788点、その内訳は土器581点、石器など207点である。床面、構築面から出土した遺物は、土器256点、石器など101点である。出土した土器はすべてⅠ群土器である。石器は剥片石器群が123点、磨製石器群が6点、礫石器群が76点出土している。剥片石器群では石鏃、石錐、撚器、削器、石匙など、磨製石器群では石斧が、礫石器群ではたたき石、石皿、すり石、石鋸、砥石、石錘などが出土している。このうち床面、構築面からは、石錐、撚器、削器、石匙、石鋸、砥石、石錘などが出土している。覆土2層出土の遺物は、流れ込みの状態を顯著に示している。また土器片は外面を上にしたものが多い。遺物は、床面、床面と構築面、床面と構築面と覆土、床面と覆土と包含層というように多様な接合関係を示している。構築面出土土器とH-10覆土出土土器、覆土出土土器とH-7・8・14覆土出土土器という接合関係が見られる。石器でも床面出土の円礫がP-3覆土出土のものに接合している。また包含層との接合、同一個体関係を見ると、土器はN-7-44・46・48・55・56・57・63・64・65・66、石器ではN-7-33・35・53・54のⅢb層出土のものと接合し、同一個体と見られるものもある。土器は本住居跡周辺出土のものと多く接合するが、石器は南西約23mほど離れたところにあるものと接合しており、南西側に多く接合関係が認められるという傾向がうかがえる。なお床面出土の遺物のうち、本住居跡に伴う確実なものは、北西コーナー付近、壁際より約80cmほど内側で、最終生活面中に若干入り込んだ状態で出土した一個体分の土器片である（図Ⅲ-25-1）。これは口縁部を北西側に向け、横倒しの状態で、半分ずつ南北に並び、内面が上を向いた状態で遺存していた。

時期：掘り込み面はⅢb層中である。構築面、最終生活面、覆土、周辺の包含層出土の土器はすべてⅠ群B類土器であることから、本住居跡は縄文時代早期中葉の時期のものである。

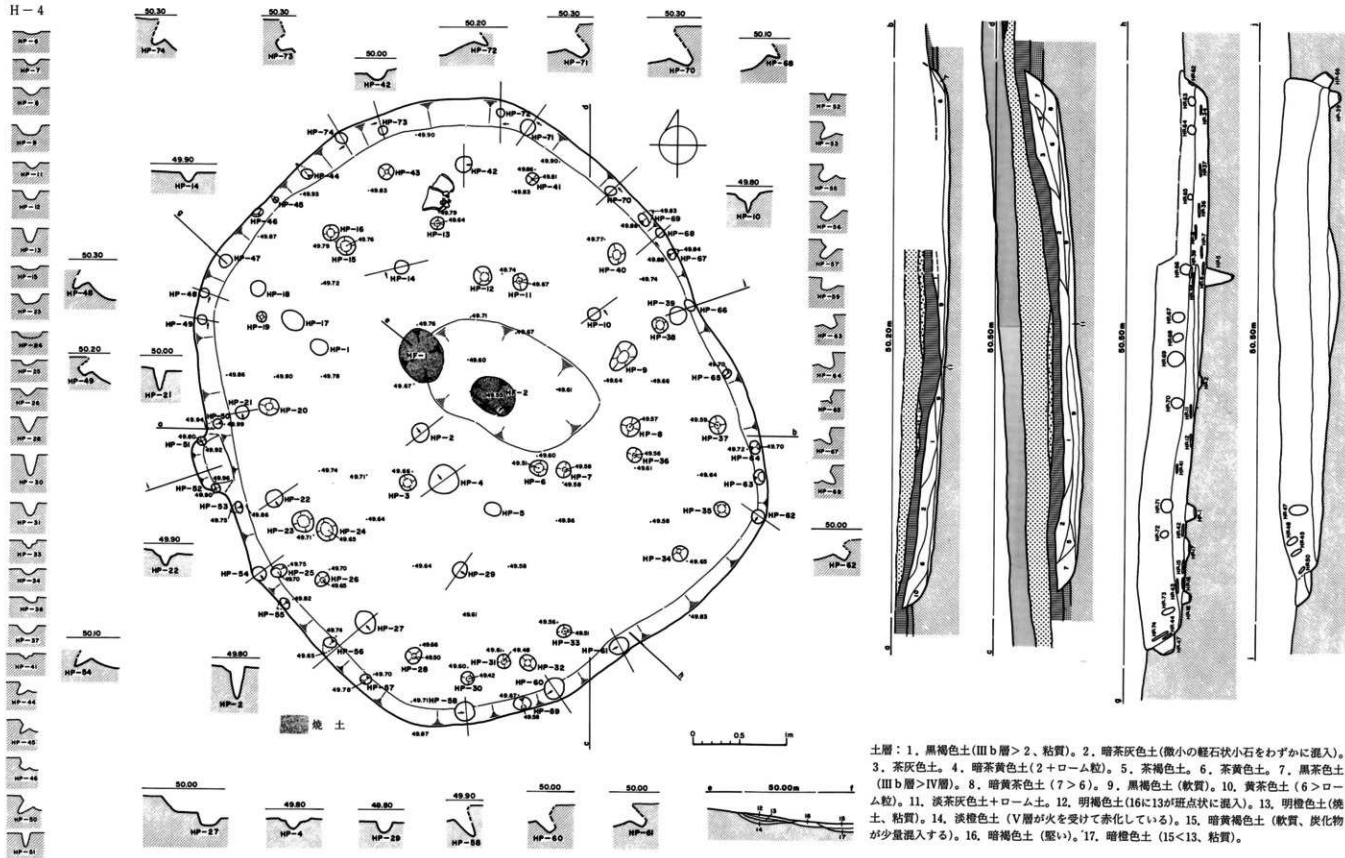
遺物：

土器（図Ⅲ-25・26・27 図版34・35・44・45）

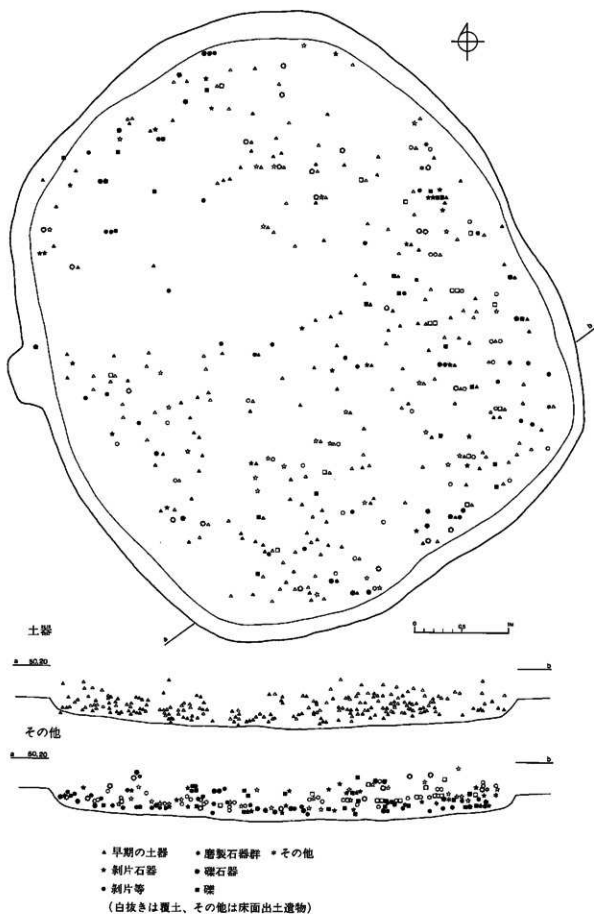
1～5・7は波状口縁のもの。1～5には4カ所に山形の波頂部があり、その両端に副突起がある。5・6・8・9は平縁のもの。口唇内側面に腹縁瓦痕文を施されるもの（1～3・6・8）がある。1は床面からまともに出土したもので全体の5分の4程が残存する。頸部がくびれて口縁部が直立する平底に近い丸底の深鉢形土器。胴下半部はわずかに張り出す。文様は口縁部と波頂部下に垂下する文様で構成される。口縁部と頸部に3条一単位の腹縁文をめぐらせ、区画した中に波状の腹縁文で横長の帯状の文様を描き、斜位に腹縁瓦痕文を充填させている。小突起間では口縁部の腹縁文が鋸歯状沈線文に置き換えられている。波頂部のくびれ部から、腹縁文による垂下する菱形の文様が描かれている。円形刺突文は鋸歯状沈線文の両端、腹縁文のところどころや、菱形の頂点に施されている。波

頂部下では、内面から指頭で押して突起状にし、その上に他より大きな刺突文が加えられている。内面には、口縁部から胴下半部まで主に横方向に幅4～5mmの条痕がある。文様施文後に磨かれ、文様の一部が消えている部分もみられる。2～5は幅広い文様帯をもつ中型の深鉢形土器。2・3・5は文様帯を上下にめぐる4条一単位の腹縁文で区画している。区画内には2、3条一単位の腹縁文で縦に方形(2)や三角形(3)の幾何学的区画が構成されている。2は主に床面から出土したもので、胴上半の2分の1程が残存する。胴部から直線的に立ち上がる器形のもので、波頂部と副突起下に縦位の入組文が描かれ、これに方形の区画文が組み合わされている。区画内は押し引き文的な腹縁圧痕文が横位、斜位に充填されている。円形刺突文は副突起下、入組文の要所に加えられている。3はH=4構築面、覆土1・2層(4点)出土の破片とN-7-44・45・56・57出土の破片が接合したもの。3分の2程が残存する。胴部がやや張り出し、頸部がくびれ、口縁部がわずかに外反する。直線、入組文の腹縁文で区画され、斜位に腹縁圧痕文が充填されている。文様が入組む部分は内面から指頭で押されて小突起状となり、この部分に円形刺突文が加えられている。このほかの部分では1条の腹縁文上に等間隔に円形刺突文が施されている。内面には横方向の条痕がみられ、胴上半部付近で炭化物が付着する。4は床面(3点)、覆土Ⅲb層(8点)、2層(7点)、3層(22点)出土の破片とN-7-34・44・59・64出土の破片(13点)が接合したものである。底部は欠損しているが全体の4分の3程が残存する。口縁部と胴下半部には間隔をあけた2条一単位の腹縁文を、口縁の波頂部で対応する様に屈曲させて器面にめぐらせている。腹縁文間には腹縁圧痕文が斜位に施されている。同様な手法による細長い帯状の文様帯による大柄な鋸歯状文を3列めぐらせ、全体として横位に連続する4段の菱形の区画文が構成されている。区画内の菱形の文様は先の鋸歯状の文様帯と腹縁2条一単位、あるいは1条の腹縁文とを結ぶことで描かれ、部分的にはくずれた三角形になっている。最後の区画内には腹縁文が斜位に充填されているところがある。胴半ばの波頂部下に位置する区画には鋸歯状沈線文が三角形に施され、その部分は内面から指頭で押して小突起状とし、ほかの部分よりは大きい円形刺突文が加えられている。口縁部内面に横方向の条痕がある。色調は全体的にぶい橙色を呈するもので、胎土に3、4mmの小砂利が混じる。5は床面(1点)、覆土(4点)出土の破片と包含層の破片が接合したものである。胴下半部は欠損している。胴部がやや張り出し、口縁部が内湾する器形のもので、4ヵ所にごく緩やかな波頂部がある。波頂部下に3条一単位の腹縁文で「Y」字状の文様を重ねている。文様の端と中央に円形刺突文が施されている。当初は縦位に、クランク状の文様や舌状の区画文を描く予定だったとみられ、器面にその文様を難にナゲ消した痕跡がある。口縁部内面にはケズリの跡がある。6は主に床直下、覆土1～3層出土の破片が接合したものである。全体の3分の1程が残存する。文様は口縁部の狭い範囲に限られ、2条の腹縁文と細い沈線文を1条めぐらせた細長い帯状の区画に斜位に腹縁圧痕文が充填されている。内外面に横、斜位に条痕がみられる。7は床面から出土した小型の鉢形土器で、乳房状の尖底のもの。尖底部は成形した粘土を貼りつけたものらしく、接合面で割れていた。口縁部に2条の沈線をめぐらせ、細い沈線で底部付近にまで連続した入組文の文様が構成されていると思われ、腹縁圧痕文が充填されている部分がある。腹縁圧痕文は沈線文とは重ならず、沈線文に添うかたちで施されている。円形刺突文は沈線文の端と屈曲部に施されている。又接合はできなかったが、波状の口縁部が2片あり、いずれにも貫通する円形刺突文がある。向い合わせで対になるものかもしれない。9は構築面、床、覆土1・3層、壁出土の破片(13点)とN-7-34出土の破片が接合したもの。全体の3分の1が残存する。無文で、横方向に条痕がみられる。10・11は胴部、底部の無文部分。11は7同様に尖底部が成形されているとみられ、接合面で欠損している。器面の凹凸が著しい。12～40は腹縁文、沈線文、刺突文、腹縁圧痕文を単独あるいは組み合わせて主に幾何学的

H-4



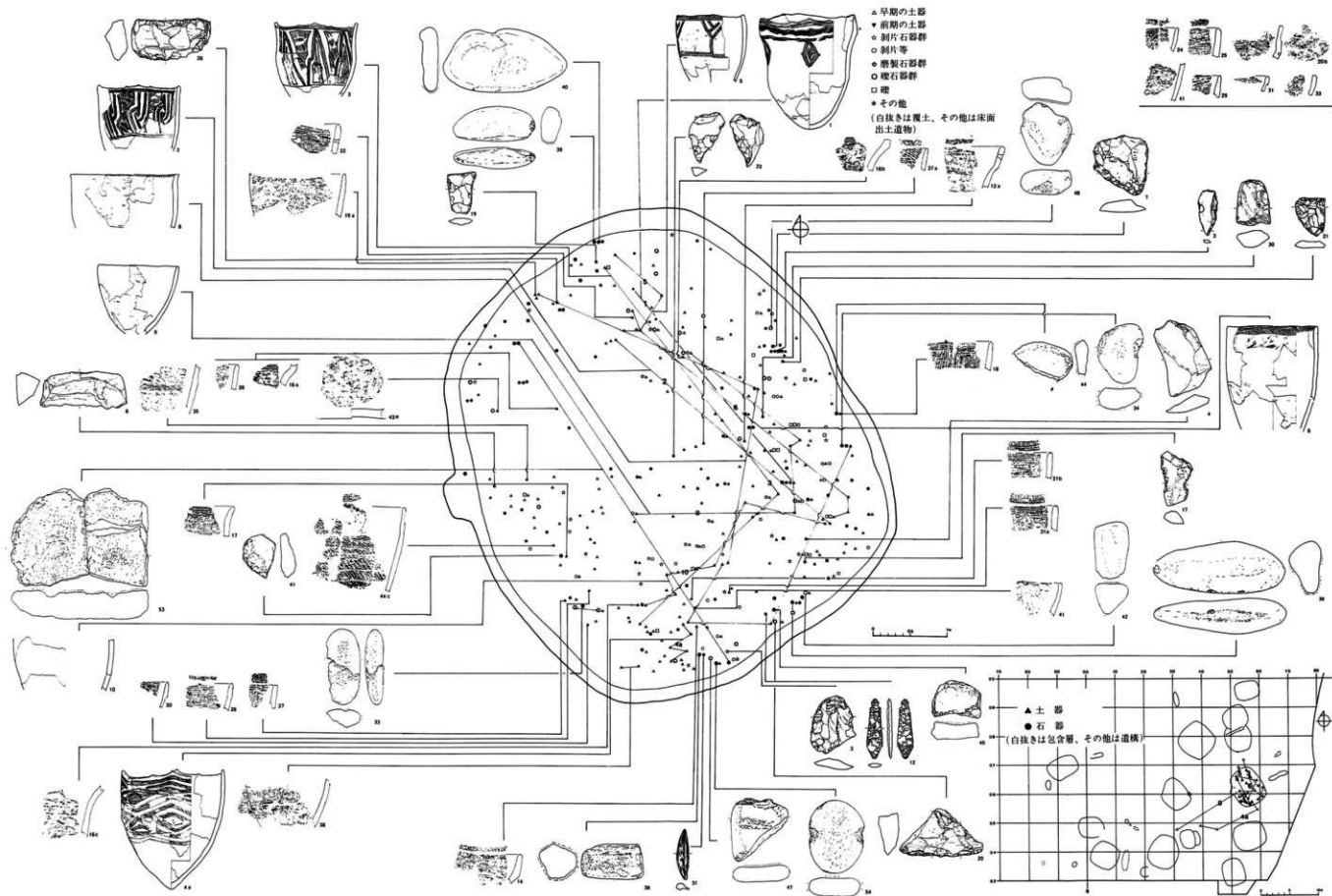
図III-22 H-4実測図



図III-23 遺物分布図

区画の文様が構成された口縁部、胴部の破片。口縁部では口唇内側角に腹縁文が施されるもの(12~14、18~27、31・32・37)や、その際に残されたと思われる爪形圧痕が残るものがある(18、19、22、25)。12~14は口頸部がキャリパー状の器形のもの。波状口縁でいずれも副突起がある。いずれも口縁部に腹縁文で区画された文様帯がある。12a・bは同一個体。区画内には腹縁圧痕文が縦位に施されている。波頂部下位には短い帯状の文様を垂下させている。13a・bは同一個体。破片はH-5(図III-36-6)、H-9(図III-61-16)、と合層から出土しているものである。三角形、菱形の文様が描かれている。頸部の腹縁文間には円形刺突文がめぐっている。口唇の腹縁圧痕文は約7mm程で押し引き状である。14も13と類似の文様構成と思われる。16a~cは同一個体。波頂部下位に垂下する文様帯がある。17~24は比較的幅広い文様帯をもつものと思われ、波状口縁(18~20、22~26、31・32)のものがある。17は口縁部がやや外反する。貝殻腹縁による縁取りを省略して沈線のみどころがある。内面には斜位に条痕があり、炭化物が付着している。18~20は方形(18)、三角形、菱形(19・20)の区画文が描かれ、腹縁圧痕文が充填されている。18は口唇外側角にも腹縁圧痕文がある。19a・bでは波頂部下位に舌状の区画文がみられる。20a・bでは楕円形の刺突文が沈線の屈曲部と波状口縁部に施されている。波頂部下位と思われる胴部を、内面から指頭で押して小突起にし、その上にも刺突が加えられている(20b)。21a・bは同一個体。口唇上に部分的に円形刺突文が施されている。口唇の腹縁圧痕文は約6mmで長めである。23・24は小型のもの。24は器面に赤色の物質が付着している。26はクランク状の腹縁文で区画された中に鋸歯状沈線文が施されている。27は口縁部に3条の腹縁文がめぐり、そこから鋸歯状の沈線文が垂下されている。約12mmの長めの腹縁圧痕文が施されている。32は沈線で文様が描かれ波頂部に刺突文が施されている。33~35は胴部破片。35は頸部がくびれる器形になるとみられ、胴部に腹縁文が3条めぐっている。36は三角形の区画文のものもみられる。円形刺突文の圧痕がラセン状になっていることから、小さな巻貝の殻頂部によるものとみられる。37は沈線により斜格子目の文様が描かれ、円形刺突文は沈線文の交差するところなどに不規則につけられている。

口唇内側には、細い棒状工具あるいはヘラ状工具で斜めに刻み目がつけられている。内面には横方向の条痕がある。38~40は無文の口縁部。38では貫通する円形刺突文が口縁部にみられる。40は器面の凹凸が著しいもので、内面には炭化物が付着する。41は幅5mm程の条痕がある。42は乳房状の尖底部。43は平底のもの。ややあげ底気味で内面には条痕がある。44a~cは同一個体で、包含層からも破片が出土しているが接合できなかった(図IV-14-160a~c)。胴半ばまで太い平行沈線を間隔をあけてめぐらせ、その間に右下りの腹縁圧痕文を斜行縄文風に施している。胴半ばは無文である。



図III-24 遺物接合図

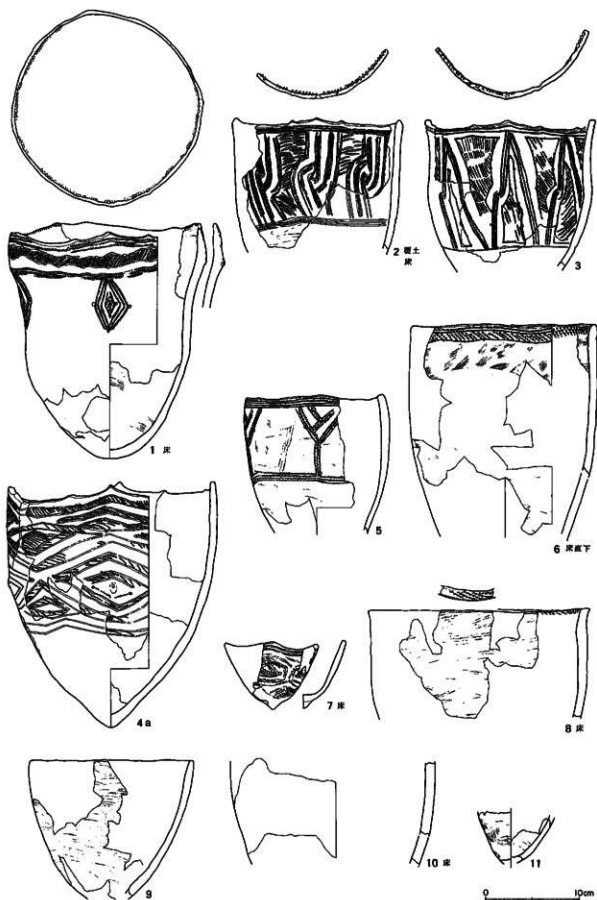
石器 (図III-28・29・30・31・32 図版57~60)

1は背腹がよくわからないが、横長剥片の腹面を調整した石鏃らしい。背面右縁の逆刺には素材の縁辺が残る。折れているのではない。2は横長の鏃。素材の打面側は背面細部調整、末端側は主に折面による整形。刃部は錯向剝離状に右縁に付く。3は小さい平坦打面の素材、背面左縁に長い刃をつける掻器。4~6は縦長の削器で、4は平坦打面を残し、みな腹面右縁に刃部。5は打面側の折面から背面の一部に調整が入る。7はほぼ全周を整形した削器で刃部はかなり急角度に作られ、打瘤を取り除いている。8~11は平坦打面を残した横長の削器で、8・10・11では腹面の粗雑な刃づけが目引く。11は背面左縁にも刃部。6・11以外の削器はいずれも背面に礫面を含む。12~14は石匙で、12は整った両面調整品。13・14は錯向剝離状に両面右縁に刃部を持ち、打面付近を両面細部調整で打る。15~17は挟入石器、素材は厚い。15・16は平坦打面を残し腹面に挟りがある。17は錯向剝離状に両面右縁を挟り、打面付近は整形される。18~25は未分類剥片石器で、18・19は両面調整品、21は背面調整品、20は腹面調整品でその他は非調整品。18は大きさや輪郭から石鏃未製品かと思われる。21は2つの折面から背面に調整が入る。20はやはり折面から腹面に調整が入る。数少ない玄武岩製の剥片石器で、削器の可能性はある。22は打瘤を取り除く際に折れたものか。背面左縁に掻器状の刃部。23~25は削器に近いものの。23は腹面左縁の刃付けと右縁折面の先後は不明。打面は複数の折れで失われる。24は刃部は短くかなり急。25の腹面右縁は削器刃部にしては細部調整が深い。左縁のそれは平坦で浅い。26~28は石核でいずれも剝離面は小さい。26は大型の剥片を素材に、折面を主な打面とする。27は両面調整器状の石核が折れ、折面からの剝離が失敗しているらしい。28は調整打面ないし作業面と打面の交代。石核背面は平坦な礫面だが打面に利用した跡がない。29は研磨石材の縁から素材を取ったらしい擦切石片。擦切折面は研磨され、おそらく片刃。30は磨製石斧の基部。N-7-53区III層出土の円刃、片刃の刃部と接合する。擦切石片ではなく、整形時の剝離面が残る。31は薄く小さい擦切残片。32~35はたたき石。32は一端と両側面に敲打痕を持ち、他端には打ち欠きがある。2つに割れて出土したが、小さい方の破片は割れ口の稜の一部が摩滅しており、石鏃のように使われたらしい。両主面の中央に散在した敲打痕と軽微なすり面があり、すり石とも考えられる。33は両主面と側面に敲打痕。主面の敲打はくぼみを2ヵ所形成する。34は両主面・両側面に集中した敲打。左図に示した方の主面には研磨が加わっているようだがやはりはっきりしない。35は両主面中央付近に敲打痕、しかし散在ぎみで、これもすり石とみたほうが良いか。36~38はすり石。36は今回出土の長手のすり石の中で最大のもののひとつ(1423g)。両主面も使用、敲打痕はほとんどない。37は四角柱状の礫を使用。38は稜上のすり面が幅広く、随所に集中した敲打痕があって一部でくぼみを形成している。37・38には弱く窪んだ平滑な研磨面があり、いずれも砥石に入れた方がよいかも知れない。39~41は石鏃で、39・40は扁平な円礫、後者は薄く剥がれた円礫片を用いたもの。39・40には片方の主面(図の左面)にも弱くくぼんだ研磨面が見られる。42~52は砥石で、42~48は主要な研磨面が1ヵ所にあるもの。42・43は長手の円礫を素材とするもので、42は三角柱状のすり石、43は両端に敲打痕のあるたたき石と複合している。43のもう一方の主面に散在した敲打痕が注意を引く。44~46は薄手の礫片の割れ面を研磨した類とみられる。45・46では周縁に連続した剝離度が見られ、整形の意図が感じられる。47はやや扁平な円礫素材。48は珪岩を用いた唯一の例。たたき石と複合しており、円礫に生じた大きな剝離面を機能部としている。49は多面体状の砥石。片方の主面にくぼみが2ヵ所見られる。50・51は扁平な素材の側面を使用する例。51では主面の一部(側面のすり面に沿った狭い範囲)にも研磨が認められる。52はかなり厚手の角礫を用いて広い研磨面をもつ。53は石皿と考えられるもの。53の破片は折れた後にも研磨が加わっている。またそのすり面に複合する円形のくぼみは深く、尖ったもので敲打したらしい。54・55はほぼ同形、同大の石鏃。ともに散在

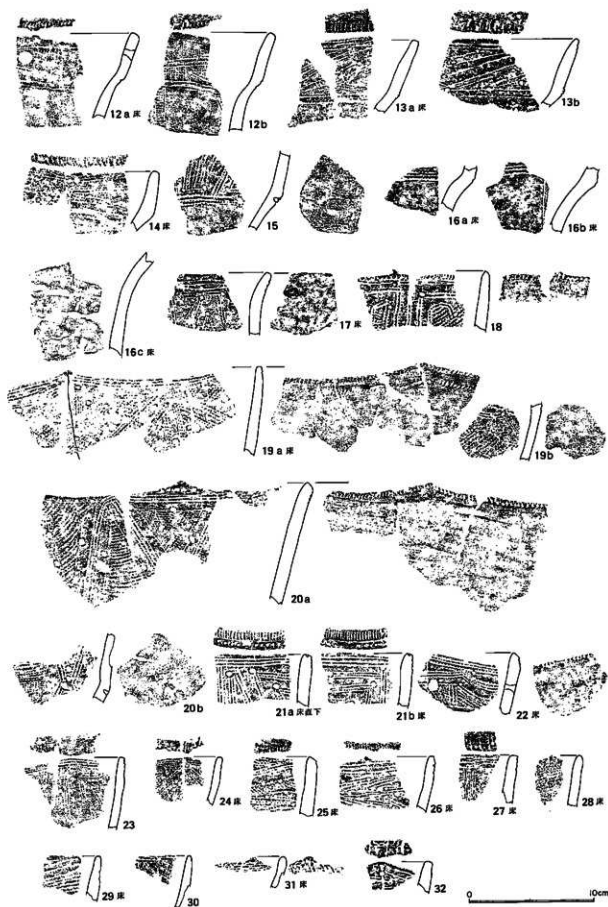
する敲打痕とすり面が両主面に見られるが、55が典型的なすり石と複合するのに対して54は一方のすり面がくぼみ、敲打痕も荒々しい。挟りの部分は側面から敲打を加えて入念に作る。56は石製品で、N-7-44区出土の破片と接合して舟形の皿状のものであることが知られた。比較的比重の大きい軽石で作られ、全体を敲打の後軽く研磨して仕上げているようであるが風化が激しく不明瞭。裏面にも狭いがやはり舟形のくぼみを作る。

表Ⅱ-4 小ピット一覧

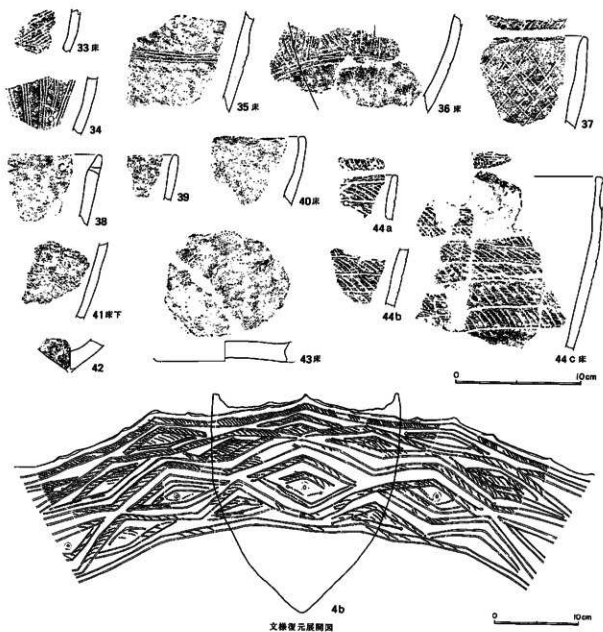
番号	直径×縦深 (cm)	深さ (cm)	土	検出面	番号	直径×縦深 (cm)	深さ (cm)	土	検出面
H P-1	18×16	11	黒茶色土>ローム土(軟質)	横断面	H P-28	18×16	—	暗茶灰色土	最終生活面
H P-2	20×17	36	灰褐色土>ローム土(粘質)	"	H P-29	15×18	15	灰褐色土	横断面
H P-3	17×17	—	灰褐色土>ローム土	"	H P-40	22×20	—	暗茶灰色土(堅い)	最終生活面
H P-4	31×30	11	灰褐色土>ローム土(粘質)	"	H P-41	14×12	5	暗茶灰色土>ローム土(堅い)	"
H P-5	18×15	30	黄灰色土>ローム土	"	H P-42	18×17	10	灰褐色土>ローム土(軟質)	"
H P-6	19×17	3	灰褐色土	"	H P-43	18×17	—	灰褐色土 ローム土(堅い)	"
H P-7	18×15	6	"	"	H P-44	14×12	—	暗茶灰色土(粘質)	"
H P-8	21×20	9	暗茶褐色土>ローム土	最終生活面	H P-45	8×5	—	暗茶褐色土	横断面
H P-9	25×22	10	灰褐色土>ローム土(軟質)	横断面	H P-46	15×9	—	暗茶灰色土(砂質)	最終生活面
H P-10	13×13	22	灰褐色土(粘質)	"	H P-47	14×13	11	暗褐色土>ローム土(砂質)	"
H P-11	17×14	8	灰褐色土(堅い)	"	H P-48	10×10	16	暗褐色土(粘質)	"
H P-12	19×17	10	灰褐色土>ローム土(砂質)	"	H P-49	11×10	12	灰褐色土(軟質)	"
H P-13	14×14	15	灰褐色土(粘質)	"	H P-50	10×10	—	褐色土>ローム土	"
H P-14	40×38	12	灰褐色土>ローム土(軟質)	"	H P-51	10×10	14	暗褐色土	横断面
H P-15	20×20	3	茶褐色土(堅い)	"	H P-52	10×10	6	"	"
H P-16	17×16	—	茶褐色土	最終生活面	H P-53	13×8	11	暗茶灰色土>ローム土(やや砂質)	最終生活面
H P-17	25×18	8	黒茶色土(軟質)	"	H P-54	18×18	20	暗褐色土>ローム土(粘質)	"
H P-18	17×16	9	灰褐色土	横断面	H P-55	12×8	—	暗茶灰色土(軟質)	"
H P-19	12×10	—	—	最終生活面	H P-56	14×11	24	暗褐色土>ローム土(軟質)	"
H P-20	20×18	—	灰褐色土>ローム土(堅い)	"	H P-57	12×10	—	茶灰色土>ローム土	"
H P-21	15×15	24	灰褐色土>ローム土(軟質)	横断面	H P-58	20×20	26	黒色土(軟質)	"
H P-22	18×18	18	暗茶灰色土(軟質)	"	H P-59	18×15	—	灰褐色土(軟質)	"
H P-23	24×22	10	暗褐色土>ローム土(軟質・砂質)	最終生活面	H P-60	23×21	20	暗茶褐色土>ローム土(粘質)	横断面
H P-24	25×22	6	暗茶褐色土>ローム土(軟質)	横断面	H P-61	21×19	16	暗茶褐色土(粘質)	最終生活面
H P-25	17×13	5	黒茶色土>ローム土(軟質)	"	H P-62	16×15	14	暗茶灰色土(軟質)	"
H P-26	18×14	8	灰褐色土>ローム土(軟質)	"	H P-63	15×12	—	褐色土>ローム土(軟質)	"
H P-27	22×20	13	暗褐色土>ローム土(粘質)	"	H P-64	15×10	—	灰褐色土>ローム土	"
H P-28	18×17	16	暗茶灰色土(軟質)	"	H P-65	12×8	—	暗褐色土(軟質)	"
H P-29	18×15	14	灰褐色土	"	H P-66	12×11	13	暗茶褐色土(軟質)	"
H P-30	14×14	22	褐色土(粘質)	"	H P-67	12×9	—	暗褐色土>ローム土(軟質)	"
H P-31	15×14	12	暗茶褐色土>ローム土(軟質)	最終生活面	H P-68	10×10	12	灰褐色土(軟質)	横断面
H P-32	18×14	8	暗茶褐色土>ローム土	横断面	H P-70	12×10	23	黒茶色土(軟質)	最終生活面
H P-34	17×16	6	暗茶灰色土(軟質)	"	H P-71	18×16	20	暗褐色土(砂質)	横断面
H P-35	18×18	—	暗茶褐色土>ローム土(軟質)	最終生活面	H P-72	9×8	15	灰褐色土>ローム土(粘質)	最終生活面
H P-36	16×18	5	—	横断面	H P-73	9×9	12	灰褐色土(粘質)	"
H P-37	21×18	9	褐色土>ローム土	最終生活面	H P-74	14×12	16	—	横断面



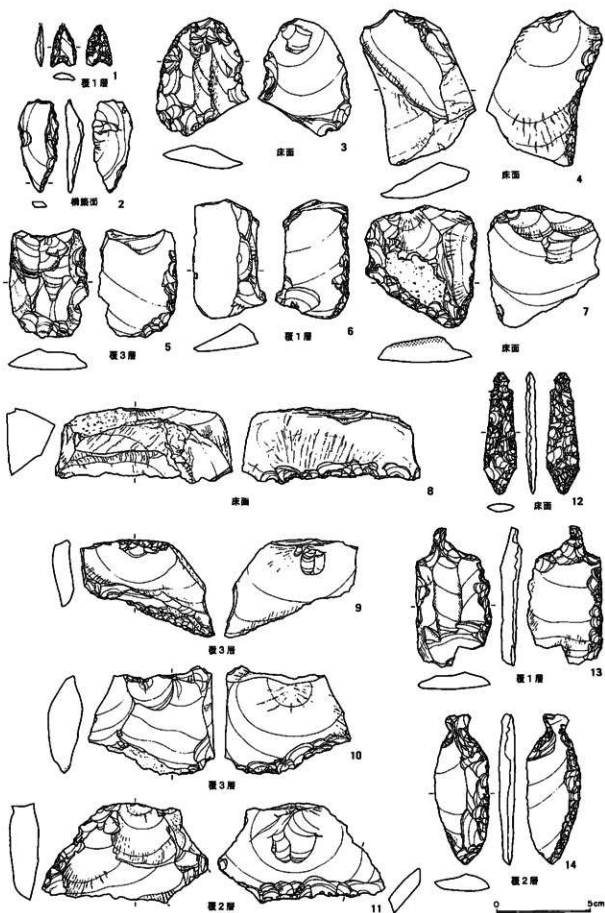
図III-25 H-4 出土土器 (1)



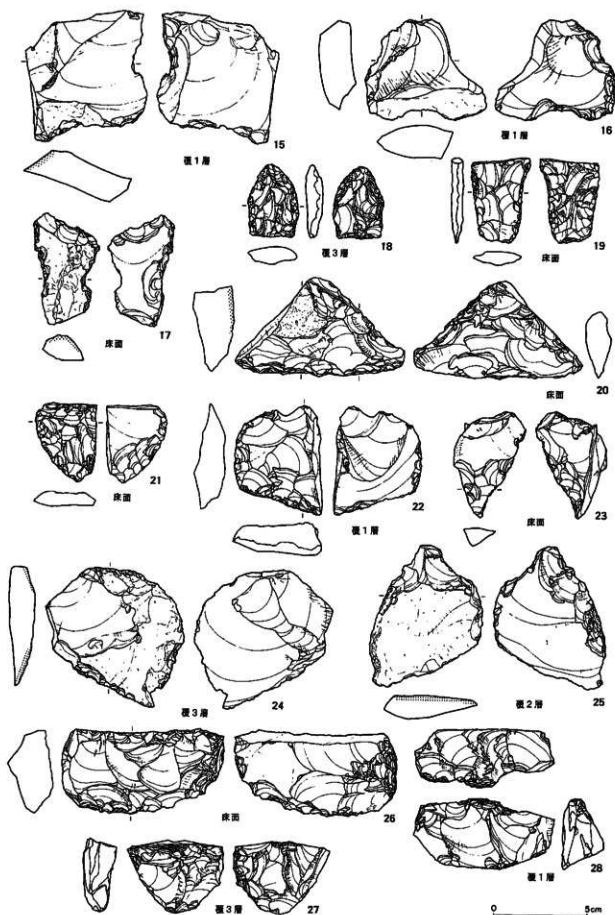
図Ⅲ-26 H-4 出土土器 (2)



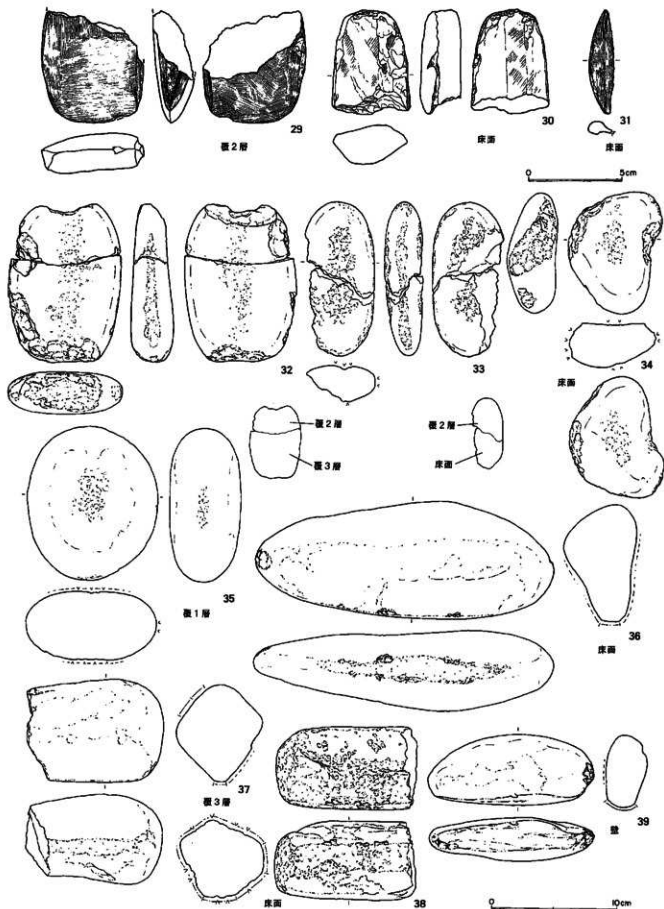
図III-27 H-4 出土土器 (3)



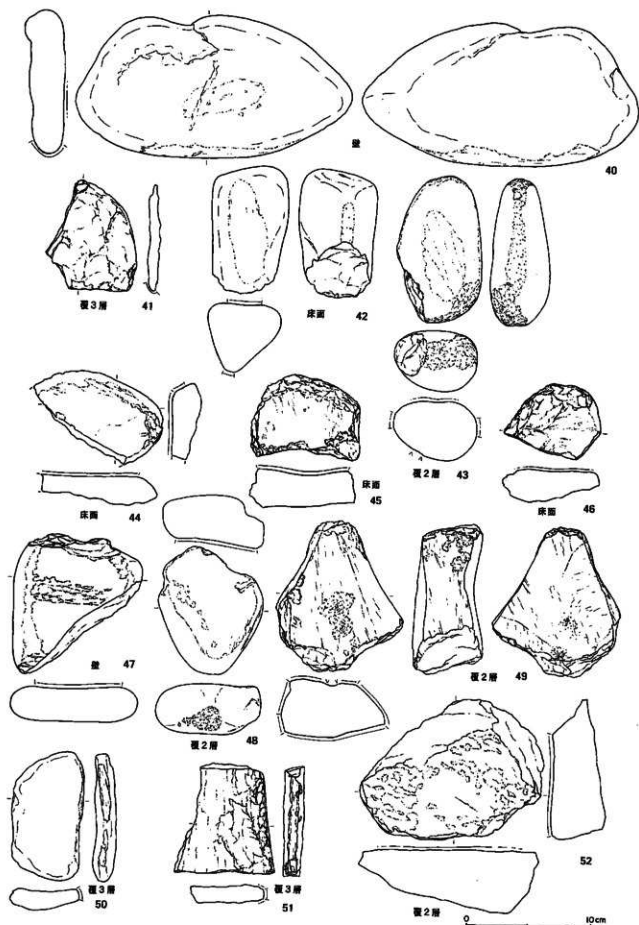
図Ⅲ-28 H-4 出土石器 (1)



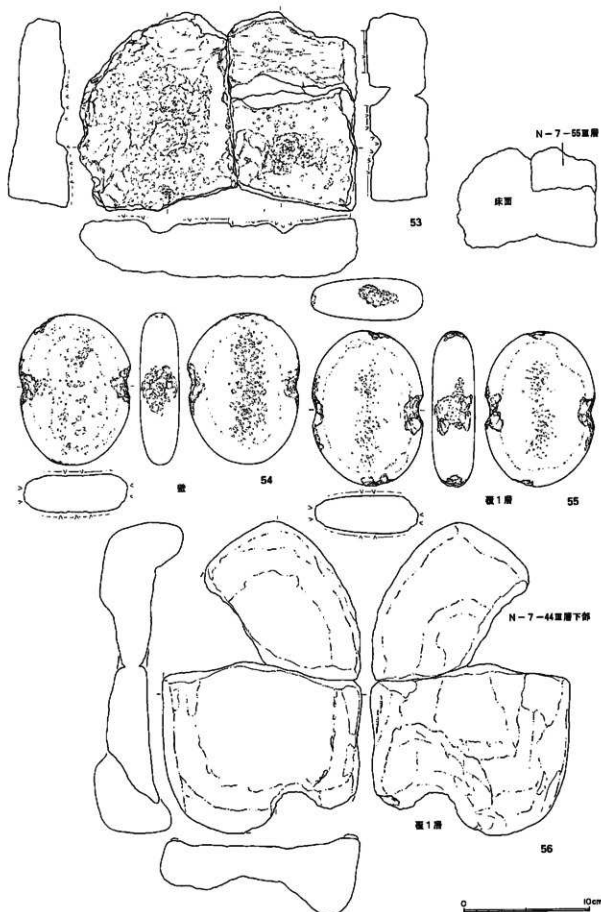
図III-29 H-4 出土石器 (2)



図III-30 H-4 出土石器 (3)



図III-31 H-4 出土石器 (4)



図Ⅲ-32 H-4 出土石器 (5)・石製品

H-5 (図III-33・34・35 図版13)

位置: N-7-54・55・64 ほぼ北から南へ傾斜する標高49.60m~49.70mの緩斜面上に位置している。本住居跡の東約5mのところは沢地形になっている。北にH-4、南東にH-10、西にH-13・14が近接する。

規模: 5.52m/5.40m×4.98m/4.76m×0.16m

平面形: 丸味をもつ五角形 床面積: 20.73㎡ 長軸方向: N-87°-E

確認・調査・土層: N-7-64の包含層調査中、西側のIV層上面で5m×2mの半円状の範囲に遺物集中が検出された。石斧が突き刺った状態で出土し、円鏝、石鏝、搔器、削器などもあり、またやや北側からは1.2m×1.2mの範囲に押しつぶされた状態で土器が一括出土した。このため周辺に遺構があることも予想されたことから、N-7-54・55のIII層を遺構検出作業を行いつつ掘り下げたところ、IV層上面で、ほぼ東西を長軸とする長円形(約5.5m×4.6m)のIII層の落ち込みを確認した。東西、南北に土層観察用の土手を設定し、順次掘り下げて調査を行った。III層を除去すると若干汚れた暗黄灰色土があり、遺物が多く出土した。これを除去するとほぼ平坦となり、炭化物の散在や、焼土が検出された。このためこの面を床面と想定し、全体に掘り下げ、壁の立ち上がりを確認した。覆土は二層であるが、中央部と東側では一層しか認められず、III層が厚く堆積している。覆土1層は黒褐色土と茶灰色土で、とくに東、南側に顕著に認められた(土層図2、3、5、7)。覆土2層は暗黄灰色土で、層厚は5cm~10cmである。粘質土でローム土と暗茶灰色土が混じり合った土である(土層図6)。構築面と覆土2層間には淡茶灰色土+ローム土の汚れた土が約5cmほど堆積している(土層図9)。この層の上面で焼土が検出されており、遺物の出土状況、炭化物の散在状態などから見て、ここが最終的な生活面であったと思われる。

床面: V層をわずかに掘り込んで構築されている。ほぼ平坦で、北西から南東に向けてやや傾斜している。中央部分には東西に細長い(2.80m×0.7m 深さ0.06m~0.1m)くぼみがある。

壁: 壁高は10cm~15cmで、北壁がやや垂直的に立ち上がっている。

炉跡: 中央部西寄りのところに1.2m×0.5mの長円形状の範囲に焼土が検出された。地床炉である。明瞭な掘り込みはなく、V層が火を受けて赤色化し、堅くなっていた。

付属ピット: 柱穴状小ピットは最終生活面、構築面、北壁の外側から45個検出されている。これらは①壁面にあるもの、②壁際から10cm~30cmほど内側をめぐるもの、③焼土と浅いくぼみの周辺にあるもの、というまとまりが見られる。①は15個あり、すべて内傾している。おおむね先端部が細くなっている。②は直立しており、細く、浅いものが多い。屋根材の支柱穴であろう。③は8個あり、直立している。支柱穴であろう。これらには最終生活面と構築面で検出されており、建て替えが行われたものと思われる。HP-31・32は壁外で検出されたもので、住居側に傾いている。IV層上面に近いところで検出されていることから、構築面の小ピットと同時期か、それに近い時期のものと思われる。

遺物出土状況: 出土遺物総数は355点、その内訳は土器195点、石器など160点である。床面、構築面から出土した遺物は、土器140点、石器など62点である。出土した土器は、覆土からII群土器が1点出土している以外はすべてI群土器である。石器は剥片石器群が98点、磨製石器群が6点、礫石器群が56点出土している。剥片石器群では石鏝、搔器、削器、石匙形石器など、磨製石器群では石斧など、礫石器群ではすり石、砥石、石鏝、円鏝などが出土している。このうち床面、構築面からは搔器、削器、石匙形石器、すり石、砥石、石斧などが出土している。遺物は床面、床面と覆土、床面と覆土と包含層という接合関係を示している。覆土出土土器とH-3・6・13覆土出土土器、X-2暗褐色土層出土土器と接合している。石器では床面出土の砥石がX-2暗褐色土層出土のものと同接合している。ま

た包含層出土土器との接合関係では、本住居跡周辺出土の土器と20mほど西方のグリッド出土の土器と接合することが確認された。床面から多くの遺物が出土しているが、本住居跡に伴う確実なものはない。図Ⅲ-36-1の一括土器は、覆土上層からの落ち込み中にあり、本住居跡よりやや新しい時期のものであろう。

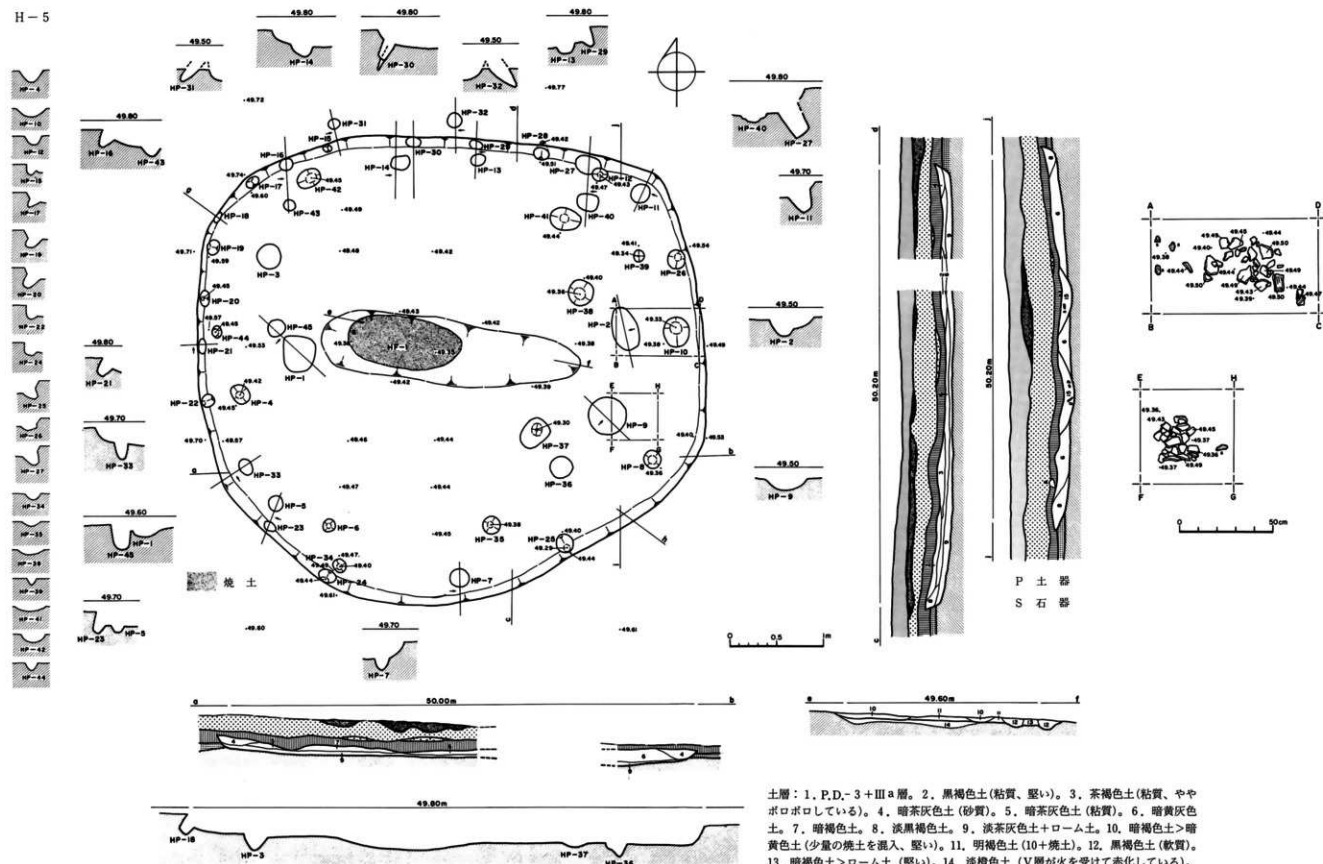
時期：掘り込み面はⅢb層中である。出土土器はⅠ群B類土器であることから、本住居跡は縄文時代早期中葉の時期のものである。

遺物：

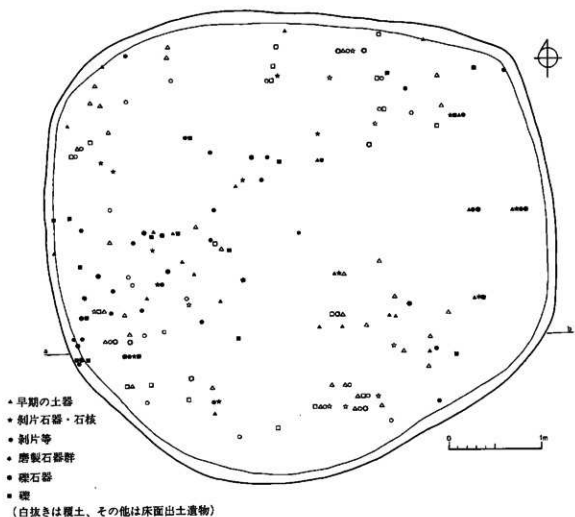
土器（図Ⅲ-36 図版36・46）

1は床面、床面直上（13点）、覆土1層（5点）・3層（9点）出土の破片とN-7-54・64から出土の破片（87点）、また1点のみであるが北方20m程離れたN-7-59から出土の破片が接合したものである。このほか接合しなかった同一個体の破片は、床面、覆土、包含層から87点出土している。底部は欠損しているが全体の5分の4程が残存する。口頸部がキャリパー状の大型深鉢形土器。口縁部は外反する。4ヵ所に山形の波頂部があり、その両端にはごく小さな副突起がある。文様は口縁部と胴上半部の2ヵ所に施される。口縁部文様帯の上下を2、3条一単位の腹縁文で区画し、この中に波頂部では菱形、残りの部分では細長い方形の文様が構成されている。腹縁文は波頂部を中心に対称となる様に斜めに充填されている。胴部には鋸歯状の沈線文を2条めぐらせ、波頂部下で頸部から腹縁文による帯状の文様を沈線に垂下させている。その中には腹縁文が縦位に充填されている。同様に波頂部の中間からは2条の鋸歯状の沈線文を配している。円形刺突文は沈線文の下端、波頂部、腹縁文上やその両端、充填文中に加えられている。口唇内側には腹縁文が施され、その下位にはところどころに爪形圧痕が残る。2～4は無文のもの。2と同一個体の破片は床面、覆土1・3層、壁から50点出土したが、ほとんどのものの表面が剝落しており、接合できたのは口縁部の3分の1程である。4ヵ所に山形の突起部のある無文のもので、内面には幅3mm程の横方向の条痕がある。胎土に2、3mmの小砂利が混じる。3・4は平縁のもの。3は東壁側の床面直上からまとも出土した破片（32点）と覆土1層（1点）、N-7-44・64（7点）、15m～20m程西方のN-7-15出土の破片（1点）が接合したものである。底部の先端は欠損しているが5分の4程が残存している。内外面ともに凹凸が著しく、器面には斜方向に、内面の口縁部付近では横方向に、底部付近ではやや斜方向に細かい条痕がある。口縁部は指で調整したと思われる、爪の圧痕が残る。胎土には3mm前後の小砂利が多い。4は主に床面直上出土の破片が接合したもので、胴部下半の粘土帯の接合面で破損している。口唇上と口縁部付近では横方向に、胴上半部では斜方向に条痕がある。内面にもほぼ全面に横方向の条痕があり、炭化物が付着している。口唇内側に刻み目状に腹縁文がつけられている。5～11はいずれも腹縁文、沈線文、刺突文、腹縁文を組み合わせ文様が構成される口縁部、胴部破片。5～10は口唇内側に腹縁文が施されているもので、5～7・10には8mm程の長めの圧痕文が施され、9では深く刻み目状になっている。5では外側角にも短い圧痕文が施されている。5・6は頸部がキャリパー状の器形のもので、いずれも波状口縁である。5は波状部の間に副突起がある。くびれが強く口縁部は直立する。口縁部文様帯は上下を2条の腹縁文と細い沈線文で区画している。沈線文の間には短い腹縁文が縦位に施されている。その際に残されたとみられる爪形圧痕が胴部の無文部にまばらにみられる。文様は波頂部を中心に三角形の区画がみられ、その中に弧状の腹縁文を充填させている。6は同一個体の破片がH-4（図Ⅲ-26-13a・b）、H-9（図Ⅲ-61-16）、と包含層からも出土しているものである。三角形、菱形の区画文が描かれている。7・8はやや幅広い文様帯のもの。7は口縁部が外反する器形のもの。口唇断面は丸味を帯びた角形で、小さな円形刺突文が、口縁の無文部

H-5



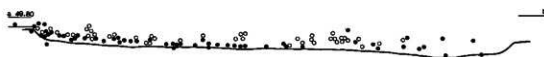
図III-33 H-5実測図



土 器



石 器



▲ 土 器
 ● 石 器
 (白抜きは覆土、その他は床面出土)

図III-34 遺物分布図

にはやや大き目の楕円形刺突文がめぐっている。口縁部には、腹縁文で三角形と菱形を組み合わせた文様が構成されているが、沈線による最初の文様が強く描かれているため、縁取りされた貝殻腹縁文の印象が薄い。内面には炭化物が付着する。8は三角形の文様が構成されている。5～8は腹縁文で区画された中に充填文がみられないものである。9a・bは同一個体。器壁が4mm前後の薄手の小型土器。口唇断面は切り出し形で、円形刺突文がめぐっている。文様構成は明瞭ではないが、区画された中に腹縁圧痕文が充填されている。11は沈線文と細かい円形刺突文による文様のもの。12は口縁部に細い沈線文を2条めぐらせて、その中に貝殻腹縁文を斜位に充填している。13は無文のもの。14はⅡ群土器。条の太さの異なるLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。

石器 (図Ⅲ-37・38・39 図版61・62)

1・2は両面調整の石鏃。ただし2の図右面右縁の破損は調整中の事故(左縁から入った剝離が右縁に達したもの)らしく、完成品とは言えない。石器の中ほどで幅広くなる輪郭も他の完形品とは異なる。3～10は撚器で、4・6が大きな礫打面を残し、7・8・10も礫面を含む。3の腹面下部は石核背面に由来する素材面らしく、主剝離面との境の厚い部分が調整している。4は厚手のもので、腹面右縁は折面。5・6は横長の剝片を用い、5では打瘤を除去する。7・8は同一母岩でともに打面、打瘤が除去され、比較的薄い刃部をもつ。7の腹面左縁は折面している。9・10、平坦打面で薄手の素材に偏った刃部。刃付けは急角度。11～15・25は削器、15以外は平坦打面の素材。12と25の背面に礫面が残る。11の刃部は素材の打面寄りでは背面、末端寄りでは主に腹面につく。12は刃縁に摩滅(やや腹面に偏る)がある。13・14はやや急角度の刃づけ。13の腹面左縁の細部調整は背面の刃づけ後のもの。14は刃部背面に微細な剝離痕が多い。15は線打面素材。背面に新鮮な節理割れ面らしいものが見られる。25は石核底面に届く大型の素材に細かい刃づけ。16・17は打瘤付近に挟りを入れた石匙形石器。18～24は未分類剝片石器。18は先行剝離面が残るがほぼ両面調整品に近いもの。19は背面調整品で調整後に折れている。20～25は非調整品。20は削器に近いが刃づけの細部調整が不揃い。21の背面右縁には微細剝離痕が多い。22は削器断片か。23は背面末端に急角度の刃づけがなされ、左右の縁辺も整形する。24は大型の剝片を素材にした石核の平坦打面に削器刃部が見られる例。石核の作業面と見えるものはあるいは挟りを作ろうとする細部調整か。26は石斧の破片で擦切折面に研磨あり。27～29は擦切残片。28には2条が切り合う特徴的な擦切溝が見られる。30・32はすり石。30の図示した方の主面下半には顕著なすり面、また折れていない方の端部を中心に敲打痕の集中が形成される。32の両主面中央付近には散在ぎみの敲打痕。31・33～35は砥石。31はX-2出土の遺物との接合によって、石鏃の破片を砥石に用いたことが知られる。図の右上にある辺が石鏃の機能部にあたる。34では主面の研磨面の中に溝状の機能部が現れ、33もそのようなものであるらしい。薄手の小さい礫を素材とする35の研磨面の一部には条痕が複合する。36・37は石鏃で、37は片面だけを打ち欠いたもの。38は未分類礫石器。片面に一端から剝離が加えられた後、同じ端部が摩滅したもの。

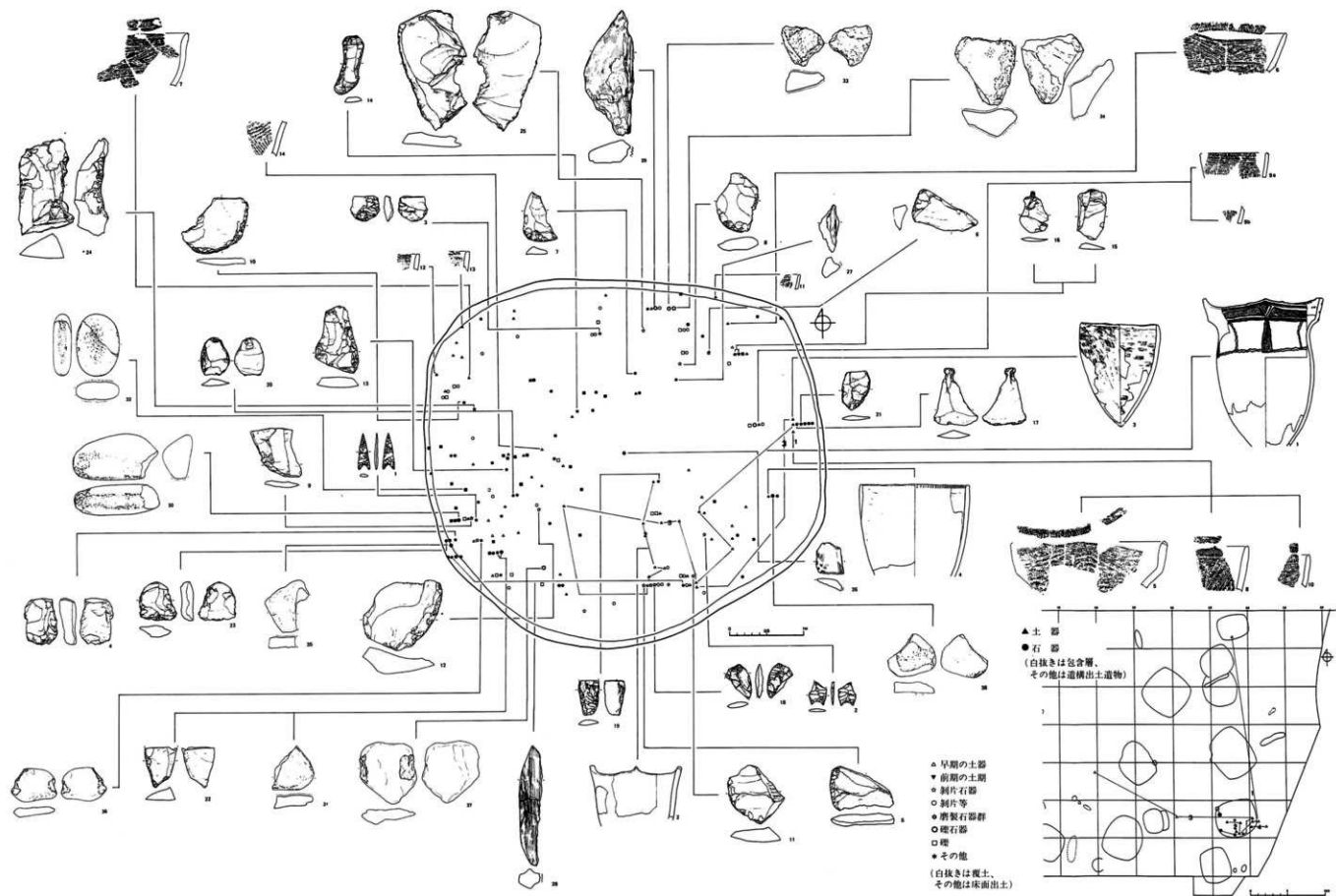
H-6 (図Ⅲ-40～44 図版14・15)

位置: M-7-94・95区、N-7-04・05区にまたがり、南東側はH-3に隣接する。東側にはP-9、F-2、剝片集中4・5などが分布する。

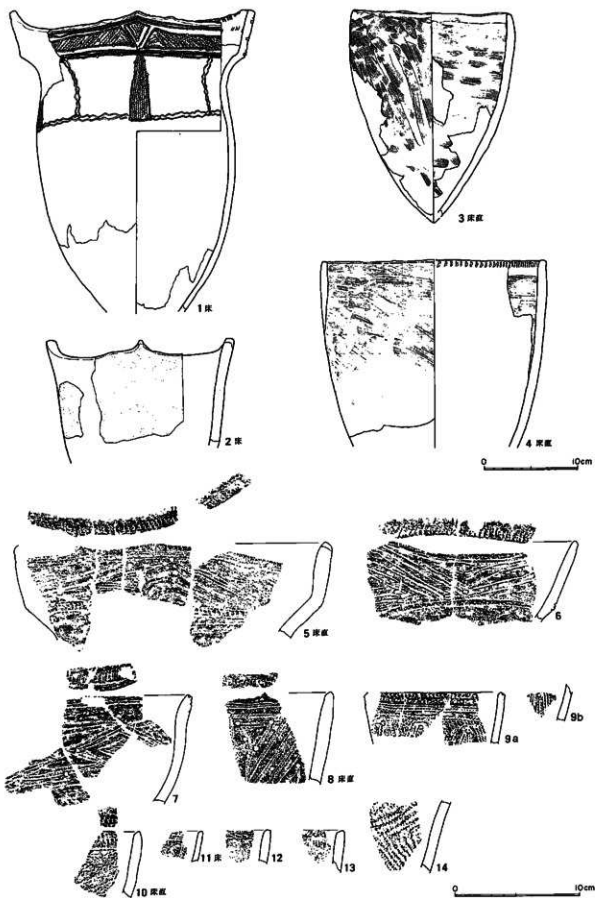
規模: 4.14m/3.84m×3.30m/3.10m×0.12m。

平面形: 隅丸長方形。床面積: 10.57m² (推定) 長軸方向: N-88°-E (推定)

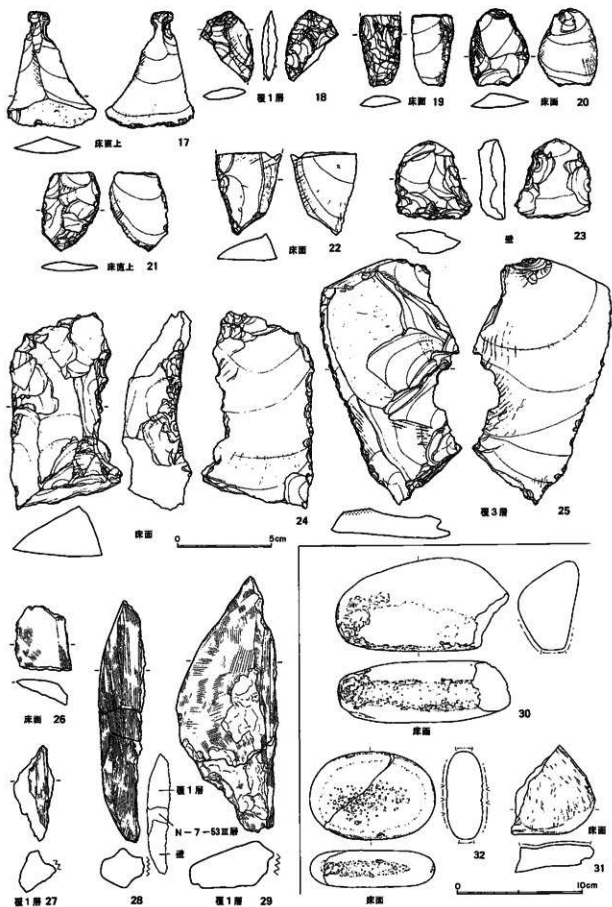
確認・調査・土層: N-7-05区の調査中にIV層中から土器片が集中して出土するのが注意され、隣接区をIV層上面まで掘り下げた段階で楕円形にⅢb層が落ちこむ状況を検出。トレンチ調査の結果先



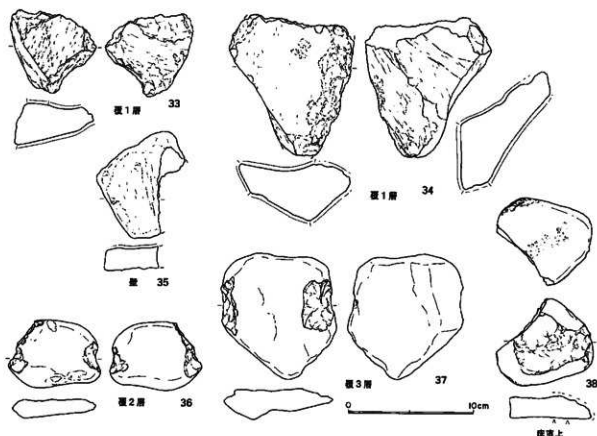
図III-35 遺物検合図



図III-36 H-5 出土土器



図III-38 H-5出土石器(2)



図Ⅲ-39 H-5出土石器(3)

表Ⅲ-5 小ピット一覧

番号	位置×形状 (cm)	深さ (cm)	土	検出面	番号	位置×形状 (cm)	深さ (cm)	土	検出面
H P-1	37×32	12	淡褐色土	最終生活面	H P-24	20×14	10	淡褐色土	横断面
H P-2	40×27	18	淡褐色土>ローム土(粘質)	"	H P-25	25×10	11	"	"
H P-3	25×25	18	淡褐色土(粘質)	横断面	H P-26	20×20	-	暗褐色土	最終生活面
H P-4	22×18	12	淡褐色土	"	H P-27	26×18	54	暗褐色土>ローム土(粘質)	"
H P-5	14×14	10	淡褐色土>ローム土(粘質)	"	H P-28	17×12	12	褐色土+ローム土(軟質)	"
H P-6	14×13	-	褐色土>ローム土(軟質)	最終生活面	H P-29	14×8	13	暗褐色土(軟質)	"
H P-7	20×20	12	黒褐色土>ローム土(軟質)	"	H P-30	18×11	-	"(粘質)	"
H P-8	18×18	-	淡褐色土+ローム土(軟質)	"	H P-31	13×11	20	暗褐色土(軟質)	砂層直上
H P-9	41×40	12	淡褐色土(粘質)	"	H P-32	18×18	20	暗褐色土>ローム土(軟質)	"
H P-10	31×28	12	淡褐色土	"	H P-33	18×14	18	淡褐色土>ローム土(軟質)	最終生活面
H P-11	22×19	20	淡褐色土+ローム土(砂質)	"	H P-34	14×12	7	淡褐色土	"
H P-12	17×12	9	褐色土+ローム土(軟質)	"	H P-35	18×18	5	淡褐色土+ローム土	横断面
H P-13	17×12	10	淡褐色土(軟質)	"	H P-36	23×22	14	淡褐色土>ローム土(粘質)	"
H P-14	20×14	10	淡褐色土>ローム土(堅い)	"	H P-37	22×25	3	淡褐色土	最終生活面
H P-15	10×7	-	淡褐色土>ローム土(堅い)	横断面	H P-38	27×27	4	灰褐色土(堅い・砂質)	"
H P-16	13×11	14	淡褐色土>ローム土(堅い)	"	H P-39	12×11	7	淡褐色土	横断面
H P-17	14×10	-	淡褐色土>ローム土(砂質)	最終生活面	H P-40	22×18	7	暗褐色土(軟質)	最終生活面
H P-18	14×5	-	暗褐色土(軟質)	横断面	H P-41	34×24	4	淡褐色土+ローム土	横断面
H P-19	16×13	-	暗褐色土>ローム土(砂質)	最終生活面	H P-42	26×20	8	淡褐色土>ローム土(堅い)	最終生活面
H P-20	16×10	14	暗褐色土(粘質)	"	H P-43	12×11	9	淡褐色土(砂質)	横断面
H P-21	16×7	12	淡褐色土(軟質)	横断面	H P-44	12×11	8	黒褐色土(軟質)	最終生活面
H P-22	14×13	-	暗褐色土(軟質)	最終生活面	H P-45	18×17	20	淡褐色土(粘質)	"
H P-23	14×10	13	褐色土>ローム土(軟質)	"					

の遺物集中がIV層類似の堅穴覆土に属することを確認した。分層・遺物取上げの後、想定される床面と構築面の2回にわたって付属ビットの検出を試み、小さいものは断ち割って調査した。堅穴の周囲ヘトレンチを延長して掘り揚げ土の観察を試みたが、確認が遅れたこともあって確実な掘り揚げ土層は認められずH-3との先後も決定できなかった。

覆土は炭化物の目立つ3層が床面を薄く覆い、壁付近にはより均質な2層、さらに腐植に富む1層が堆積する。堅穴中央部では固有の覆土は薄く、III b 1層が厚く流入する。

床面：腐植・炭化物混じりのV層（覆土4層）で構成され、西寄りの部分を中心に踏み固めが感じられる。西北-南東方向の傾斜を示す。なお壁際では4層があまり堆積せず、床面は堅穴中央部よりわずかに凹んで周溝状を呈する傾向があった。

壁：堅穴西側で最大20cm程度の立ち上がりを確認できたに過ぎず、南東側では壁の検出に失敗した。確かめ得る範囲では床面から緩やかに壁面へ移行し、かなり崩れている印象を与える。またHP-4はほぼ住居跡の輪郭に重なる位置にあるが、この部分はほとんど床面の直上まで掘り下げて遺構を検出しており、壁の位置は正確に捉えられていない。部分的に外側へ張り出して壁が設けられていた可能性も残る。

炉跡：床面中央に覆土3層が長方形に落ちこんでおり（HP-1）、その底面、少し北西側に偏って円形の焼土溜りが検出された（HF-1、図版15-1）。HP-1の長軸は堅穴床面の推定長軸から15°ほど南に振れる。HP-1覆土に炭化物が目立ったので全量を浮遊選別したところ、少量の炭化材・クルミ属種皮微量が検出された（VI章2節）。

付属ビット：ほぼ垂直に掘り込まれたものが多く、斜めに壁に入りこむのはHP-8のみ。南・西寄りのHP-2・3・12・14が浅く径が大きいのに対して、北東側のHP-5・13は細くやや深い。HP-6・15は後者に近い。なおHP-4は他より大きく整った掘り方を持ち、覆土のやや下部から削器1点が出土した（図版15-2）。H-3のHP-9と同様の土壌と思われ、堅穴の北東壁寄りにある点も類似する。

遺物出土状況：遺物は総数1243点、概して1・3層の境付近と2層中に多い（図版14-1）。土器は443点出土しており、ほぼI群B類単純の資料である。堅穴の東側で多くが出土し、西側は空白となる状況が見られる（図III-41a、図版14-1）。床面付近である覆土4層の出土品は23点にとどまり、特徴のよくわかる資料がない。覆土内では概して隣接した土器片同士が接合しており（図III-43）、H-3のように堅穴中央を隔てて接合する傾向はない。覆土の破片だけで復元された個体（図III-45-1・5など）もあり、覆土の形成時に住居跡に遺棄されたものがある程度存在すると思われる。またH-3・9（図III-58）、X-1・2の土器との間で接合が見られる。H-9床面付近の土器がH-6覆土の出土品と接合する例が3個体あり（図III-60-1・5・8）、H-9に先行して埋没した可能性が考えられる。

計800点出土した石器等のうち剥片石器群は672点を占める。全て硬質頁岩（ないし流紋岩）製で、石器は24点と少ない。土器のような分布の偏りは顕著でないが（図III-41b）、床面付近の出土品が少ないことは同様である。なお550点ある剥片のうち514点は堅穴北西隅で検出した剥片集中の遺物である。磨製石器群は擦切残片1点のみ。礫石器群は128点（計11.2kg）が出土、やはり2層（46点）3層（43点）の出土品が多く、特に礫石器は36点のうち26点が覆土2層の遺物であった。H-3でも注意された珪岩製品は礫石器群出土点数の46%にあたる59点と多いが、重量では計586.1gと僅かで、しかもそのうち474.8gは1点のたたき石（図III-46-13）が占めている。おそらく礫石器が細かく破砕した結果点数が増えているのであって、付近に搬入された珪岩礫の数はそれほど多くないものと思われる。

る。珪岩製造物は主に竪穴のやや北東寄りに比較的多まった分布を示す(図Ⅲ-42-d)。礫石器はほとんど全てが竪穴の周縁部で出土しており(図Ⅲ-42-c)、住居の廃絶後間もなく流入したものが多くに見受けられる。13点ある石錘は東・南側の壁付近に集まって出土し(図Ⅲ-42-e)、特に遺構の南東隅付近に5点の石錘が密集しているのが注意を引いた(図版14-2)。東側では長さが幅を上回る石錘、南西側には幅が長さを上回る類が集まっているらしく興味深い。礫石器群の接合は遺構内、H-3や付近の包含層との間で確認されるが、1~数m離れたものが接合する例が多い。土器とはやや異なって覆土中に堆積するまでにある程度攪乱されていることを示すものであろうか。

剝片集中：北西部壁際の2層下部で検出し、任意に設定した20cm四方の区画を単位として約2cmの厚さで土壌ごと採取、1.4mm目の篩で水洗して遺物を回収した。514点の遺物は全て硬質頁岩製剝片で総重量74.3g、密度は平均0.14点/cm²とそれほど密集はしていない。壁裾の傾斜に沿って高低差をもって堆積しており、上手の部分で密度が増すようである(図Ⅲ-44)。剝片は比較的限制された数(4ないし5個)の母岩に由来するらしく(図版14-4)、特に識別の容易な3種の石材のものを数えてみると、集中の下手につや消しの黒色、上手西寄りにモヤ状に濃淡のある灰色、上手中央に緑色の石材が多く分布して必ずしも混在していないことがわかる(表Ⅲ6-b)。恐らく製作の機会や製作者の異なる剝片が同じ位置に遺されたことを示すのであろう。

遺物の重さを点検してみると、累積百分率折線の形は他の住居跡の例と相当異なっている。0.4g未満の微細な剝片はそれほど多くなく、より大きい剝片が急激に減少する傾向もないために0.1g台までグラフの傾きは大きく変化しない。折線の右端の位置はH-1・3の例と変わりが無いので重い剝片が多いとも言えず、あるいはH-3覆土3層の集中について考えたように目につく剝片だけを拾い集めた結果がこのような重さの分布に表れているのかもしれない。

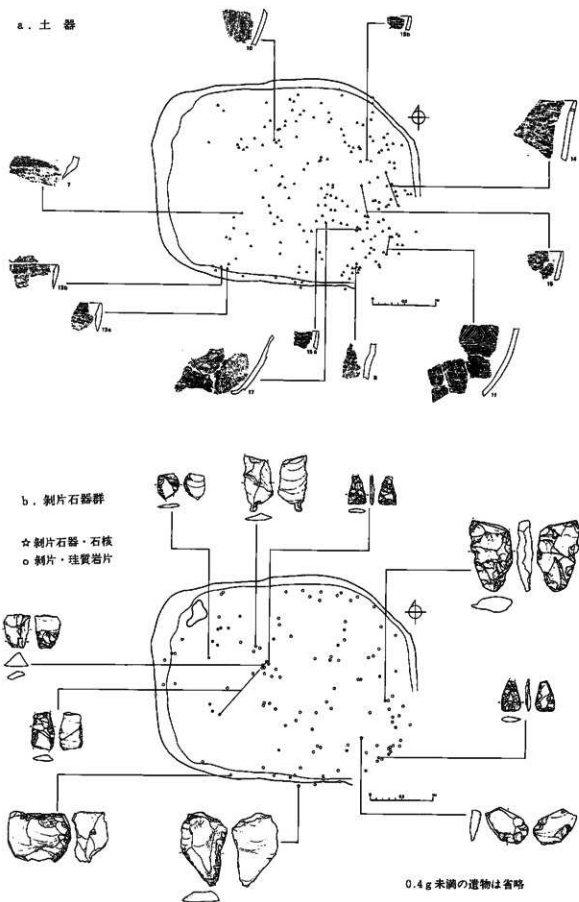
4mm以上の長さまたは幅をもつ剝片494点について観察すると(表Ⅲ-6)、礫面を残す例は非常に稀で礫打面のものは皆無。H-1・3の剝片集中に比べて平坦打面の比率が高く、小打面(線・点打面)は少ない。計測した上での判断ではないが幅広く奥行き狭い直線的な打面が目立ち(図Ⅲ-48-39~41)、特に黒色・濃淡のある灰色の石材でその印象が強い。背面の対向剝離は他の住居跡の例に比較すると幾分少なく、長幅比も少し小さくなって横長の剝片が僅かだが縦長剝片の数を上回っている。いずれもあまり極端な差はないけれども、未製品を伴っていて両面調整品の細部調整に由来することがほぼ確実なH-3覆土2層の例などとはやはり様相が異なると言わねばならない。もっとも先に記したように由来の異なるものが同居しているらしく、さらに遺物に選択が加わっている可能性もあるので、この程度の観察で判断を加えることには問題も多い。

時期・性格：I群B類土器期の遺構である。遺構の規模・方位・形状はH-11とよく一致し、やはり年代的に近いものと推測される。また接合遺物の共有からH-3・9、X-1・2とは時期が近接する可能性があり、特に覆土1層出土の土器片がH-3覆土4層の出土品と接合した例があるので(図Ⅲ-18-13)恐らくH-3より先に廃絶したものとみられる。同様の接合関係からH-6がH-9に先行することも推定できる。H-6周囲のⅢ層には環状に遺物の希薄な部分があって竪穴周囲の掘り揚げ土の範囲を反映するらしいが、ここに遺物が少ないこと自体がこの住居の草分け的な位置を暗示しているように思われる。

遺物：

土器(図Ⅲ-45 図版36・37・46)

1は覆土2・3層出土のもの。底部は欠損しているが3分の2程が残存する。口頸部はゆるやかなキャリパー状で、胴部下半は張り出し、口縁部は直立気味である。上半部は茶褐色、下半分は赤味を



図III-41 遺物分布図(1)

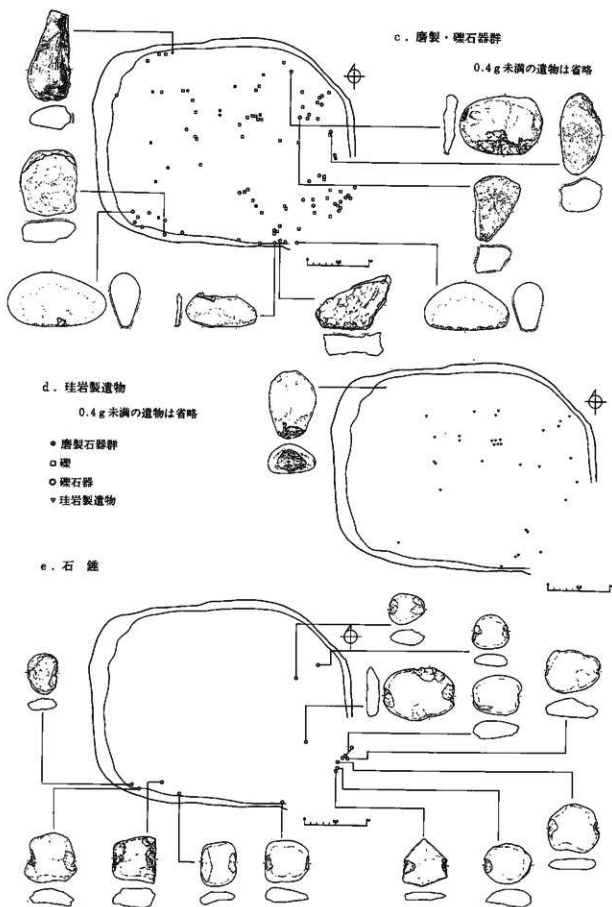
帯びている。器面は摩滅が著しく文様構成ははっきりしないが包含層出土の土器（図IV-4-7）と類似の文様構成をとるとみられ、腹縁文で菱形の文様が描かれていると思われる。胴上半には鋸歯状沈線文が胴部をめぐっている。2は覆土1~4層出土の破片（20点）とM-7-93（2点）、N-7-24（8点）出土の破片が接合できたもの。胴上半部の3分の2程が残存する。波状口縁の大型の深鉢形土器。口縁部と胴半ばに腹縁文を3条ずつめぐらせ幅広い文様帯を区画している。文様は3条一単位の腹縁文で波頂部で大柄な「Y」字状の区画、波頂部間では三角形の区画がてきえる様に構成がされている。それぞれの区画を再区画し部分的に、腹縁文を疎らに充填させている。波頂部下位の文様の交差する位置を内面から指頭で押し小突起状にしている。円形刺突文はこの部分にのみつけられている。沈線文を縁取る腹縁文が押し引き文的になっている。又貝殻腹縁文が省略されて沈線文のみになっているところがある。内面には横方向の条痕がある。3は覆土3・5層出土の破片（8点）とX-1 III b層出土の破片（1点）が接合したもの。胴半ばまで文様帯があるもので、欠損しているが乳房状の尖底になると思われる。4・5は無文のもの。4は主に覆土1層から出土した破片が接合できたものである。平縁のもの。器面は凹凸が著しく、内外面に粗い調整痕が残る。胴部はやや張り出し、口縁部を意識するかの様に頸部にくびれがあり、ところによっては段状になっている。口唇断面は角形で、外側角に縄によると思われる深い刻み目がつけられている。5は覆土1・2層から出土した深鉢形土器。4ヵ所に山形の波頂部がある。口縁部に横方向の条痕がある。6は丸味を帯びた乳房状の尖底部。胎土に1・2mmの小砂利が多い。7・8は口頸部がキャリバー状の器形のもの。8はH-3出土の土器（図III-19-7 a~c）、包含層出土の土器（図IV-8-59 a~e）と同一個体の破片。9~12は幅広い文様帯があるもので、腹縁文、沈線文、刺突文を組合せて幾何学的文様が描かれている。9は3条一単位の腹縁文で三角形の文様を描いている。口唇内側角の腹縁文痕は刻み目状になっている。12は波状口縁の鉢形土器。文様は胴下半部まで沈線により入組文的文様が構成されている。文様の下位には、2条の沈線で崩れた鋸歯状の文様が描かれている。円形刺突文が多用され、沈線上に等間隔で施されている。口縁部と内面では底部付近まで横方向の条痕がある。底部付近では斜位になっている。13 a・bは同一個体。口縁部に細い沈線が2条めぐり、その間に腹縁文が斜位に粗く施されている。14~17は無文の口縁部。17は薄手で焼成の良い土器である。器面に斜方向の条痕がある。

石器（図III-46~48 図版63~65）

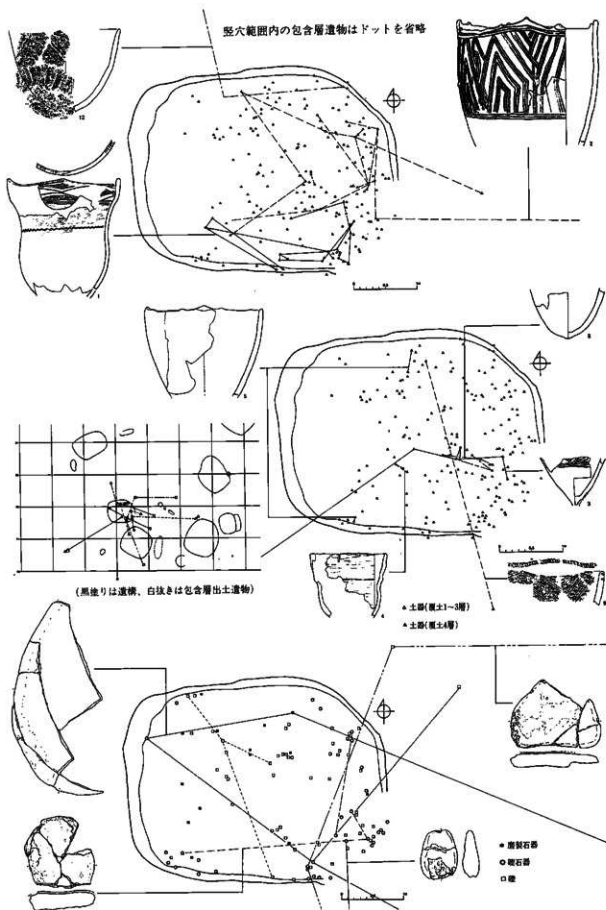
2は削器、礫打面で背面にも礫面が残る、背面右縁にやや急角度の刃付け。1も削器に近い未分類石器。打面側の折面から背面へ細部調整が入る。3は石匙形石器、素材末端に鉤角剝離状の折り。4~9は未分類剥片石器。4・9が両面調整品、5は背面調整品で他は非調整。4・5は石礫未製品とみて良いであろう。4の図右面右縁の欠損は調整中の事故（左縁から入った調整が右縁に達したもの）か。5は横長の剥片を素材にするらしい。6、素材末端の腹面を調整するもの。7、両面左縁に鉤角剝離状の刃付け。8、打面側と素材末端の折面を切って細部調整。10は石核、作業面はほぼ一定で、打面は2回ほど転移しているがみな風化の弱い礫打面。石核背面に作業面を作ろうとした形跡もあるが、剝離作業に至っていない。11は唯一の磨製石器群遺物で、石材の縁辺を取り込んだ擦切残片。

12はHP-4出土の削器。素材は礫打面で、石核底面も礫面であったとみられる。

13、主に一端を機能部とするたたき石。14・15はすり石、いずれも主要な機能部に隣接して平滑なすり面がみられる。15の両端には集中する敲打痕。16・17、扁平な礫を用いた石鋸。17では剝離を加えて薄い機能部を作り出している。18~23は砥石で18は長手の円礫を用いた例。集中する敲打痕が併存。



図III-42 遺物分布図(2)



図Ⅲ-43 遺物接合図

19～22は一方の主面が機能部になるもの、18は角礫素材、凹凸の激しい割れ面に研磨が見られる。20・22は薄手の円礫を利用、19も同様か。22には左傾した状痕。23は多面体状に近い。24～37は石錘で、片面加工、あるいはそれに近いものが目立つ（24・27・32・35・36）。25は礫の両端以外に、両側縁にも加工した珍しい例。37は石皿。欠損が大きい、円礫を素材としてほとんど整形を経ていないらしい。機能部は両主面にあつて、遺物の幅方向では浅く窪むが長さ方向には平坦、もしくは緩い凸面をなすようである。38はH-3覆土の破片と接合した未分類礫石器。両端に打ち欠き加わり、石錘かたたき石に近いものである。

39～41は覆土2層剥片集中の剥片。いずれも幅広く直線的な切子打面をもち、幅が長さを上回る。40はつや消し黒色、39・41は濃淡のある灰色の石材を用いたもの。

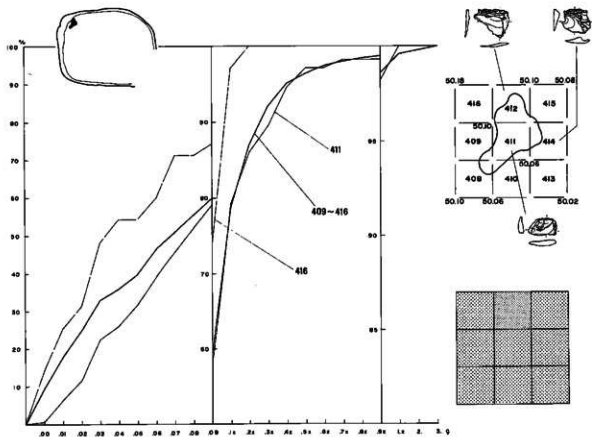
日、点数・密度・重量

番号	点	数	密度	重量	番号(点)																											
番号	点	数	密度	重量	0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.1x	0.2x	0.3x	0.4x	0.5x	0.6x	0.7x	0.8x	0.9x	1.x	2.x	3.x	4.x					
408	25	400	0.1	2.9			4	2	5	1	1	1	0	2	2	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0					
409	29	400	0.1	2.3		1	2	7	1	2	2	1	1	3	5	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
410	18	400	0.0	3.0		0	1	1	1	0	1	3	1	1	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0					
411	173	400	0.4	25.6	1	10	9	10	8	10	15	11	11	11	20	10	6	9	4	9	2	0	0	0	0	0	0					
412	180	400	0.5	25.4	31	14	12	6	5	4	10	2	10	5	20	17	5	1	2	0	2	1	1	0	0	0	0					
413	9	400	0.0	0.4	1	0	0	1	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
414	25	400	0.1	4.5	9	4	2	8	0	0	1	0	0	0	0	4	3	2	0	1	1	0	0	0	1	0	0					
415	17	400	0.0	0.9	4	2	2	2	0	1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0					
416	35	400	0.1	2.2	5	4	2	6	2	0	2	4	0	1	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
合計	514	3600	0.1	74.9	49	43	37	41	16	19	35	22	33	23	97	49	20	15	7	5	3	2	1	2	1	1	0					

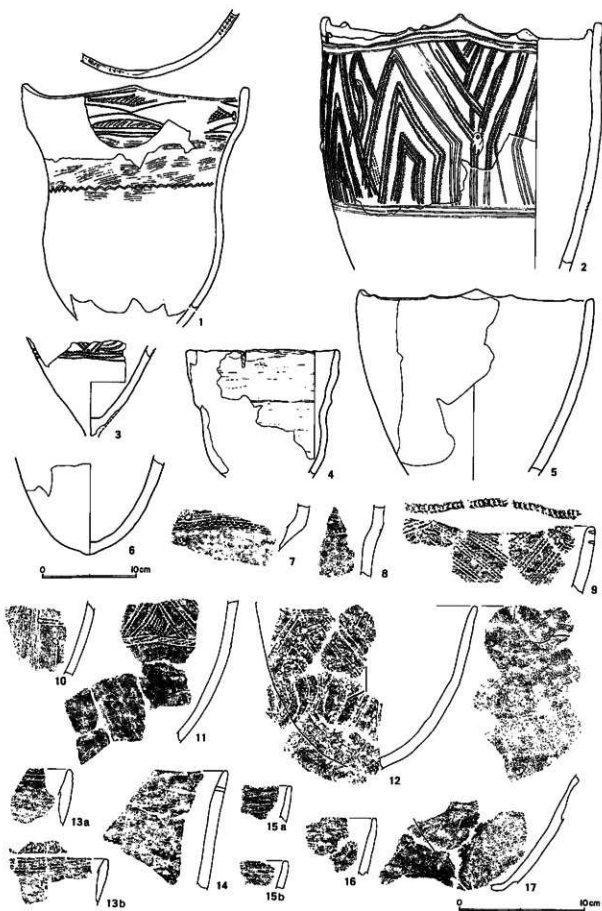
b. 遺物の概観 長さまたは幅が4cm以上ある遺物を対象の列とし、うち打面が残っているもののみ長短比を計算した。ただし石片の分類は全遺物についておこなった。

遺物番号	長さ(点)	幅(点)	厚(点)	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面
遺物番号	長さ(点)	幅(点)	厚(点)	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面	打面
408	25	9/11.8	2/18.2	0/0	0/0	0/0	2/7.7	3/13.0	5/21.7	1/4.3	0/0	10/52.1	1/4.3	0/0	12/52.2	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
409	29	7/38.3	5/41.7	0/0	0/0	0/0	5/10.3	5/17.2	4/13.8	0/0	0/0	17/56.0	1/2.4	0/0	10/54.5	1/2.4	1/2.4	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
410	18	3/37.5	5/38.5	0/0	1/5.9	0/0	3/16.7	4/22.2	1/5.5	0/0	0/0	10/38.8	1/3.6	1/16.7	7/38.9	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
411	173	24/48.2	58/51.8	0/0	0/0	0/0	22/18.5	54/31.2	12/6.9	14/6.1	0/0	61/38.3	1/0.6	0/0	60/38.1	54/31.2	50/28.9	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
412	170	16/51.5	47/47.1	1/1	0/0	0/0	20/11.8	50/34.7	14/8.2	0/0	0/0	71/41.8	10/5.9	0/0	20/10.8	82/44.1	79/42.4	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
413	8	1/35.3	2/36.7	0/0	0/0	0/0	1/12.5	2/25.0	0/0	0/0	0/0	5/32.5	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
414	25	3/37.5	5/38.5	0/0	0/0	0/0	0/0	6/25.1	2/8.7	0/0	0/0	15/55.2	2/8.7	1/20.9	13/52.0	4/18.0	3/12.0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
415	15	5/32.5	2/25.0	1/12.5	0/0	0/0	0/0	4/28.7	0/0	4/28.7	0/0	1/42.7	0/0	1/42.7	5/13.5	1/38.0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
416	35	6/47.1	9/53.8	0/0	0/0	0/0	10/38.8	5/14.3	1/2.9	1/2.9	0/0	16/53.7	0/0	0/0	6/17.1	0/0	2/5.7	23/55.7	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
合計	434	141/48.1	135/47.0	2/0.7	1/0.2	0/0	71/14.4	142/28.7	28/7.5	28/7.5	0/0	216/43.7	18/2.6	0/0	130/23.5	147/28.0	143/21.7	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0

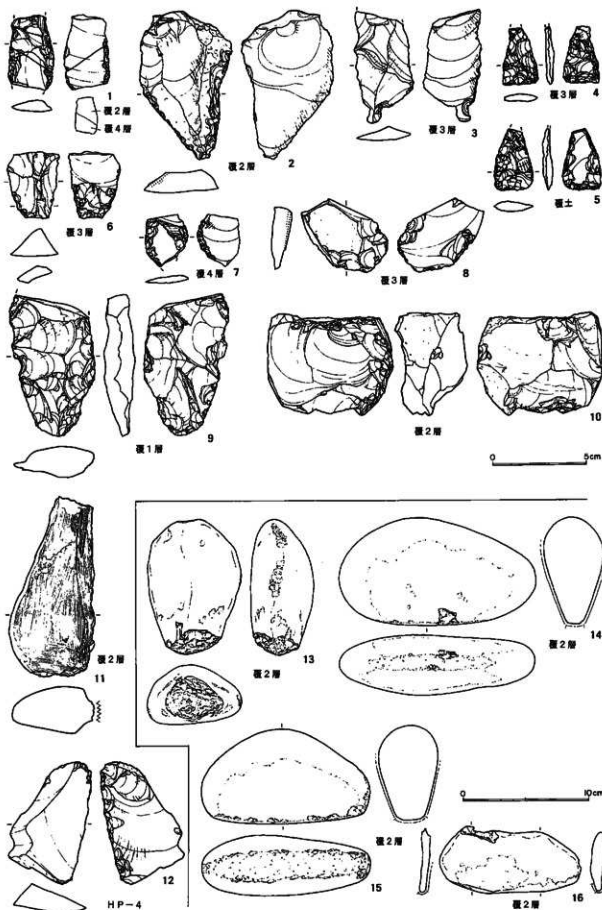
表Ⅲ-6 H-6 剥片集中集計表



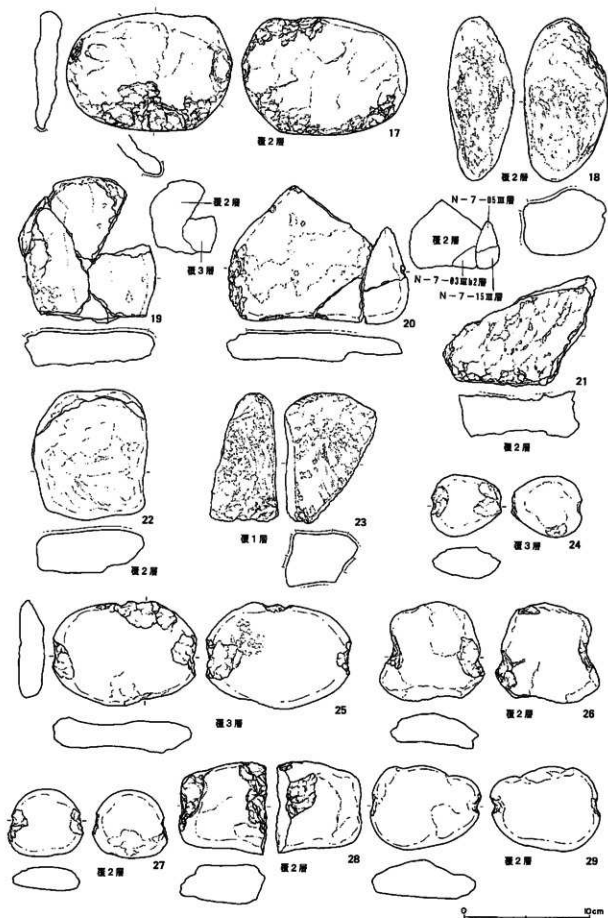
図Ⅲ-44 剥片集中



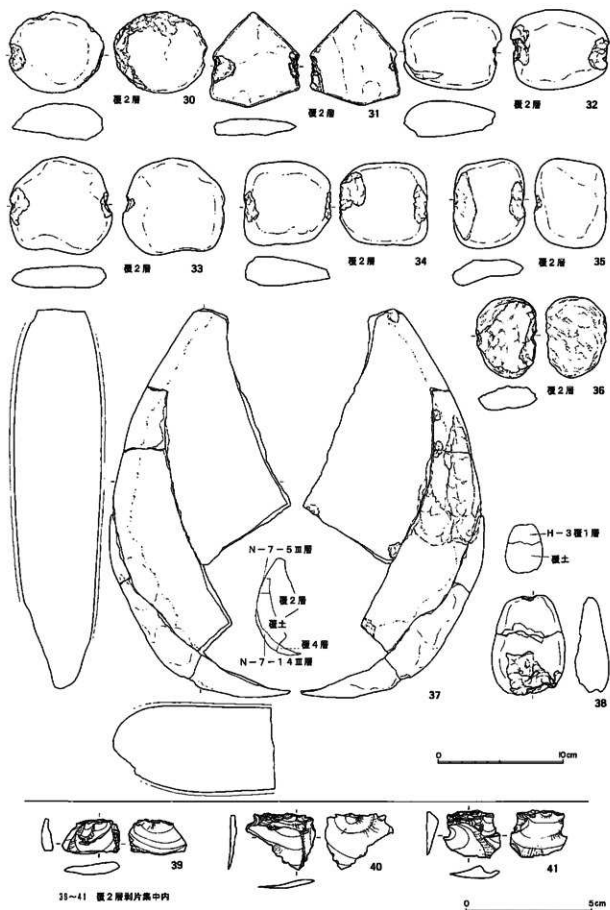
図Ⅲ-45 H-6出土土器



図III-46 H-6出土石器(1)



図III-47 H-6出土石器(2)



図Ⅲ-48 H-6 出土石器 (3)

H-7 (図III-49・50 図版16)

位置：N-7-48・58・59 ほぼ北から南へ傾斜する標高50.70m～51.20mの緩斜面上に位置している。ほぼ北にH-11、南西にH-12が近接し、H-8と重複している。

規模：4.3m/4.05m×(3.7m)/(3.4m)×0.24m

平面形：台形状 床面積：11.90㎡ 長軸方向：西-東

確認・調査・土層：N-7-58の包含層調査中、長円形状(4m×3m)にIII b層が落ち込んでいるのを確認する。東西、南北に直交する土層観察用の土手を設定し、III b層から順次掘り下げる。III b層下の褐色土、黒茶色土を除去したところで、南側中央付近で遺物が多量に出土した。遺物を取り上げつつ、さらに汚れの目立つ暗黄色を掘り下げると、V層直上付近で貼り付いた状態で土器片が多く出土した。この面を床面と想定し、全面に掘り下げ、東、西、北壁の立ち上がりを確認する。覆土はほぼ三層に分けることができる。覆土1層は砂質の褐色土である。層厚は5cm～10cmである(土層図1)。覆土2層は黒茶色土で層厚は5cm～10cmである(土層図2)。覆土3層は汚れの目立つ暗黄色土で、層厚は5cm～10cmである。出土遺物の大半はこの層から出土している(土層図4)。

床面：V層を掘り込んで構築されている。北か南へ向けてやや傾斜しており、とくに南側中央部は浅いくぼみになっている。

壁：全体的に急傾斜で立ち上がっている。壁高は20cm～25cmである。南壁は不明である。

炉跡：床面中央部やや南西寄りで円形状(20cm×20cm)にV層が火を受けて赤色化している部分が確認された。地床炉と思われる。

付属ピット：柱穴状小ピットは19個検出されている。すべて直立する小ピットで、HP-11・15・16・17・19以外は壁際から10cm～20cmほど内側をめぐっている。HP-15・16は構築面と思われるV層上面で検出されたものである。またHP-17は床面直上で検出したものである。これは二本柱(HP-15・16)から1本柱(HP-17)への建て替えが行われたものと思われる。

遺物出土状況：出土遺物総数は178点で、その内訳は土器161点、石器など17点である。床面から出土した遺物は土器が14点、石器等4点である。出土した土器はすべてI群土器である。石器は剥片石器群と礫石器群が出土している。剥片石器群では刮器など、礫石器群ではたたき石が出土している。遺物は床面と覆土、覆土と包含層に接合関係が見られる。床面、覆土1・2・3層出土の土器とH-8覆土出土土器、覆土出土土器とH-4・8覆土出土土器が接合している。包含層出土の土器ではN-7-39・48・49・57・58・59のIII b層出土の土器と接合している。またM-7-96、N-7-25という本住居跡の南東約15m～20m離れたグリッド出土の土器と接合している。

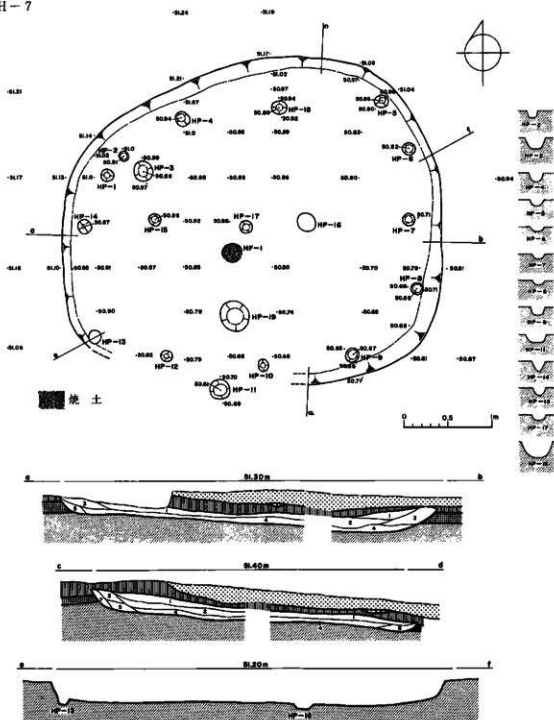
時期：掘り込み面はIII b層中である。床面、覆土、周辺出土の土器はすべてI群B類土器であることから、本住居跡は縄文時代早期中葉の時期のものである。なおH-8とは重複関係にあり、H-8の北壁の一部を切って構築している。

遺物：

土器 (図III-51 図版37・47)

1は床面(3点)、覆土1層(36点)、覆土3層(25点)出土の破片とH-8覆土1層(4点)、包含層N-7-58(1点)出土のものが接合したものである。このほかに接合はしなかったが同一個体の破片が床面、覆土、N-7-39・49・59から65点出土している。破片は大きく割れているものが多い。底部は欠損しているが全体の3分の2程が残存する。無文で平縁の大型深鉢形土器。口縁部では横方向に、胴上半部では斜に、胴下半部では縦方向に条痕がある。底部付近では横方向に細かい擦痕がある。胎土に小砂利が混じり、色調は灰褐色である。焼成は良い。2は無文で平縁の深鉢形土器。口縁

H-7



- 土層：1. 褐色土 (砂質)。 2. 黒茶色土。
3. 淡褐灰色土。 4. 暗茶色土。
5. 暗茶黄色土。 6. 暗黄色土 > 褐色砂
7. 淡褐色土 (4 + 5)

図Ⅲ-49 H-7 実測図

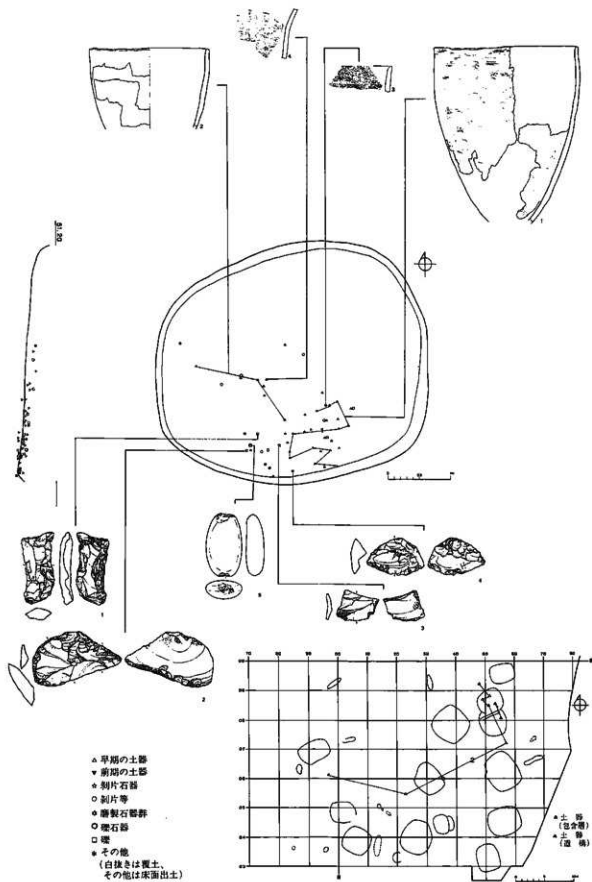
部は覆土1・3層（2点）出土の破片と周辺のN-7-57・58出土の破片（3点）、20m～30m以上も離れたM-7-96、N-7-25出土の破片が接合した。また胴部は覆土1層（4点）のものと、N-7-48・49・59・58出土のものが接合したもので破片はすべて粘土帯の接合面で方形に破損していた。それぞれの接合破片から器形を想定したものである。焼成が非常に良く、胎土には4、5mmの小砂利が混じる。口唇内側角に貝殻腹縁文が刻み目状につけられている。3は口縁部がやや外反する器形のもの。鋸歯状沈線文で文様が描かれている。4は薄手の土器。頸部でくびれる器形になるとみられ、縦位に鋸歯状沈線文が施され、端には円形刺突文がつけられている。

石器（図III-52 図版66）

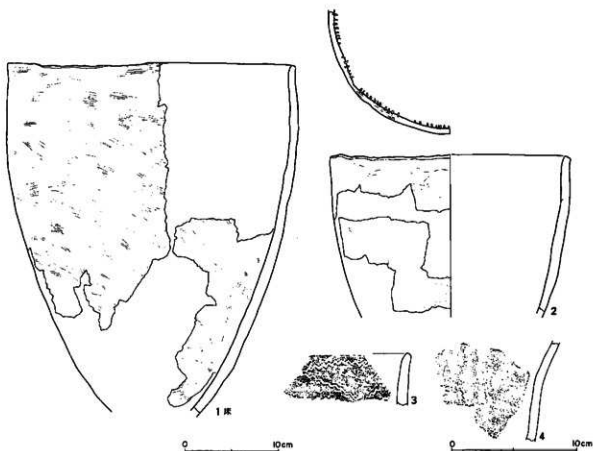
2、平坦打面素材、腹面に刃をつけた横長の削器。背面にも刃部があり、左縁は搔器、右縁は削器に近い。3は抉入石器、素材の上下は折れている。折面を切って背面右縁に抉りがある。1・4は未分類剥片石器で非調整品。1は主に腹面の細部調整によって下端を除く全周を整型。筧状石器に近い。下端は礫面。4は腹面に深い細部調整を入れて打層を取り除く。背面に礫面、同末端左寄りに削器状の刃部。5はたたき石で敲打痕は両端にだけ見られる。石錘とも考えうるが顕著な抉りはない。

表III-7 小ピット一覧

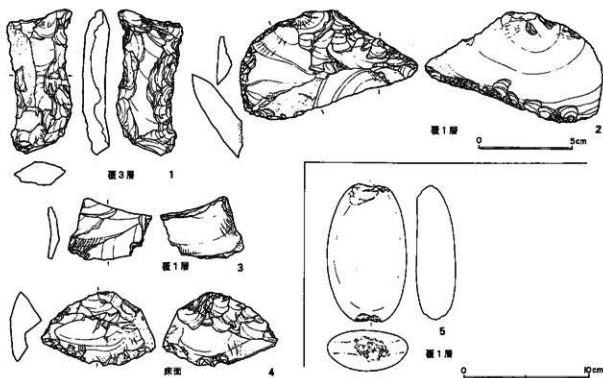
番 号	縦径×幅径 (cm)	深 さ (cm)	器 土	検出面	番 号	縦径×幅径 (cm)	深 さ (cm)	器 土	検出面
H P-1	14×14	—	灰褐色土	床 面	H P-11	22×22	9	暗茶褐色土	床 面
H P-2	12×11	8	灰褐色土	"	H P-12	13×12	—	灰褐色土	"
H P-3	22×21	13	暗褐色土	"	H P-13	14×13	10	暗褐色土+ローム土	"
H P-4	16×14	10	暗黄灰色土	"	H P-14	15×14	12	灰褐色土+ローム土	"
H P-5	16×14	7	"	"	H P-15	14×13	9	灰褐色土	横 面
H P-6	15×14	5	"	"	H P-16	20×20	4	暗黄灰色土	"
H P-7	14×14	8	"	"	H P-17	15×14	—	灰褐色土+ローム土	床 面 直 上
H P-8	14×13	5	"	"	H P-18	17×15	—	灰褐色土	床 面
H P-9	16×14	9	"（軟質）	"	H P-19	25×32	18	"	"
H P-10	13×12	—	灰褐色土（軟質）	"					



図III-50 遺物分布と接合図



図III-51 H-7 出土土器



図III-52 H-7 出土石器

H-8 (図III-53・54 図版17)

位置：N-7・47・48・57・58 北から南方向へ傾斜した、標高50～51mの緩斜面上に位置する。竪穴内は床面を切って構築したT-9がある。また、北側には壁を切ってH-7が構築されており、さらにその北にH-11が近接する。西側はH-12、南側はH-4、東側が沢となっている。

規模：(4.72m/5.50m)×4.40m/4.16m×0.20m

平面形：台形 床面積：16.00㎡ 長軸方向：N-7-W

確認・調査・土層：T-9の壁面に焼土が確認されたため、重複した遺構があると判断した。確認面はIV層上面である。確認時における平面形は黒色土の落ち込みがわずかに見られたものの、北側がH-7、H-9試掘溝によって切られていたり、南側の覆土があまり残存していなかったため、はっきりとは把握できなかった。しかし、グリッドラインに沿って掘り込まれた東西方向のトレンチにより、壁の立ち上がりや焼土が検出され、竪穴の存在が明瞭になった。そこで調査は、東西方向に残された土層観察用の土手をそのままセクションベルトとし、南北を2分割して床面と壁の立ち上がりの確認に努めた。南北方向の土層観察は南半分がほとんど床直上と判断されたので、焼土のみ南北方向に断面を残し、土層観察を行なった。覆土は7層に分層された。流れ込みによる自然堆積である。焼土は6・7層であるが、7層は掘り込まれたものではなく、V層が被熱によって変色したものである。

床面：床面は第V層をわずかに掘り込んで構築されており、南東方向に緩く傾斜する。堅く締まった床面である。焼土(HF-1)の周辺は若干窪む。北側はH-7・H-9、試掘溝などによって切られている。

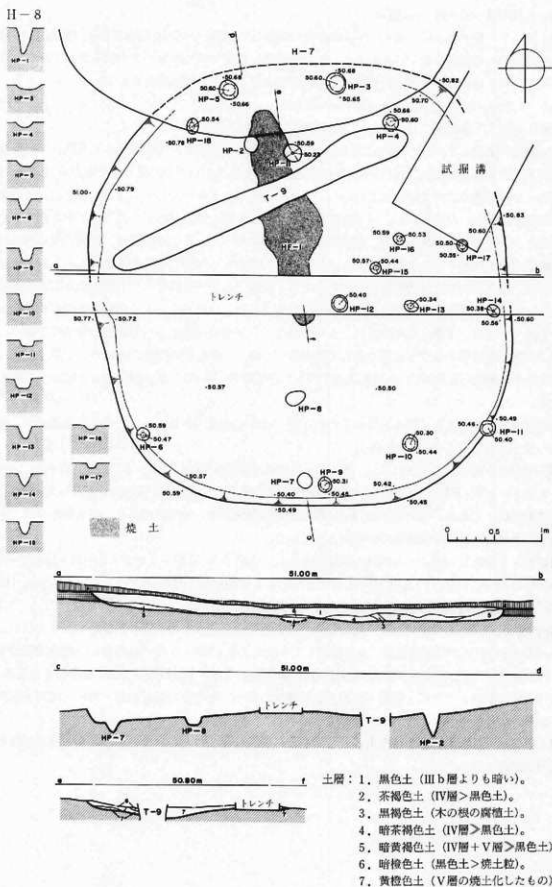
壁：北壁はH-7によって切られているため不明。ほかも確認面が低かったために不明瞭だが、傾斜の緩い立ち上がりのように思われる。

炉跡：中央から北以上に長さ2.31m、幅0.30～0.60mの細長い焼土(HF-1)が検出された。一部、T-9やトレンチ、HP-1・2によって切られている。焼土の上面は若干黒色土が混じった暗褐色土、下部は黄褐色土である。最大層厚は12cm。特別の施設を持たない地床炉である。焼土中からは、キハダ種子の果肉付き破片が極微量だが検出されている。

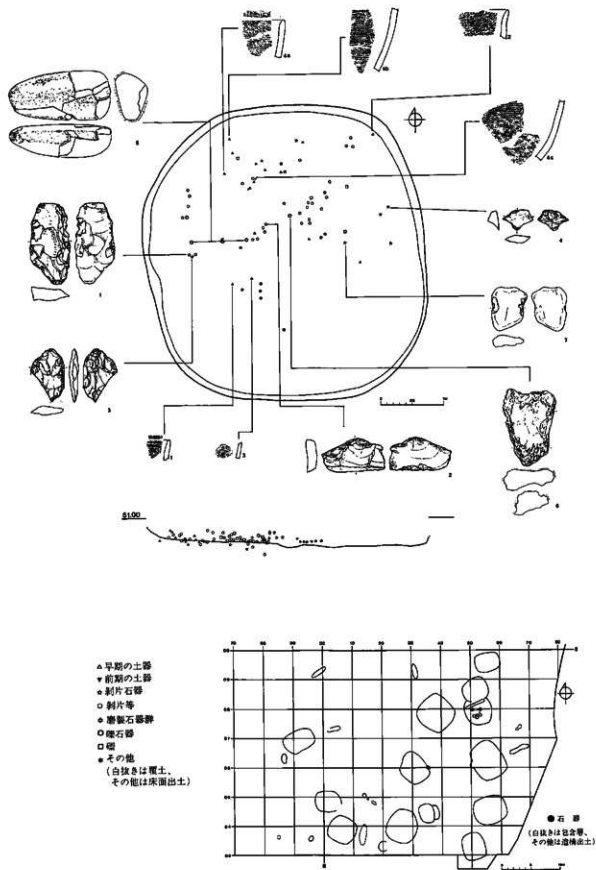
付属ピット：柱穴状の小ピットが18ヵ所確認された。このうち、HP-3～7・9～11・14・17・18は壁際を廻る。また、HP-1・2はHF-1を切っていることが確認された。HP-1の深さは26cm、HP-2は深さ25cmで、断面の形状はいずれも垂直で、先端が尖る。

遺物出土状況：出土遺物は少なく、総数は80点である。全点、出土地点等を記録して取り上げた。遺物は、竪穴内の南側がほぼ床面近くまで露出していたために、HF-1周辺に散在した状態で検出された。内訳は土器23点、石器等が57点である。23点の土器のうち、I群B類は22点、II群は1点である。石器の器種は削器・すり石・砥石・石錐・擦切残片のほか、未分類の刮片石器・刮片・珪質・岩片・礫がある。

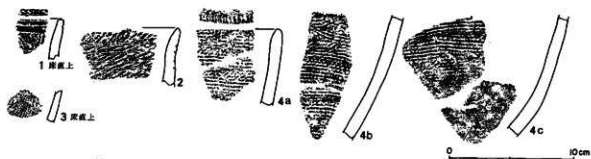
時期：床面からII群土器が1点出土されているものの、H-7にきられていることから縄文時代早期中葉の住居跡と考えられる。



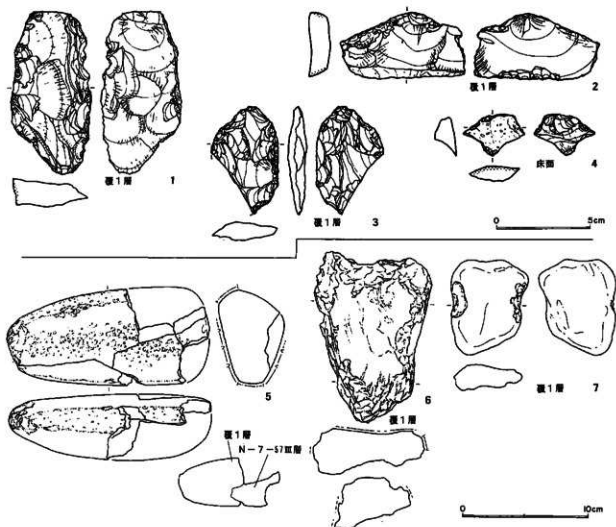
図III-53 H-8実測図



図III-54 遺物分布と接合図



図III-55 H-8 出土土器



図III-56 H-8 出土石器

遺物：

土器（図III-53・54 図版17）

1は口縁部に腹縁文が2条施されている。口唇内側角に棒状工具による刻み目がある。2は波状口縁のもので副突起部。先の尖った細い棒状工具で平行沈線文を複数施していると思われるが、器面を一周はせず途切れていると思われる。沈線文間には斜行縄文風にも腹縁圧痕が充填されている。楕円形の刺突分は沈線の途中・端に加えられている。内面にわずかに条痕がある。3は胴部片。小型の土器とみられる。細い沈線で舌状に区画した中に腹縁圧痕文が充填されている。4～6は同一個体の破片。覆土1層（4～6）と柱穴内（5）から出土した。器面には貝殻腹縁による押し引き文が横位に施されているが底部付近は無文である。口唇内側角に腹縁圧痕文がつけられている。胎土には砂粒が多い。

石器（図III-56 図版66）

1、背面右縁に粗く刃をつけた削器。平坦打面素材、背面は打面転位前の作業面で左縁に礫打面が大きく残る。刃づけに先立って腹面左縁にやや深い細部調整が加わる。2、横長の削器で刃部は短い。背面上端に礫面、粗い切り打面に連なって上端にも礫面がある。3は両面調整、4は非調整の未分類剥片石器である。4は顆球の入った黒曜石製で背面・打面は礫面。5は長手のすり石で両主面に散在する敲打痕と平滑なすり面の複合が見られる。端部には集中する敲打痕あり。6は砥石、礫片素材らしいもの。両側面に研磨に使用する。条痕は見えない。7、片面加工の石錐。

H-9（図III-57～59 図版18）

位置：N-7-23、24、33、34 標高49m、調査区を北西から南北にのびる沢部分に位置し、北東にH-13・14が、西側にH-3・X-2、南西にP-3がある。

規模：5.62m/5.40m×5.55m/5.38m×0.20m

平面形：隅丸方形 床面積：22.88㎡ 長軸方向：N-12°-W

確認・調査・土層：Ⅲ層上面を調査中に調査区南側境界付近に大きなP.D.3の落ち込みを確認する。土層観察用のベルトを残し、トレンチ調査を行う。P.D.3中やP.D.3直下から縄文が施された土器片・石器・剥片・礫等が出土した。トレンチ調査の結果北西側・北東側に立上りを確認する。南側は不明瞭である。Ⅲ層中にP.D.4（黄褐色砂質土）が認められ、Ⅲ層はⅢa層とⅢb層とに分層された。覆土1層はP.D.3直下の黒色土である。第Ⅲa層に少量のP.D.3が混じったもので、ボソボソである。覆土2層はⅢb層直下に部分的に認められる黄褐色粘質土である。粒子の粗い砂粒を多く含み、本堅穴や周辺の遺構の掘り上げ土の流れ込みによる二次堆積と思われる。覆土3層は暗褐色粘質土で、しまりよく、少量の炭化物を含む。覆土4層は、暗褐色粘質土で、粒子は細かく、乾燥するとクラックが入る。少量の炭化物が混じる。遺物は本層から最も多く出土した。覆土5層は黒褐色粘質土で、壁際に部分的に堆積した層で、粒子は細かく、乾燥するとクラックが入る。覆土6層は床面ないし、床面直上である。暗褐色粘質土で、粒子は細かく乾燥するとクラックが入る。少量の遺物が出土している。覆土7層は、赤褐色粘質土で焼土である。

床面：床面は第Ⅴ層を10cmほど掘り込んで構築されている。南側に向かってゆるやかに傾斜する。

壁：南側は不明瞭であるが、ほぼ緩やかに立ち上がる。

炉跡：焼土は2ヵ所確認された。HF-1は覆土を掘り下げ中に堅穴中央よりやや北側の覆土6上面で確認する。焼土の標高はほぼ遺物が集中するレベルと同じである。HF-2は床面精査中に住居跡中央よりやや南側で確認する。焼土は未発達である。

付属ピット：柱穴は20ヵ所確認された。いずれも10cmで浅いものが多く、明確な配列は認められなかつ

た。

遺物出土状況：遺物は1,763点出土している。内訳は、土器1,165点うちⅠ群B類土器1,133点、Ⅱ群土器32点、石器等は598点うち石鏃（6）、筒状石器（1）、搔器（1）、削器（6）、石匙（1）、石匙形石器（2）、挟入石器（1）、未分類剥片石器（37）、剥片石器片（8）、剥片（244）、石核（4）、硬質頁岩片（13）、たたき石（7）、石皿（1）、すり石（5）、石鋸（1）、砥石（7）、石錘（6）、円礫（64）、角礫（2）、未分類礫石器（7）、石斧（1）、擦切残片（2）、未分類磨製遺物（2）である。遺物は北側から多く出土し、出土層位はⅢb層・覆土4層が多く、床面出土は少ない。また、Ⅲa層からのⅠ群B類土器の出土は少ない。Ⅱ群土器はP.D.3ないし直下の黒色土（Ⅲa層）から出土する傾向が認められた。

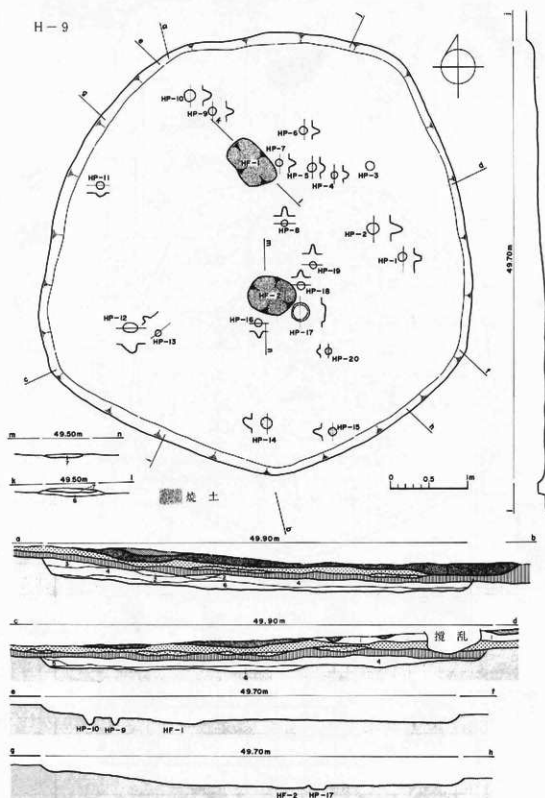
時期：縄文時代早期中葉、Ⅰ群B類土器の時期

遺物：

土器（図Ⅲ-60・61・62・63 図版38～40、47～49）

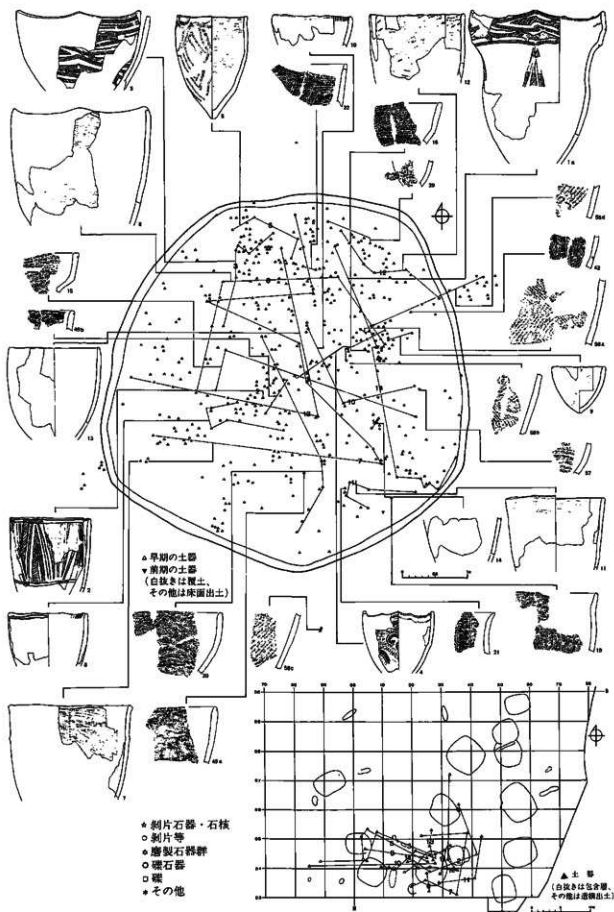
1は破片が比較的大きく割れていて広範囲に分散していた。覆土4・5層（12点）、H-3覆土1・2層（5点）、H-6覆土4層（1点）、X-2暗褐色土層（3点）、とN-7-13・14・24・34・35（19点）出土の破片が接合したものである。残存する口縁部から胴下半部のほぼ半分が包含層から、その他の口縁部はH-9から、胴部破片は主にH-3、X-2から出土した。底部は欠損しているが全体の4分の3程が残存する。口頸部はキャリパー状で口縁部がやや内傾する、大型の深鉢形土器。4カ所に緩やかな山形の波頂部がありその両端には、ごく小さな副突起がある。口縁部の平面形は隅丸方形である。口縁部文様はH-3（図Ⅲ-18-2）、P-7（図Ⅲ-87-1）出土の土器に類似し、点対称の構成となっている。クランク状文様が入組む部分、波頂部下の頸部では内面から指頭で押されて小さく盛り上がり、頸部から腹縁文による帯状の区画で三角を描く文様が垂下されている。押し引き文的な腹縁圧痕文が、口縁部の区画内、垂下する文様帯に斜位に充填されている。小さな円形刺突文は1条で施される腹縁文上にのみ等間隔で施され、波頂部とそれに対応する、クランク状の屈曲部、小突起部には他より大きな刺突文が加えられている。口唇内側角には、腹縁圧痕文が施されているが、その下位には、ところどころに爪形の圧痕がある。内面には胴半ばまで横方向のケズリの痕跡がある。

2～4は文様帯が幅広いものである。2は覆土5層出土の破片（5点）とN-7-23・27・33・34・36・43・44出土の破片（42点）とが接合できたものである。平縁の中型深鉢形土器。口縁部と胴半ばに2条ずつ沈線をめぐるせ、その間に腹縁圧痕文を充填し上下の区画帯としている。2条一単位の腹縁文で上下を繋ぎ、連続した三角形の区画文を構成している。沈線で再区画された中には腹縁圧痕文が粗く充填されている。3は覆土4・5層（6点）とM-7-95、N-7-04・05・24出土の破片（10点）が接合したものである。胴上半の3分の1程が残存する。文様構成は、はっきりとしなが、H-4出土の土器（図Ⅲ-25-4）と類似のものとみられ、菱形の文様が描かれている。ところどころに鋸歯状の沈線文が横位に施されている。4は覆土3・5層（6点）とH-4構築面出土の破片（1点）が接合したものである。4カ所に山形の波頂部があり両端に副突起がある。波状の中型の深鉢土器、文様帯は腹縁文と胴部の2条の沈線文で区画されている。文様構成は、はっきりとはしないが2条一単位の腹縁文で両端に点対称の入組文的文様を描く細長い構成の文様帯が器面の数カ所に、斜位に配置されているとみられる。波頂部下位に配された文様帯では、入組む部分が内面から指頭で押されてやや盛り上がっている。この文様帯は更に腹縁文で縁取られている。空間には貝殻腹縁部の押し引き文が施されている。円形刺突文は口縁部、2条の腹縁文間に、等間隔で施されている。また文様帯間を区画するかにみえる刺突列が斜めに配されている。口唇内側角には押し引き文がつけられ、下位に

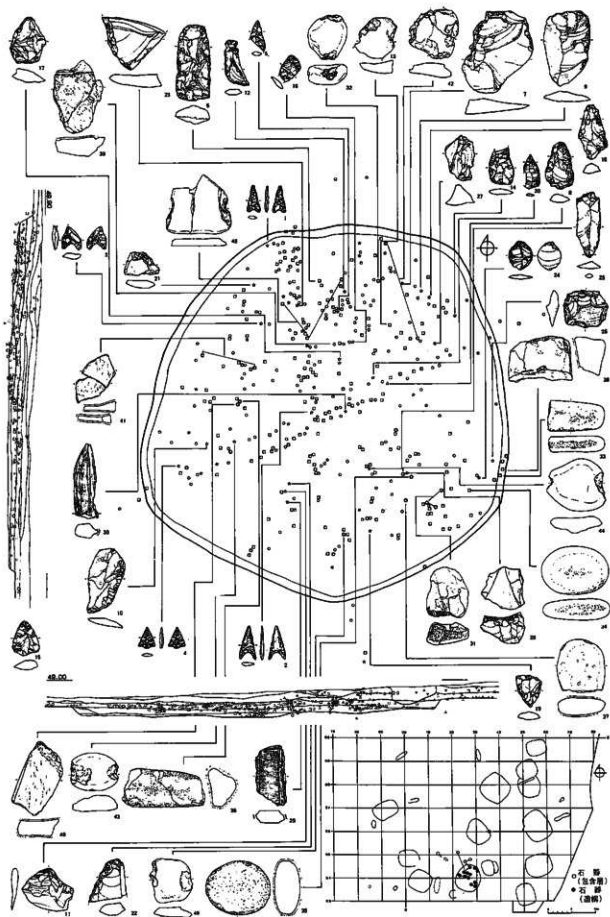


土層：1. 黒色土 (III a層>P.D.-3、ボソボソして、しまりが悪い)。2. 黄褐色粘質土 (P.D.-4とは異なり粒子が粗い、流れ込みによると思われる)。3. 暗褐色粘質土 (しまりは良い、少量の炭化物を含む)。4. 暗褐色粘質土 (乾燥するとクラックが入る、少量の炭化物を含む、しまりが良い)。5. 黒褐色粘質土 (しまりは良い、乾燥するとクラックが入る)。6. 暗黄褐色粘質土 (しまりは良い、乾燥するとクラックが入る、本層上面、本層中から少量の遺物が出土している)。7. 礫土。

図III-57 H-9実測図



図III-58 遺物分布と接合図(1)



図III-59 遺物分布と接合図(2)

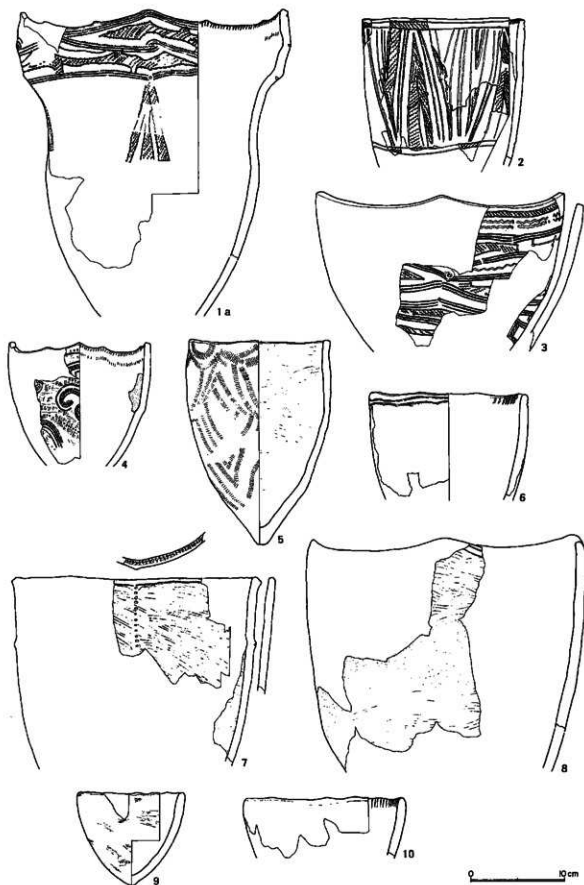
は爪形の圧痕がある。5は覆土4・5層(9点)出土の破片とH-6覆土3層、N-7-04・05・25(6点)出土の破片が接合したもの。全体の4分の3程が残存する。乳房状の尖底深鉢形土器。口縁部がごくわずかに外反する。文様は口縁部から底部付近にまで幅約6mmの貝殻腹縁部の押し引き文で文様が描かれている。器面が磨滅して文様は明瞭ではないが、口縁部に弧状あるいは鋸歯状の文様を重ねて施し、胴部では、斜めに交差させて三角形、菱形の文様が構成されているとみられる。区画された中に縦に、腹縁圧痕文が施されている部分がある。器面には腹縁部による横方向の条痕が、かすかにみられる。内面には全面に同様の条痕がある。底部付近では縦方向になっている。6は胴上半部の3分の1が残存する。器内外面は凹凸が著しく口縁部は不規則に波打っている。文様は口縁部に限られ、腹縁文が2条めぐっている。口唇内側に約8mmの長めの腹縁圧痕文が施されている。胎土に2・3mmの小砂利が多い。7は覆土2・4・5層出土の破片(10点)とP-3床面(1点)、周辺の包含層出土の破片(13点)が接合したもので、一部は図上で復元した。胴半ばまでの2分の1程が残存する。平縁の深鉢形土器。口唇断面は切り出し形で、口唇直下に腹縁文が1条めぐっている。器面には貝殻腹縁部によるとみられる条痕文が斜位に施されている。調整というよりは文様効果を意図したものと思われる。口縁部の4ヵ所から、円形刺突文を垂下させている。上端は指でつままれ、下端は内面から指頭で押されていて小突起状になっている。口唇内側角は腹縁圧痕文が刻み目状に施されている。内面には横方向に条痕がある。8は覆土4・5層(7点)出土の破片とH-6覆土2・3層、包含層出土の破片(7点)が接合したものである。波状口縁の大型深鉢形土器。胴上半部の3分の1程が残存する。器面には貝殻腹縁部による条痕文が横位・斜位に重ねられているが、ところどころ無文の部分もある。条痕文は文様効果を意識したものか調整によるものかは、はっきりとしない。内面にも同様の条痕がある。口縁部には浅い沈線文が2条めぐり、内面には約10mmの腹縁圧痕文が疎らにつけられている。9~13は無文のもの。9~12の口縁は不規則に波打つ部分があるが、波状を意識しているとは思わない。9は乳房状尖底の小型鉢形土器。器面の凹凸が著しく、内外面に横・斜方向の条痕がある。11・12は器形・土器片の割れ方、胎土・焼成が非常によく似た土器である。破片は粘土帯の接合面で破損している。9では横方向に11では横・斜方向に条痕がある。10は口縁部の2分の1が残存する。口唇断面はやや尖り気味で内面には、縦位に刻み目がある。爪によるものかもしれない。その下に疎らに短い爪形の圧痕がある。12は口縁部がやや内湾気味で、口唇断面は薄身である。14は無文の胴部だけのもの。上部は粘土帯の接合面で破損している。15~50は腹縁文、沈線文、刺突文、腹縁圧痕文を単独あるいは組合せて主に幾何学文の区画文を構成している。口縁・胴部の破片。口縁部は口唇内側に腹縁圧痕文を施すもの(15・16、18~21、23・24、29~32、34・35、38、49a・b)がある。波状口縁のものには波頂部の両端に副突起がつけられているものもある(15~17、19)。15~18は口頸部がキャリバー状の器形のもの。いずれも波状口縁である。15は口縁部文様は、はっきりとはしないが、波頂部下位に帯状の垂下する文様がある。16はH-4(図III-26-13)、H-5(図III-36-6)と18はH-3出土(図III-18-8a~8c)、包含層出土(図IV-8-59a~e)と同一個体の破片。17a・bは、包含層出土の土器(図IV-4-8)と同一個体。沈線文のみで連続する菱形・平行四辺形を組み合わせた文様が構成されている。波頂部下は内面から指頭で押されて小さな突起となっており、円形刺突文が施されている。19~22は幅広い文様帯があるもの。19は頸部がやや外反する。口唇上には小さな円形刺突文がめぐっている。3条一単位の腹縁文で縦長、楕円の区画文と描き腹縁圧痕文を斜位に充填させている。円形刺突文は3条の腹縁文の端、1条で施される腹縁文を等間隔に施されている。20a~cは鉢形土器になるとみられる。口縁部と胴部に2条一単位の腹縁文が施され区画された中に三角形の文様が構成されている。21a・bは同一個体と思われる。口縁部は外反し、口唇断面は尖り気味である。口

縁部と胴部に腹縁文を2条ずつめぐらせ、その中に縦に短い腹縁圧痕文を施し上下の区画としている。上下を繋ぐ鋸歯状の沈線文は1条と2条、交互に施文されている。沈線の両端には円形刺突文がつけられている。内面には腹縁圧痕文が3列めぐっているが、上から順に長くなっている。22~38は、口縁部であるが小片のために文様構成ははっきりしない。22a・bは同一個体。波頂部に縦位の腹縁圧痕文が施されている。内外面に条痕が残る。23は区画された中に鋸歯状沈線文が横位に施されている。26には内面に爪形の圧痕がある。27は沈線文で文様が描かれている。28は一方が偏る左右非対称の波状口縁のもの。波頂部下位に沈線で区画された垂下する文様がみられる。31は細い腹縁文で文様が描かれているので、貫通する円形刺突文がある。33は半截竹管状工具による沈線文が施されたもの。34~38の口縁部には、短い腹縁圧痕文が施された細長い帯状の文様がある。39~48は胴部片。39・40は、小型のもの。39は細い沈線で文様が描かれている。41は鋸歯状の沈線文が横位に施されている。内外面ともに横方向に条痕がある。44は三角形の区画文が描かれている。47は内面から指頭で押して小突起状にし、円形刺突文をめぐらせている。中心の刺突文は貫通している。48には沈線で区画された舌状の文様がみられる。49a・bには口縁部に円形刺突文がめぐっている。焼成の良い土器で内面に炭化物が付着する。50~55は無文の口縁部。51は口縁部がやや外反する。56a・bは同一個体と思われる。頸部がくびれる器形のものともみられ、その部分を内面から指頭で押して小突起状にし、円形刺突文を施している。57~63はII群土器。いずれも胎土に繊維が混入している。覆土上部の包含層III a層に相当する位置から出土してものである。57は胴下半部と思われる。刺突文状の押し引き文が器面にめぐらされている。包含層出土の土器(図IV-16-1a~f)と同一個体。58a~dは同一個体の破片。条の太きの異なるLRとRLの原体による羽状縄文が施されている。60はLRの原体を横位と縦位に施し縦方向の羽状縄文となっている。61は0段多条の縄文が施されている。63は包含層出土の土器(図IV-16-13)と同一個体。縦方向に太い押し引き文が施されている。

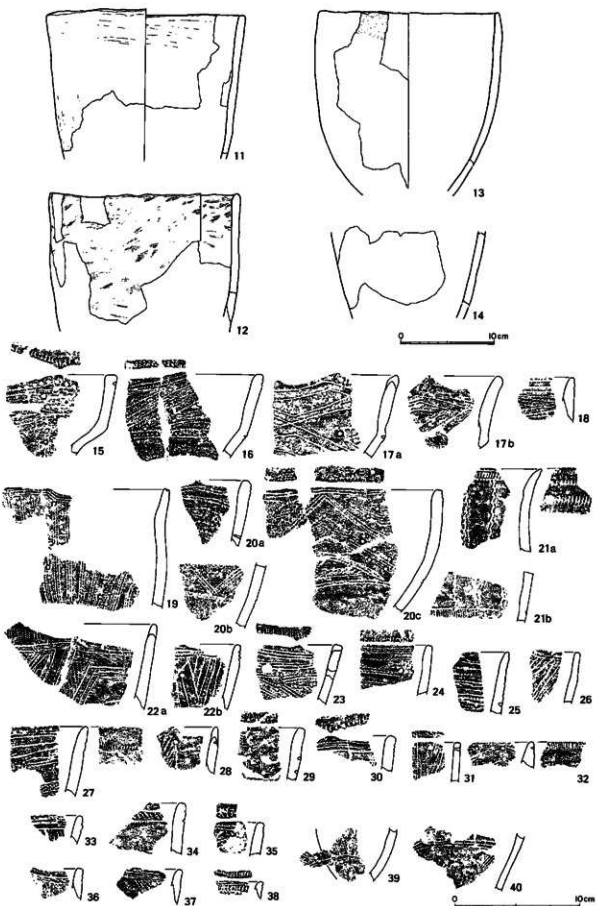
石器(図III-64・65・66 図版67・68)

1~4は石鏃、5も石鏃と思われる尖端部。2は非調整品、3も素材の背面が残っているらしい。4は黒曜石製、顆粒は全く漆黒に近い。5は篋状石器。背腹がはっきりしないが腹面調整品らしく、全周の整形も主に腹面に加わる。上下両端の縁辺に使用痕とみられる摩滅が著しい。8は両縁を整形した搔器。背面に礫面が残り、平坦打面もそのまま、刃づけは浅く粗い。7・9~11は削器。みな平坦打面を残し、11を除いて礫面を含む。刃部の位置は腹面左縁(7)・背面右縁(9)・両面右縁(10)・腹面末端(11)。12は素材の打面付近を挟った石匙。主に腹面の両縁と背面末端に刃づけする。縁辺からの調整はないが、背面中央の稜を取り除いている。13、挟入石器。素材は平坦打面、背面を礫面が蔽う。素材末端の折面は挟りを切る。14~26は未分類切片石器。14~16は両面調整品、石鏃の未製品かと思われるもの。17は腹面調整、18~26は非調整品。17~19、石鏃未製品としては厚すぎる印象。20、薄い尖端をもつ。2のような非調整石鏃の未製品か。21、末端を除く素材の両面を整形。22・23は削器に近いもの。ただ腹面の細部調整は削器刃部にしては深く、23では背面の刃部を打面として施される。24、背面ほぼ全周を整形。25、両面右縁に不揃いな細部調整。末端は鈍い尖端状になる。26、打面付近の両面を整形、腹面では打層を取り去る。27・28は石核。ともに石器の素材になりそうな大きさの剝離面もっていない。26、打面の転位が激しい。25、不安定な平坦打面。29・30は擦切残片。30は住居跡より上手にあるIII層の遺物と接合した例である。31・32はたたき石。前者は一端、後者は両端だけに打撃が加わり、潰れは目立たない。石鏃ないしその未製品の可能性もある。33~36はすり石。33・36の図化した方の主面、および34・35の両主面に散在敲打痕とすり面の複合。34・35では側面・端面の一部に集中敲打痕に近いものが見られる。36では主要機能部以外の稜上、また図化していない2つの主面の中央に

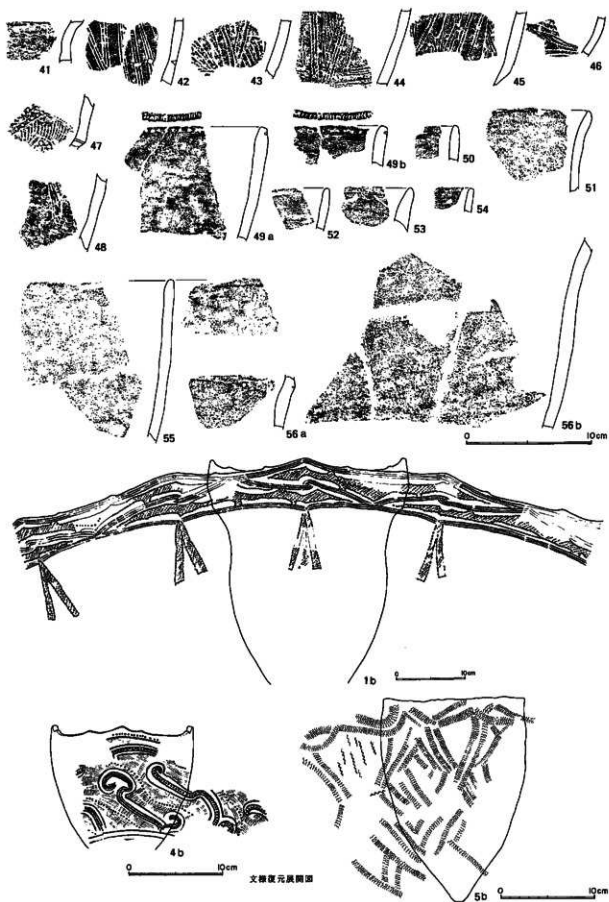
も集中ぎみの敲打痕。37～41は砥石で、素材は円礫(37)・角礫(38)・礫片(39)など。39では一方の主面、37が両主面、38・40・41ではさらに側面にも研磨が見られる。41の2つの破片は厚さが一致せず、少なくとも一方は折れた後にも、研磨されたことがわかる。42～46は石錘。42は周縁の広い範囲に片面加工をおこなう特異なもの。44には錯向剝離状の打ち欠きが見られる。45、大ききの割に平坦な素材。



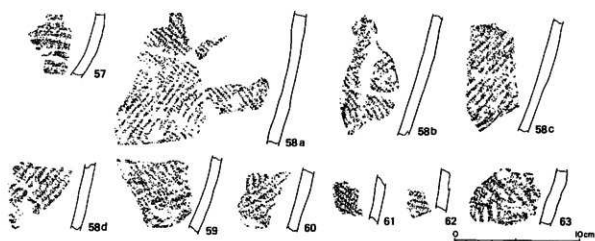
図III-60 H-9出土土器(1)



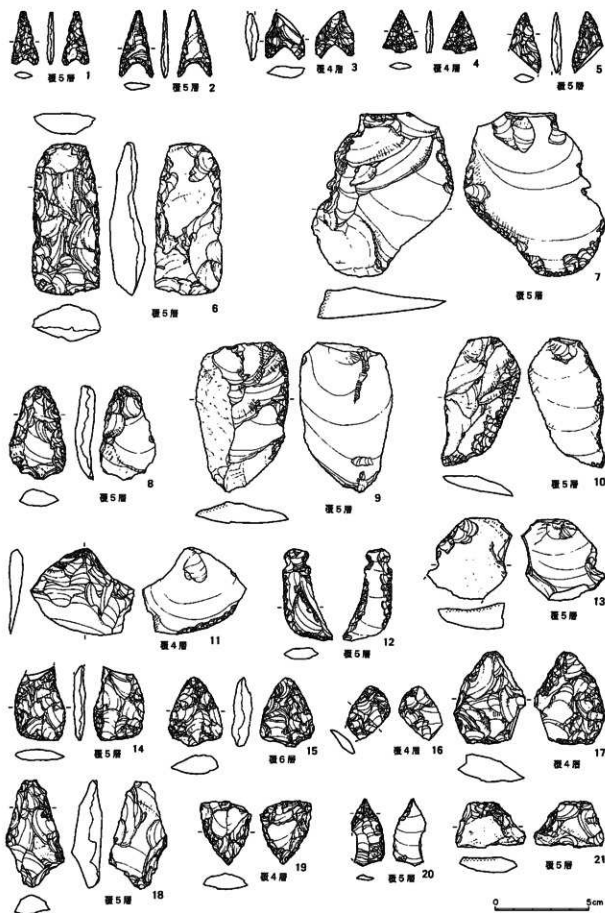
図III-61 H-9出土土器(2)



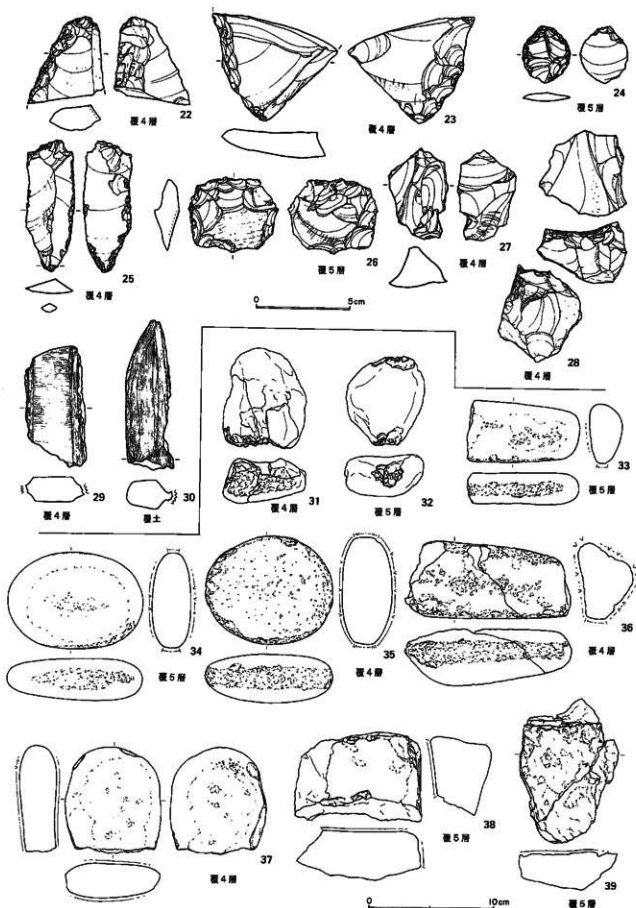
図III-62 H-9出土土器(3)



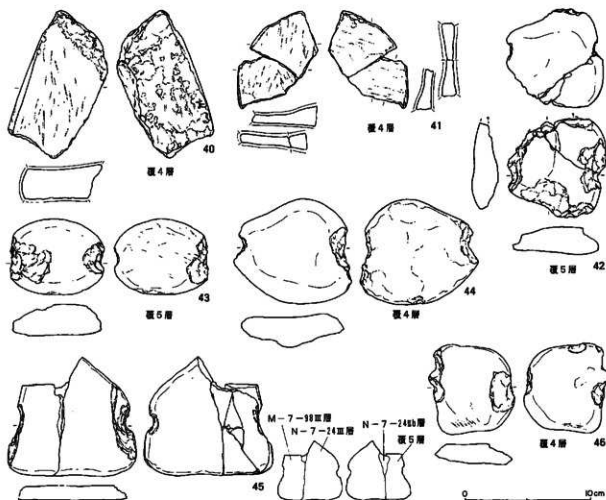
図Ⅲ-63 H-9 出土土器 (4)



図III-64 H-9 出土石器 (1)



図Ⅲ-65 H-9出土石器(2)



図III-66 H-9出土石器 (3)

H-10 (図III-67・68・70 図版19)

位置：N-7-42・43・52・53 標高49.50m～49.60mの平坦地に位置している。東にP-6・7、ほぼ北にH-5、北西にH-9・13・14が近接する。

規模：4.56m/—×3.92m/—×0.1m

平面形：ほぼ南北を長軸とする隅丸長方形 床面積：16.44㎡

確認・調査・土層：N-7-52・53の包含層調査中、IV層上面で南北を長軸とする長円形状の落ち込みを検出した。土層観察用の土手を設定し、暗褐色土を掘り下げ、その下の暗茶灰色を除去し、床面、壁の立ち上がりなどの検出作業を行う。土手の交点付近の暗茶灰色土下に焼土の広がりを確認し、やや堅い面を検出した。覆土は2層である。覆土1層は軟質の暗褐色土である。層厚は約10cmほどである(土層図3)。覆土2層は汚れの目立つ暗茶灰色土で、層厚は5cm～10cmである(土層図9)。遺物は覆土2層に多く含まれており、とくに北、東壁側から多量の剥片が出土している。

床面：やや凹凸はあるが、ほぼ平坦である。V層を若干掘り込んで構築されている。

壁：掘り込みは浅く、断面は皿状を呈している。

炉跡：床面の北東寄りに2ヵ所の焼土がある。地床炉である。明瞭な掘り込みは認められないが、わずかにくぼみになっている。HF-1は87cm×50cm、HF-2は86cm×52cmの楕円形状の広がりをもち、

焼土は2cm～3cmの厚さがある。ともに火を受けてV層が赤色化している。とくにHF-2は赤味が強く、堅くなっている。

付属ピット：柱穴状小ピットは23個検出されている。これらは①壁際をめぐるもの、②壁外にあるもの、③床面中央部分にあるもの、というまとまりが見られる。①は壁際より10cm～50cm内側にあり、すべて直立している。掘り込みは浅い。②は北～東に3個検出されただけで、全体については明らかでない。住居側に傾き、杭状である。③は3個である。すべて直立し、杭状で深い。HP-2はHF-1の焼土を排した後に検出されたものである。HP-1とHP-3は長軸方向の中心線上にある。これらは主柱穴と思われる。小ピットと焼土の関係を検出状況から考えると、HP-2を主柱とする一本柱の時にはHF-2が使用され、その後HP-1・3の二本柱の時にはHF-1が使用されたのであろう。

遺物出土状況：出土遺物総数は925点、その内訳は土器104点、石器など821点である。床面から出土した遺物は、土器77点、石器など35点である。出土した土器はすべてI群土器である。石器は剥片石器群が806点、礫石器群が15点である。剥片石器群では削器など、礫石器群ではたたき石、すり石、石鋸などが出土している。このうち床面からはすり石、石鋸などが出土している。遺物の出土で目立つことは、剥片が多いことである。壁際、とくに北壁側と東壁側では覆土2層中からまとまって出土している。出土した石器の約89%を占めている。出土土器の接合関係を見ると、床面直上出土土器とH-4床面、構築面出土の土器、覆土出土土器とP-6覆土出土の土器が接合している。また包含層との間には、N-7-46・53・56・64・65のⅢb層出土の土器と接合し、本住居跡の北～北東側との接合関係を有するという傾向が見られる。

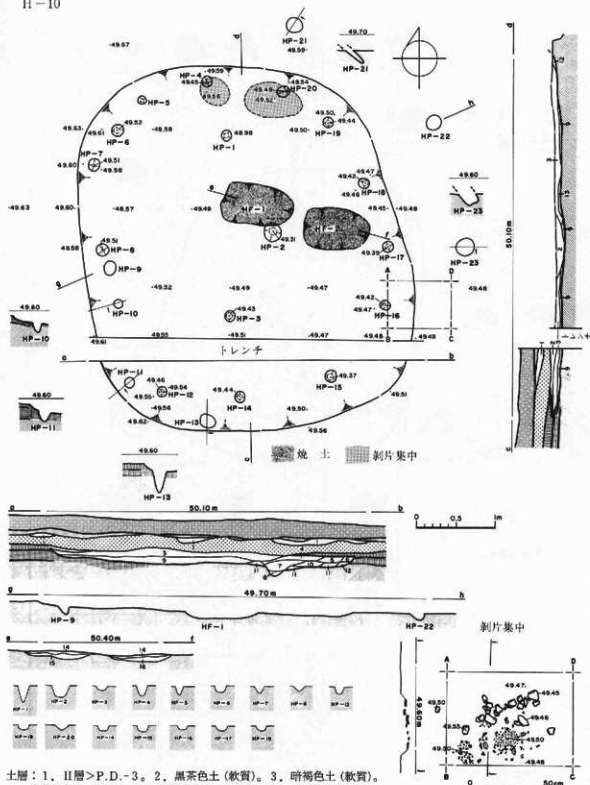
時期：掘り込み面はⅢb層中とおもわれる。出土土器はすべてI群B類土器であることから、本住居跡は縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

遺物：

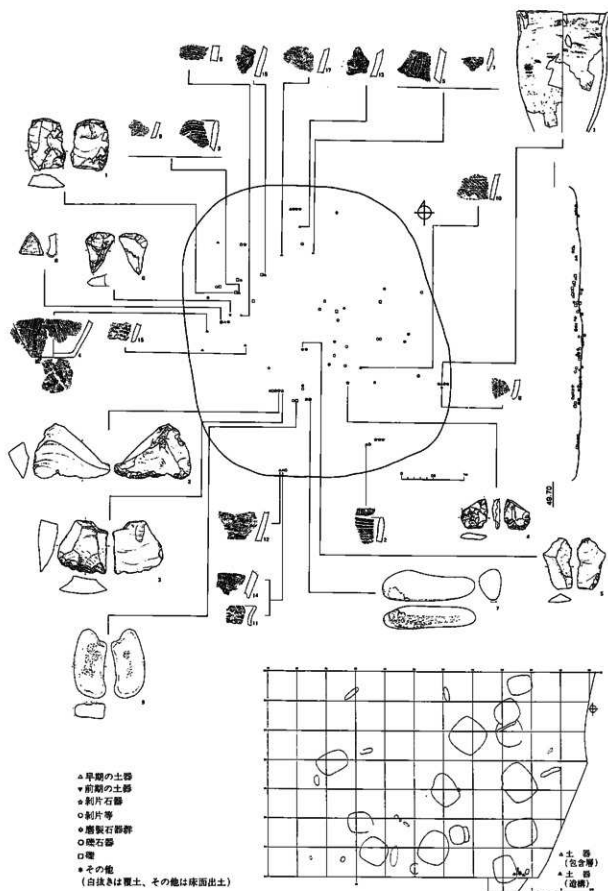
土器（図Ⅲ-69 図版40・49）

1は東壁側の床面直上からまとまって出土した破片（31点）と、隣接するP-6覆土1層（20点）、N-7-53（6点）出土の破片が接合したものである。焼成は良いが表面が剝落しているものが多い。平縁で、胴部がやや膨らみ、口縁部がわずかに外反する無文の深鉢形土器。器内外面には幅10cm～15cm程度の幅広い条痕がある。内外面とも口縁部、胴上半部では横方向あるいは斜方向に、胴下半部から底部にかけては縦方向の条痕がみられる。内面には炭化物が付着している。胎土に3mm前後の小砂利が多い。2～9は腹縁文、沈線文、刺突文、腹縁圧痕文を組み合わせて文様が構成されているもの。2・3はいずれも波条の口縁部。口唇内側に腹縁圧痕文が施されているが、3のものはほかの土器のものより長めである。3は包含層出土の土器（図Ⅳ-4-7）と同一個体である。4は覆土と包含層N-7-43出土の破片が接合した平底土器。文様は底面から器面全体に施されていると思われる。文様構成は明瞭ではないが、3条一単位の腹縁文で入組文を描き、これが上下の区画帯と接続して三角形の区画文が構成されるものと思われる。区画の最後は沈線文によるもので、腹縁圧痕が充填されている。底部は2、3条単位の腹縁文で同心円あるいは渦巻状の文様が描かれている。円形刺突文は入組文の中心に、沈線文には等間隔に付加されている。薄手で焼成が良い土器である。5は太い沈線で「舌状」の区画を描き、その中に3条の腹縁文が施されている。10は同一個体の破片がH-4の覆土1層・床面（図Ⅲ-27-44b・c）、構築面（図Ⅲ-27-44a）、N-7-44・55・56・63・65（図Ⅳ-14-160 a～c）から出土している。平行沈線文で区画した中に、腹縁圧痕文を斜めに施している。11～17は無文のもの。11は口縁部が外反する。12・14はHP-13出土のものである。14・17には条痕がみられる。

H-10



図III-67 H-10実測図



図Ⅲ-68 遺物分布と接合図

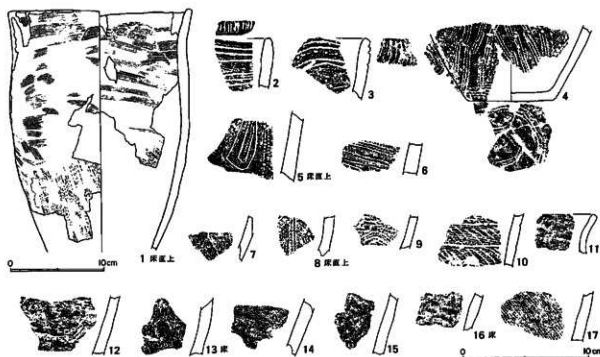
石器 (図III-71 図版69)

1~3 削器、いずれも大きな打面をそのままにしてある。1・3が粗い切子打面、2は平坦打面。1は疎面を含む素材で背面右縁を刃部とし腹面右縁にも不揃いな細部調整が続く。2は腹面末端に刃づけ。3は鋸歯状の刃縁。4は両面調整、5は非調整の未分類剥片石器。6は石器片、腹面を調整したものらしい。7はすり石。主面のすり面は認められない。8は砥石と複合する石器で縁に段のある機能部を有する。9は両主面中央付近に敲打を加えるたたき石。図の右面の敲打痕は散在がみで、不明瞭ながらすり面が複合しているようでもある。

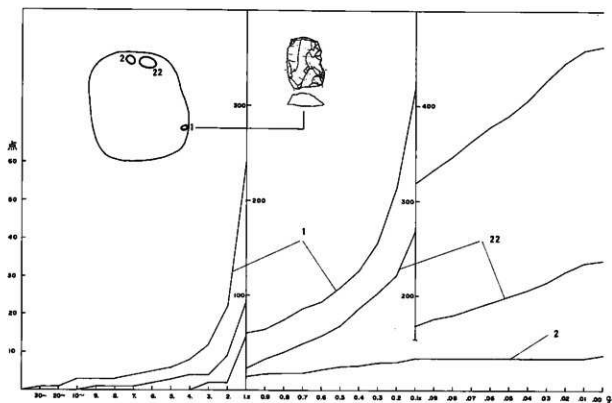
剥片集中：竪穴の北および東側の壁付近、床面直上の覆土中に剥片の集中出土が見られ、少数の剥片石器を交えていた (図版19-3)。すべて硬質頁岩製、計738点の遺物がおおよそ3箇所に分かれて分布し (遺物番号1・2・22)、それぞれ2~3個以上の母岩に由来するらしい。番号2には特徴的な墨流し様の色調をもつ石材が含まれ、包含層の剥片集中1と母岩を共有している可能性が高い。現場で剥

表III-8 小ピット一覽

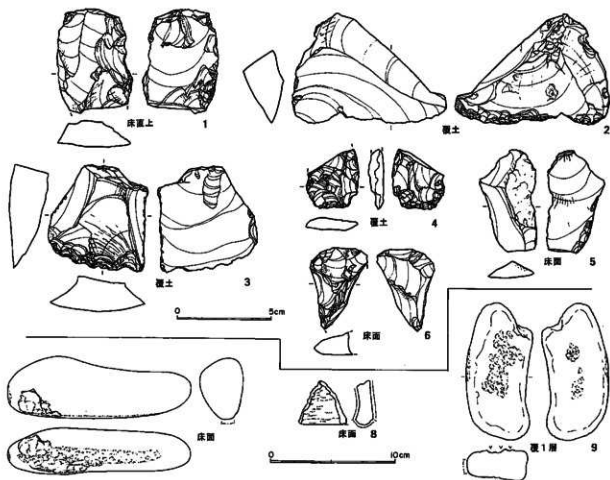
番号	底径×縦径	厚さ	土	検出面	番号	底径×縦径	厚さ	土	検出面
H P-1	14×12	22	暗灰黄色土 (粘質)	床 面	H P-13	20×16	25	黄褐色土 (粘質)	床 面
H P-2	22×21	15	褐色土 (粘質)	H P-1下	H P-14	14×12	6	灰褐色土	"
H P-3	14×14	5	暗灰黄色土 (粘質)	床 面	H P-15	14×14	8	暗灰黄色土 (粘質)	"
H P-4	14×12	13	暗灰黄色土+黄色砂	"	H P-16	15×12	5	灰褐色土+ローム土 (粘質)	"
H P-5	10×10	12	灰褐色土 (粘質)	"	H P-17	14×13	6	暗灰黄色土	"
H P-6	14×14	8	暗灰黄色土 (粘質)	"	H P-18	14×12	6	灰褐色土+ローム土	"
H P-7	15×14	9	灰褐色土+ローム土	"	H P-19	14×13	6	"	"
H P-8	15×14	7	"	"	H P-20	17×13	5	"	"
H P-9	17×15	13	暗灰土+ローム土	"	H P-21	20×18	24	暗褐色土+ローム土 (粘質)	重 b 層中
H P-10	11×11	10	灰黄褐色土 (砂質)	"	H P-22	18×18	17	灰褐色土+ローム土 (粘質)	"
H P-11	13×11	15	黄褐色土 (粘質)	"	H P-23	23×22	20	暗褐色土+ローム土 (粘質)	"
H P-12	12×12	9	灰褐色土	"					



図III-69 H-10出土石器



図Ⅲ-70 剥片集中



図Ⅲ-71 H-10出土石器

a. 点数・重量

遺物 番号	点数	重量 (g)	遺物 (g)																												
1	464	272.7	4A	13	12	21	18	12	15	19	14	14	106	37	30	18	15	7	12	10	4	30	10	4	2	1	4				
2	37	32.9	3	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3	1	3	4	0	1	3	12	0	1	0	0	0				
22	237	116.4	5	9	11	8	7	6	7	7	4	7	47	18	17	18	11	8	9	7	10	14	5	0	1	1	2				
合計	738	425.0	19	32	30	29	23	18	22	24	18	21	157	59	37	29	19	21	18	17	40	15	5	3	2	6					

b. 遺物の観察 観察は重量0.5g以上の遺物についておこなった。ただし特殊な石材・剥片以外の遺物の比率は全遺物点数中の百分率。

遺物番号	観察点数	材質 (点/%)	形状 (点/%)	厚さ (点/%)	長さ (点/%)	幅 (点/%)	重量 (点/%)	特徴的な石材 (点/%)	剥片以外の遺物 (点/%)	剥片 (点/%)	全重量 (点/%)	石片 (点/%)
1	157	19/12.1	1/1.6	23/13.9	16/9.6	7/4.5	3/1.9	3/1.9	16/12.2	5/3.2	8/0	1/0.6
2	36	1/3.5	0/0	4/11.8	12/44.4	3/7.4	0/0	0/0	9/25.0	0/0	0/0	1/3.6
22	102	22/21.5	3/2.0	15/14.8	35/34.3	6/5.9	4/3.9	5/4.9	31/30.4	3/2.9	0/0	0/0
合計	295	42/14.8	3/1.1	42/15.5	105/36.3	15/5.5	7/2.5	14/4.9	56/19.0	25/8.7	5/1.7	2/0.7

表Ⅲ-9 H-10 剥片集中集計表

片を選んで取り上げ、土壌の水洗分別はおこなっていないので微小な遺物については確実なことが言えないものの、点数の多い番号1と22はよく似た累積度数折線を示す(図Ⅲ-71)。礫面を残す遺物を相当数含み、切子・平坦打面が主体となるなどの点でも1と22の類似が注意され(表Ⅲ-9-b)、同時に他の住居跡内剥片集中とは幾分異なる性格が窺われる。しかし石器の素材を剥離する作業の産物にしては細かい剥片が多い。3箇所集中から1点ずつ出土した石器片はみな両面調整品の破片らしく思われるもので、調整時の剥片が混在するとみるのが自然である。大型の石器の調整、あるいは調整の初期のおおまかな加工に由来する遺物が多いのかも知れない。

H-11 (図Ⅲ-72・73 図版20・21)

位置: N-7-59 北から南へ傾斜した標高50~51mの緩斜面上に位置する。検出された14軒の住居跡のなかで最も北側に位置し、さらにその北側にはP-2が近接する。東側は銭亀宮の川、南側はH-7・8、T-9、西側はT-7、南西にはH-12がある。

規模: 4.08m/3.85m×3.30m/3.00m×0.37m

平面形: 台形 床面積: 10.86㎡ 長軸方向: N-80°-E

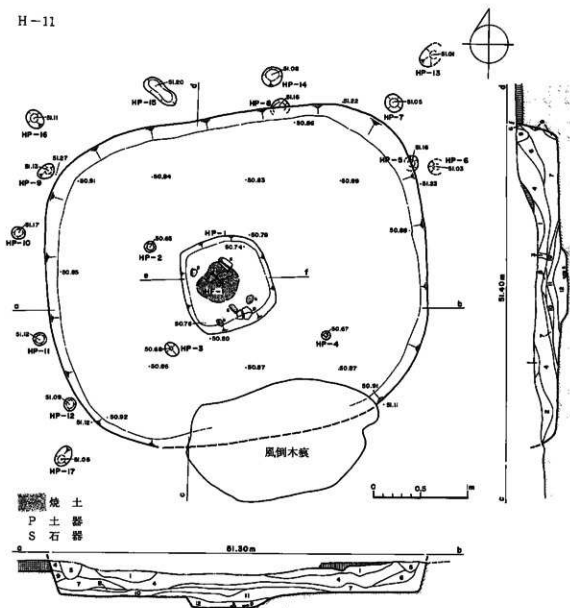
確認・調査・土層: N-7-59の包含層を調査中、Ⅲb層中で平面形を確認した。発掘区の東側は幅50cm程の土層観察用の土手を表土層から残してある。確認された平面形の輪郭は、幅10~20cmの黒褐色土が覆っており、内部は掘り上げ土と思われる黄褐色と黒色土が混在していた。南側の壁部分は風倒木によって攪乱されており、平面形が一部不明瞭になっているものの、方形もしくは台形と想定された。調査は平面形を四分割するように土層観察用の土手を残して、順次掘り下げを開始した。攪乱部分においても、どの程度整穴が破壊されているか不明であったため、遺物を極力残し、覆土の層序を確認することに努めた。調査期間中、風雨にさらされることもあり、微細な遺物は一部出土位置から動いたりしたが、全点出土地点、出土層位、レベルなどを記録して取り上げるように努めた。土層は13層に分層された。南北方向に残した土層断面C-Dの観察では、周囲の崩落よりも先に、中央部分の土層が厚く堆積していることが窺え、構築物の崩壊による堆積が推察される。また、平面形の輪郭を確認することができた覆土5層は、床面まで達しておらず、どのような現象で堆積したのか不明である。

床面: 床面はV層を20~35cm程掘り込んで構築している。南側の一部が攪乱によって破壊されているもののほぼ平坦で、堅く締まっている。

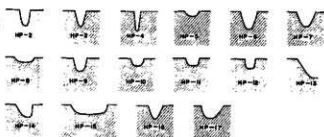
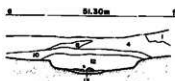
壁: 壁の立ち上がりは攪乱部分を除いて、垂直に近い状態で明瞭に立ち上がる。

炉跡: HP-1の内部に径約40cmの地床炉(HF-1)が確認された。砂質の赤色土である。焼土中か

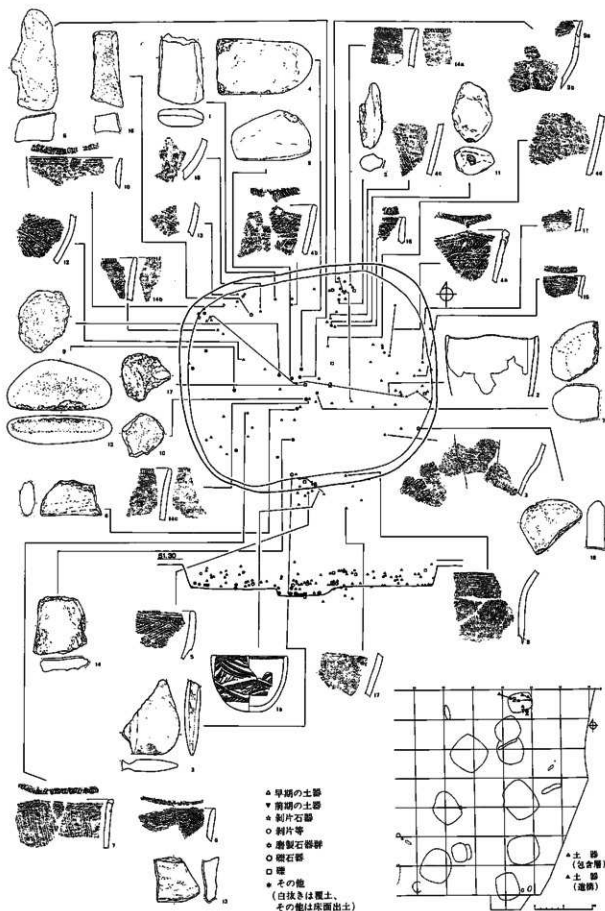
H-11



- 土層：1. 黄褐色土（V層＞黒色土）。
 2. 黒褐色土（風倒木痕）。
 3. 黒色土（木の根による攪乱）。
 4. 暗茶褐色土（1＋黒色土が混在、砂質）。
 5. 黒褐色土。
 6. 黒褐色土（5より若干干しい）。
 7. 茶褐色土（1＋黒色土だが、黄褐色土は5cm内外のブロック状）。
 8. 黄褐色土ブロック（黄色土＞黒色土）。
 9. 褐色土（崩落土、砂質）。
 10. 暗黄褐色土（7よりも黄褐色土ブロックが多い）。
 11. 暗茶褐色土。
 12. 茶褐色土（黄色土＋黒色土＋炭化物）。
 13. 赤色土（焼土、砂質）。



図III-72 H-11実測図



図Ⅲ-73 遺物分布と接合図

らは、微量のキハダ種子破片とクルミ属の殻、微細の炭化材が採取された。

付属ピット：床面中央部に約0.94×1.00mの浅い方形のピット（HP-1）が掘り込まれている。壁の立ち上がりは南壁以外、明瞭に立ち上がる。ピット内からはHF-1が確認され、さらに土器片、石器等が出土している。HP-1の周辺、北東部を除く床面の3ヵ所には柱穴状の小ピット（HP-2～4）が検出された。断面の形状は、いずれも先端が細くなっており垂直に近い。床面からの深さは20cm前後である。また、竪穴の周辺にも北側と西側の壁の周りを小ピットが廻る。ただし、東・南側では検出できなかった。これらの小ピットのほとんどは断面形状が垂直に近いが、HP-13・16・17の3ヵ所、つまり、竪穴の四隅にあるものは断面形状が竪穴の中央に傾く。

遺物出土状況：出土した遺物は総数160点である。床面・ピット内から土器25点、石器等18点、覆土内から土器78点、石器等13点、攪乱部分から土器24点、石器等2点である。このうち土器はすべてI群B類。石器は剥片石器が少なく、礫石器が目立つ。特にHP-1内からは、すり石1点、石鋸2点、砥石4点が出土している。

時期：出土した遺物から縄文時代早期中葉と思われる。

遺物：

土器（図III-74・75 図版40・50）

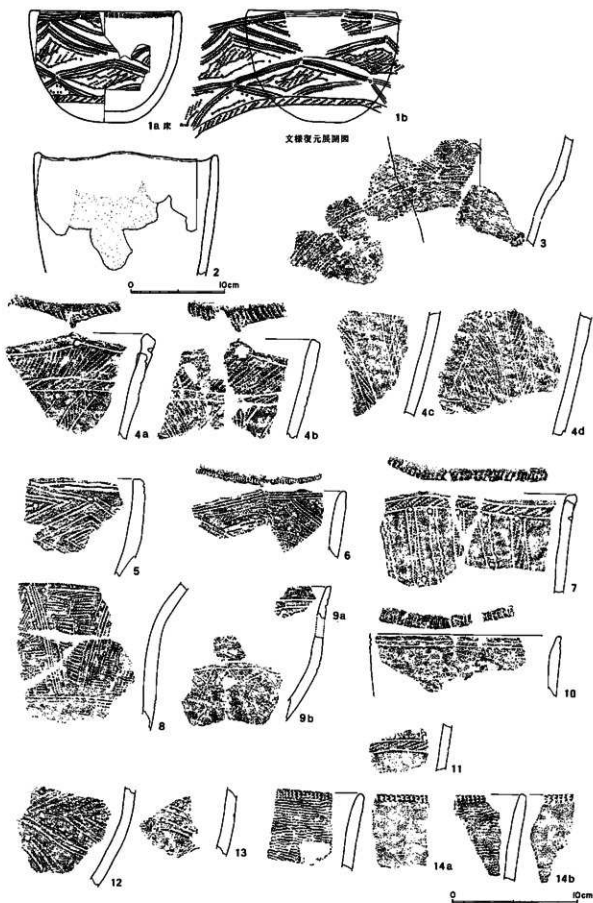
1は床面（8点）、覆土（2点）出土の破片とN-7-49出土の破片（1点）が接合したものである。2は無文のもの。全体の3分の1柱が残存する。緩やかな波状口縁で、口唇断面はやや丸味を帯びる。3～13は腹縁文、沈線文、刺突文、腹縁瓦痕文を、単独であるいは組合せて文様を構成している口縁、胴部の破片。3はキャリパー状の器形の中型土器。口縁部の文様構成ははっきりとはしないが、腹縁文で幾何学文の区画、舌状の文様が描かれている。胴部には鋸歯状の沈線文が2段途切れ、途切れにめぐっている。沈線文の両端には円形刺突文が加えられている。4・6・7は波状口縁のもの。口唇内側に腹縁瓦痕文が施されている4・6には波頂部の両端に副突起がある。8は口縁部が外反する器形のものと思われる。文様帯は幅広く、3条一単位の腹縁文で描かれた三角形の区画文が点対称の構成になっている。区画内には腹縁瓦痕文が充填されているが、部分的に押し引き文状になっている。4a～dは同一個体の破片。小さな山形の突起部がある波状口縁の大型土器。突起部は指でつまんで作出されたようだ。文様帯の幅は広いとみられ、口縁部と胴部に沈線文を1条ずつめぐらせ区画した中に沈線文で三角形、方形の文様が構成されている。区画内には腹縁瓦痕文が斜位に充填されている。口縁部に帯状の文様帯があるのかもしれない。円形刺突文が施される部分は、突起部、沈線文の端などで、ごく少なく数が限られている。内面に炭化物が付着する。5は厚手の土器、菱形の文様が施されている。内面には横方向に条痕がある。6は舌状の空間ができる文様が構成されている。7は口縁部に沈線文を二条めぐらせ、腹縁瓦痕文を斜位に施している。文様帯の上部の区画と思われる、そこから垂下する文様が施されている。2条の腹縁文によるクランク状の文様と、2条一単位の鋸歯状の沈線文が交互に、ほぼ等間隔に繰返し施されている。9 a・b、10は沈線で文様が描かれているもの。9 a・bは同一個体。緩やかな波状口縁をなすと思われる。口縁部に2条、胴部に1条沈線文をめぐらせ、その間に鋸歯状の沈線文が施されている。胴部の沈線下にも大柄な鋸歯状文がみられるが文様が重複しているところもある。内・外面に、口縁部では横方向の胴部では斜、縦方向の条痕がある。10は口縁部に2条の沈線文がめぐっている。口唇内側には棒状工具による刻み目がある。12は包含層出土の土器片（図IV-12-114）と同一個体のもの。14a～cは貝殻腹縁部による条痕文が横方向に施されているものであるが、調整痕ではなく、文様効果を意識したものと思われる。口唇の内・外面に腹縁瓦痕文が施されているが、内面のものは深く刻み目状になっている。内面には細かい条痕がある。15では幅約7mmの貝

殻腹縁部の押し引き文が横位に施されている。弧状になっている部分もみられる。口唇内側にも施文されている。16~17は無文のもの。16は口唇内側に長さ約10mmの刻み目状の腹縁圧痕文が施されている。17は横方向にケズリの痕跡がある。18は底部付近の破片。内・外面ともに縦方向の条痕がある。

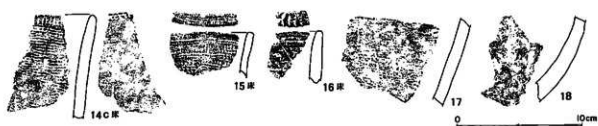
石器 (図III-76・77 図版70・71)

1~7はHP-1出土の礫石器、他は床面・覆土出土の遺物である。

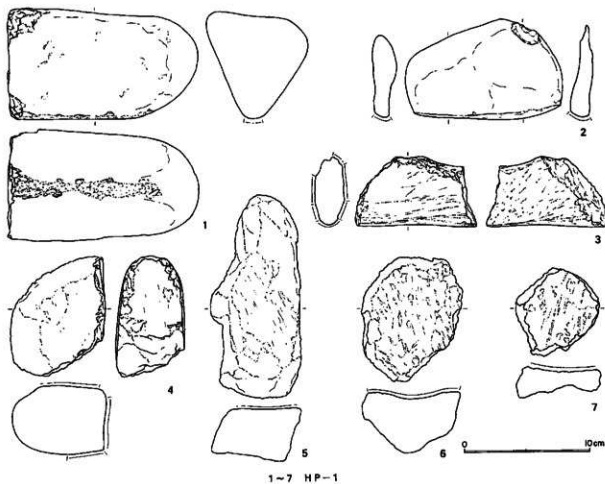
8は磨製石斧。風化が激しいが擦切石斧らしい。片刃。9・10は擦切残片。9は折断の後で擦切溝の一部に研磨を加えている。10は研磨石材の縁に位置し、その幅からみて石斧の素材となるべきもの。折断時の事故で放棄されたか。11、一端だけに狭い機能部のあるたたき石。1・12はすり石、1の主面には確実なすり面がない。12は典型的な長手のすり石。側面に帯条の機能部、両主面には散在敲打痕・平滑すり面の複合。集中敲打痕をともわない。2・3・13・14は石鋸、2は扁平な円礫を素材とし、3は砥石と複合。13・14はともに礫片素材らしく、一方の主面を研磨。13は段の付く機能部、14は剝離を加えて薄くした機能部をもつ。4~7・15~18は砥石。4・18、円礫片素材で礫の折面にも研磨が見られる。5、長手の礫素材、左傾する擦痕が見られる。6・7・15・17はやや厚手の素材に強く窪んだ機能部(15は擦痕が顕著、17は複数の溝状研磨に分かれる)をそなえ、15以外は同一母岩由来かと思われるが接合しない。16、ねじれた角柱状のもの。左図左縁の折面は主面の研磨に先だつように見える。敲打による深くぼみが1箇所。



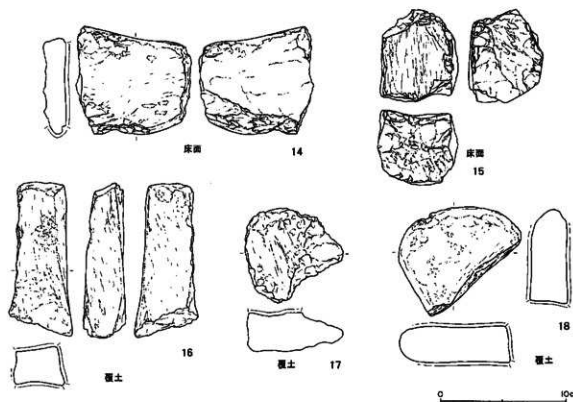
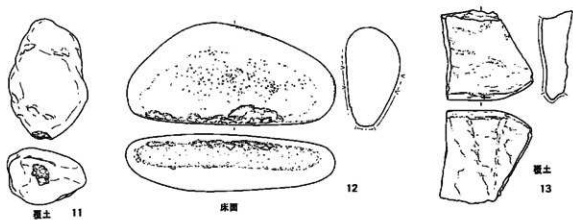
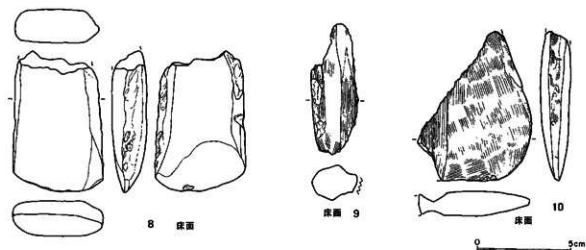
図Ⅲ-74 H-11出土土器(1)



図III-75 H-11出土土器 (2)



図III-76 H-11出土石器 (1)

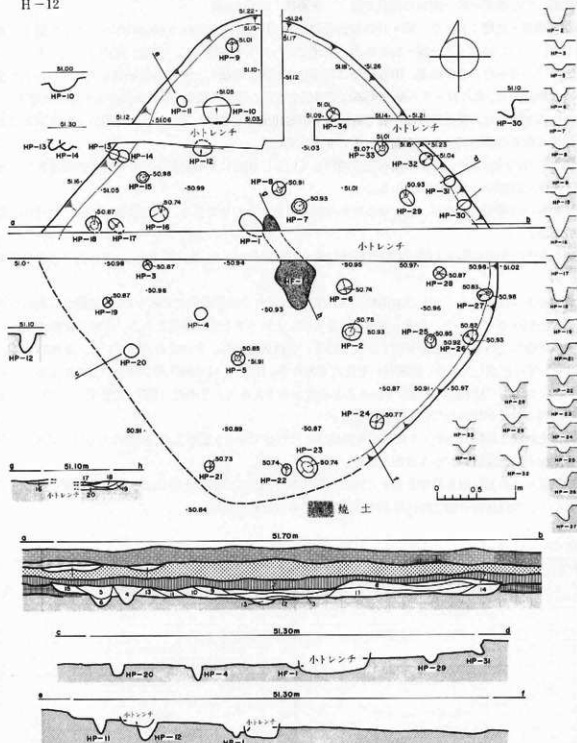


図Ⅲ-77 H-11出土石器(2)

H-12 (図III-78 図版22)

位置：N-7-37・38・47・48 ほぼ北から南へ傾斜する50.80m～51.25mの緩斜面上に位置してい

H-12



土層：1. II層+P.D.-3. 2. 暗茶褐色土(軟質). 3. 淡褐色土+暗黄色土(砂質). 4. 暗茶黄色土. 5. 暗茶褐色土(粘質). 6. 暗黄褐色土(粘質). 7. 暗褐色土. 8. 黄茶色土(砂質). 9. 黑茶色土. 10. 明黄灰色土. 11. 茶褐色土(軟質). 12. 3に焼土が混入. 13. 黒褐色土(軟質). 14. 淡黒茶色土(砂質). 15. 灰黄色土(軟質). 16. 暗茶褐色土>焼土. 17. 褐色土>焼土. 18. 明橙色土(焼土). 19. 暗黄灰色土>焼土粒. 20. 明灰色土(V層が火を受けて赤化している).

図III-78 H-12実測図

る。本住居跡の北東～西にはH-7・8・11、南東にはH-4、ほぼ南にはH-2が近接する。

規模：5.16m/4.87m×4.88m/ (4.63m)×0.2m

平面形：中心線が北西～南東の隅丸方形 床面積：約20.95㎡

確認・調査・土層：N-7-37・47の包含層調査中、IV層中で約70cm×50cmの広がりをもつ焼土を検出した。このためN-7-38・48に東西、南北に小トレンチを設定し、床面、壁の立ち上がりなどの検出作業を行った。この結果、Ⅲb層下に茶褐色土が薄く堆積し、V層を若干掘り込む北壁の立ち上がりを確認した。またN-7-38南東隅に茶褐色土下から焼土を検出し、焼土検出面を床面と想定し、全体に掘り下げた。覆土はほぼ一層で茶褐色土が約10cmほど堆積している。ただ中央部分はⅢb層と酷似する軟質の暗茶褐色土が床面直上まで堆積している。

床面：やや凹凸があり、北から南へ若干傾斜している。北側はV層を若干掘り込んで構築されているが、南側はIV層中につくられている。

壁：南西側は不明であるが、他はゆるやかな傾斜の立ち上がりである。北西壁高は20cm、他は10cm前後である。

炉跡：床面中央部に50cm×60cmの楕円形状の焼土の広がりがある。地床炉である。浅い掘り込みを有する。

付属ビット：柱穴状小ビットは34個検出されている。これらは①壁面にあるもの、②壁際から20cm～50cmほど内側をめぐるもの、③焼土周辺にあるもの、というまとまりが見られる。①は7個検出され、すべて内傾している。先端部が細くなっている。③は8個あり、すべて直立している。主柱穴と考えられる。②は直立しており、屋根材の支柱穴であろう。HP-1は焼土湿りの土が上にかぶっていること、またHP-13・14が重複していることなどから考えると、2本柱（HP-1とHP-2）から4本柱に建て替えが行われている模様である。

遺物出土状況：遺物はHP-1周辺で8点出土しただけである。土器2点、石器など6点である。このうち床面からは珪質岩片が1点出土した。

時期：掘り込み面はⅢb層中と考えられる。周辺から出土している土器はすべてI群B類土器であることから、本住居跡は縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

表裏-10 小ビット一覧

番 号	直径×埋深 (cm)	深 さ (cm)	層 土	検 出 面	番 号	直径×埋深 (cm)	深 さ (cm)	層 土	検 出 面
H P-1	35×21	20	暗灰色土	横 面	H P-15	20×15	17	暗茶褐色土 (軟質)	床 面
H P-2	24×20	18	"	"	H P-19	12×12	10	暗褐色土>ローム土 (軟質)	"
H P-3	12×12	10	暗褐色土+ローム土	床 面	H P-20	18×17	15	"	"
H P-4	16×14	21	暗褐色土>ローム土 (軟質)	"	H P-21	13×12	13	"	"
H P-5	17×17	9	"	"	H P-22	15×12	11	暗褐色土+ローム土	"
H P-6	15×19	21	"	"	H P-23	23×22	11	暗茶褐色土>ローム土 (軟質)	"
H P-7	18×17	8	黒茶褐色土>ローム土	"	H P-24	19×17	10	暗褐色土+ローム土	"
H P-8	18×16	8	"	"	H P-25	16×14	7	"	"
H P-9	18×14	18	暗褐色土>ローム土 (軟質)	"	H P-26	18×16	10	暗褐色土+ローム土	"
H P-10	34×34	12	淡褐色土	"	H P-27	18×15	16	" (軟質)	"
H P-11	14×12	17	暗褐色土>ローム土	"	H P-28	16×18	12	"	"
H P-12	22×21	22	淡褐色土	"	H P-29	21×15	13	暗褐色土>ローム土	"
H P-13	18×12	10	暗茶褐色土+ローム土	"	H P-30	17×12	19	暗茶褐色土+ローム土	"
H P-14	20×14	8	暗褐色土>ローム土 (軟質)	横 面	H P-31	14×12	10	"	"
H P-15	16×13	5	暗褐色土+ローム土	床 面	H P-32	15×16	23	"	"
H P-16	23×18	27	"	"	H P-33	18×16	9	"	"
H P-17	20×15	17	暗茶褐色土	"	H P-34	16×16	9	"	"

H-13 (図III-79・80 図版23)

位置：N-7-34 H-14によって壊されている。H-9に隣接し、標高50mの緩斜面上に位置する。

規模：2.70m/2.32m×(-)/(-)×0.23m

平面形：隅丸方形 床面積：(4.21㎡) 長軸方向：N-31'-W

確認・調査・土層：Ⅲ層上面で、僅かにP、D、3の落ち込みを確認した。また、第Ⅲ層中から多くの遺物が出ることから、当初、大きなピットを想定し、トレンチを設定して調査を行なった。ほぼ東西のトレンチの東側に10cm程の断差と壁の立上りを確認し、重複関係があることが判った。壊されているものをH-13、壊しているものをH-14と呼称し、調査を行った。覆土1層は暗赤褐色土でⅢ層の黒色土とP、D、3が混じったものである。ボソボソでしまりがわるい。Ⅲ層に相当するものと思われる。覆土2層は暗褐色土で少量の炭化物が混じる。覆土3層は暗褐色土で、覆土2層に類似するがやや黄色味が強い。覆土4層は黄褐色砂質土で、僅かに部分的にくぼむ。覆土5層は暗褐色粘質土しまりがよい。覆土6層は暗褐色粘質土で、覆土5層に類似するがやや黄色味が強く、ローム塊が混じる。覆土7層は暗褐色粘質土で、しまりが良く粘性が強い。平面形は、大部分がH-14に壊され、北東の一部を除くと不明であるが隅丸方形と思われる。

床面：床面はV層を15cm掘り込んで構築されている。床面は、ほぼ平坦である。

壁：西側がH-14によって壊され不明であるが、東側は緩やかに立ち上がる。

炉跡：確認されなかった。

付属ピット：柱穴は3ヵ所確認された。すべて壁柱穴である。H-14のHP-3・5は本竪穴のものの可能性がある。

遺物出土状況：遺物は、覆土・床面から45点出土している。その内訳はI群B類土器(27)、未分類刮片石器(3)、刮片石器片(1)、刮片(8)、角礫(6)である。

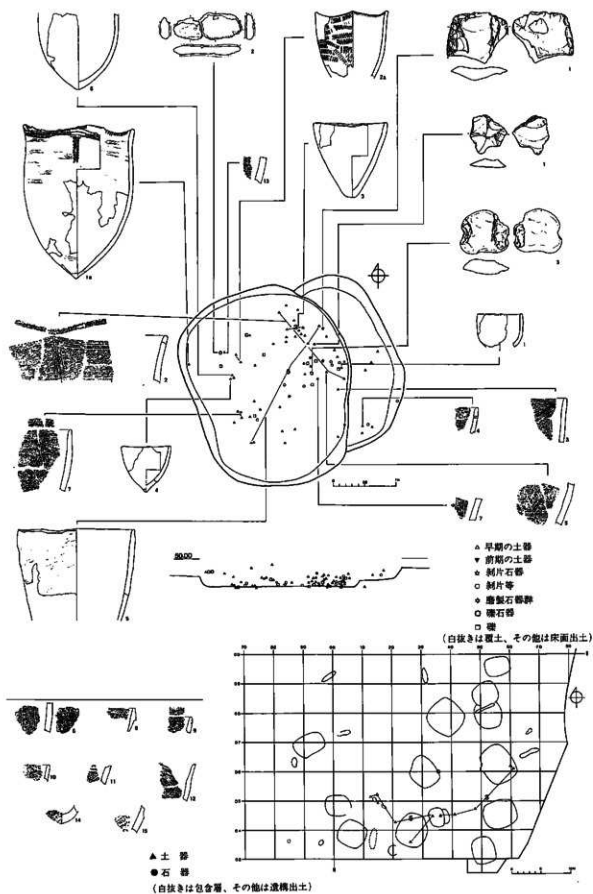
接合関係は、土器は遺構間で2例認められた。覆土出土の土器とH-3(覆土1層)・H-5(Ⅲ層)・H-6(覆土)とX-2(暗褐色土層)及び包含層、覆土出土の土器とH-4(覆土1層)と包含層(M-7-84、95、N-7-34、44、45)、H-13(床)とH-14(覆土1層)とが、包含層ではN-7-34と接合している。石器は接合関係が認められなかった。

時期：縄文時代早期中葉、I群B類土器の時期

遺物：

土器(図III-81 図版40・41・51)

1は全体の5分の1程が残存する。無文の小型の碗形の土器である。2~7は腹縁文、沈線文、刺突文、腹縁圧痕文で文様が描かれている。2はH-13の床面、H-14の覆土、N-7-34から出土した破片が接合でしたものである。口縁は緩やかな波状をなし、わずかに外反する。口縁部と胴部に3条一単位の腹縁文上をめぐらせ区画し、更に波頂部からも腹縁文を垂下させて文様帯を構成している。区画内は腹縁圧痕文が充填され、舌状の空間には3条の腹縁文が施されている。円形刺突文は文様帯、沈線、腹縁文や両端、交差する部分に加えられている。又波頂部からおろされた腹縁文の下端部分には、内面から指頭で押したと思われる跡があり、小さく突起状になっている。この部分には円形刺突文が施されている。内面には条痕がある。3は口唇断面が切り出し形をなすもので小さな副突起の部分。4は口縁の無文部に外からの貫通する円形刺突文がある。5はN-7-34出土の破片と接合したもので、接合はしなかったが同一個体の破片がN-7-35からも出土している(図IV-11-98a~e)。



石器 (図III-83 図版71)

1、背面左縁に細い細部調整(あるいは使用痕かも知れない)のある未分類石器。打面付近は折損。

H-14 (図III-79・80図版23)

位置：N-7-34。H-13を切って構築されている。H-9に隣接し、標高50mの緩斜面上に位置する。

規模：3.10m/2.94m×2.63m/2.43m×0.25m

平面形：隅丸長方形 床面積：5.94㎡ 長軸方向：N-31°-W

確認・調査・土層：H-13と切り合い関係が認められる。覆土1層は暗赤褐色土でIII層の黒色土とP、D.3が混じったものである。ボソボソでしまりが無い。覆土2層は暗褐色土で少量の炭化物が混じる。覆土3層は暗褐色土で、覆土2層に類似するがやや黄色味が強い。覆土4層は黄褐色砂質土である。覆土5層は暗褐色粘質土でしまっている。覆土6層は暗褐色粘質土で、覆土5層に類似するがやや黄色味が強く、ローム塊が混じる。

床面：床面はV層を20cmほど掘り込んで構築されている。床面はほぼ平坦であるが、北東壁際に皿状の浅いくぼみをもつ。H-13より10cm程度低い。

壁：壁はほぼ垂直に立ち上がる。

炉跡：焼土は確認されなかった。

付属ビット：柱穴は8ヵ所確認された。柱穴はいずれも10cm内外と浅く、壁から約30cm内側のところを不規則にめぐる。

遺物の出土状況：遺物は、349点出土している。内訳は土器はI群B類土器(313)、II群土器(1)で、石器等は未分類剥片石器(2)、剥片(8)、珪質岩片(6)、すり石(1)、砥石(2)、石錘(1)、円礫(3)、角礫(12)である。南西壁付近から1個体の大型破片がまとまって出土している。また、北西壁周辺の包含層から竪穴中央に向かって数個体の土器・石器類が流れ込んだような状態で出土している。

接合関係は、土器は遺構間で3例認められた。覆土出土の土器とH-4(覆土3層)及び包含層(N-7-33、44)、覆土出土の土器とH-9(覆土2層)及び包含層(N-7-15、24、34)、覆土出土の土器とH-9(覆土2、3、4、5層)・X-2(暗褐色土層)及び包含層(N-7-3、4、13、24、33、34)がある。包含層とは広範囲に接合関係が認められた。

石器は遺構・包含層の接合は認められなかった。

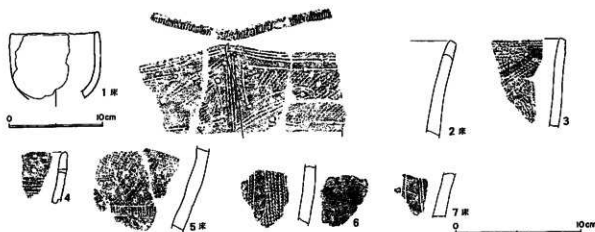
時期：縄文時代早期中葉、I群B類土器の時期

遺物：

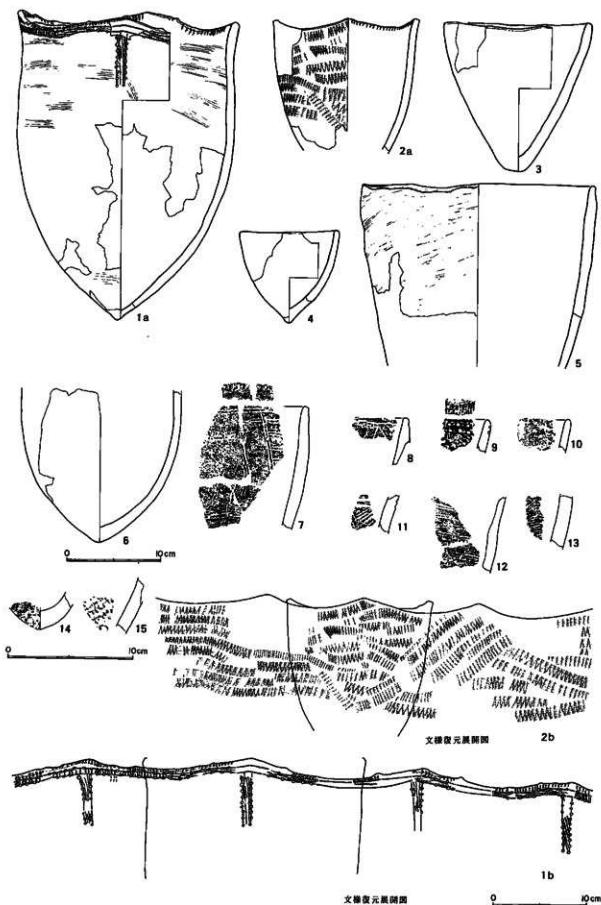
土器 (図III-82 図版40・41・51)

1は覆土(36点)とN-7-03・34(27点)出土の破片が接合したもので全体の4分の3程が残存する。ほかに接合はできなかったが同一個体の小片が覆土から多数出土している。胴部がやや膨らみ、口縁部がわずかに反する深鉢形土器。底部は小さな乳房状である。4ヵ所に緩やかな波頂部がある波状口縁のもので、その両端にごく小さな副突起がある。口縁の平面形は隅丸方形である。文様は口縁部と波頂部の下位に限られている。口縁に腹縁文を2条めぐらせ、その間には腹縁瓦痕文が加えられている。全周の3分の2以上で、10mm程の長めの瓦痕文が斜位に、残りの部分には短く縦位に施されている。波頂部下位には、腹縁文による垂下する帯状の文様があるが、省略して沈線文のみで描いているところもある。この部分には長めの腹縁瓦痕文が充填されている。円形刺突文は、腹縁文、沈線文上にほぼ等間隔に加えられているが、不規則になっている部分もある。口唇の内と外の角には腹

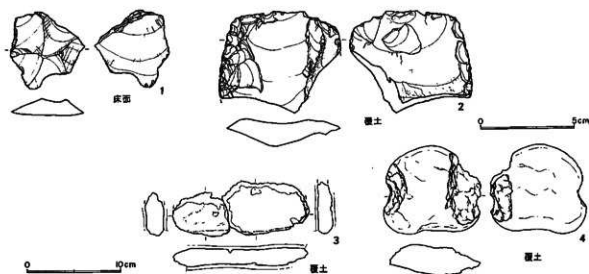
縁圧痕文がつけられているが内面は長めである。口縁部付近の内面には横方向にヘラ状工具による調整痕がある。2は覆土出土の破片（5点）とH-9覆土2層（1点）、N-7-15・24・34（17点）出土の破片が接合したものである。4ヵ所に緩やかな山形の波頂部がある中型の深鉢形土器。底部は欠損しているが3分の2程が残存する。口唇断面は角形で、部分的に切り出し形になる。文様は口唇部から胴部下半にかけて、貝殻腹縁部の押し引き文と連続波状文が施されている。施文具の原体である貝殻腹縁部の幅は約12mmで、最初に器面のほぼ全面に横位に施文し、次にそれに重なるように斜位に、あるいは弧状に施文している。この際貝殻を押し引きながら、不規則に連続波状文も加味するという手法をとっている。胴下半部は無文である。口唇内側には腹縁圧痕文が施されている。内面にはかすかに条痕が残る。胎土には3mm前後の小砂利が多い。3～5は無文のもの。平縁である。3は覆土3層出土の破片（6点）とH-4覆土3層（1点）、N-7-34・44（3点）出土の破片が接合したものである。丸底に近い尖底である。口縁部付近では内外面ともに横方向、胴部から底部にかけて縦方向に条痕がある。胎土には4mm前後の小砂利が多い。4は乳房状の尖底になるとみられる小型の鉢形土器。口唇断面は切り出し形である。胎土には3mm前後の小砂利が多い。5は覆土から出土したもので、口縁部から胴部にかけての2分の1程が残存する。口唇断面は尖り気味で、口縁部は不規則に波打つ部分や、粘土を折り返したままの状態のところもある。器面は凹凸が著しく斜め方向にケズリの痕跡がみられる。内面には幅3～5mm程の、ヘラ状工具による調整痕がほぼ全体にある。胎土に砂粒が多い。6は覆土出土の破片（2点）とN-7-34出土の破片（2点）が接合したもので、胴部半ばの輪積みの位置で割れている。底部は砲弾形で、尖底部は内面から指頭で突き出したとみられる痕跡がある。7は口縁部と胴部に腹縁文を2条ずつめぐらせ区画した中に、腹縁文による区画文、細かい2条一単位のくずれた鋸歯状沈線文で上下に大きく蛇行する文様が描かれている。8は沈線が施されたもの。9は口縁に沿って円形刺突文が2列めぐっていると思われる。10は無文のもの。11は接合はできなかったが包含層出土の土器（図IV-5-16）と同一個体。12・13は条痕がある。15はII群土器。節のやや太い原体による縄文が施されている。胎土に繊維が混じり、内面は磨かれている。包含層出土の土器（図IV-17-36）と同一個体の可能性がある。



図III-81 H-13出土土器



図III-82 H-14出土土器



図III-83 H-13、14出土石器

石器（図III-83 図版71）

2、折れているので未分類刮片石器としたが、まず刮器であろう。腹面右縁に平坦な細部調整が連なり、背面の刃部がこれを切る。3は砥石。風化で不明瞭ながら両主面の広い範囲に研磨があるらしい。本来の輪郭は不明。4、石錘、作り直したものか一端に挟りが2箇所ある。

2 土墳

土墳は10ヵ所確認された。その分布は住居跡が集中地区する調査区南側の標高49~51mに多い。構築時期は、早期の貝殻文尖底土器の時期のもの(6)、前期のもの(1)、不明なもの(3)があり、その中には土墳基と考えられるもの3基がある。

P-1 (図Ⅲ-84 図版24・41)

位置: M-7-93 規模: 1.02m/0.77m×0.69m/0.40m×0.15m

平面形: 不整形円形 長軸方向: N-18° -E

確認・調査・土層: IV層上面で、土器片を含む黒色土の落ち込みとして確認する。N-7-03の剝片集中、M-7-73のII群土器出土地点に隣接する。覆土1層は、黒色土でIII層との区別が困難である。P.D.3層の混入は認められない。2から4層は、汚れたIV、V層で、地山との境界は不明瞭である。墳底・壁: 平面形は不整形円形を呈し、墳底はV層中に掘り込まれている。壁の立上りは一定しない。土墳内にやや傾いた小穴が2基認められる。

遺物出土状況: II群土器が30点出土している。覆土1層から内面を上に向けた一箇体の土器片が出土している。

性格: 人為的な掘り込みでない疑いも残るが、土器の出土状況は、包含層からの混入とは考えにくい。性格は不明である。

時期: 縄文時代前期前葉、II群土器の時期

遺物:

土器 (図Ⅲ-84 図版41)

1は覆土1層から出土した深鉢形土器。底部は欠損しているが全体の3分の1程が残存する。口縁部には2個一対になる山形突起が2ヵ所、あるいは4ヵ所にあるとみられる。口唇上から内面にかけて非常に丁寧に磨かれている。胴半ばまではゼロ段多状のRL原体による縄文を帯状に施文している。施文の際の縄の末端部を強く押すことでループ文が意識されている。

底部にかけては羽状縄文を構成する意図とみられ、RL原体よりも糸の幅が細いL R原体による縄文が施されている。底部付近は施文後ナデられている部分がある。

P-2 (図Ⅲ-84 図版24)

位置: N-6-40 規模: 0.98m/0.46m×0.92m/0.42m×0.21m

平面形: 隅丸方形 長軸方向: N-89° -E

確認・調査・土層: IV層の調査中に黒色土の落ち込みを確認する。覆土1層は黒色土で、III層に相当するものと思われる。覆土2層は暗黄褐色土である。

墳底・壁: 墳底はV層中に掘り込まれている。壁はゆるやかに立ち上がり、断面形は浅い皿状である。

遺物出土状況: 角礫1点が出土している。覆土1層中位から出土したもので、人為的加工は認められない。第V層に含まれる礫に類似する。

性格: 人為的なものでない疑いがある。性格は不明である。

時期: 不明

P-3 (図Ⅲ-84 図版24・42・51・72)

位置：N-7-23、33 規模：1.75m/1.40m×(-)/(-)×0.33m

平面形：円形 長軸方向：N-18°-E?

確認・調査・土層：事前調査のテスト・ピットの壁断面で確認する。覆土をP.D.3、Ⅲa層、P.D.4、第Ⅲb層が覆う。覆土1層は暗褐色砂質土でIV層・V層に類似し、掘り上げ土の流入したものと思われる。覆土2層は暗褐色粘質土である。いずれも少量の炭化物が混じる。覆土上位にP.D.4が認められることからⅢb層中から掘り込まれたものと思われる。

墳底・壁：墳底はV層中に掘り込まれている。平面形はテスト・ピットによって壊されているがほぼ円形になるものと思われる。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿状である。

遺物出土状況：111点出土している。その内訳はI群B類土器92点、石器等19点である。石器等には未分類片石器(1)、剥片(4)、すり石(2)、砥石(1)、円礫(1)、角礫(9)、石斧(1)がある。遺物は、覆土2層下部や墳底から多く出土し、一個体の小型土器が潰れた状態で出土している。墳底から出土した土器片・礫のなかには他の遺構出土の遺物との接合関係が認められるものもある。性格：不明である。

時期：早期中葉のI群B類土器の時期

遺物：

土器 (図Ⅲ-85 図版42・51)

1~7は腹縁文、沈線文、刺突文を組合せて文様を構成しているものである。口縁部の破片では、口唇内側角に腹縁瓦痕文を施しているものがある(1・5)。1は床面(3点)は床面出土のもの(3点)とN-7-24・34(3点)出土の破片が接合したもので、同一個体の破片はN-7-13・33からも出土している。全体の2分の1程が残存する。平縁で胴部がやや張り出し、口縁部が内湾する中型の深鉢形土器。口縁部と胴下半部に沈線を2条ずつめぐらせ文様帯を区画している。口縁部の沈線間は腹縁瓦痕文が斜めに充填されている。2条一単位のクランク状の沈線文を施して文様帯を縦に区画し、その中を更に沈線で自由に区画して腹縁瓦痕文を粗く施している。胴下半部に細かい擦痕がある。2は床面出土の破片(11点)とN-7-33(1点)、10m程北西方のM-7-94(1点)出土の破片が接合できたものである。平縁の小型の碗形土器。底部は丸底気味である。底面は、内面から指頭で押して凹ませている。口縁部はやや外反し、口縁部の4ヵ所から底面で直交するように3条一単位の腹縁文を施し器面を4単位に区画し、その中を鋸歯状の沈線文で更に区画し、3条の腹縁文を口縁部から垂下させている。円形刺突文は3条の腹縁文の両端のものに、沈線文の端に施されているが、貫通しているものが2個あった。口唇部では外側角には細棒状工具で刻み目が、内側角には腹縁瓦痕文がつけられている。胎土に1・2mmの小砂利が多い。3は波頂部の両端に副突起がある。腹縁文で点対称な三角形を重ねる文様を描いているとみられる。円形のしっかりした刺突文が三角形の頂点に加えられている。4は床面出土の破片とN-7-13出土の破片が接合できたもの。緩やかな波頂部をもつ深鉢形になるとみられる。口縁部に3条、胴部に2条それぞれ太い腹縁文をめぐらせ、その間に鋸歯状の沈線文を2条、途切れ途切れにめぐらせている。刺突文は腹縁文、沈線文の上下やその間の空間につけられている。口唇内側角に腹縁瓦痕文が施されている。厚手で胎土には砂粒が多い。5・6はいずれも内外面に細かい条痕がある。5は区画の中に押し引き状の腹縁瓦痕文が施されている。7は2条あるいは3条一単位の沈線で、口縁部と胴部を縦ぎ文様帯を区画するとみられる文様が描かれている。区画内には長めの貝殻瓦痕文が疎らに施されている。8~13は条痕文(8・11・12)、無文のもの。8は条痕文により斜格子目の文様が描かれている。条痕は貝殻の腹縁部を使用したものかもしれない。

包含層出土の土器片(図IV-14-145a~b)と同一個体である。10a・bは同一個体の破片。口唇直下に円形刺突文がめぐっている。口唇内側角に腹縁圧痕文が施されている。

石器(図III-86 図版72)

1は非調整の未分類片石器で背面の一部に礫面。両縁と末端は折れて、折面から腹面へ細部調整が入る。3は磨製石斧、擦切技法によらないものらしい。刃部は破損しているが片刃であったとみられる。2・4はすり石、2は上下の稜に機能部が見られる。4の主要機能部は通例よりも突出した断面形を呈しており、両主面の平滑なすり面を切って敲打痕ないしくばみ、また稜上や図の左端などにも集中した敲打痕が見られる。

P-4(図III-86 図版25)

位置: N-7-04 規模: 2.08m/1.45m×0.43m/0.18m×0.24m

平面形: 溝状 長軸方向: N-81°-E

確認・調査・土層: IV層上面の調査中に細長い黒色土の落ち込みを確認した。当初、Tピットを想定して半載する。覆土1層は第III層類似の黒色土、覆土2層は第IV層に腐植土塊が混じる暗褐色土である。

填底・壁: 填底は浅くV層中に掘り込まれている。填底は凸凹である。壁は北側が急角度に、南側はゆるやかに立ち上がる。

遺物出土状況: 遺物は出土していない。

性格: 風倒木痕の可能性ある。性格は不明である。

時期: 不明である。

P-5(図III-87 図版25)

位置: M-7-86 規模: 1.85/1.08×0.98/0.44×0.25

平面形: 長円形 長軸方向: N-7°-W

確認・調査・土層: IV層上面で黒褐色土の不整形の落ち込みを確認する。風倒木痕の可能性を想定し、周辺を掘り下げたところ、比較的明瞭な輪郭をもつものであることが判明した。覆土1層は黒褐色土、覆土2層は褐色土、覆土3層はにぶい黄褐色土、覆土4層は灰黄褐色土、覆土5層はにぶい黄褐色土、覆土6層は褐色土である。覆土6層を除きいずれも軟らかい。

填底・壁: 填底は浅くV層中に掘り込まれている。断面形は浅い皿状で、填底は凸凹である。

遺物出土状況: 覆土5層から高師小僧1点が出土している。

性格・時期: 不明である。風倒木痕の可能性ある。

P-6(図III-87 図版25)

位置: N-7-53 規模: 0.67m/0.58m×0.56m/0.53m×0.34m

平面形: 長軸がほぼ南北の楕円形。填底は東西を長軸とする長円形。

確認・調査・土層: N-7-53の包含層調査中、IV層上面で長円形状の落ち込みと、突き刺さった状態の土器片の集中を検出した。北西-南東で半載し、遺物の出土状況を観察しつつ掘り下げた。覆土は大きく三層に分けることができる。覆土1層は暗褐色土である(土層図1)。やや堅い粘質土で、ローム土が混入している。遺物は大半がこの層から出土している。出土土器は立ったまま押しつぶされた状況を呈している。覆土2層は褐色土、黄色土などが混り合った非常に汚れた土である(土層図2・

3・4・5・6)。覆土3層は淡褐色土である(土層図7)。炭化物を多量に混入する粘質土である。全体に混り合った汚れた土で、埋め戻しによる土である。

墳底・壁：墳底は平坦で堅い。V層を深く掘り込んでつくられている。壁は、上半部が外傾し、広口状になっている。墳底から壁中ほどにかけてはオーバーハングしている。

遺物出土状況：遺物出土総数は39点で、土器が32点、石器などが7点出土している。土器はすべてI群土器である。石器などはおもに覆土2層の下層から出土している。覆土1層出土の土器とH-10床面直上出土の土器が接合している。

性格・時期：性格は不明である。ただ覆土が埋め戻しのものであること、覆土上に土器が立てられていた様子がうかがわれること、炭化物を多量に混入していることなどから考えると土墳墓の可能性はある。出土土器はすべてI群土器であることから、縄文時代早期中葉のものと思われる。なおH-10の覆土を掘り下げて輪郭が検出できたことから、H-10より古いものと考えられる。

P-7 (図III-87 図版25)

位置：N-7-53 規模：1.13m/0.79m×0.86m/0.56m×0.38m

平面形：南北を長軸とする長円形。墳底はN-16-Eを長軸とする隅丸長方形。

確認・調査・土層：N-7-53の包含層調査中、IV層上面で一括遺物を検出した。周辺を精査し、ほぼ南北を長軸とする長円形状の落ち込みを確認した。南北で半截し、遺物の出土状況を観察しながら掘り下げた。覆土は大きく三層に分けることができる。覆土1層は暗褐色土で、ローム土が混入している(土層図1)。汚れており、上層から遺物が多量に出土している。出土土器は外面を上に出しているものが多い。覆土2層は暗褐色土と黄茶色土が混り合った土で、汚れている(土層図2・3・4)。覆土3層は灰黄色土で、炭化物を多量に混入し、しまっている。覆土3層上面は火を受けたように赤味を帯びている。またこの面で遺物が多く出土している。

墳底・壁：平坦で堅い。V層を深く掘り込んでつくられている。壁の下半部は垂直に立ち上がり、上半部は外傾し、大きく開いている。

遺物出土状況：遺物出土総数は297点で、土器は267点、石器などは29点である。覆土1層出土土器は239点、覆土3層上面出土土器は11点である。すべてI群土器である。石器は砥石、たたき石などが出土している。覆土1層出土土器は、横倒しのまま押しつぶされた状態を呈している。

性格・時期：性格は明らかでない。ただ遺物の出土状況や炭化物が多量に混入し、覆土が埋め戻しの土であることなどから、土墳墓の可能性はある。

出土土器はすべてI群B類土器であることから、縄文時代早期中葉のものと思われる。

遺物：

土器 (図III-87 図版42)

1は口縁部がキャリパー状の器形のもの。底部は欠損するが5分の4程が残存する大型の深鉢形。胴部下半が張り出し、口縁部は直立する。4ヵ所に大きな山形の波頂部があり、その両端に副突起がある。口縁部の平面形は隅丸四角形である。口縁部に3条一単位の腹縁文、頸部には2条の腹縁文をめぐらせ文様帯を区画している。頸部の腹縁文間には短い腹縁圧痕文が縦位に施され、波頂部下は内面から指頭で押し小さく突起状に作出している。他のものより大きい。波頂部間に腹縁文で帯状の文様を縦位に施し、文様帯を4単位に区画している。それぞれの区画には4条一単位の腹縁文で横位にクランク状文様を描き、波頂部下で入組む形となっている。この部分には円形刺突文がつけられている。上下の空間は1条の腹縁文で三角形の文様を描き全体として点対称の構成となっている。帯

状、三角形の区画内には腹縁圧痕文が縦位、横位に充填されている。波頂部下のくびれの位置からは胴部下半の張り出し部まで腹縁文で垂下する細長い帯状の文様が施文されている。この部分には腹縁圧痕文が斜位に充填されている。円形刺突文は腹縁文上に等間隔に、頸部の腹縁間では器面をめぐっている。口縁の波頂部下を意識しているとみられ、その位置の刺突文は他よりも大きくなっている。口唇内側角に腹縁圧痕文がつけられている。口唇上の内外面に非常に丁寧に調整されていて、内面口縁部には横方向の条痕がある。胴部上半部では内外面に炭化物が付着する。2は覆土5層上面(6点)と壁(3点)から出土したもの。無文の深鉢形土器とみられる。口縁部から胴部にかけての3分の2程が残存する。口縁部の破片は輪積の位置で割れている。口唇断面は切り出し形で、内面には横方向の条痕がある。3～4は口縁部。3は波状口縁のもので、比較的幅広い文様帯をもつものとみられる。また波頂部から3条の沈線文を縦位に施して、区画した中に幾何学的文様が構成され、腹縁圧痕文が充填されている。口縁部にめぐる2条の沈線文のところどころに腹縁圧痕文が重ねられている。4a～cは同一個体。山形の波頂部の下位に貫通する円形刺突文がある。3～4は口唇内側角に腹縁圧痕文がつけられている。5は斜格子目の条痕文がかすかにみられる。

石器(図Ⅲ-88 図版72)

1は礫打面、湾曲した素材の背面左縁に刃を付ける搔器。2～5は未分類石器、2は両面調整、3～5調整なし。3はほぼ全周縁を浅く整形。4、末端部の折面を切った細部調整がある。5、主に背面左縁に浅い細部調整、打面付近はかなり整形されているらしい。6はすり石、両方の側面・端面に敲打痕の集中。平坦な方の主面に研磨が加わり、すり石のすり面としては例外的に条痕が見える。7、薄い礫片の主面を研磨する砥石。

P-8(図Ⅲ-89 図版26・73)

位置: N-7-35、36 規模: 0.58m/0.33m×0.56m/0.23m×0.29m

平面形: 円形 長軸方向: N-30°-E

重複: H-2により壊されている。

確認・調査・土層: H-2の床面調査中に、東側壁際に黒色土の落ち込みを確認する。覆土1層は黒色土、覆土2層は腐植土塊が混じる暗黄褐色土、覆土3層は暗黄褐色土である。H-2により上部が壊されたものと思われる。

墳底・壁: 墳底は浅くV層中に掘り込まれている。墳底は南側に傾斜する。

遺物出土状況: 遺物は覆土2層から石器等2点出土している。その内訳は削器(1)、角礫(1)である。

性格: 不明である。

時期: 時期を特定できる遺物は出土していないが、H-2との切り合い関係から古い時期のものであることは確かである。

遺物:

石器(図Ⅲ-89 図版73)

1は大ぶりの切子打面、背面の一部に礫面があり、両面右縁に錯向剝離状の刃付けのある削器。

P-9(図Ⅲ-89 図版26・52)

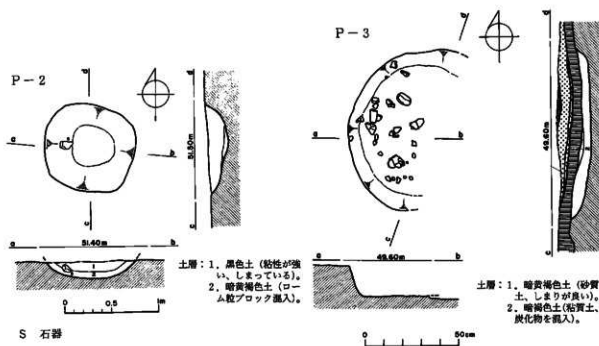
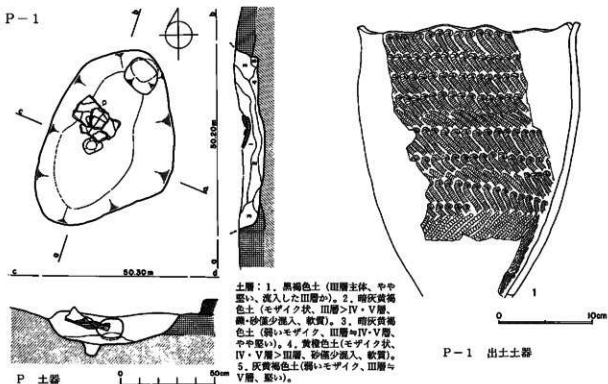
位置: N-7-14、15 規模: 0.68/0.54×0.53/0.32×0.12

平面形: 円形 長軸方向: N-27°-W

確認・調査・土層: V層上面で褐色土の落ち込みに遺物が含まれていることを確認する。覆土は少量

の炭化物を含む。覆土1層は黒色土、覆土2・3層は少し汚れたV層に類似するが、覆土3層はやや黄色味が強い。

墳底・壁：墳底は浅くV層中に掘り込まれている。墳底は平面形は円形である。



図III-84 土壌実測図と出土遺物（1）

遺物出土状況：I群B類土器15点、頁岩剣片2点出土している。覆土2層上部から遺物が出土している。土器は同一個体と思われ、あたかも北東側から土壌内部に落ち込んだような出土状況を呈している。また、土器はN-7-35第III層出土の破片と接合している。

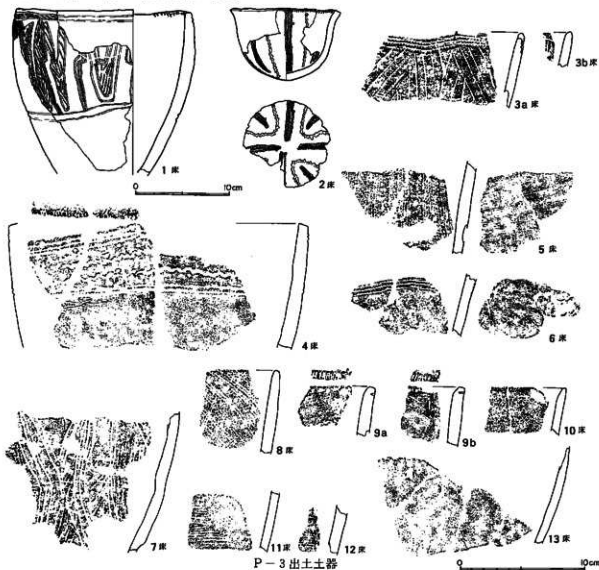
性格：不明である。

時期：早期中葉のI群B類土器の時期

遺物：

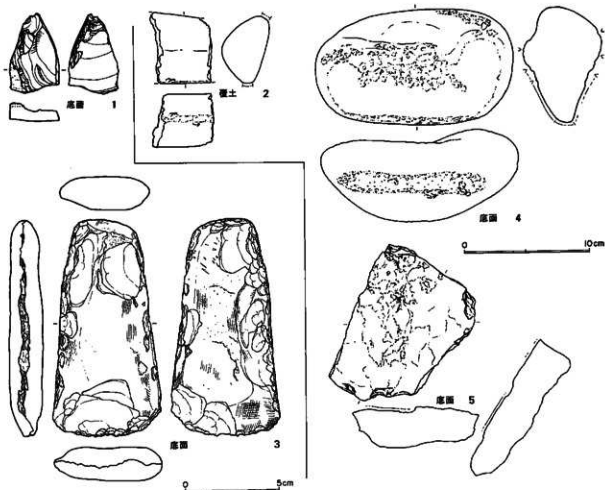
土器（図III-89 図版52）

2・3 a～cは包含層出土の土器（図IV-10-90）と接合はしなかったが同一個体である。2は覆土2層出土の破片とN-7-25出土の破片が接合した。4ヵ所に波頂部があり、その中間に小さな突起部がある。口縁部と胴部に2条ずつ腹縁文を施し区画した中に斜位に腹縁庖痕文が施されている。胴部には更に1条腹縁文がめぐっている。文様は3条一単位の腹縁文で大きく三角形を描き、斜位の線を重ねて、斜格子目の文様を描いている。円形刺突文は文様の交差する部分では、その四隅に施されている。口唇内側には腹縁庖痕文が斜位に施されている。内面には、口縁部では横位に、その下位では縦位・斜位に幅8mm程度の条痕がある。

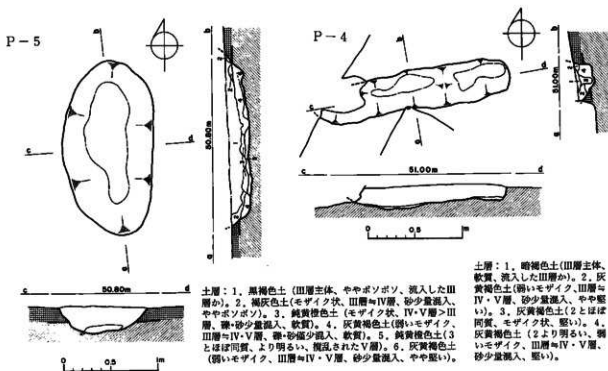


P-3出土土器

図III-85 土壌出土遺物（2）

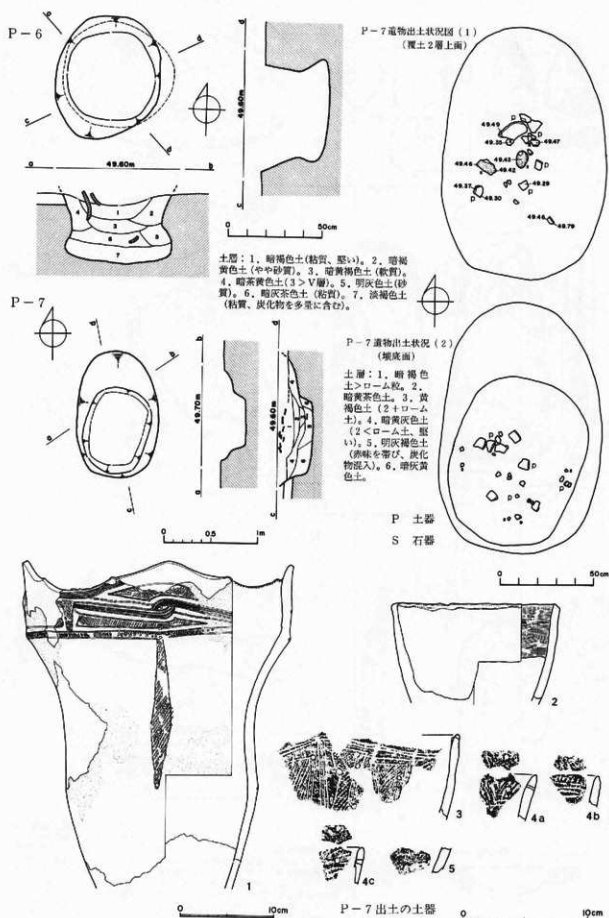


P-3 出土石器



土層：1. 黒褐色土（田層主体、ややボソボソ、流入した田層か）。2. 灰黄褐色土（モザイク状、田層≒IV層、砂少量混入、ややボソボソ）。3. 純黄褐色土（モザイク状、IV・V層≒田層、砂少量混入、軟質）。4. 灰黄褐色土（弱いモザイク、田層≒IV・V層、砂少量混入、軟質）。5. 純黄褐色土（3とほぼ同質、より明るい、攪乱されたV層）。6. 灰黄褐色土（弱いモザイク、田層≒IV・V層、砂少量混入、やや堅い）。

図III-86 土壌実測図と出土遺物（3）



図Ⅲ-87 土壌実測図と出土遺物(4)

P-10 (図III-89 図版26・73)

位置: N-7-25、26 規模: 0.84m/0.75m×0.57m/0.42m×0.11m

平面形: 隅丸長方形 長軸方向: N-62° -W

確認・調査・土層: H-2の床面調査中に、西側壁付近に褐色土の落ち込みを確認する。覆土1層はボソボソの褐色土、覆土2層は少量の黒色土が混じる暗黄褐色粘質土である。覆土2層は埋め戻しである。なお、覆土が埋め戻しで、墓墳の可能性が想定されることから残存脂肪酸分析のために覆土2層下部、墳底第V層の土壌の一部を採取した。分析結果は第IV章で詳しく述べてある。当初、H-2に伴うものと考えたが、遺構に伴わないP-7に平面形が類似し、他の住居跡に同様な土壌が認められなかったことから別に扱った。

墳底・壁: 墳底は浅くV層中に掘り込まれている。墳底は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は隅丸長方形で、上部形状が異なるがP-7に類似する。

遺物出土状況: 石器類が12点出土している。その内訳は削器(1)、石匙(2)、磨製石斧(1)、砥石(2)、赤色鉱物礫(1)、刺片(4)である。赤色鉱物礫は墳底北西隅から出土している。削器・刺片はおおぶりである。

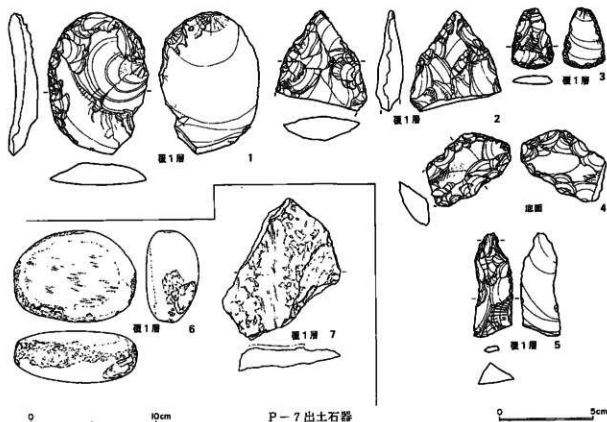
性格: 土墳墓の可能性がある。

時期: 縄文時代早期中葉、I群B類土器の時期

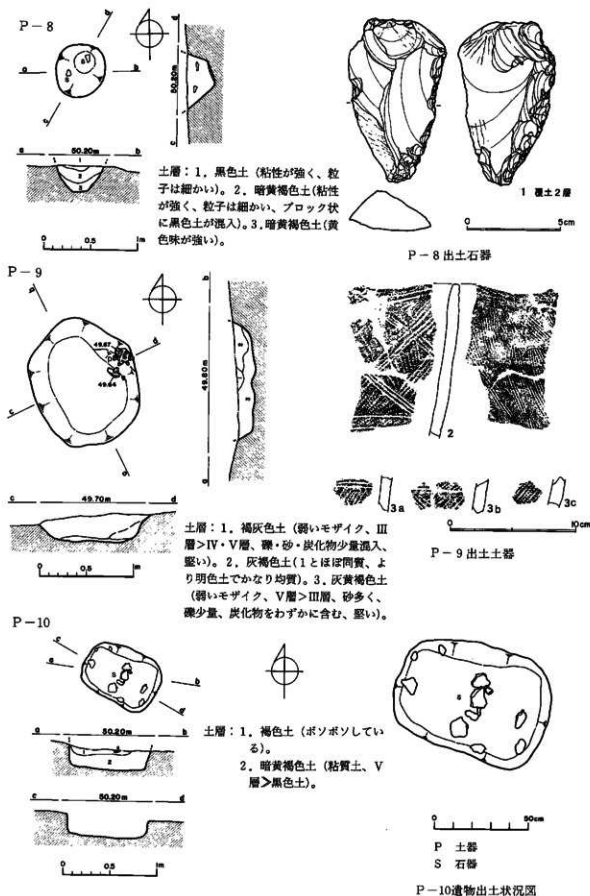
遺物:

石器 (図III-90 図版73)

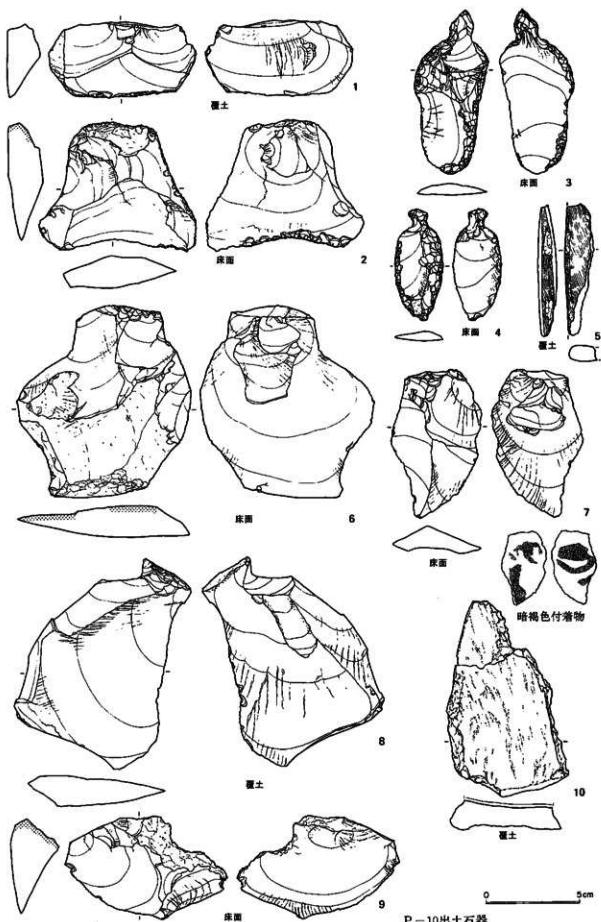
1・2は横長の削器。1は背面左縁付近に礫面、打面は折れて不在。2は礫打面。3・4は石匙、



図III-88 土壌出土遺物(5)



図Ⅲ-89 土壌実測図と出土遺物（6）



P-10出土石器

図III-90 土壇出土遺物(7)

3は背面右縁に刃部、素材末端に挟りを付ける。4は背面両縁に刃付け、打面付近に挟り。背面の一部に礫面が残る。6・7は平坦打面、9は礫打面の大きな剝片で、6は背面にも広い範囲で礫面が見られる。7は両面に黒褐色タール様・赤色の二種の付着物が観察される。8も恐らく礫打面の剝片、腹面右縁が1枚の大きな剝離面(縦割れ?)で取り去られている。5は比較的薄手の磨製石斧、図示した側面に擦切溝の痕跡がかすかに残る。もう一方の側面の一部は主面の右縁上端に残るが擦切溝に平行せず、研磨石材の縁辺から素材を取った石斧の基部片である可能性が高い。10は砥石、薄手の円礫か円礫片を素材にする。

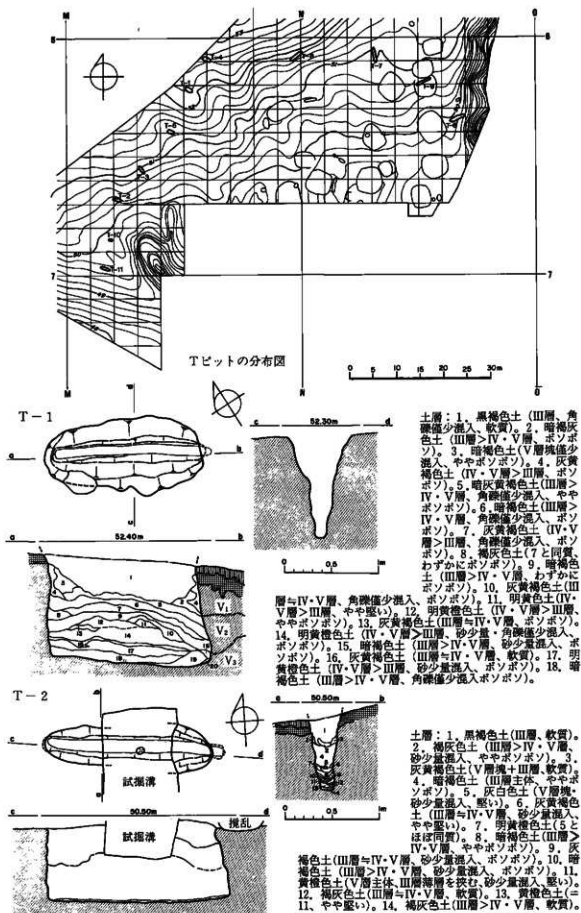
3 Tピット (図III-91~94 図版27~29)

今回の発掘区域で確認されたTピットの総数は11基である。分布は6~7ラインの間、標高49~53mの間にみられ、住居跡群の西側をほぼ南北に並ぶグループ(T-1~5・10・11)と住居跡群の北側から遺跡の東側をながれる銭亀宮の川に向かうグループ(T-6~9)がある。T-1~5・10・11の7基は、昭和50・51年、53年に同道跡で確認・調査されたものに続くものと思われ、Tピットの広範囲な広がりが確認できた。各Tピットと等高線との関係は、等高線に長軸が沿うように構築されたものが多く、高い位置から低い位置へと並ぶが、T-7のみ直交する。Tピットとほかの遺構との切り合い関係は1例しかなく、T-9がH-8を切っているのを確認したのみで、基本的には住居跡群とは分布を異にしている。

Tピットの構造の内、平面形は基本的に溝状の形態である。過去の調査(千代編、1977)で、平面形をA~C型の3種に分類したもののうち、A・B型に該当するものであろう。長軸の長さは確認面で、0.95~3.33mまでであるが、最も小型のT-10を除くと1.60~3.33mとなり、平均値は2.32mである。短軸の長さは0.33~0.68mで、平均値は0.52m。底部の形状も過去において、I~IIIタイプに分けられている。『底部の形状が口径の長軸方向の内側になるもの』をI、『片側が口径の長軸方向より深く入っているもの』をII、『両端が口径の長軸方向より奥に深く入り込むもの』をIIIとしており、今回検出されたもののうちT-1~5・10はIタイプ、T-11はIIタイプ、T-6~9はIIIタイプに該当する。これを分布の面からみると、住居跡群の西側にあるグループはI・IIタイプ、住居跡群の北から東へと向かうグループはIIIタイプとなる。底面はほぼ平坦に掘り込まれたものが多いが、T-10は西側の立ち上がり付近に窪みがみられ、さらに東側には径約10cm、深さ約8cmの杭状の小ピットが確認された。また、T-2の底部中央付近にも小ピットらしきものが確認されたが極めて不明瞭で木根の可能性が高い。それぞれの確認面からの深さは、0.55~1.23mまでのものがある。標準的な深さは0.90m前後である。覆土内の土層は最大20層まで分層されたが、いずれもP.D.3が混入している

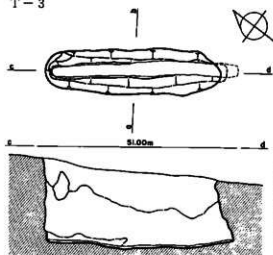
遺構番号	発掘区	平面形	長軸(上/下)×短軸(上/下)×深さ(m)	長軸方向	出土遺物	備考
T-1	M-7-57	溝状	1.66/1.67×0.55/0.10×1.06	N-62°-W		
T-2	M-7-23	溝状	1.79/1.93×0.52/0.12×0.77	N-66°-W		
T-3	M-7-34	溝状	1.87/2.00×0.48/0.14×0.84	N-32°-W		
T-4	M-7-59・60	溝状	1.75/1.75×0.68/0.15×1.23	N-77°-W		
T-5	M-7-46	溝状	1.60/1.70×0.55/0.14×0.98	N-75°-W		
T-6	N-7-66	溝状	3.32/3.33×0.64/0.23×0.77	N-85°-E	土器1点	
T-7	N-7-39	溝状	3.00/3.23×0.55/0.18×0.63	N-9°-W	土器3点	
T-8	M-7-96	溝状	2.88/2.90×0.56/0.16×1.07	N-56°-E		
T-9	N-7-48・58	溝状	3.33/3.73×0.48/0.08×0.98	N-66°-E	土器2点	H-8を切る
T-10	M-7-11	溝状	0.95/1.02×0.33/0.20×0.55	N-80°-W		底にピットあり
T-11	M-7-10	溝状	2.00/1.85×0.33/0.18×0.57	N-73°-W		

表III-11 Tピット一覧

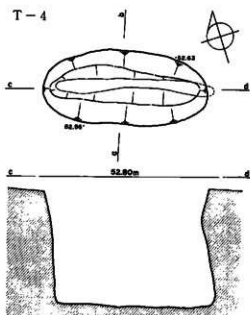


図Ⅲ-91 Tピットの分布図と実測図(1)

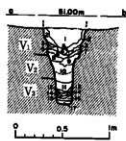
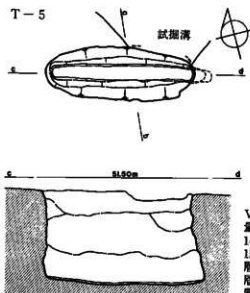
T-3



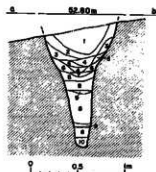
T-4



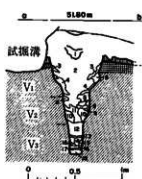
T-5



土層：1. 黒褐色土 (Ⅲ層、砂少量混入、やや堅い)。2. 暗灰黄褐色土 (Ⅲ層≧Ⅳ・Ⅴ層、砂少量混入、軟質)。3. 明灰黄褐色土 (Ⅳ・Ⅴ層>Ⅲ層、砂少量混入、軟質)。4. 暗褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、砂僅少混入、やや堅い)。5. 灰黄褐色土 (2とほぼ同質)。6. 暗褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、Ⅴ層塊あり、軟質)。7. 暗褐色土 (6より明るい、Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、軟質)。8. 灰黄褐色土 (Ⅲ層≧Ⅳ・Ⅴ層、砂僅少混入、軟質)。9. 暗灰黄褐色土 (Ⅲ層≧Ⅳ・Ⅴ層、砂僅少混入、ややボソボソ)。10. 鈍黄褐色土 (Ⅴ層<Ⅲ層、砂少量混入、軟質)。11. 暗褐色土 (Ⅲ層<Ⅳ・Ⅴ層、ラミナあり、砂僅少混入、ややボソボソ)。12. 明黄褐色土 (Ⅴ層主体、砂僅少混入、ややボソボソ)。13. 褐灰色土 (Ⅲ層≧Ⅳ・Ⅴ層、砂少量混入、ややボソボソ)。14. 明黄褐色土 (12とほぼ同質、やや堅い)。15. 暗褐灰色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、砂少量混入、ややボソボソ)。16. 明黄褐色土 (Ⅴ層主体、砂が目立つ、やや堅い)。17. 黒褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、軟質)。

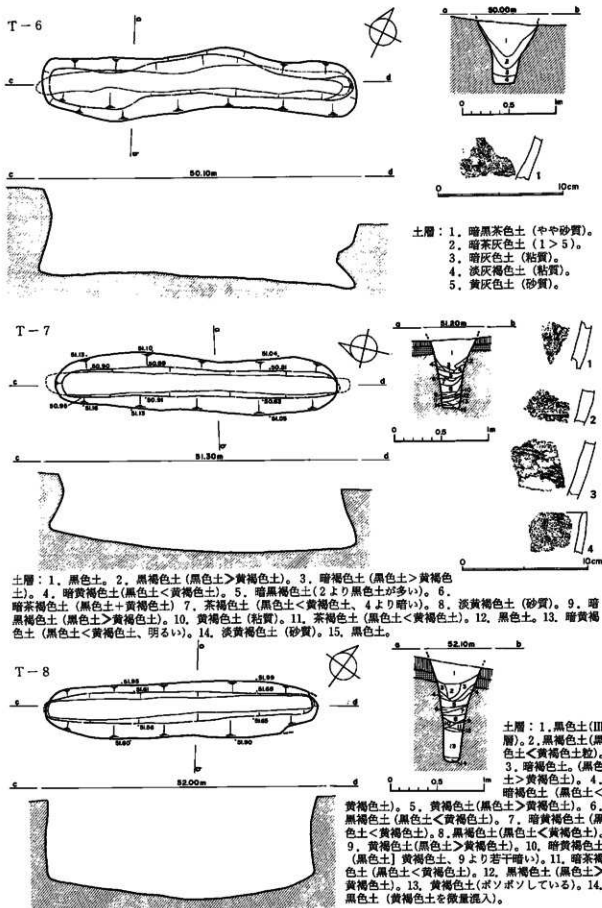


土層：1. 黒色土。2. 黒色土 (少量のⅡ層を含む)。3. 暗黄褐色土 (ブロック状に黒色土が混入)。4. 黒色土 (やや黄色味を帯びる)。5. 暗黄褐色土 (しまりが悪く、ボソボソしている)。6. 暗黄褐色土 (5と類似)。7. 黒色土 (疎混入)。8. 黄褐色土 (しまりが悪く、ボソボソしている)。9. 黒色土 (しまりが悪く、ボソボソしている)。10. 黒色土 (粘性が強いが、ボソボソしている)。

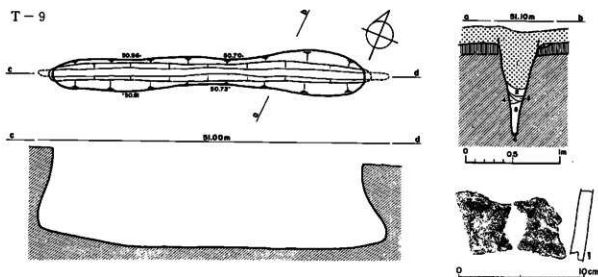


土層：1. 黒褐色土 (Ⅲ層、軟質)。2. 黒褐色土 (1より明るい、Ⅲ層、軟質)。3. 暗褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、軟質)。4. 灰黄褐色土 (Ⅲ層≧Ⅳ・Ⅴ層、Ⅳ層らしいもの、軟質)。5. 暗褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、ややボソボソ)。6. 灰黄褐色土 (Ⅲ層≧Ⅳ・Ⅴ層、軟質)。7. 暗灰黄褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、ややボソボソ)。8. 灰黄褐色土 (Ⅳ・Ⅴ層>Ⅲ層、砂少量混入、軟質)。9. 暗褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、ボソボソ)。10. 明灰黄褐色土 (Ⅳ・Ⅴ層>Ⅲ層、砂僅少混入、軟質)。11. 灰黄褐色土 (Ⅳ・Ⅴ層>Ⅲ層、ラミナあり、ボソボソ)。12. 明黄褐色土 (Ⅴ層主体、砂少量混入、ややボソボソ)。13. 黒褐色土 (Ⅲ層<Ⅳ・Ⅴ層、ボソボソ)。14. 灰黄褐色土 (Ⅲ層≧Ⅳ・Ⅴ層、ラミナあり、砂少量混入、ボソボソ)。15. 明黄褐色土 (Ⅳ・Ⅴ層>Ⅲ層、砂目立つ、軟質)。16. 暗褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、砂目立つ、ボソボソ)。17. 明灰黄褐色土 (Ⅳ・Ⅴ層>Ⅲ層、砂目立つ、軟質)。18. 暗褐色土 (Ⅲ層>Ⅳ・Ⅴ層、砂少量混入、軟質)。

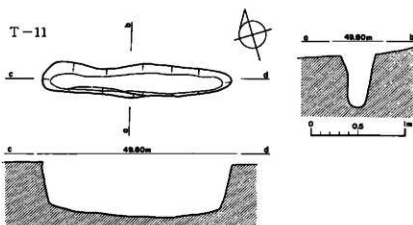
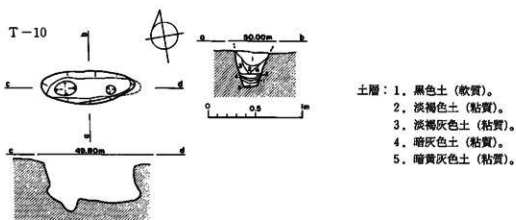
図Ⅲ-92 Tピット実測図 (2)



図Ⅲ-93 Tピット実測図と出土遺物（3）



土層：1. 黒色土。2. 暗黄褐色土（黄褐色ローム土＞黒色土）。3. 黒色土。
4. 暗褐色土。5. 黄褐色土（やわらかい）。



図Ⅲ-94 Tピット実測図と出土遺物（4）

ものではなく、P.D.3を切って構築している例も確認されていない。Tピットの墳底付近に伴った遺物はなく、覆土内から検出されたI群B類の土器片がわずかにみられただけである。各Tピットの位置、平面形、規模、長軸方向、出土遺物などについては、以下の表にまとめる。

4 焼土

F-1 (図III-95 図版30)

位置：N-7-67 北西から南東に向けてゆるやかに傾斜する斜面上に位置している。標高は49.90m～50.20mである。本遺構のすぐ東側は沢地形となり、急傾斜で落ち込んでいる。南にT-6、北西にH-7・8、南西にH-4が近接している。

確認：N-7-67の包含層調査中、IV層上面で検出する。遺構に伴うものかどうかを確認するため、周辺を精査し、遺構検出作業を行った。焼土周辺で小ピット状のものをいくつか検出したけれども、形状、断面、覆土などから木の根底であることが明らかとなり、遺構に伴うものではないことが判明した。

形状：平面形は、長軸約1m、短軸0.42m～0.5mのひょうたん形のものである。長軸方向はほぼ北東―南西である。

層位：層厚約5cmほどの赤褐色焼土である。明瞭な掘り込みは認められない。この上にはIII層に焼土粒が少量混入した土が3cm～5cmほどある。焼土の下V層は火を受けて赤色化し、堅くなっている。

時期：焼土中から遺物は出土していない。周辺からはI群土器が出土していることから、縄文時代早期中葉の時期のものと思われる。

F-2 (図III-95 図版30)

位置：N-7-14 P-9に隣接し、H-2・3・6・9に囲まれる位置にある。

確認：包含層の掘り下げ中にIII層下面で一部を検出し、N-7-14区を横断する畦を設けて層位を検討したが焼土周囲に掘り込みは確認されなかった。

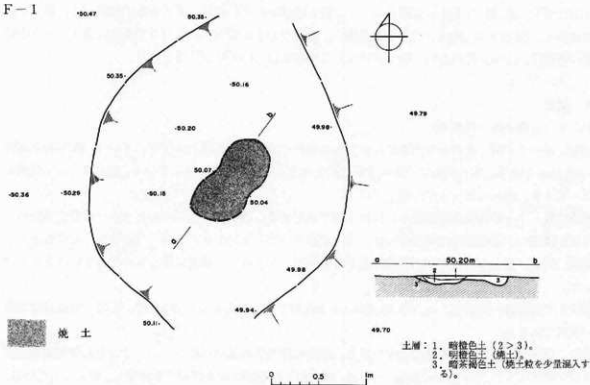
形状：主体となる焼土は長楕円形の整った平面形を示し、その長軸上北西側に少し離れて小さな焼土が見られる。最大深さ5cm程度の浅い窪みに焼土が溜った状況である。主体となる焼土の北東・南東側に各1ヵ所、径12cm程の小穴が検出されたが焼土との関連は不明。

層位：焼土(2層)の上には直接III層が堆積し、焼土粒がIII層下部へ混入しているのが見られた。焼土の下位では厚さ2～4cmにわたってV層が赤く変色している(3層)。炭化物・骨片等は調査中には見られなかった。

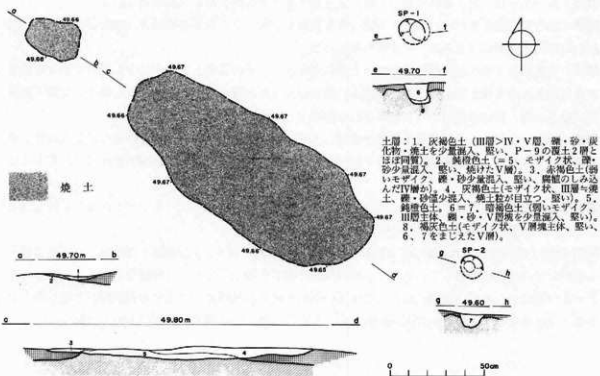
遺物出土状況：発掘中に確認出来た遺物はないが、焼土を全量採取してフローテーションに供したところ、クルミ殻片が検出された。

時期・性格：時期の限定は困難。IVないしV層上に形成されており、また主体となる焼土の形状はH-5床面などのそれに類似しているため、堅穴住居に属する地床炉であった可能性もある。しかし一方F-2付近はかなり広い範囲にわたってIV層の形成が悪く、V層にまで達する侵蝕面が存在したことを考えさせるため、この焼土に人為的な掘り込みを伴ったという推定は絶対のものではない。

F-1



F-2



図III-95 F-1、2実測図

5 その他の遺構

X-1 (図III-96・97 図版30)

位置：M-7-83・84。今回検出された早期中ごろの遺構のうちでは南西端に位置する。

規模：3.1m×2.2m。遺物の垂直分布範囲0.5m。

確認・調査・土層：M-7-83区付近ではP・D・4層の遺存によりIII b層上面を確認することができ、これをやや掘り下げた段階で石皿を含む礫の集中を検出した。遺構の範囲を正確に決めることは難しいが、付近のIII b層は遺物に乏しかったため、結局M-7-83・84区出土のIII b層遺物の大半をX-1として認定した。

遺構は自然のものとみられる窪地に位置する。窪地内ではIII b層下部が堅く締まった壁状の構造を見せるが(2層)、礫と遺物の集中はこれより上位の、窪地外と同様の軟らかいIII b層(1層)中に存在する。III b層とV層との間には腐植に乏しい粘土質の堆積が見られ、遺構の形成前には水溜りが存在したものと思われる。

遺物出土状況：窪地の中央付近に石皿・石鍾と土器片を交えた礫群があり、その少し東と北東にも小規模の遺物のまとまりが見られる。後二者は地形を反映してより高い位置にあり、中央の礫群自体も窪地の中心に向かって沈み込むような様子を見せる(図版30-5)。中央の群ではより軽量の礫が南西寄りのやや低い位置に偏る傾向があり(図III-97)、ある程度流水の影響を受けている可能性がある。北東の群と中央群北側の間で礫が接合しており、また中央南寄りの遺物と東側のそれとは接合関係・被熱の痕跡などで関連を示すが、全体として一連のものであるとの確証はない。土器は8点出土しいずれも早期、I群B類土器。石器等は総数36点、32点までが礫で28点は角礫。8.5kgに達する石皿から3.9gの角礫まで大きさは不揃いながら3~700g前後のものが多く、礫石器群の総重量は22.6kg。流紋岩が多数を占め、中央の礫群にのみ輝緑岩(1点は石皿)が存在(図III-97)。隣接して出土した角礫の接合が目立ち、この位置で割れて散布した可能性もある。遺構間接合はH-6覆土3層との間で1例、包含層との接合もM-7-83区内で1例あるのみ。ともにI群B類土器片である。

時期・性格：P・D・4層との関係と土器から縄文早期のものとして問題ない。H-6と土器の接合関係があり、また接合してはいないが土器の一例(図III-98-2)はH-9・P-3の床面出土の個体(図III-60-7)と同一らしく、4つの遺構が時期的に接近する可能性がある。窪地中央の遺物は人為的に集中させたものと考えられるが配置に規則性を認めがたく、意図的に構築した可能性は小さい。同じく礫の集中を含むX-2とは礫の大きさ、石器等の構成などの点でやや異なる。

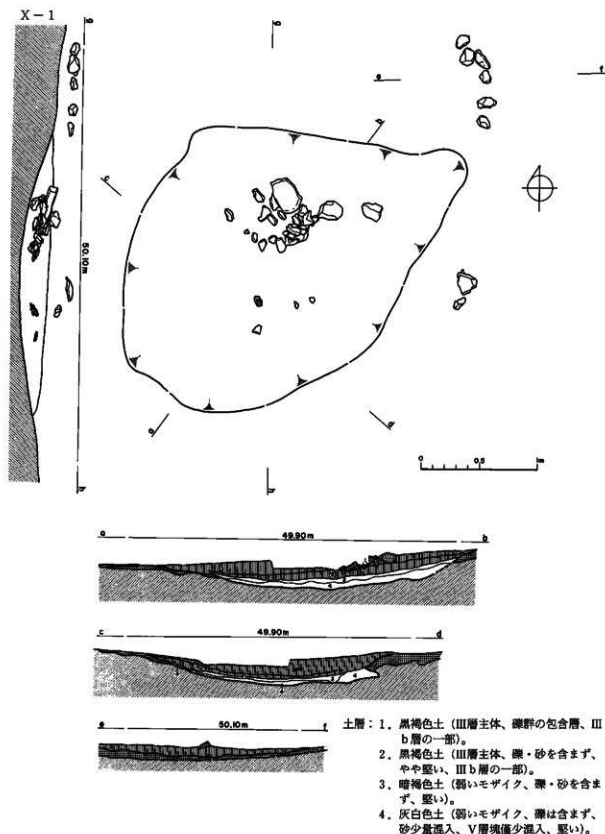
遺物：

土器(図III-98 図版52)

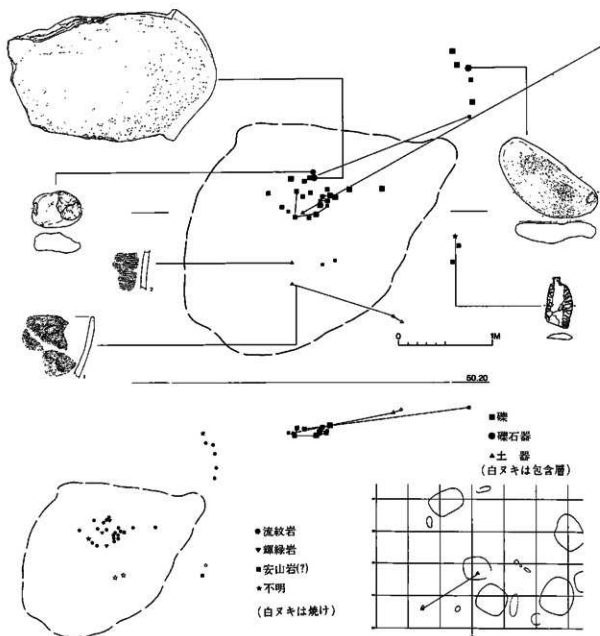
1は無文のもの。口唇は丸味を帯びている。2はH-9出土の土器(図III-60-7)と同一個体。貝殻腹縁部による条痕が斜位に施されている。

石器(図III-99 図版74)

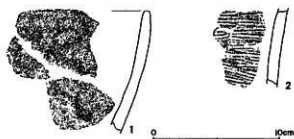
1は石鍾。両端の挟り以外に側縁にも打ち欠きが見られる。2は横長の素材を用いた石匙、背面の一部に礫面が残存。背面両縁に刃部が作られ、腹面では打瘤を調整するように細部調整が加わる。3扁平な円礫を素材とする砥石。一方の主面に機能部、左傾する擦痕をとまない、同じ主面に2ないし4箇所にわかれたくぼみが重複する。4円礫素材の石皿。両主面にすり面を形成、しかし周縁の折面との先後関係は不詳。図で上に置いた主面のすり面はややザラついてすり石側面のすり面に近く、下の主面は平滑ですり石主面のすり面に類似。機能部は遺物の長さ方向・幅方向とも弱くくぼむが、周縁部では凸面に転じて敲打痕(すり面に先行するらしい)が目立つ傾向がある。



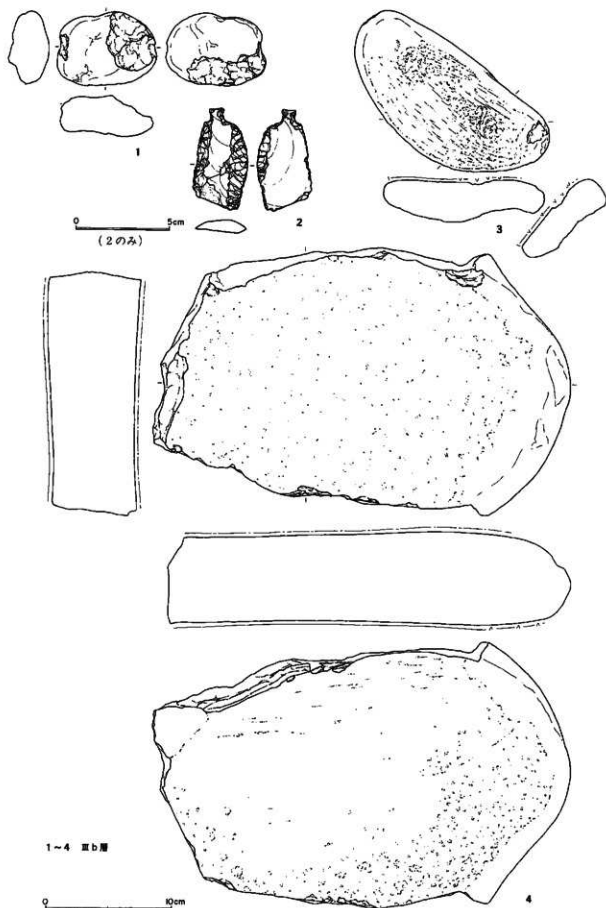
図Ⅲ-96 X-1 実測図



図III-97 遺物分布と接合図



図III-98 X-1出土土器



図Ⅲ-99 X-1 出土石器

X-2 (図III-100~102 図版30)

位置：N-7-13・14。早期の遺構群の南西部、H-3の東に隣接し、南側はやや層位の異なる(III b 2層)剝片集中6・7に接している。H-9・P-3・F-2にも近い。

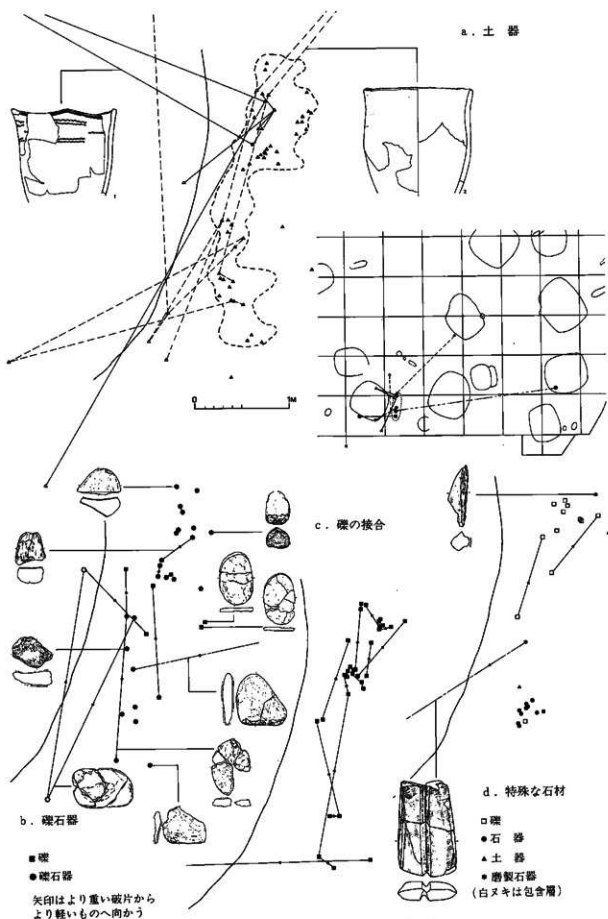
規模：3.0m×0.9m。遺物の垂直分布範囲0.5m。

確認・調査・土層：H-3の確認のために設定したトレンチ内で、住居跡周囲の暗褐色土層からIV層上面にかけて人工遺物を交えた礫の集中があることを確認した。トレンチ断面では掘り方の存在を確認できなかったもので周囲をIV層上面まで掘り下げて礫群の実測を行った(図版30-6)。礫群中の土器は遺構の一部とみ取り上げたが、剝片石器群については周囲の暗褐色土にもかなりの密度で含まれていたため、礫群の構成後に流入した可能性を考慮して遺構の遺物に加算していない。

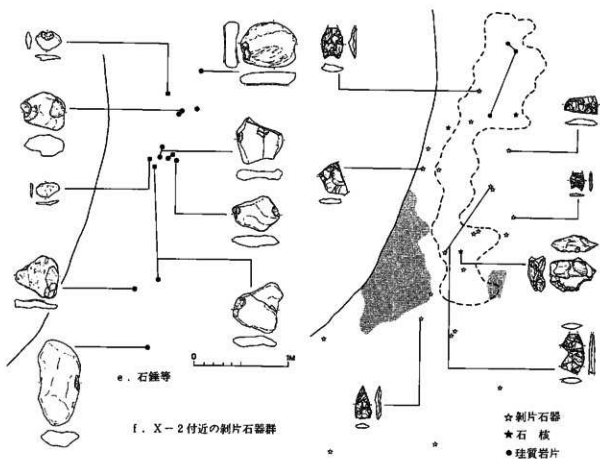
礫群はやや砂めだつ暗褐色土(1・2層)中に存在する。これについて発掘時にはIV層を直接覆う事実からIII b 2層相当の層位と判断したが、この層はH-3・9の南側などで見られるIII b 2層より腐植に乏しく、むしろ住居跡周囲のIII b 2層を覆う「掘り揚げ土」と仮称したものに近い。遺物の下端位置を表示した垂直分布図(図III-100)から読取れるように礫その他はほぼ一連の平面に乗った状況であり、暗褐色土はIV層を削平した侵蝕面を覆う形で堆積しているものとみられる。恐らくH-3の項で記したように、暗褐色土は「掘り揚げ土」とともに住居跡埋没の過程で形成された一種の覆土とみるべきものであろう。

遺物出土状況：遺物の総点数は277点、うち土器は66点ですべて縄文早期、I群B類土器である。石器等は211点、うち礫石器が25点、礫は181点を占める。礫は重さ415gから0.1g未満と比較的小さく、土器を除く遺物の総重量は約9.51kgであった。礫石器群208点のうち流紋岩と判断されたものが121点を占め、重量でも5.41kgに達する。礫群は一見折り重なった印象をあたえるものの、これはむしろ小型の礫が大きい礫の隙間に落ちこんでいるためで、実際には遺物の下端高は5cm程度上下するのみである(図III-100)。恐らく礫群のみが覆土を持たずに形成されたか、礫を含んでいた土層が侵蝕されて土壌が流失したかのいずれかであるとみられる。また土器片は礫その他と完全に混在するのではなく、礫の集中を囲むように遺構の周縁に近い部分で多く出土する印象がある(図III-101a)。これは礫群と土器片との細かい時間差を示すかもしれない。土器・礫石器・礫いずれも遺構内でかなり接合し、帯状の遺構の全体が概ね一連のものであることを示唆する(図III-101a~c)。南北方向(傾斜の上手と下手)の接合が多く見られるが、下手の遺物のほうがより軽量・小型であるわけでもなく、またある種の石材が遺構の一部に集中する傾向も認められる(図III-101d)。従ってこの礫群が水の営力の影響を受けているとしても、あまり極端な攪乱を考える必要はないであろう。H-2(図III-8)・3・5(図III-35)・9(図III-58)など他の遺構や包含層の遺物との接合も多く、H-2覆土の土器(図III-9-1)との接合はH-2の廃絶後にX-2が形成されたことを示唆する。一方住居跡床面の出土品とX-2の遺物との接合がH-9(土器、図III-60-1)・H-5(石鋸、図III-104-6)で各1例認められ、3つの遺構の時期が近接する可能性を示す。なおX-2付近暗褐色土層の剝片石器群の分布を図III-102fに示した。X-2と剝片石器の分布の関連は明瞭でなく、石鏃や両面調整石器を主とするその内容からはむしろ剝片集中6・7との関係が問題になる。ただ珪質岩片に限っては遺構内で接合して包含層に見られず、X-2に属することが確実である。

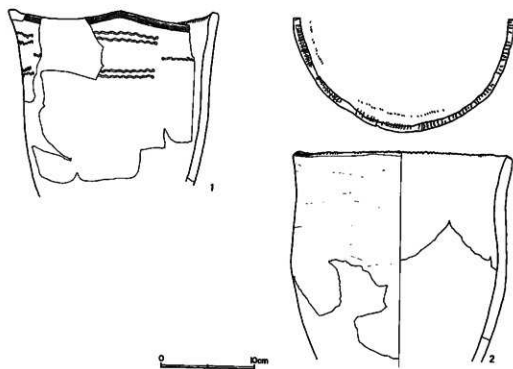
時期・性格：出土遺物が早期中ごろのものであることは問題ない。H-3の輪郭に沿うように形成されているのは、堅穴住居の構築時に周囲に掘り揚げた土に含まれていた遺物がこのような形で残ったことを意味するように思われる。X-2内部でやや離れて接合する例、またH-3の南北で出土した遺物とX-2の遺物とがかなり接合する事実に関しても掘り揚げによる拡散として説明ができるかも



図III-101 遺物分布と接合図(1)



図Ⅲ-102 遺物分布と接合図(2)



図Ⅲ-103 X-2 出土土器

しれない。X-2を構成する遺物の多くはH-3構築以前にこの付近に存在したことになるので、H-5・9など床面出土の遺物がX-2と接合関係を示す住居跡についてはX-2およびH-3より先行する可能性を考えるべきであろう。遺物の内容では石錘とその未製品らしい未分類礫石器、製作時の礫片(図Ⅲ-105-18・19)が目立ち(図Ⅲ-102e)、または磨製石斧製作関連の石器群も認められるが、すり石・石皿および両者に関連の強い輝緑岩礫はほとんど欠如しており、剥片石器群の存在も疑わしい。このような遺物の構成が廃棄者の性別や季節性などに関係することも考えられる。

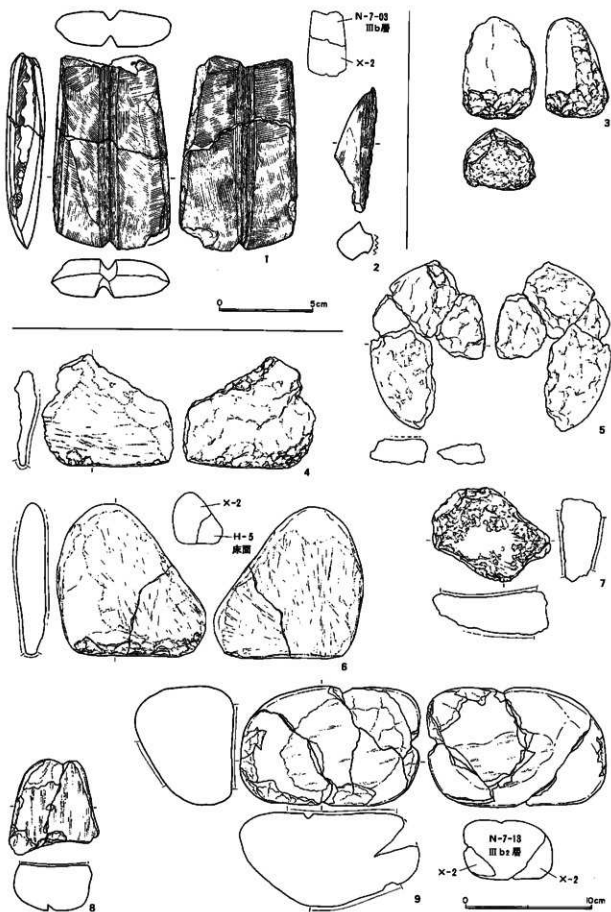
遺物：

土器(図Ⅲ-103 図版42) 1はX-2の暗褐色土(6点)、H-9覆土3・4・5層(5点)、H-14覆土(4点)とN-7-03・04・13・24・33・34(17点)出土の破片が接合出来たものである。破片は接合作業の段階で大きく4つの塊り(1~4)に接合し、それぞれがまとまりのある3ヵ所に分布する傾向がみられた。1：X-2と西側のN-7-03・04、2、3；H-14・H-9覆土と、周辺のN-7-24・33・34、4；H-14覆土。これらの破片を器形と文様を想定し復元した。底部は欠損しているが全体の4分の3程が残存する。4ヵ所に緩やかな山形の波頂部がある。口縁部の平面形は隅丸四角形である。口縁部に3条、腹縁文がめぐっている。文様は胴部上半に限られ、2条一単位の鋸歯状の沈線文が4ヵ所の波頂部を中心とした狭い範囲に施されている。この間には2条の沈線文を補うように1条の沈線文が施されている。沈線文の両端にはそれぞれ円形刺突文がつけられている。口唇内側角には腹縁圧痕文が施されている。焼成は良いが表面が剥落している破片が多い。2は暗褐色土(7点)出土の破片とH-3覆土(1点)、N-7・13・14・25(12点)出土の破片が接合したもので全体の5分の3程が残存する。底部は粘土帯の接合面で欠損している。無文で平縁の深鉢形土器。口縁部はやや外反する。表面は磨滅している。口縁部と内面胴半ばに炭化物が付着する。胎土には1、2mmの小砂利が多い。口唇内側角から口唇上にかけては腹縁圧痕文が施されている。圧痕文下位にはところどころに小さな爪形の圧痕がある。

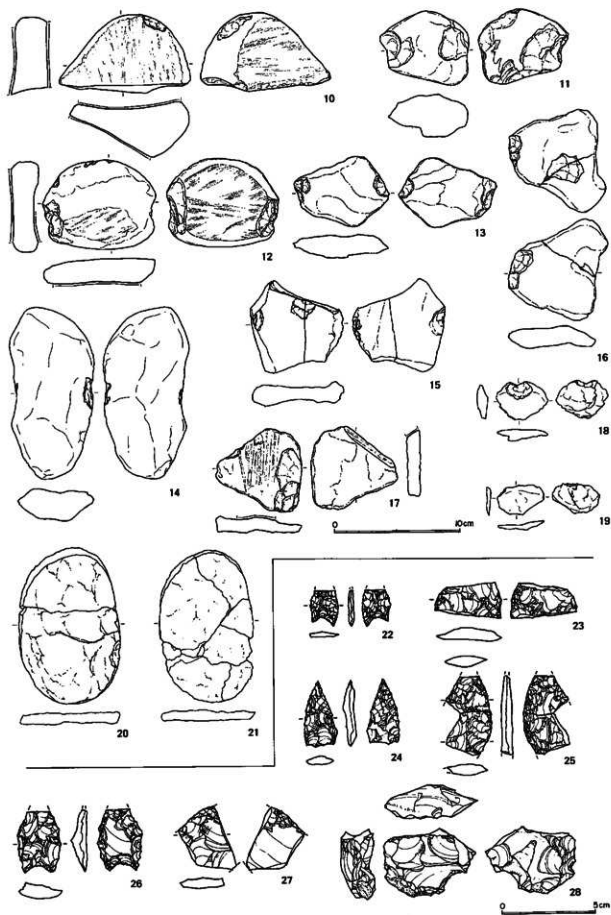
石器(図Ⅲ-104・105 図版75)

1は幅の広い磨製石斧、刃付けと中央の擦切溝との先後関係は明確でない。基端が折れた後、多少研磨を加えて整形してある。2は研磨石材の縁辺を取りこんだ擦切残片。3、一端を機能部とするたき石。端面と側面の境にも敲打痕の集中が見られる。4・6は石鋸。4は恐らく円礫片、6は扁平な円礫が素材とみられ、前者は礫面側の主面、後者は両主面に研磨が加わる。ともに機能部を両面から打ち欠いて整えた形跡がある。5・7~10は砥石。5は薄い円礫片の割れ面を機能部とするが、研磨は部分的でしかも軽微。7、比較的厚い角礫ないし礫片にやや望みの強い機能部。8、下端の折面が研磨を切っており、長手の円礫の主面を機能部とする類か。両端と左縁に研磨後の打ち欠きが見られ、石錘に改作しようとした可能性がある。9は大型・厚手の円礫を用いて両主面にかなり平坦な研磨を加えた珍しい例。10、恐らく円礫片素材、折面にも研磨のある類。11~14は石錘。12、砥石と複合する例。図右面の研磨は打ち欠きより後のもののようにも見えるが不確定。14、非常に軽微な打ち欠き。15~17、対向する挟りが明確でないで未分類礫石器としたが、石錘ないしその未製品の可能性が高い。15・16は角礫素材、後者は砥石に複合。15・17は打ち欠きの途上で折れて放棄されたものかもしれない。18~21は円礫で、18・19は石錘の挟りを作った際の礫片かと思われるもの。18の背面には先行する小さな打ち欠きの痕がある。20・21は扁平に割れた円礫。同じ礫の一部と思われ互いに接して出土した接合しない。石鋸や砥石の素材として人為的に割った可能性がある。

22~27はX-2付近暗褐色土出土の剥片石器、28は同じく石核である。22は両面調整の石鏃。図右面では左縁から入りこんだ調整が右縁に達して石器の輪郭を損じている。23~27は未分類剥片石器。



図III-104 X-2 出土石器 (1)



図III-105 X-2 出土石器 (2)

23～25は両面調整品で24は石鏃の未製品かと思われる。25、調整の後で図右面左縁を浅く整形。26も石鏃未製品らしい背面調整の遺物であるが、基部には既に挟りを設ける。腹面の浅い細部調整を打面として背面の調整をおこなっているらしい。27、非調整品。28、剥片素材の石核で打面転移3回、折面を打面として小さい剥片を剥離したところで終わっている。

剥片集中 (図III-106・107・108 図版31)

位置：包含層内で剥片が集中出土した地点は7ヵ所あり、遺構と同じく調査区南東寄りの位置に分布がみられる。剥片集中1・2がN-7-53区のH-10周辺に、また剥片集中4～7はN-7-03・04・13・14区のH-3付近にあり、覆土内の剥片集中とあわせて竪穴住居跡となんらかの関連をもつことが窺われる。集中1・2の位置するN-7-53区は包含層からの石核の出土が最も多いグリッドでもあり、この付近が剥片石器群の集中的な製作ないし廃棄の場であった可能性もある。なお集中3はH-3の上に位置するが、層位からみて住居とはかけ離れた年代のものである。

規模：微小な剥片の散布範囲を判断することは困難であり、また集中を確認するまでにある程度の遺物を掘り飛ばすのが通例であるため、細かい数値にはあまり意味がないと思われるが、調査中に記録した値は次のとおりである。

剥片集中3：長径1.25m×短径0.70m×最大厚さ3.0cm (以下同じ)

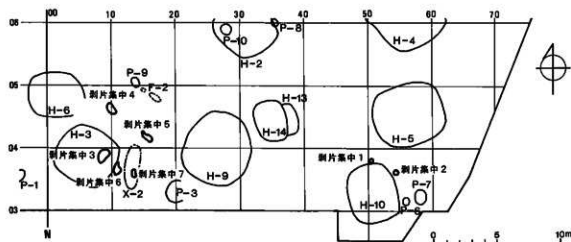
剥片集中4：0.48m×0.39m×2.0cm 剥片集中5：1.19m×0.66m×3.3cm

剥片集中6：2.63m×0.72m×2.5cm 剥片集中7：0.36m×0.23m×2.1cm

広がり大きさではかなり規模の違いがあるものの厚さはいずれも大差がなく、落ちこみに厚く溜った例などはない。なお集中1・2については規模の計測はしていない。

確認・調査：集中1・2は位置のみ記録し、現場で遺物を集めて取り上げた。その他は集中を確認した時点で掘り下げを中止して集中範囲の確認に努め、上面の標高を記録したのち任意に設定した20cm四方の区画を単位として遺物番号を与え、約2cmの厚さで土壌ごと採取、1.4mm目の篩を用いて水洗し遺物を回収した。しかし検出の作業に際して遺物の密な部分以外は削られてしまいがちで、小さな集中が群島のように残った場合(図III-107、図版31-2・3)では土壌ごと取り上げる意味は薄れるものと思われる。なお厚みがあると判断した集中5は上下を2回に分けて土壌を採取したが、結局得られた遺物が少なかったため上下の資料をまとめて扱った。

層位：集中3は従来無遺物の火山灰層と考えられてきたP.D.3層の下部に位置しており、層の性格



図III-106 剥片集中位置図

について問題を提出している(VI章 節参照)。あるいはP、D、3層を掘り込んで形成された廃土に属するのではないかと考えたが、確かめることができなかった。集中3を除く6ヵ所はIII層内で検出されており、うち集中1は住居跡に流入したIII b 1層、集中6・7は住居跡周囲のIII b 2層上面に形成されていることを確認した。H-3・X-2の項で述べたようにH-3周囲のIII b 2層上面は竪穴の埋没に際して侵蝕されている可能性があるので、集中6・7も住居より新しい疑いがある。結局覆土内の剥片集中を含めて、概ね住居の廃絶後に剥片が遺棄されているらしい。

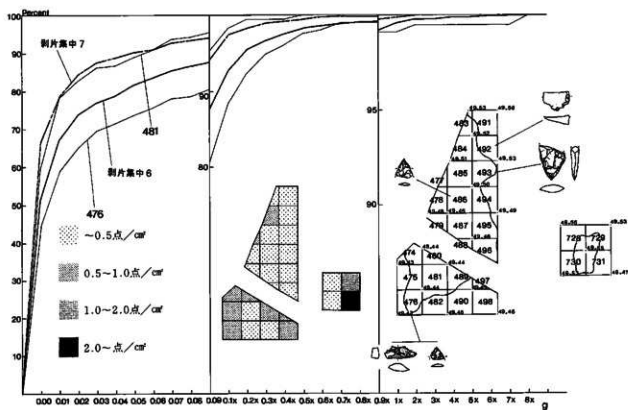
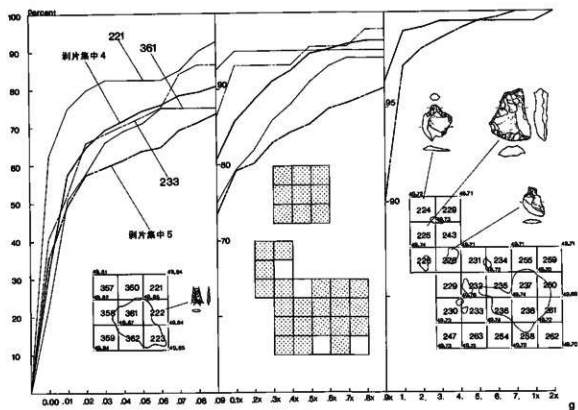
遺物の量・密度(表III-12~17): 篩い分けを行なった例では1ヵ所の集中で212点(集中5)から6288点(集中3)に達する遺物が得られている。ただし最大の遺物数を記録した剥片集中3の遺物は熱を受けて破砕しているものが多く(図版31-5)、一塊であったものが水洗中に細かく砕ける例も見られたのでそのまま他と比較することはできない。遺物の密度にもかなり差があり、集中内の各区画を通じて1㎡当たり0.5点を超えない集中4・5から区画によっては2点/㎡以上を示す集中7まで数倍以上の開きがある。遺物の重さで比較すると最も量の多いのがやはり集中3で、範囲の広い集中6がこれに続く。最も少ないのは集中7の54g弱であるが、点数の多さに比較して使われている石材の体積が非常に小さいことが窺われる。

遺物の大きさ: (図III-107・108 表III-12~17): 剥片の長さなどは計測していないので重さによって大きさの構成を窺ってみると、0.3g未満の遺物だけで総数の90%以上に達する集中6と7、0.5ないし1g付近で90%を超える集中4と5がそれぞれ類似の構成を示している。同じ集中内でも区画によってかなりの違いがあるので一概に言いにくい、集中5は集中4よりもさらに微細な剥片の割合が低く、一方集中7は集中6のうちでも最も微細剥片の多い区画(遺物番号481など)に等しい構成をもっていることがわかる(図III-108)。遺構内の剥片集中に比較すれば集中4と5はH-1覆土、集中6・7はH-3覆土3層の例に近い大きさの構成であるとみられる。

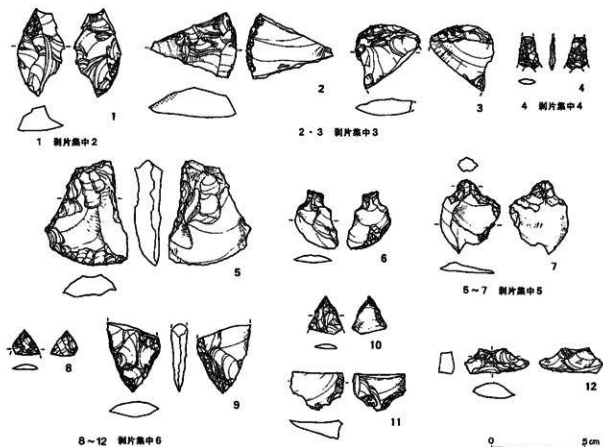
集中1・2は篩い分けを行っていないので集中4~7との比較は困難であるが、同じく現場で遺物を収集したH-10床面直上の剥片集中とはかなりよく似た重さの構成を示している(図III-107)。**石材**(表III-12~17): 遺物の圧倒的多数は硬質頁岩製で、集中4に僅かの黒曜石製剥片が混在している。どの集中でも複数の母岩に由来するものと思われ、集中5では光沢をもつ透明な筋の入る特徴的な石材が西寄りの区画だけに認められるなど、集中の内部は必ずしも均質でないことを示唆している。なお集中1にはH-3覆土2層およびH-10(遺物番号2)の剥片集中で注意された灰色、墨流し様の変化に富んだ色調をもつ石材が16%ほど含まれており、3つの集中が何らかの関連を有する可能性もある。

剥片の観察(表III-12~17): 平面上の位置では集中1・2とH-10の剥片集中とはごく接近しており、あるいは本来一連の遺物ではないかとも思われた。しかし観察してみると、集中1・2はH-10の剥片集中より礫面をもつ遺物が稀であり、切子打面・小打面が多くて平坦打面は少ないなど一致しない点が目につく。打面の観察では集中4とH-1覆土の剥片集中がよく似た結果を示しており、一方剥片集中5は平坦・切子・線打面が拮抗する他に例をみない構成をもっている。集中5は対向剝離をもつ剥片の比率も低く、今回検出した剥片集中の中ではやや特異な存在であると言えよう。なお剥片集中6・7は微細な遺物が多量にあるため観察が未了で、結果を収録することができなかった。

剥片以外の遺物: 石鏃や調整のある未分類石器、あるいはそれらの断片とみられる石器片が集中2・4・6で少数出土し、切子打面や小打面、対向剝離の多い剥片の特徴に対応している。これらに対して剥片集中5では調整のある剥片石器はなく、代わって搔器・石匙など他の集中に例のない器種が認められる。集中3はやはり調整された石器を含まないが、熱による破砕のため本来の遺物の内容は窺



図III-108 剥片集中 (2)



図III-109 剥片集中出土遺物

いがたい。剥片が多数を占めるという確証もないので、正確にはむしろ珪質岩片集中と呼ぶべきものである。剥片集中1・7は剥片以外の遺物を交えず、また石核はどの集中にも含まれていない。

時期・性格：剥片集中3周辺のP.D.3層からはII群土器が出土しており（図III-107）、集中自体も縄文時代前期のものである可能性が強い。点数が多いのは焼けて破砕したことによる部分が大きいようなので、他の集中のように石器製作に関連するものかどうか疑問もある。他の剥片集中は層位・周辺出土の遺物や集中内の石器の特徴から早期中ごろ、I群B類土器期の所産とみられる。微細な剥片が多く石鏃等を交えた集中4・6は主に剥片石器の調整作業に由来するものと思われ、集中4では剥片の観察からもある程度裏付けられる。集中5は4・6などと性格が異なり、集中内で出土したような調整のない石器の製作に関連する可能性がある。狭い範囲に遺物の密集する集中7などはまとめて捨てたものと考えて差し支えないであろうが、その他は製作の場に散布したものか廃棄されたものか判断が難しい。

遺物（図III-109 図版31）

1は剥片集中2出土の石器片、調整のある石器の断片らしい。2・3は集中3出土の未分類剥片石器、ともに非調整品。4は深い凹形の基部をもつ両面調整の石鏃、集中4出土。5～7は集中5出土の石器。5は撚器、背面腹面とも主に左縁を整形している。6は石匙としたが刃部の細部調整が微細で石匙形石器でもよいかも知れない。7、非調整の未分類剥片石器。8～12は剥片集中6出土石器で、8は石鏃。9～11は未分類剥片石器、9は両面調整品、10は石鏃かその未製品とみられる背面調整品、11は非調整品。12は石器片、両面調整の剥片石器とみられる。

4. 点数·重量

產 物		產 量 (g)																													
產 物	產 量	(g)	0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.1x	0.2x	0.3x	0.4x	0.5x	0.6x	0.7x	0.8x	0.9x	1.x	2.x	3.x	4.x	5.x	6.x	7.x	8.x	9.x	
1	226	135.1	9	7	7	5	7	5	4	9	33	35	14	13	8	10	9	5	8	30	8	0	2	0	1						
2	192	73.0	1	5	5	9	6	5	6	9	1	35	34	16	4	9	9	6	4	2	6	1	0	1	1	1					

6. 遺物の観察

調査は重量0.3g以上の遺物のみについて行なった。ただし特徴的な石材・断片以外の遺物の比率は遺物総数に対する百分率。

D. 遺物の数値													
調査番号	観測点	観測の位置 あり(点/%)	打面の分類 (点/%)							貫面の分類 (点/%)		特徴的な石材 (点/%) 天然石産出	製作以外の遺物 (点/%) 石製品
			縦打面	平打打面	切子打面	横打面	打面	分類不明	打面切れ	射面割れ	ギザ面		
1	332	65/9.0	17/1.0	9/0.5	47/68.1	5/4.9	1/1.0	1/1.0	36/37.8	18/13.7	6/4.0	27/16.2	0/0
n	34	54/15.9	5/1.5	5/1.5	22/32.3	3/4.3	2/1.1	2/1.1	14/13.7	8/11.3	4/5.6	3/1.8	1/0.6

表 III-12 銅片集 1、2 集計表

実数・重量

年份	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	合计	平均
人数	7	2	1	5	1	29	25	9	18	7	4	185	130	171	2580	825	151	33	113	57	28	51	290	1836	6288		
男	26.2	8.9	2.6	9.8	4.2	9.5	14.8	3.9	25.9	9.9	5.1	1.5	8.3	31.7	78.9	68.6	6.8	4.5	11.7	3.8	1.2	8.8	18.3	61.5	245.5		
女	0	0	0	0	0	8	8	8	8	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

表四-13 制片集中3集計表

8. 点数·密度·重量

年	月	日	时	分	秒	星期	时分秒点数																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
							0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.10	0.11	0.12	0.13	0.14	0.15	0.16	0.17	0.18	0.19	0.20	0.21	0.22	0.23	0.24	0.25	0.26	0.27	0.28	0.29	0.30	0.31	0.32	0.33	0.34	0.35	0.36	0.37	0.38	0.39	0.40	0.41	0.42	0.43	0.44	0.45	0.46	0.47	0.48	0.49	0.50	0.51	0.52	0.53	0.54	0.55	0.56	0.57	0.58	0.59	0.60	0.61	0.62	0.63	0.64	0.65	0.66	0.67	0.68	0.69	0.70	0.71	0.72	0.73	0.74	0.75	0.76	0.77	0.78	0.79	0.80	0.81	0.82	0.83	0.84	0.85	0.86	0.87	0.88	0.89	0.90	0.91	0.92	0.93	0.94	0.95	0.96	0.97	0.98	0.99	1.00	1.01	1.02	1.03	1.04	1.05	1.06	1.07	1.08	1.09	1.10	1.11	1.12	1.13	1.14	1.15	1.16	1.17	1.18	1.19	1.20	1.21	1.22	1.23	1.24	1.25	1.26	1.27	1.28	1.29	1.30	1.31	1.32	1.33	1.34	1.35	1.36	1.37	1.38	1.39	1.40	1.41	1.42	1.43	1.44	1.45	1.46	1.47	1.48	1.49	1.50	1.51	1.52	1.53	1.54	1.55	1.56	1.57	1.58	1.59	1.60	1.61	1.62	1.63	1.64	1.65	1.66	1.67	1.68	1.69	1.70	1.71	1.72	1.73	1.74	1.75	1.76	1.77	1.78	1.79	1.80	1.81	1.82	1.83	1.84	1.85	1.86	1.87	1.88	1.89	1.90	1.91	1.92	1.93	1.94	1.95	1.96	1.97	1.98	1.99	2.00	2.01	2.02	2.03	2.04	2.05	2.06	2.07	2.08	2.09	2.10	2.11	2.12	2.13	2.14	2.15	2.16	2.17	2.18	2.19	2.20	2.21	2.22	2.23	2.24	2.25	2.26	2.27	2.28	2.29	2.30	2.31	2.32	2.33	2.34	2.35	2.36	2.37	2.38	2.39	2.40	2.41	2.42	2.43	2.44	2.45	2.46	2.47	2.48	2.49	2.50	2.51	2.52	2.53	2.54	2.55	2.56	2.57	2.58	2.59	2.60	2.61	2.62	2.63	2.64	2.65	2.66	2.67	2.68	2.69	2.70	2.71	2.72	2.73	2.74	2.75	2.76	2.77	2.78	2.79	2.80	2.81	2.82	2.83	2.84	2.85	2.86	2.87	2.88	2.89	2.90	2.91	2.92	2.93	2.94	2.95	2.96	2.97	2.98	2.99	3.00	3.01	3.02	3.03	3.04	3.05	3.06	3.07	3.08	3.09	3.10	3.11	3.12	3.13	3.14	3.15	3.16	3.17	3.18	3.19	3.20	3.21	3.22	3.23	3.24	3.25	3.26	3.27	3.28	3.29	3.30	3.31	3.32	3.33	3.34	3.35	3.36	3.37	3.38	3.39	3.40	3.41	3.42	3.43	3.44	3.45	3.46	3.47	3.48	3.49	3.50	3.51	3.52	3.53	3.54	3.55	3.56	3.57	3.58	3.59	3.60	3.61	3.62	3.63	3.64	3.65	3.66	3.67	3.68	3.69	3.70	3.71	3.72	3.73	3.74	3.75	3.76	3.77	3.78	3.79	3.80	3.81	3.82	3.83	3.84	3.85	3.86	3.87	3.88	3.89	3.90	3.91	3.92	3.93	3.94	3.95	3.96	3.97	3.98	3.99	4.00	4.01	4.02	4.03	4.04	4.05	4.06	4.07	4.08	4.09	4.10	4.11	4.12	4.13	4.14	4.15	4.16	4.17	4.18	4.19	4.20	4.21	4.22	4.23	4.24	4.25	4.26	4.27	4.28	4.29	4.30	4.31	4.32	4.33	4.34	4.35	4.36	4.37	4.38	4.39	4.40	4.41	4.42	4.43	4.44	4.45	4.46	4.47	4.48	4.49	4.50	4.51	4.52	4.53	4.54	4.55	4.56	4.57	4.58	4.59	4.60	4.61	4.62	4.63	4.64	4.65	4.66	4.67	4.68	4.69	4.70	4.71	4.72	4.73	4.74	4.75	4.76	4.77	4.78	4.79	4.80	4.81	4.82	4.83	4.84	4.85	4.86	4.87	4.88	4.89	4.90	4.91	4.92	4.93	4.94	4.95	4.96	4.97	4.98	4.99	5.00	5.01	5.02	5.03	5.04	5.05	5.06	5.07	5.08	5.09	5.10	5.11	5.12	5.13	5.14	5.15	5.16	5.17	5.18	5.19	5.20	5.21	5.22	5.23	5.24	5.25	5.26	5.27	5.28	5.29	5.30	5.31	5.32	5.33	5.34	5.35	5.36	5.37	5.38	5.39	5.40	5.41	5.42	5.43	5.44	5.45	5.46	5.47	5.48	5.49	5.50	5.51	5.52	5.53	5.54	5.55	5.56	5.57	5.58	5.59	5.60	5.61	5.62	5.63	5.64	5.65	5.66	5.67	5.68	5.69	5.70	5.71	5.72	5.73	5.74	5.75	5.76	5.77	5.78	5.79	5.80	5.81	5.82	5.83	5.84	5.85	5.86	5.87	5.88	5.89	5.90	5.91	5.92	5.93	5.94	5.95	5.96	5.97	5.98	5.99	6.00	6.01	6.02	6.03	6.04	6.05	6.06	6.07	6.08	6.09	6.10	6.11	6.12	6.13	6.14	6.15	6.16	6.17	6.18	6.19	6.20	6.21	6.22	6.23	6.24	6.25	6.26	6.27	6.28	6.29	6.30	6.31	6.32	6.33	6.34	6.35	6.36	6.37	6.38	6.39	6.40	6.41	6.42	6.43	6.44	6.45	6.46	6.47	6.48	6.49	6.50	6.51	6.52	6.53	6.54	6.55	6.56	6.57	6.58	6.59	6.60	6.61	6.62	6.63	6.64	6.65	6.66	6.67	6.68	6.69	6.70	6.71	6.72	6.73	6.74	6.75	6.76	6.77	6.78	6.79	6.80	6.81	6.82	6.83	6.84	6.85	6.86	6.87	6.88	6.89	6.90	6.91	6.92	6.93	6.94	6.95	6.96	6.97	6.98	6.99	7.00	7.01	7.02	7.03	7.04	7.05	7.06	7.07	7.08	7.09	7.10	7.11	7.12	7.13	7.14	7.15	7.16	7.17	7.18	7.19	7.20	7.21	7.22	7.23	7.24	7.25	7.26	7.27	7.28	7.29	7.30	7.31	7.32	7.33	7.34	7.35	7.36	7.37	7.38	7.39	7.40	7.41	7.42	7.43	7.44	7.45	7.46	7.47	7.48	7.49	7.50	7.51	7.52	7.53	7.54	7.55	7.56	7.57	7.58	7.59	7.60	7.61	7.62	7.63	7.64	7.65	7.66	7.67	7.68	7.69	7.70	7.71	7.72	7.73	7.74	7.75	7.76	7.77	7.78	7.79	7.80	7.81	7.82	7.83	7.84	7.85	7.86	7.87	7.88	7.89	7.90	7.91	7.92	7.93	7.94	7.95	7.96	7.97	7.98	7.99	8.00	8.01	8.02	8.03	8.04	8.05	8.06	8.07	8.08	8.09	8.10	8.11	8.12	8.13	8.14	8.15	8.16	8.17	8.18	8.19	8.20	8.21	8.22	8.23	8.24	8.25	8.26	8.27	8.28	8.29	8.30	8.31	8.32	8.33	8.34	8.35	8.36	8.37	8.38	8.39	8.40	8.41	8.42	8.43	8.44	8.45	8.46	8.47	8.48	8.49	8.50	8.51	8.52	8.53	8.54	8.55	8.56	8.57	8.58	8.59	8.60	8.61	8.62	8.63	8.64	8.65	8.66	8.67	8.68	8.69	8.70	8.71	8.72	8.73	8.74	8.75	8.76	8.77	8.78	8.79	8.80	8.81	8.82	8.83	8.84	8.85	8.86	8.87	8.88	8.89	8.90	8.91	8.92	8.93	8.94	8.95	8.96	8.97	8.98	8.99	9.00	9.01	9.02	9.03	9.04	9.05	9.06	9.07	9.08	9.09	9.10	9.11	9.12	9.13	9.14	9.15	9.16	9.17	9.18	9.19	9.20	9.21	9.22	9.23	9.24	9.25	9.26	9.27	9.28	9.29	9.30	9.31	9.32	9.33	9.34	9.35	9.36	9.37	9.38	9.39	9.40	9.41	9.42	9.43	9.44	9.45	9.46	9.47	9.48	9.49	9.50	9.51	9.52	9.53	9.54	9.55	9.56	9.57	9.58	9.59	9.60	9.61	9.62	9.63	9.64	9.65	9.66	9.67	9.68	9.69	9.70	9.71	9.72	9.73	9.74	9.75	9.76	9.77	9.78	9.79	9.80	9.81	9.82	9.83	9.84	9.85	9.86	9.87	9.88	9.89	9.90	9.91	9.92	9.93	9.94	9.95	9.96	9.97	9.98	9.99	10.00	10.01	10.02	10.03	10.04	10.05	10.06	10.07	10.08	10.09	10.10	10.11	10.12	10.13	10.14	10.15	10.16	10.17	10.18	10.19	10.20	10.21	10.22	10.23	10.24	10.25	10.26	10.27	10.28	10.29	10.30	10.31	10.32	10.33	10.34	10.35	10.36	10.37	10.38	10.39	10.40	10.41	10.42	10.43	10.44	10.45	10.46	10.47	10.48	10.49	10.50	10.51	10.52	10.53	10.54	10.55	10.56	10.57	10.58	10.59	10.60	10.61	10.62	10.63	10.64	10.65	10.66	10.67	10.68	10.69	10.70	10.71	10.72	10.73	10.74	10.75	10.76	10.77	10.78	10.79	10.80	10.81	10.82	10.83	10.84	10.85	10.86	10.87	10.88	10.89	10.90	10.91	10.92	10.93	10.94	10.95	10.96	10.97	10.98	10.99	11.00	11.01	11.02	11.03	11.04	11.05	11.06	11.07	11.08	11.09	11.10	11.11	11.12	11.13	11.14	11.15	11.16	11.17	11.18	11.19	11.20	11.21	11.22	11.23	11.24	11.25	11.26	11.27	11.28	11.29	11.30	11.31	11.32	11.33	11.34	11.35	11.36	11.37	11.38	11.39	11.40	11.41	11.42	11.43	11.44	11.45	11.46	11.47	11.48	11.49	11.50	11.51	11.52	11.53	11.54	11.55	11.56	11.57	11.58	11.59	11.60	11.61	11.62	11.63	11.64	11.65	11.66	11.67	11.68	11.69	11.70	11.71	11.72	11.73	11.74	11.75	11.76	11.77	11.78	11.79	11.80	11.81	11.82	11.83	11.84	11.85	11.86	11.87	11.88	11.89	11.90	11.91	11.92	11.93

h. 遺物の調査

[illegible]

②、造船物の概算														
船舶は概算であり、実際は4桁以上のものとなっている。ただし、内航向け船舶・漁船等は、実際値と概算値に若干の差がある。														
船舶種類	数量(隻)	船名	内航向け船舶(%)					客船向け船舶(%)			貨物向け船舶(%)	漁船向け船舶(%)		
			船名	船名	船名	船名	船名	船名	船名	船名		船名	船名	
307	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
308	8	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
309	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
310	81	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
311	14	2/2	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
312	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
313	20	1/2	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
314	88	4/4	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
315	11	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
316	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
317	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
318	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
319	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
320	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
321	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
322	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
323	11	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
324	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
325	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
326	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
327	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
328	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
329	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
330	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
331	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	
332	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	

表 II-14 制片集中 4 集统计

8. 点数・重量

序号	组别	性别	年龄	身高 (cm)	体重 (kg)	握力/握力指数																				
						0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.10	0.11	0.12	0.13	0.14	0.15	0.16	0.17	0.18	0.19	0.20
224	7	450	138	6.3	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
225	7	450	0.31	27.1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
226	1	450	0.30	1.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
227	5	450	0.31	7.7	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
228	19	450	0.48	8.7	3	4	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	2	1	0	1	0
229	7	450	0.31	4.4	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0
230	41	450	1.38	19	18	8	4	1	1	1	0	1	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
232	14	450	0.34	4.5	3	4	2	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
241	40	450	0.11	8.9	3	0	0	1	1	1	0	1	4	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
234	2	450	0.31	6.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
231	1	450	0.39	6.0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
236	8	450	0.32	2.6	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
327	11	450	0.30	1.9	1	2	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
238	24	450	0.39	4.8	11	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
347	5	450	0.31	3.1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
253	6	450	0.30	0.1	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
258	8	450	0.32	5.2	3	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
259	2	450	0.31	5.0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
265	3	450	0.31	2.1	1	0	0	0																		

1. 遺物の類数 調査は長さまたは幅が4cm以上のものについて行った。ただし銅片以外の遺物・特殊な石片の見当は遺物数に対する百分率。

遺物番号	数量(点)	品目 (点/%)あり	打製(点/%)										磨製(点/%)		銅片以外の遺物(点/%)			
			打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	打製打	磨製打	磨製打	磨製打	磨製打
224	7	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	4/7.1	0/0	0/0	1/14.3
225	2	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/28.6	0/0	0/0	0/0
226	1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
227	4	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
228	18	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
229	7	1/14.3	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
230	34	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
231	11	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
232	58	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
233	2	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
234	8	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
235	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
236	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
237	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
238	10	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
239	3	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
240	4	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
241	7	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
242	2	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
243	1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
244	1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
合計	181	3/7.7	1/6.6	20/11.1	22/12.2	22/12.2	22/12.2	22/12.2	22/12.2	22/12.2	22/12.2	22/12.2	22/12.2	22/12.2	14/7.7	1/6.6	1/6.6	1/6.6

表15 銅片集中5集計表

2. 点数・重量

遺物番号	数量(点)	品目 (点/%)あり	重量 (g)	磨製(点/%)																	
				0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.10	0.11	0.12	0.13	0.14	0.15	0.16	0.17
474	88	222	0.28	2.7	37	13	5	2	0	4	0	1	0	1	3	0	0	0	0	1	0
475	215	420	0.25	5.9	118	30	18	11	4	3	2	6	8	10	4	2	1	0	2	0	0
476	211	400	0.23	28.8	94	30	13	9	4	5	4	1	4	16	7	6	3	3	1	2	0
477	35	80	0.58	5.6	13	11	2	2	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0
478	94	240	0.26	4.1	39	13	4	3	2	2	0	0	0	2	2	1	0	2	0	1	0
479	95	148	0.40	3.0	35	9	10	1	2	2	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0
480	81	140	0.44	3.3	31	10	3	1	2	2	2	1	0	2	2	0	0	1	0	0	0
481	172	360	0.43	4.3	108	32	9	6	1	4	3	3	1	2	3	2	0	1	0	0	0
482	115	490	0.59	6.0	27	17	7	4	1	8	5	1	1	3	3	4	1	0	2	0	0
483	17	145	0.12	1.9	7	3	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
484	171	290	0.58	8.4	118	25	9	5	2	4	0	1	0	0	4	3	0	0	2	0	0
485	113	390	0.29	7.9	37	14	18	1	5	2	4	1	3	0	6	3	4	2	0	0	0
486	126	420	0.21	5.4	60	29	9	1	0	0	0	1	4	2	7	2	2	1	2	0	0
487	30	370	0.98	3.8	19	5	1	1	2	0	0	0	1	1	3	1	1	0	0	1	0
488	7	40	0.15	0.1	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
489	134	230	0.40	5.2	30	21	9	9	1	6	4	4	3	3	7	8	0	0	0	0	0
490	25	420	0.24	5.3	15	10	8	3	2	4	2	1	1	0	3	1	1	0	0	0	0
491	95	490	0.17	4.8	38	4	2	4	2	1	2	0	2	0	7	3	1	1	0	0	0
492	108	490	0.27	17.7	42	30	10	4	3	4	3	3	1	0	7	4	1	1	2	0	0
493	54	490	0.14	13.8	38	7	4	6	3	1	0	1	0	1	2	3	0	0	0	2	1
494	30	490	0.08	1.9	30	0	1	2	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
495	48	490	0.10	1.4	34	2	2	1	0	1	1	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0
496	34	290	0.12	4.0	11	5	2	1	0	1	2	1	1	1	5	1	1	0	0	1	0
497	18	50	0.27	5.1	4	0	0	1	2	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0
498	41	390	0.11	3.4	14	10	5	2	2	1	2	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0
合計	2339	7501	5.38	153.6	1130	284	141	79	28	62	43	36	24	81	112	58	33	14	39	5	4

3. 銅片以外の遺物 見当は遺物の総数に対する百分率である。

遺物番号	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	合計
数量(点/%)	0	0	1/1.5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1/1.5	1/1.5	0	0	0	0	0	4/9.1
重量(点/%)	0	0	1/1.5	1/1.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5/9.1
その他	正確に																									1/9.0

表16 銅片集中5集計表

4. 点数・重量

遺物番号	数量(点)	品目 (点/%)あり	重量 (g)	磨製(点/%)																	
				0.00	0.01	0.02	0.03	0.04	0.05	0.06	0.07	0.08	0.09	0.10	0.11	0.12	0.13	0.14	0.15	0.16	0.17
728	120	400	0.32	6.5	32	21	10	7	2	0	5	7	2	1	5	2	0	0	1	0	0
729	183	400	0.39	4.3	82	28	11	5	0	4	2	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0
730	941	420	0.35	25.1	894	115	34	34	11	12	4	17	4	7	26	8	2	2	0	0	0
731	545	430	1.36	35.3	380	100	37	8	10	3	4	5	15	7	3	4	2	3	1	0	0
合計	1747	1800	1.58	55.5	1159	256	102	54	19	25	14	30	11	24	57	29	7	6	2	0	0

表17 銅片集中7集計表

IV 包含層出土の遺物

1 土器 (図IV-2~17 図版76~90)

縄文時代早期 (I群)、前期 (II群)、晩期 (III群) に属するものがある。出土総点数は9,839点で、早期のものが95%以上を占め、(9,387点)、前期が447点、極わずかに晩期 (5点) のものもある。

早期の土器の分布は、同時期の住居跡が集中するNラインから東側の地区と重なり、調査区の南東側に集中している。又、浅い沢状の地形が形成されているNライン周辺からもややまとまって出土する傾向がみられた。包含層はさらに南側にも広がっていることが予想できる。遺物は一個体分がまとまって出土する例は少ない。破片が広範囲に分布しているものもあり、20m以上離れた破片が接合した例もある。

前期の土器も、早期と同様の分布傾向がみられ、H-9周辺の包含層ではP.D.3層から出土しているものが多い。

縄文時代早期の土器 (図IV-4~15 図版76~91)

I群A類土器 (49・50)

30点出土した。一個体分の破片とみられる。胎土に繊維が混入するものでA類土器はH-1から一個体分が出土している。49a~dと50a・bは同一個体の可能性が非常に強い。50a、bはH-1の土器と同一個体である。49a~dはH-1に隣接する包含層から出土したものである。胎土には石英の細粒が多量に混じる。49aは胴下半部とみられる。器面には斜めに調整痕とみられる粗い擦痕がある。細い沈線文が5・6条施されているが、部分的にやや太くなるところもある。図III-5-1の胴半ばに施されている沈線文に対応できるものと思われる。49b・cはいずれも粘土帯の接合面で割れている。49bは粘土帯を接合する際に指先で押して成形したと思われ、粘土が盛り上がる部分と凹んだ部分がある。49cは乳房状の尖底部であるが、先端は欠損している。

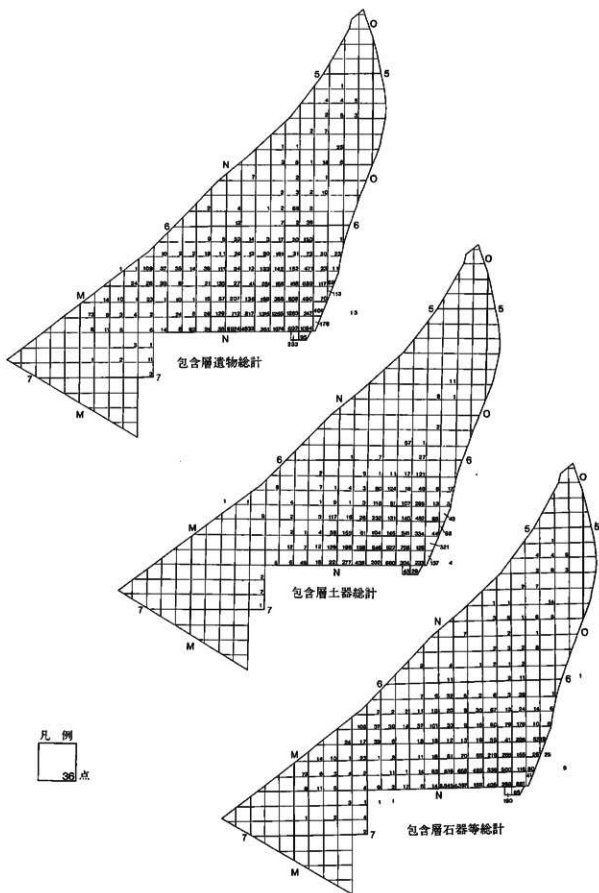
I群B類土器 (1~48、51~157)

貝殻腹縁文、沈線文、刺突文、貝殻腹縁圧痕文等を単独あるいは組合せて文様を構成するもので、底部は主に尖底をなし、平底のものもある。貝殻腹縁部の押し引き文・連続波状文によるものも少数みられる。沈線文で文様を描くものでは、貝殻腹縁圧痕文で録取りする手法のものが多いが、貝殻腹縁圧痕文が省略されるものもみられる。器内外面には、貝殻腹縁部あるいは腹縁部を使用したとみられる条痕が残るものも多い。器形、文様構成、文様要素等でa~h種の8種類に分けられる。

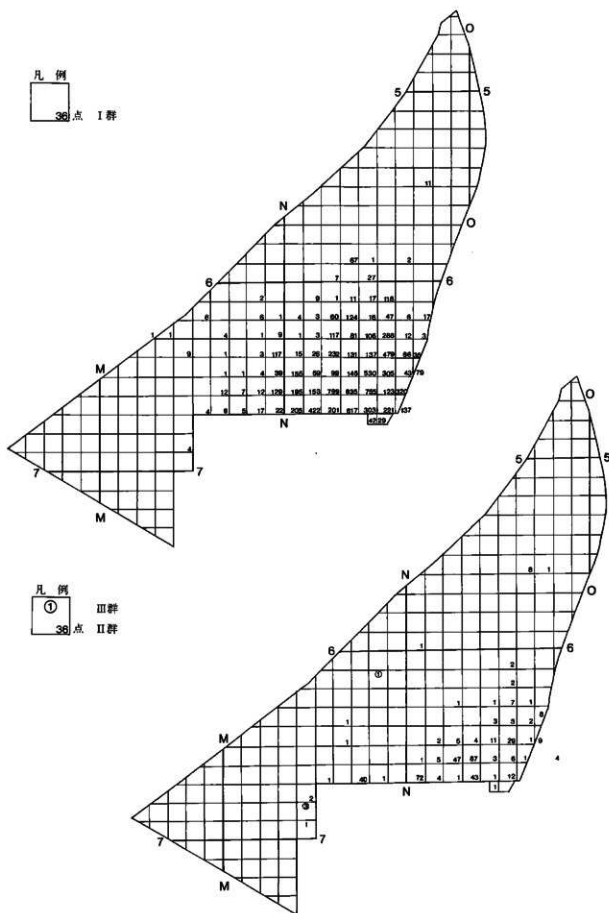
a種 (1~8、51~59)

口頸部がキャリパー状のもの。波状口縁で4カ所に山形の波頂部のあるもの (1・3・4・6~8、51・52・59) と緩やかな波状になるもの。(2・5) がある。前者では波頂部の両端に小さな副突起のあるものみられる (1・4・6~8、51・59)、口縁部の平面形は隅丸方形のものが多い。口唇部断面は、口唇上が平坦で角形のもの (1~3、5~7、51~54、57・59)、丸味を帯びるもの (4・8、55) があり、口唇内側角に腹縁圧痕文を施すもの (4~7、51~55・57・59) がある。口唇上に施文されるものもみられる (3・5)。腹縁圧痕文は短く内側角に施されるもののほか、10mm程の長めの圧痕文が施されるものがある (7・53・57・59)。又その際についたと思われる爪形の圧痕が文様下位に残されているものがある (51・55・57)

文様帯は口縁部に限られるもの (4) のほか、頸部から垂下する文様が施されるもの (2・3・7・51)、胴部上半の無文部に横位に鋸歯状沈線文が施されるもの (3・5・55・56) 等がある。文様が胴上



図Ⅳ-1 発掘区別出土遺物点数



図IV-2 発掘区別出土土器点数

半部にまで及ぶもの(6)もある。文様は、腹縁文、沈線文で幾何学的な区画が構成される。文様帯を直線あるいは、クランク状の線で大きく三角形に区画して、点対称の文様構成がみられるもの(2~4、51・52)、横位に連続する菱形・三角形・方形の文様が展開されるもの(5~7、54)等がある。区画内は主に腹縁圧痕文が充填される。文様帯の上下は1条ないし2・3条の腹縁文をめぐらせ、区画するもの、(2・4・7・51・55)のほか、腹縁文間に、横位、縦位に腹縁圧痕文を施して、細長い帯条の区画を形成しているものもある(3・6)。円形刺突文は腹縁文・沈線文上や屈曲部に施され、鋸歯状沈線文の両端に施されるもの(54・56)もある。又、口縁部、頸部のくびれ部、文様帯間の無文部にめぐらされるものもみられる(1・2・7、59)。口縁部、頸部の文様の入組む部分や交差する部分を、内面から指頭で押して小突起状にし、その部分に刺突文が施されるものがみられる(4~6、8・51・53・58)。

1は口縁部文様帯が幅広いもので、頸部の屈曲は弱く、口縁部がやや外反する中型深鉢形土器。胴上半部の2分の1程が残存する。器壁は約5~7mmと薄く、焼成は良好である。文様は波頂部から、2条のクランク状の腹縁文を縦位に施し、文様帯を区画している。区画内は更に弧線で上下に繋がれている。腹縁圧痕文は斜位に充填されている。鋸歯状の沈線文は、胴部と口縁部の文様帯にも施されている。円形刺突文は口縁部に2条めぐっているが、波頂部では1条になっている。2~4は三角形・菱形に区画された点対称の文様構成のもの。2は広範囲から破片が出土しているものである。波頂部間から腹縁文を斜め施して菱形に区画している。腹縁文は弧線で繋がれている。区画内は沈線文で三角形に再区画されている。腹縁圧痕文のほか、押し引き文が充填されている部分もある。垂下する文様帯には横位に腹縁圧痕文が充填されている。口唇直下の無文部と頸部の腹縁文上に円形刺突文列が施されている。内・外面に横位に細かい条痕がある。3は口縁部の腹縁文間には横位に、頸部のものには縦位に腹縁圧痕文が施されている。垂下する文様帯の両側に鋸歯状沈線文がめぐっている。4は波頂部下で入組むように、クランク状の腹縁文が施され、菱形に区画されている。腹縁文の両端は弧線で繋がれている。沈線文を縁取る腹縁圧痕文がやや押し引き文的になっている。区画内の充填文は疎らである。焼成が良好な土器で、内面にはケズリの痕跡がある。5は全体の5分の2程が残存する。3条単位の沈線文を波頂部下で「X」字状を描く様に施し、全体として三角形と方形の文様が横位に展開されている。充填文は斜位に施されている。胴部には鋸歯状沈線文が横位に4条施されているが、途切れる部分に、円形刺突文が施されている部分もある。6は破片が広範囲に分散していたもので、20cm以上はなれた地点から出土した破片(N-7-39とN-7-13)と、H-13出土の破片が接合している。胴下半部は欠損しているが、上半部の2分の1程が残存する。文様帯が2段で構成され、上段には5に類似の三角形・方形の区画文、下段には台形の区画文がそれぞれ横位に展開されているとみられる。7はH-10から同一個体の破片が出土している(図III-69-3)。胴上半の3分の2程が残存する。頸部の屈曲は弱く、口縁部はやや外反気味である。横位に連続する、横長の菱形・三角形で文様が構成されている。区画内には腹縁圧痕文が横位に、疎らに施されている。腹縁文で挟まれた長い無文部には、円形刺突文がめぐらされている。口縁部内側の腹縁圧痕文は長さ約15mmの長めのものである。垂下する帯状の文様の一部が確認できる。8はH-9からも同一個体の口縁部が出土している(図III-60-17a、b)。沈線文のみで菱形と三角形を組合せた文様が描かれている。波頂部には楕円形の刺突文が施されている。

51・52はクランク状の腹縁文が斜位に施されているもので、点対称の構成のものとみられる。51には3条の腹縁文が文様帯から垂下されている。53~58は全体の構成が明瞭ではないが、幾何学文的な区画がみられる。53は区画内に腹縁圧痕文が横位に施されている。54・57は薄手の小型土器。54は沈線に

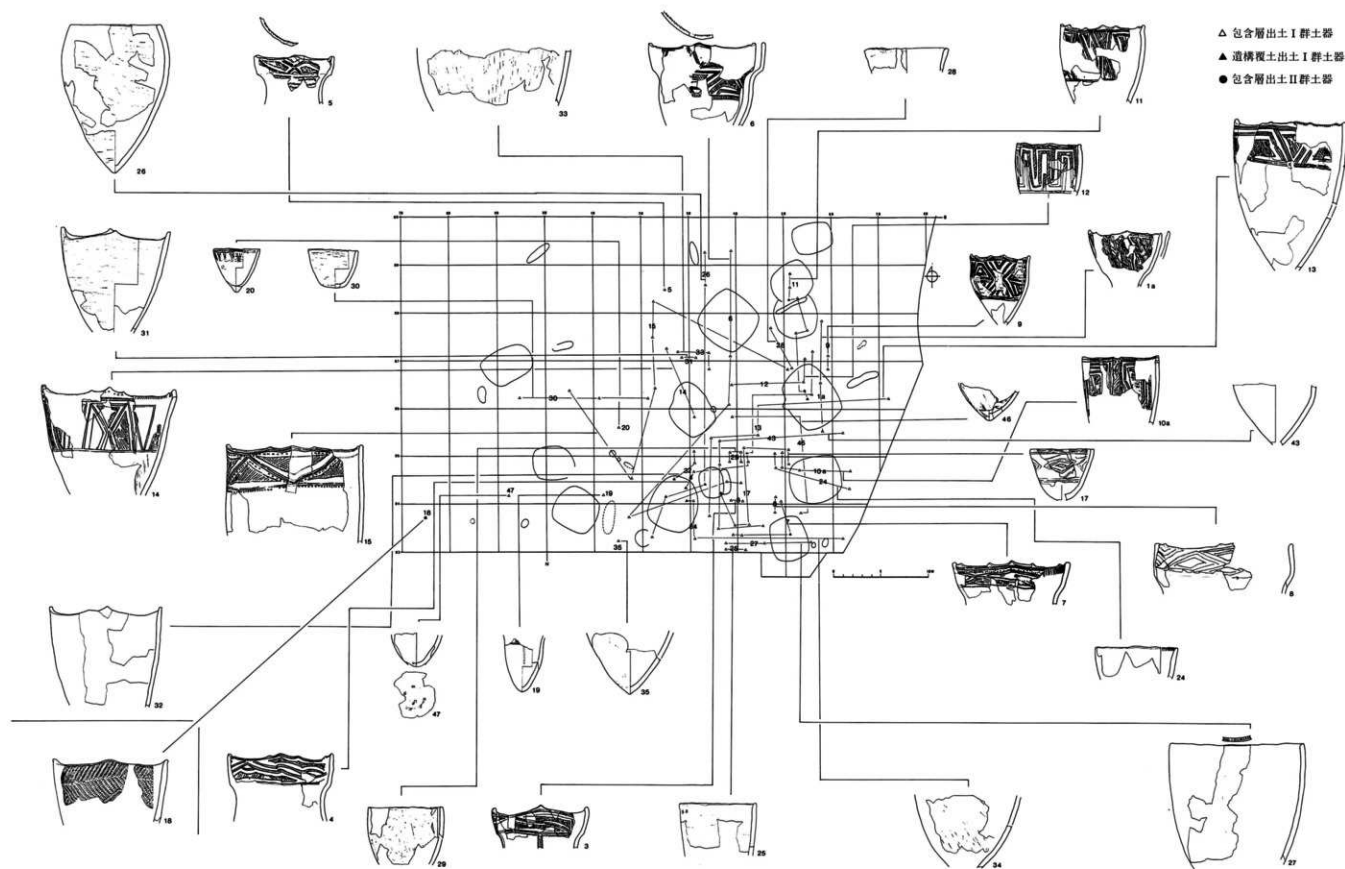


図 IV-3 包含層出土復原土器接合図

よる三角形の文様が描かれている。頸部の腹縁文間には、小さな円形刺突文が施されている。55・56は胴部に横位に鋸歯状沈線文が施されている。55は頸部を整形する際に、内面から指頭で押したとみられ、凹みが連続して残っている。57は口縁部に腹縁圧痕文が施されている。55・58はいずれも、内外面に横位に細かい条痕がある。59a～eは同一個体。H-3(図Ⅲ-18-8a～c)、H-6(図Ⅲ-45-8)からも破片が出土している。頸部の2条の腹縁文間には、小さな円形刺突文がめぐっている。口縁部文様は7と類似の横位に展開する構成とみられる。胴部には連続波状文が2段に施されている。

b種 (18・20、60～89)

口縁部はやや外反するが、直立気味の器形のもので、文様は簡単な構成となる。口縁部と胴部の細長い文様帯を腹縁文、沈線文で繋ぐ構成のもの、口縁部の狭い範囲に帯状にあるいは、垂下する文様が施されるもの等がある。本種にみられる鋸歯状沈線文、腹縁圧痕文が縦位、斜位に充填される細長い区画帯、垂下する文様帯は、a種の胴部文様に対応し、共通する要素のものである。断片的資料が多いため、口縁部の形骸がわかるものは少ないが、平縁と波状口縁のものがみられる。口唇断面は口唇上が平坦で角形のものが多く、丸味を帯びるもの(66・68・70・84)、尖り気味のものもある。口唇内側角に腹縁圧痕文が施されるもの(20・60・61・66・69・71・72・74・80・82)、押し引き文、あるいは押し引き文的な圧痕文が施されるもの(77・79)、棒状工具で刻み目が施されるもの(78・84)、貝殻の背圧痕文が施されるもの(81)等がある。その際に残されたとみられる爪形圧痕があるものもみられる(69・72・80)。文様構成などからb種-1と2種にわけられる。

b種-1 (19・60～71)

口縁部と胴上半部にそれぞれ細長く文様を施し、上下に繋ぐ垂下する文様が描かれる構成のものである。

19は口縁部は欠損している。焼成は良好で、胎土が稠密な土器である。小形の砲弾形尖底土器。胴上半部をめぐる沈線文、腹縁文がみとめられ、極小さい円形刺突文が2条垂下されている。刺突文列は細い沈線で舌状に区画されている部分もみられる。接合はしないが、71a～cと胎土、焼成、文様要素に類似点がみられる。同一個体の可能性がある。60～67は口縁部から鋸歯状沈線文、腹縁文を垂下させているもの。63・65の沈線文の端には円形刺突文が施されている。60a～c・61は口縁部と胴部に3条ずつ腹縁文をめぐらせ、鋸歯状沈線文と、腹縁文を交互に間隔をあけて垂下させている。62には無文部に腹縁圧痕文が疎らに施されている。65～69は口縁部、胴部に腹縁圧痕文を斜位(65・66・68・69)、縦位(67)に充填させた細長い帯状の区画文がある。67はH-9出土の破片(図Ⅲ-61-21a・b)と同一個体。68a・bは口唇直下に1条、沈線文がめぐっているもの。器面には斜位に幅2mm程の条痕がある。69はやや外反する器形のもので、帯条の文様帯が2・3段施されているとみられ、文様帯間には横位に鋸歯状沈線文が施されている。口唇上には横位に腹縁圧痕文が1条めぐっている。口唇上と器内外面には横位に細かい条痕がある。70a・bは沈線文が口縁部に2条めぐり、2条単位の沈線文が垂下されている。71a～cはへら状工具による沈線文で文様を描き、その上下を腹縁圧痕文で縁取りしている。平行線をめぐらせ、縦に区画する意図のものともみられる。

b種-2 (18・20・72～89)

口縁部の狭い範囲に帯状に文様が施されるもの、垂下する文様が施されるものである。破片資料のため、b種-1と同様の文様構成をとるものもあるかもしれない。

18は中型の鉢形土器。厚手で、焼成は良好である。腹縁圧痕文が斜位に施された帯状の文様がめぐっている。口唇上にも施文されている。内・外面に横位に細かい条痕がある。20は底部、粘土帯の接合面で欠損している。小型の鉢形土器。薄手で胎土に細かい白い砂粒が多い。口縁部に施された腹縁文は、

腹縁圧痕文での縁取りが省略されて、沈線文のみの部分もある。連続波状文が間隔をあけて施されている。

72a・b～76は横位の鋸歯状沈線文が施されている。72・74・75では沈線の端に円形刺突文が施されている。72a・bは口縁部に平行に2条腹縁文を施し、その間に、横位に押し引いて施された楕円形刺突文がめぐっている。口唇内側角に施された腹縁圧痕文は刻目状になっている。外側角にも施文されている。比較的新しい段階のものかもしれない。73はやや崩れた太い鋸歯状沈線文が施されているもので、間隔をあけて施された2条の間には、腹縁圧痕文が斜位に充填されている。口唇上には、中空の棒状工具による刺突文がめぐっている。74・75は15m程離れた地点から出土したものであるが、同一個体の可能性がある。口唇上に、楕円形刺突文が2列めぐっている。77は口縁部の腹縁文の上位には腹縁圧痕文が、下位には円形刺突文列が施されている。78は平行沈線文が2条施されている。79は太い沈線文間に縦位に腹縁圧痕文が施されている。円形刺突文は沈線の途切れる部分にみられる。80・81では腹縁圧痕文が横位、縦位に施されている。82a・bは緩やかな波状口縁をなすもので、口唇内外面角に腹縁圧痕文がある。83～85は刺突文列が口縁部にめぐらされているもの。83は楕円形の刺突文のもので、波頂部では沈線で三角形に区画された中でも3列施されている。84a～cは波頂部から刺突文を2列垂下させている。86～88は沈線文で垂下する文様が描かれている。いずれも斜位に腹縁文が充填されている。89は鋸歯状沈線文が2列、縦位に施されている。

c種 (9～17, 90～136)

口縁部が直立気味あるいは、頸部がくびれてやや外反する器形のものである。文様帯が口縁部から胴上半部までの幅広い範囲のものである。平線のもの (19・17, 114) と波状口縁のものがある。波状口縁のものでは4カ所に山形の波頂部があるもの (9・11・13・14・90・91・95・97・99・100・102・107・110～112)、緩やかな波状のもの (92・93・98・101)、不規則に波打つもの (12・115) がある。波頂部の両端に小さな副突起があるものが多い (9・11・13～15, 91・92・95・97・112)。口唇断面は口唇上が平坦で角形をなすものが多く、やや丸味を帯びるもの (111・113) もみられる。口唇内側角には貝殻腹縁圧痕文を縦位に施すもの (10～13, 16, 90～99, 102～104・107・108, 110～113・115) のほか、押し引き文 (105・114) の施されるものもみられる。

文様帯は主に1条あるいは2、3条単位の腹縁文を、口縁部と胴部にそれぞれめぐらせ区画するものと、沈線文で区画するもの (11・14・99・115) 等がある。2条単位のものでは、その間に腹縁圧痕文を縦位、斜位に充填して細長い区画帯 (10・12・90・94・98) が形成されているもの、円形刺突文列が施されるもの (92・114) がある。

文様は主に三角形・菱形、方形等の幾何学的区画文で構成される。上下を区画された中を再区画するもので、同様の文様を区画内に重ねる方法で、最終的区画内には充填文として腹縁圧痕文を施すものが多い。押し引き文を充填させるもの (98a～d, 131) や、鋸歯状沈線が施されるもの (92・104) もある。円形・楕円形刺突文は腹縁文・沈線文上ではほぼ等間隔に、その両端や文様が交差、入組む部分に施される。文様帯間の無文部や、波頂部下の空間に施されるものもある。また、波頂部下位の文様が交差する部分を内面から指頭で押して突起状にし、その部分に円形刺突文を施すもの (92・97・110・112) もみられる。粘土塊を貼り付けて突起状にしているものもある (13)。文様構成から大きく2つに分けられる。

c種-1 (13・14, 91～100・102)

文様帯が縦位に区画されるものである。口縁部から腹縁文・沈線文を斜位・縦位に配し区画するので、腹縁文は2、3条一単位でクランク状に施されるもの (10, 91～96) がより最終的な区画は、単

一の腹縁文・沈線文で描かれる例が多い。区画文はそれぞれ独立した文様を構成しているが、全体としては点対称の構成がみられるものがある。

10は口縁部の2ヵ所あるいは4ヵ所に指頭等で押圧して形成された凹みがあり2個対の小突起状になっている。下位には貫通する円形刺突文が施されているが、向い合せて対になるようである。口縁部にめぐる腹縁文上には角形の刺突文が密に施され、腹縁文間には、腹縁圧痕文を斜位に施す部分と、横位に施す部分がある。凹み部分を中心に屈曲した腹縁文を2条施し、縦に帯状の文様帯を形成し、器面を4単位に区画している。区画内は押し引き文的な腹縁圧痕文が充填されている。11はH-4・8・7からも破片が出土している。波頂部を中心に「X」字状に大きく文様帯を区画し、区画内には点対称の三角形の文様が構成されている。焼成が良好な土器である。12は縦の区画が横位に連結したものとみられる。2条の沈線文で縦・横を繋ぐ文様が描かれ、細長い帯状の文様を上下から入組ませている。沈線文間には上下の区画帯同様斜位の腹縁圧痕文が充填されている。内外面には横位に粗い条痕がある。

90は文様構成や施文が他とはやや異なるものであるが、便宜的にここに置いておく。4ヵ所の波頂部の中間にやや小さな突起部がある。胴部に施された腹縁文間には腹縁圧痕文が斜位に施され、その下位にも一条めぐっている。全体を大きく三角形に分割し、斜位の線を重ねて、斜格子目の文様を描いている。区画内は腹縁圧痕文が間隔をあけ、整然と施されている。円形刺突文は、文様の交差する部分では、四隅に配されている。無文部と、口縁部内面には横位、胴部には縦位に幅8mm程の条が4本みられる条痕がある。91~93・95はクランク状腹縁文で区画されているもの。93~97は方形・三角形の区画文が描かれている。94~96は点対称構成とみられる。92a~dは同一個体。口縁部の腹縁文上には、小突起間に限り、円形刺突文が施されている。波頂部から腹縁文を3条、縦位に施し、槽円形の文様と繋げている。この文様帯が大きな区画帯になっていると思われる。槽円形の区画内には縦位に鋸歯状沈線文が施されている。焼成は良好で、胎土が稠密である。93は口唇上に沈線文が施されているが、波頂部に限られるようである。94は口縁部の帯状の区画帯の上下に2条単位の腹縁文がめぐっている。内外面には、横位に細かい条痕がある。95は4条一単位の腹縁文で文様が描かれている。96~97は内面に横位の条痕がある。98a~cは同一個体。緩やかな波状口縁である。貝殻腹縁圧痕文に先だって施される沈線文が非常に細いものである。2条単位の腹縁文を斜めに施して大きく区画している。口縁部には弧状に沈線文を施し、無文部を形成している。2条の腹縁文間と沈線文上には、小さな円形刺突文が施されている。腹縁圧痕文は口唇上にも斜位に施されている。99~102は太い沈線文で大柄な文様が構成されている。99a~c・100は三角形、方形の文様のもので、100は点対称構成である。101は屈曲する2条の沈線文で上下に入り組む文様が描かれている。口唇部に施された腹縁圧痕文は深く刻み目状で内面には幅4mm程の条痕が横位にみられる。102は口縁部と胴部に間隔をあけて施された腹縁文が文様帯の区画となっている。99~101の充填文は疎らに施文されている。

c種-2 (9, 13~15, 103~115)

文様が主に横位に展開するものである。三角形・菱形・方形・台形の区画文を単独あるいは組合せて、横位に連続して展開させる文様構成のもの(9, 13~15, 103~106, 108~115)、腹縁文で連続する山形文が施されるもの(107)等がある。区画内は同様の文様で再区画され、区画内は腹縁圧痕文が充填されるもののほか、鋸歯状沈線文が施されるものもある(108)。円形刺突文はc種-1同様、腹縁文、沈線文上やその両端、文様の交差する部分に施されるほかに、文様帯間、波頂部下位、胴部上半部の無文部に施されるものがある(11・12・112)。

9, 13~15は三角形、台形の区画文が構成されているもの。9は小型の深鉢形土器。底部は欠損して

いるが全体の2分の1程が残存する。口縁部に沈線が1条めぐり、斜位に腹縁圧痕文が施されている。文様は2段の構成となっていて、波頂部下に三角形の区画文が描かれ、台形の文様と組合せている。波頂部下の区画内には他の部分のものより大きい円形刺突文が施されている。13~15は大型の深鉢形土器。13は全体の3分の2程が残存する。9の上段の文様のみが展開されているものであるが、台形の区画文がやや崩れている。腹縁圧痕文は口唇上に施文されている。口縁部内側に炭化物が付着している。14は胴上半部の2分の1程が残存する。波頂部下位で「X」字状に交差するように腹縁文を施し、上下に対称の三角形の文様を描き、方形の文様と組合せている。波頂部下の無文部には、円形刺突文が部分的に施されている。口縁部の内外面には横位の胴部の無文部には縦位の条痕がある。15は胴下半部は欠損している。H-3・4の覆土からも同一個体の破片が出土している。横長の三角形の文様が展開されているが、波頂部では菱形になっている部分もある。刺突文が多usedされ、文様間の上向きの三角形の部分と口縁部の無文部に槽円形刺突文が施されている。胴部の腹縁文下にも一列めぐっている。口縁部内側には腹縁圧痕文の下位に爪形圧痕が一列等間隔に施されている。文様効果を意識したものかもしれない。胎土に径1mm程の白い砂粒が多量に混じっている。33と胎土、焼成が類似している。同一個体の可能性がある。16・17は小型の鉢形土器。横位に連結する菱形の文様が描かれている。16はH-4覆土からも破片が出土している。厚手で器面の凸凹がいちじるしい。口縁部に1条沈線をめぐらせ、縦位に腹縁圧痕文を施文している。腹縁文で描かれる文様は割付けが不均一で崩れた構成となっている。腹縁圧痕文の縁取りが省略され、沈線文のみになっている部分もある。口縁部には横位に、胴下半から底部にかけては、縦位に細かい条痕がある。内面には炭化物が付着している。17はH-14覆土からも破片が出土している。全体の2分の1程が残存する。沈線が強く施文されているため、縁取りしている腹縁圧痕文の印象が薄くなっている。省略されて沈線文のみの部分もある。区画内の充填文は極簡単に疎かに施されている。内面には幅4mm程の横位の条痕が胴半ばまである。103~106は全体の文様構成はわからないが、菱形・三角形等の区画文を横位に連続する文様のものとみられる。103は文様帯間の無文部に、104は区画内に鋸歯状沈線文が施されている。104の口縁内側の腹縁圧痕文は15mm以上ある長めのもの。107は腹縁文を鋸歯状に重ねている。円形刺突文は屈曲部に施され、口縁部からの列点文のようにになっている。108・109は方形・台形の区画文のもの。108は鋸歯状沈線文が区画内に施されている。110は菱形の区画内に対称的な三角形の文様が充填されている。112は15と文様構成が類似のもの。波頂部下の無文部に円形刺突文が施されている。111・114は曲線的な腹縁文で連続する菱形の文様が描かれている。114は口縁部の腹縁文間に小さな円形刺突文が施されている。同様の刺突文は文様帯間の無文部にも施されている。113は鋸歯状沈線文と区画の沈線文が連続している。115はH-2覆土からも同一個体の破片が出土している。器壁は薄く、器面の凸凹が著しい。沈線で文様が描かれているが、部分的には腹縁圧痕文を重ねている。口縁部に沈線が2条めぐり、無文帯が形成されている。文様構成ははっきりとはしないが、縦長の三角形の文様を中心として左右に連続する三角形の文様が展開するものとみられる。円形刺突文は三角形の頂点部分に、複数、集中して施されている。区画内には腹縁圧痕文を縦、横に組合せて施文している部分がある。

116~122は断片的な資料なので文様構成がわからないもの。116は厚手で、横位の鋸歯状沈線文と円形刺突文例による区画文がある。117は沈線文で区画されている。118は口縁部から縦位に、鋸歯状沈線文が配されている。腹縁文の区画に沿って円形刺突文がめぐっている。120 a・bは腹縁圧痕文が鋸歯状に施されている。121は横長の文様帯、122は方形の区画がある。122~130はミニチュア土器。130は乳房状尖底のもの。131は口縁部に円形刺突文がめぐっている。132・133はP-7出土の土器(図Ⅲ-87-3)と同一個体。134は口唇断面が切り出し形で、腹縁圧痕文が斜位に施されている。135 a~c・136は

平底のもの。136はH-10出土のもの(図III-69-4)と同一個体。136は底部に腹縁文が2条めぐっている。

d種 (137a~c~143)

貝殻腹縁部の押し引き文、連続波状文が施されるもの。

137~141・143は押し引き文、142は連続波状文が施されている。137a~cは同一個体の破片がH-8からも出土している。器面のほぼ全面に横位に施されている。口唇の内外面角に腹縁圧痕文が施されている。下位に爪形の圧痕がある。138は薄手のもの。幅約8mmの押し引き文で波状の文様が描かれている。口唇内側には約7mmの長めの腹縁圧痕文が施文されている。143は深鉢形土器。薄手で焼成は良好である。幅約10mmの押し引き文で大柄な波状の文様を数列めぐらしている。内・外面に横位・縦位の細かい条痕がある。

e種 (144~147)

沈線文で文様が施されるもの。144はH-4から同一個体の破片が出土している(図III-27-38)。斜格子目の文様が描かれているが、文様は口縁部に限られるようである。口縁内側には棒状工具による斜めの刻み目がある。146・147は条痕で文様が描かれているものであるが、沈線と同様の施文効果のものとみられるので、一応本類に含めた。145a~dは波状口縁をなすもの。幅2、3mmの条痕で斜格子目の文様が描かれている。粘土に石英粒が多い。146は口唇内側に縦位に細い刻み目がある。

f種 (21、148、149)

文様を意図したとみられる条痕文が施されているものである。

21は破片が広範囲から出土したものである。H-3・5・6・13の覆土、X-2 III b2層からも出土した。底部は欠損しているが、全体の5分の4程が残存する。焼成は良好で、色調は胴上半部が黒褐色、下半部は赤褐色である。平縁で、胴部がやや張り出し、頸部がくびれる深鉢形土器。口唇上は磨かれ平坦になっている。ほぼ全面に貝殻腹縁部の条痕が横位に施されている。口縁部には腹縁圧痕文を3条、横位にめぐらせている。内面は非常に丁寧に調整されている。口唇内側角には腹縁圧痕文が施されている。148・149はやや外反する器形のもの。148は幅2、3mmの条痕文が斜位に施文されている。口唇上は円形刺突文がめぐっている。内面には横位に細かい条痕がある。149は幅約10mmの条痕で、波状の文様を重ねている。

g種 (24~32、149~158)

無文のものを本種とした。文様が全くないものと、口唇上あるいは内側に刻み目が施されるもの、(24・28・29・150・153) 腹縁圧痕文が施されるもの(27、151)がある。平縁のもの(24~30、152~154、156・157)と波状口縁のもの(31・32・158)があり、口縁部は直立気味のもの(24・25・29・30、150~158)、内湾するもの(26・27)、外反するもの(28、156・157)がある。口唇上が平坦で角形のものが多く、やや丸味を帯びるもの(24・25)がある。24は内面にケズリの痕跡がある。刻み目はへら状工具か爪によるとみられる。25は内面の凸凹が著しい。破片は粘土帯の接合面で割れていた。内面に横位に粗い条痕がある。26は口縁部が強く内湾する乳房状尖底の深鉢形土器。全体の5分の3程が残存する。底部付近は赤味を帯びている。凸凹が著しく、化粧粘土がはみ出している部分、破片が表裏に割れている部分がある。口縁部の一部に縦位、胴部では横位に粗い条痕がある。底部では同心円状に擦痕がみられる。28は内面に横位に条痕がある。29は口縁部が不規則に波打っているもので、口唇上は浅い刻み目が部分的に施されている。30は平底の鉢形土器。内外面に横位に細かい条痕がある。153は口唇上のところどころに斜位に浅い刻み目がある。155は内面に細かい条痕がある。156はH-2・5からも同一個体の破片が出土している(図III-9-10)。157は口縁部内側に稜がある。155はミニチュア土器。

31・32は4ヵ所に山形の波頂部がある。31は全体の4分の3程が残存する。焼成は良好で胎土は緻密である。ほぼ全面に横位に条痕がある。炭化物が付着している。32は胎土に白い砂粒が非常に多い。

h種 (33~48、165~189)

無文の胴部・底部の破片を本種とした。

33・34は大型の深鉢形土器の一部。33は縦方向に、ケズリの痕跡がある。胎土に白い砂粒が多く混じる土器で、15と良く似ている。同一個体の可能性がある。34はH-9の覆土から破片が出土している。色調は赤褐色で、斜位にケズリの痕跡がある。35~41、46、165~170は乳房状尖底部。35は胴下半まで斜位・縦位に条痕がある。尖底部では同心円状に擦痕が残っている。深い擦痕もみとめられ、擦痕部分は赤褐色、その上下は黒褐色である。171~173・179は砲弾形になるもの。42~45、174~178は尖底部が欠損している。47は底部の粘土帯の接合面で欠損しているものであるが、その部分を取り囲むように円形刺突文がめぐっている。太い棒状工具を押し引きながら施文したものとみられる。48・180は平底のもの。48はやや丸底気味である。

I群C類土器 (160a~c・161)

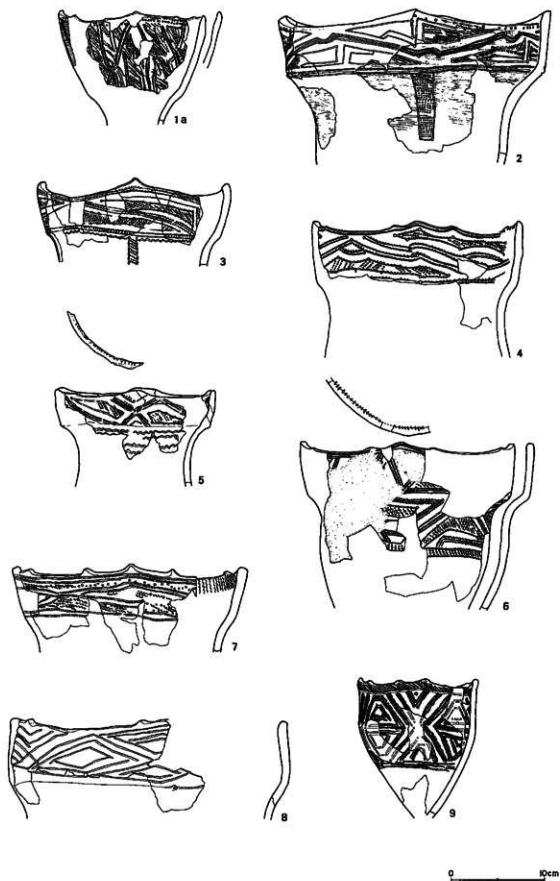
2個体分の破片が出土している。B類土器の文様要素である腹縁圧痕文、沈線文、刺突文で文様が施されるものであるが、文様構成がB類とは異なる。口縁に平行に沈線文をめぐらせ、腹縁圧痕文を斜位に充填する手法 (160)、口縁部の狭い範囲に斜位に、腹縁圧痕文を施文するもの (161) は住吉町式の口縁部文様に類似のものとみられる。この様な点から、本類を物見台式と住吉町式の間位置づけられる可能性があるものとして捉えた。160a~cは小さな山形の波頂部がある波状口縁のもので、副突起がある。同一個体の破片はH-4 (図Ⅲ-27-44a~c)、H-10 (図Ⅲ-69-10) から出土している。平行沈線文を胴半ばまで等間をあけて施しその間に20mm前後の腹縁圧痕文を斜位に充填させている。円形刺突文は沈線上に疎らに施されている。内外面に横位に条痕がある。161は小型の鉢形土器。口唇断面は尖り気味である。内面には横位に条痕があり、炭化物が全面に付着している。

I群D類土器 (162)

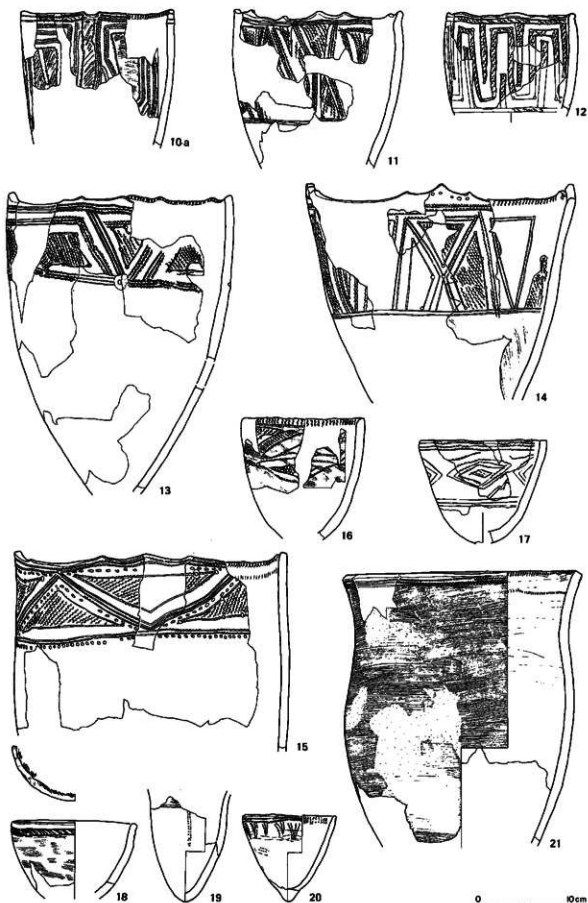
住吉町式に相当するもの。口唇断面は尖り気味である。口縁部に2条沈線をめぐらせ、その間に長さ約10mmの長めの腹縁圧痕文を矢羽根状に施している。口唇内側にもやや間隔をあけて縦位に施文している。胎土に砂粒が多い。内外面に横位の条痕がある。

I群E類土器 (163・164)

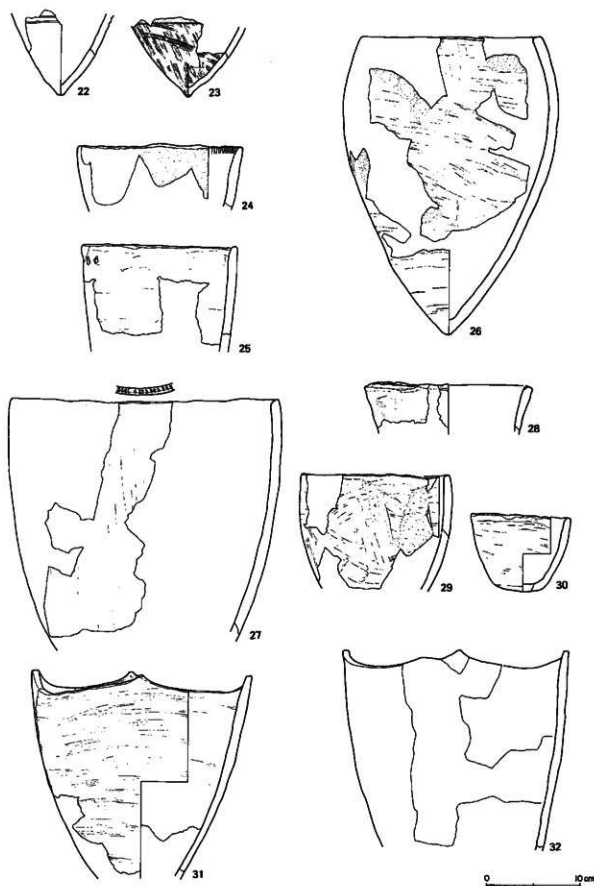
ムシリⅠ式に相当するもの。いずれも焼成の良好な薄手の土器。163は波状口縁をなすとみられ、器壁は口唇に向かって薄くなっている。平行沈線文を横位に浅く施し、斜位の沈線をやや強く施文して、斜格子目状の文様構成となっている。164は横位に多条施された平行沈線文間に、縦位・斜位の沈線を重ねて、163同様、斜格子目文を描いている。横位の沈線文間には、刻目条の刺突文が施されている。内面に横位の条痕がある。



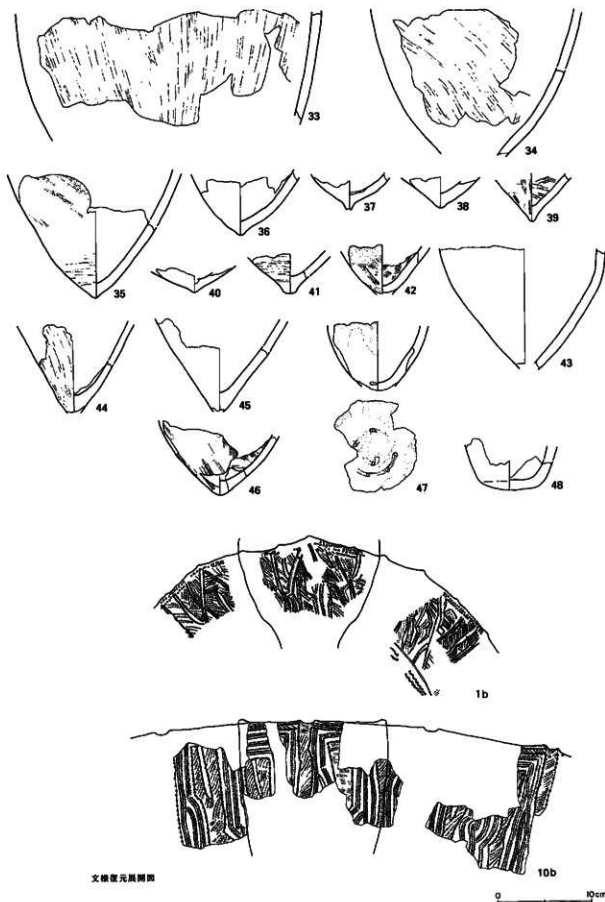
図IV-4 I群B類土器(1)



図Ⅳ-5 I群B類土器(2)

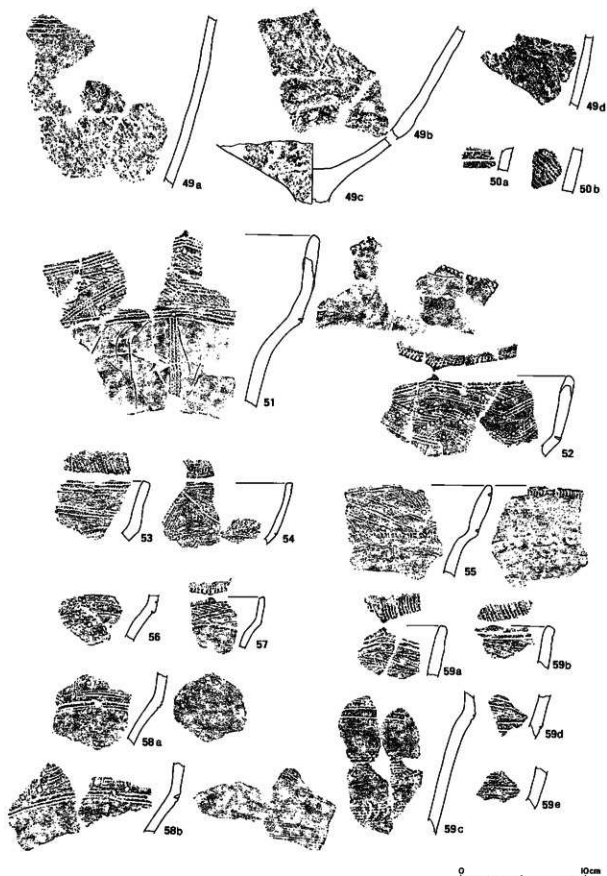


図IV-6 I群B類土器(3)

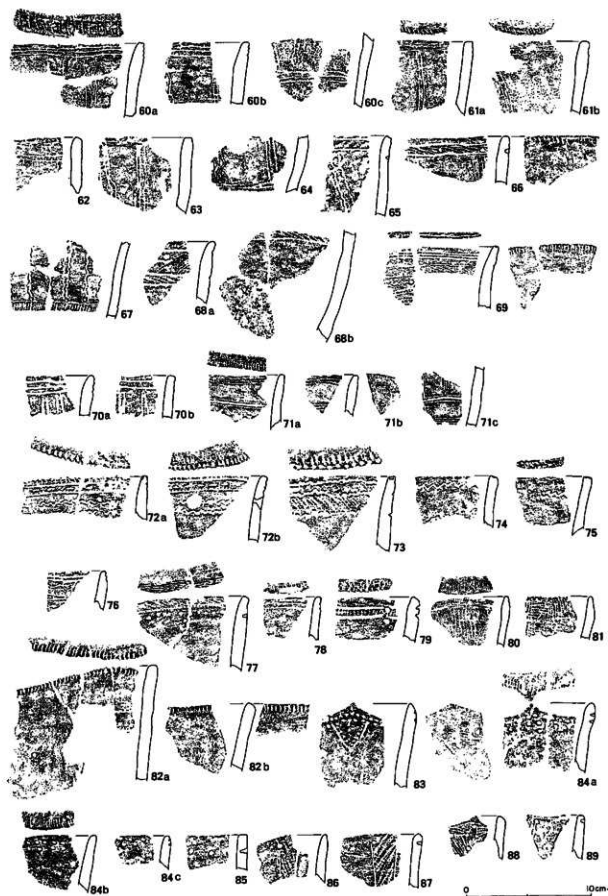


文様復元展開図

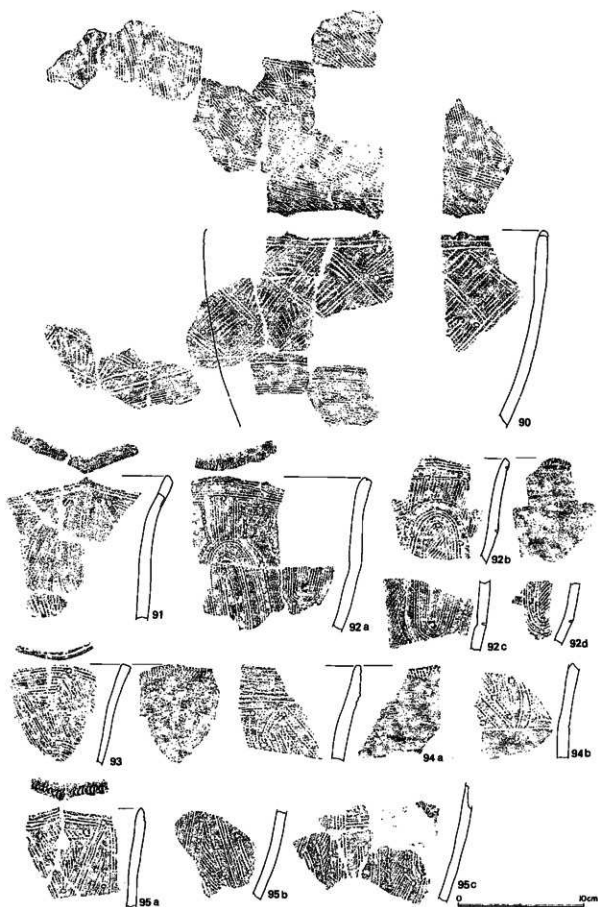
図IV-7 I群B類土器(4)



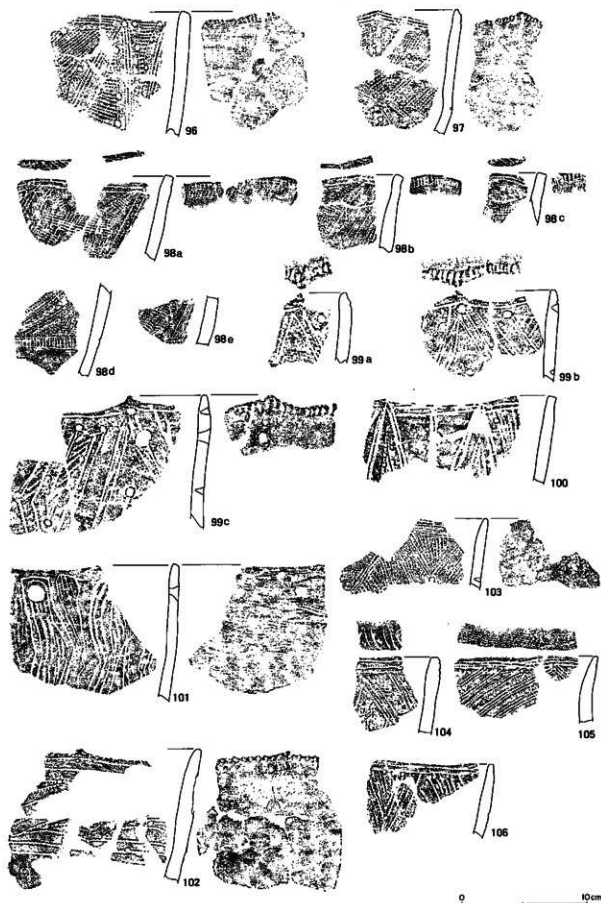
図IV-8 I群A類・B類(5)土器



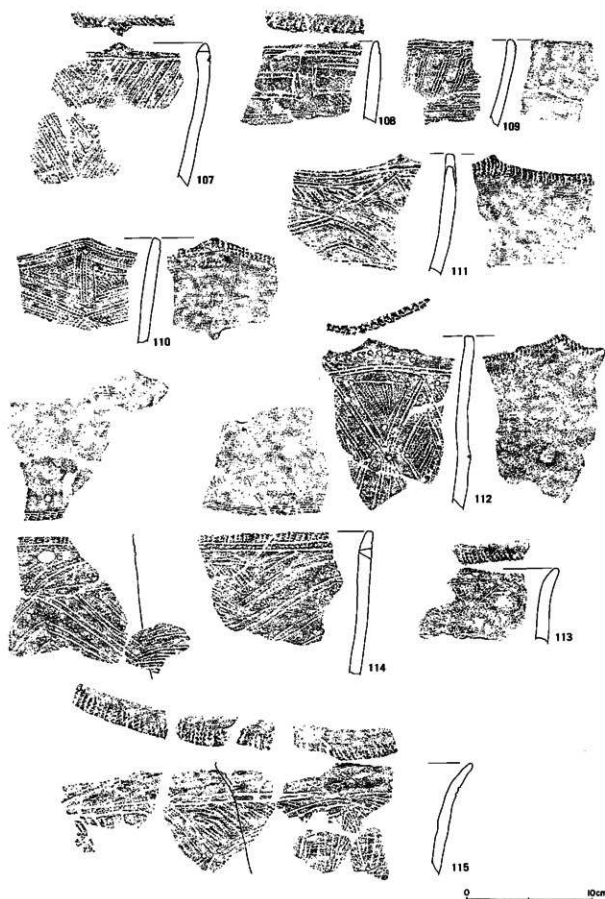
図Ⅳ-9 I群B類土器(6)



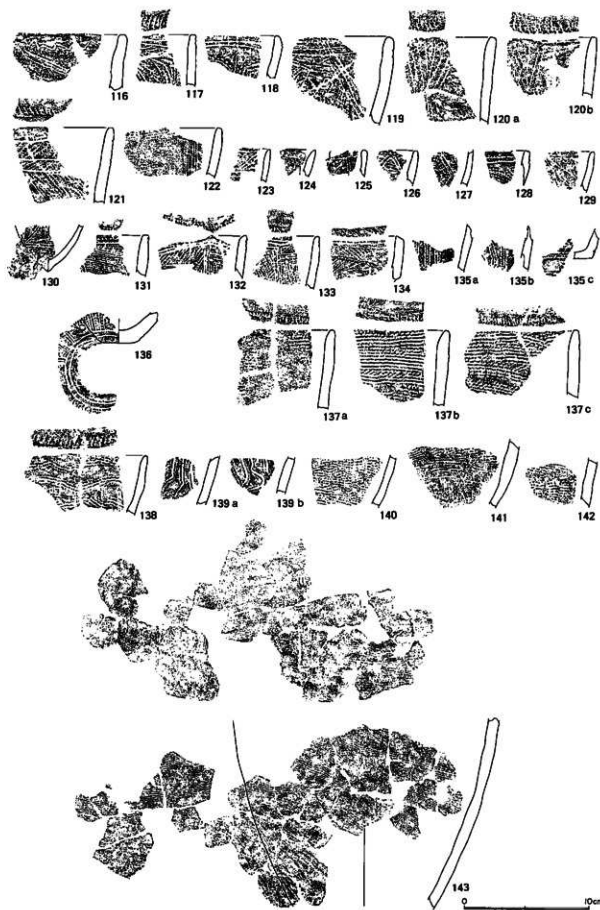
図Ⅳ-10 I群B類土器(7)



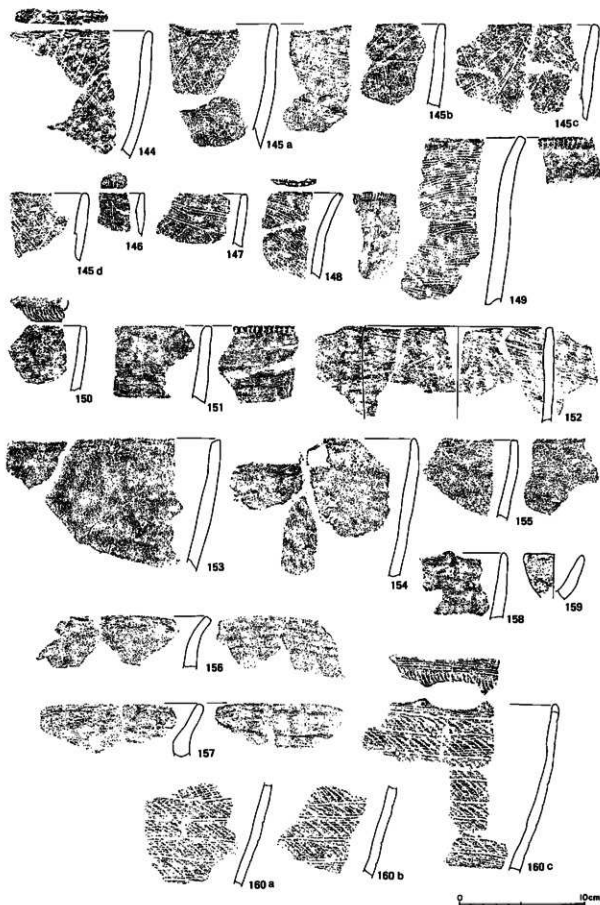
図Ⅳ-11 I群B類土器(8)



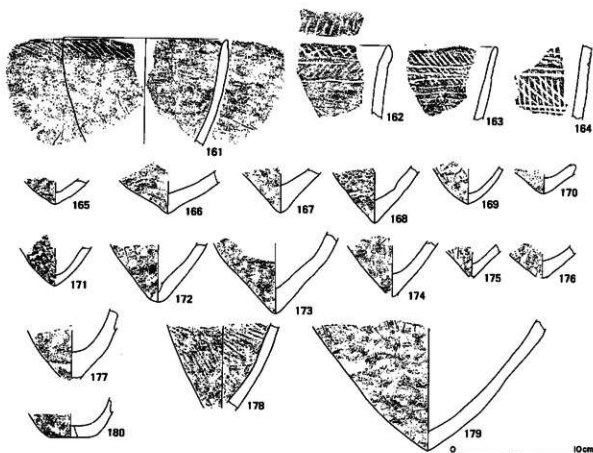
図IV-12 I群B類土器(9)



図Ⅳ-13 I群B類土器(10)



図IV-14 I群B類(11)・C類(1)土器



図IV-15 I群B類(12)・C類(2)・D類・E類土器

縄文時代前期の土器(図III-16~17 図版III-90・91)

II群土器

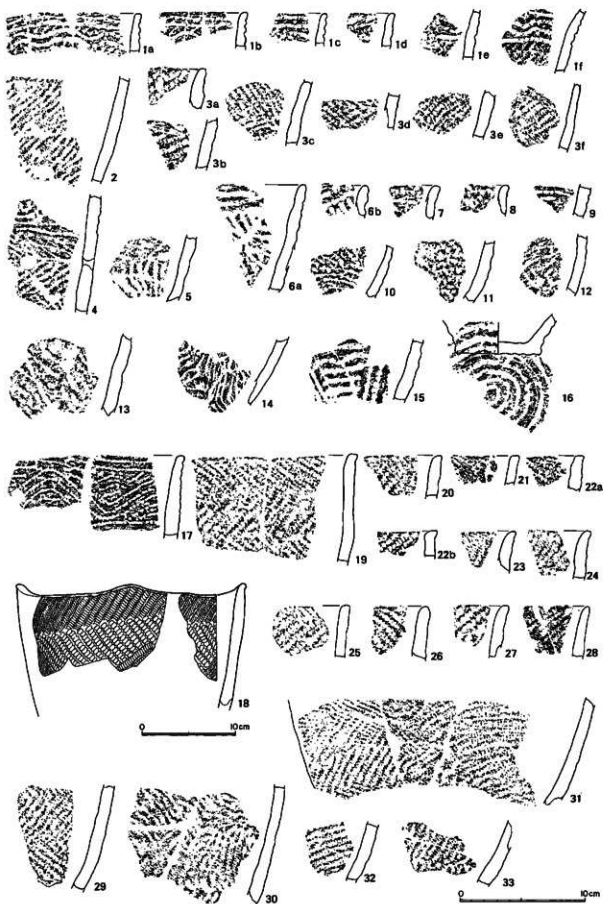
447点出土した。遺構出土のものを含めて復元個体は2個体であるが、包含層では他に16個体程が確認出来た。春日町式・トドホッケ式に相当するものである。小さな破片が多く全体の文様構成がわかるものは少ないが、文様、文様構成からa～c類にわけられる。胎土にはいずれも繊維が混っている。

a類 主に口縁部に押し引き文による文様が施され、胴部には縄文が施されるもの。

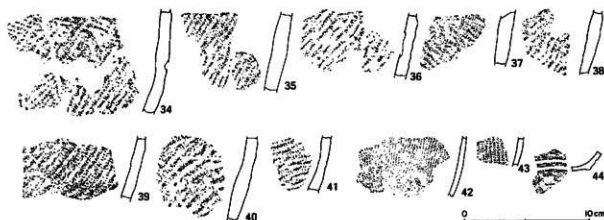
1 a～fは同一個体の破片。口縁部では内面から口唇上まで磨かれている。竹管状工具の背面で口縁部に沿って平行にあるいは波状に2・3条押し引き文がめぐらされている。胴部には、0段多条のLR原体による斜行縄文が施されている。2は胎土、縄文から判断し1と同一個体の可能性がある。3 a～fは色調が黄褐色を呈し他のII群土器よりも比重が軽いものである。器面が磨滅してははっきりしないが胴部には羽状縄文が施されている。4は刺突文的な押し引き文と条の太さが異なる0段多条の原体による羽状縄文がみられる。5は底部付近とみられ、RL原体による斜行縄文地に縦方向に押し引き文が施されている。

b類 押し引き文が施されているもの。

縄文と組み合わせて施文されている可能性はあるが、一応押し引き文のみのものを本類とした。6 a・bは、口縁部には平行にめぐり、その下位では弧状に文様が描かれている。7・8は内面から口唇上のみが磨かれている。同一個体の可能性がある。10～14は底部付近の破片、尖底になると思われる。底部に複数・平行にめぐらされている。13は磨滅してははっきりとはしないが、斜め方向の押し引き文がみられる。地文に縄文が施されているかもしれない。14は尖底をなす小型の土器。波状・同心円状の文



図IV-16 II群土器(1)



図Ⅳ-17 Ⅱ群(2)・Ⅲ群土器

様がみえる。15・16には焼成・胎土から判断し、同一個体の可能性がある。平底のもの。胴部では、縦位・波状の文様がみられる。底部には平行に数条めぐらせ、底面にも同心円状に施されている。17は施文する際、1つ1つの押圧が強いため連続する刺突文風になっているものである。波状口縁になるとおもわれる。口縁部に平行に施した間に、大きく波状、それを繋ぐ短い弧状の文様が施されている。

c類 縄文の施されているもの。

18は4ヵ所に山形の突起部がある波状口縁のもの。内面から口唇上は磨かれ、口唇部の粘土が張り出し気味のところがある。LRとRLの原体による羽状縄文が施されている。LR原体は0段多条である。19～28は口縁部。いずれも内面から口唇上にかけて磨かれている。19は羽状縄文、23にはLR原体による縄文が縦位に施されている。29～41は胴部、29～31・34には0段多条のLRとRLの原体による羽状縄文が、32・33・35～41は斜行縄文が施されている。

縄文時代晩期の土器(図Ⅳ-17 図版Ⅲ-17)

Ⅲ群

5点出土した。42・43は縦行縄文が施されている胴部片。44はあげ底気味の底部。ヘラ状工具による沈線が2条めぐっている。

2. 石器

包含層出土の石器の総数は18,622点、このうち剥片石器群15,515点、礫石器群は2,999点に達し、一方磨製石器群は109点と少ない。図IV-18・19に各石器群の発掘区別出土点数を示しているが、遺構の集中する南東部の発掘区で包含層の遺物数も多くなることが明瞭である。剥片石器群ではN-7-03・04・13・14・53区の出土点数が非常に多いのが目立つ。これは包含層内の剥片集中から得た遺物を加算しているためである。点数の少ない磨製石器群はほとんどがN-7区内で出土しており、特に2番目に多いN-7-33区の2倍を超える点数がN-7-53区で出土しているのが注目される。

礫石器群も集中の傾向は概ね同様であるが、礫石器・円礫が他の遺物に近い分布を示すのに対して角礫はM-7・N-6区内でも相当の出土が見られる。これは人為的な分布ではなく、地質上の要因で自然に包含層に入り込んでいる角礫が多数あるためと思われる。M-7・N-6区内で角礫の多い調査区は尾根状に高まる地形にあたり(図I-5)、基盤層の角礫が侵蝕によって露出しやすい位置を占めている。逆に小さい谷ないし凹地形の位置するM-7-13・N-6-64区付近などには飛び地状に剥片石器群や礫石器・円礫の分布域が存在する。

図IV-20~22に示した取り上げ位置のドット図は、種類の如何を問わず石器のほとんどがI群B類土器期の遺構の付近にのみ分布すること、またI群A類土器期の住居跡H-1やTビットとはほとんど関連を見せないことを明確に示している。H-6・12を結ぶ線から北西では極端に遺物が希薄になってあたかもそこまで人間のほとんど立ち入らない密林が迫っていたかのようであり、またH-2の付近に奇妙に石器の少ない地区があることも注意を引く。N-7-53区に目立って多い石核、磨製石器群の集中に隣接するようにN-7-43区から44区にかけて密集する砥石・石鏃など分類ごとに微妙に異なる分布のあり方も窺われるが、分布の詳細についての解釈は今後の検討に待つ部分が大きい。

以下各石器群について分類ごとに記述する。

剥片石器群(図IV-23~32 図版92~98)

剥片石器群の大半は硬質頁岩製であり、玄武岩・黒曜石・珪岩製品が少数存在する。黒曜石は総数で9点を占めるに過ぎず、珪岩製品は1点、玄武岩も数点に気付いただけである。なお薄片試料の偏光顕微鏡観察では珪質の流紋岩の使用も確認されているが、肉眼では硬質頁岩との区別が容易でなく、点数を特定することができなかった。本書ではひとまず両者を一括して「硬質頁岩製」と記載しておくが、この中には流紋岩製品も混在していることをご了解頂きたい。遺物の類別としては剥片(14,492点)が圧倒的に多く、石器(775点)・珪質岩片(195点)・石核(53点)と続く。

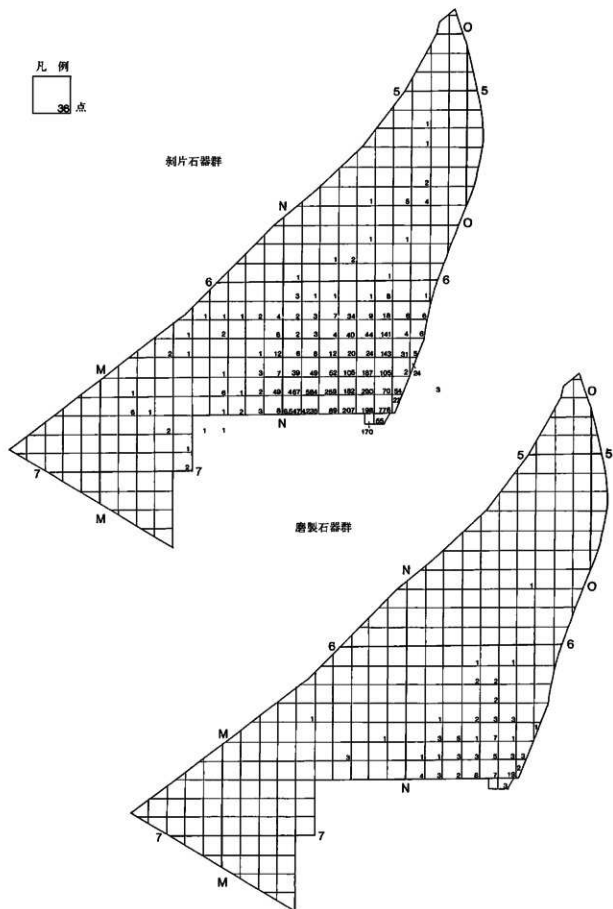
a. 剥片石器

石鏃(図IV-23-1~18 図版92-1)

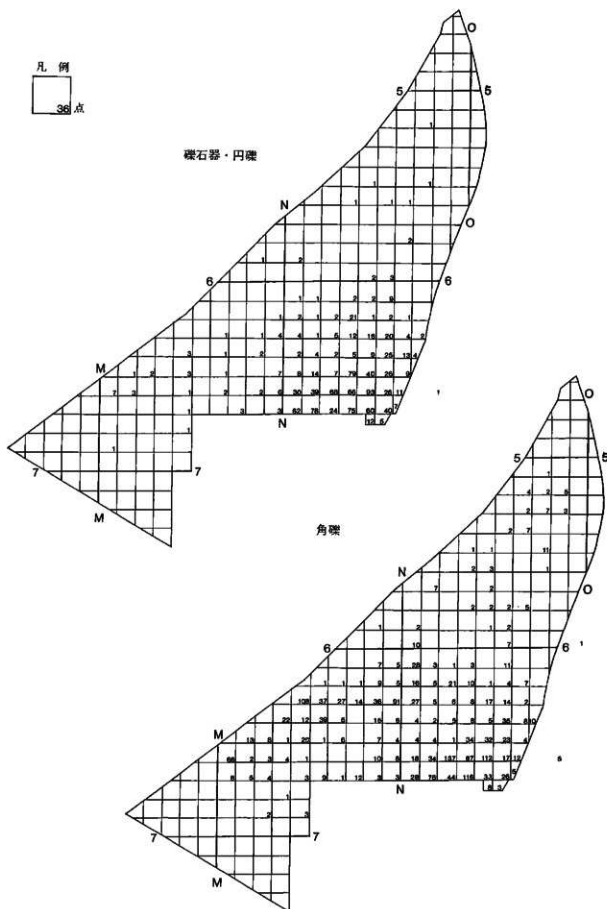
36点を認めた。黒曜石製2点(13・15)を除いて硬質頁岩を用い、貝殻沈線紋土器期のものと見られるのは比較的深い凹形の基部をもつ類(1・2・4~11)である。これらを含めて凹形基部のものは27点、直線形基部(14・15)2点、有茎石鏃(16~18)3点。直線形基部・有茎のものはいずれも両面調整品であるが凹形石鏃には中野A遺跡の前回の調査と同様に非調整品(1~3)・背面調整品(6~8)があり、各5点出土している。しかし腹面調整品はなく、礫面を残した例もない。15は早期末、16は後期後半の遺物かと思われる。

石槍(図IV-23-19 図版92-1)

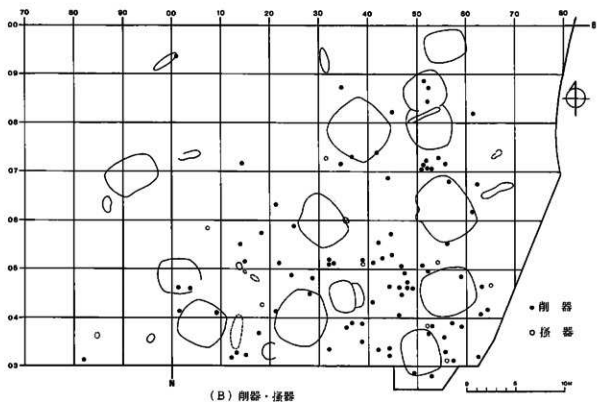
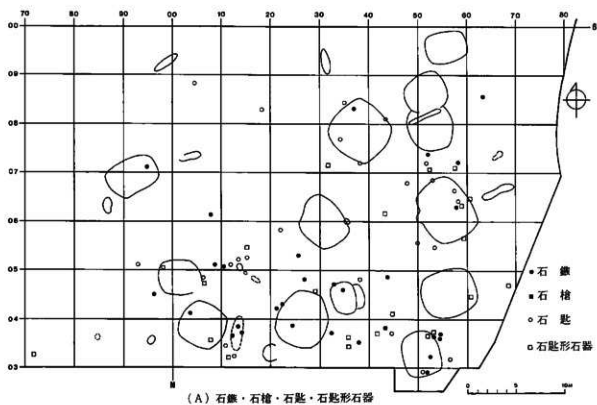
石槍に近い柳葉形両面調整の遺物は稀でないが(図IV-32-145・147)、尖端や側縁の加工が整った確実なものは頁岩製の1例のみであった(19)。尖端と基部の区別は困難。狭く深い細部調整は概ね求



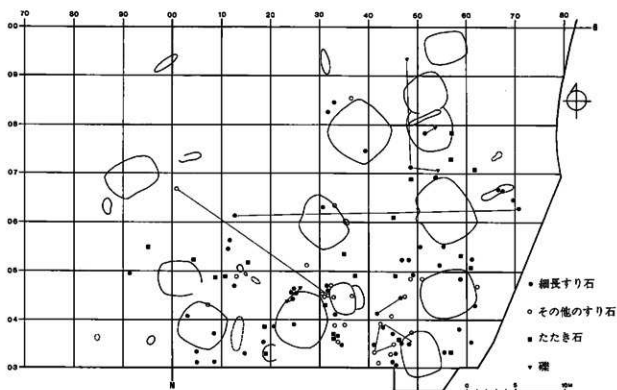
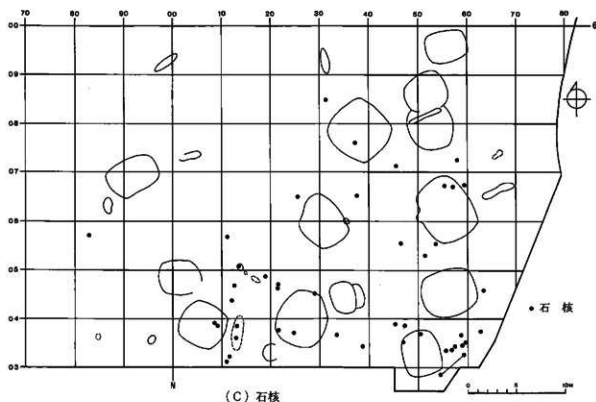
図Ⅳ-18 発掘区別出土石器等総数(1)



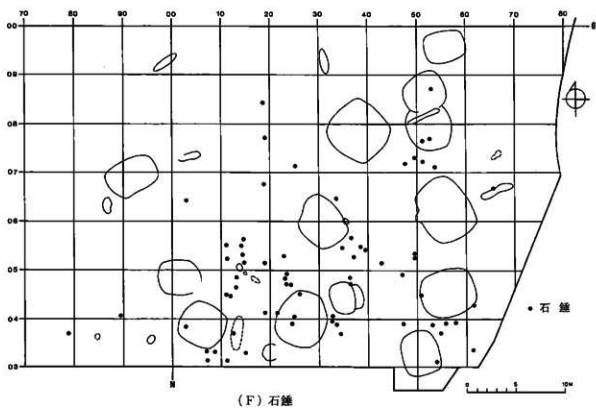
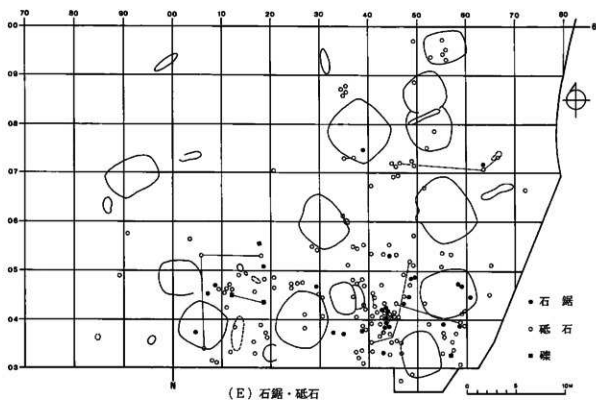
図IV-19 発掘区別出土石器等総数(2)



図IV-20 分類別分布・接合関係図(1)



図IV-21 分類別分布・接合関係図(2)



図Ⅳ-22 分類別分布・接合関係図 (3)

心状、さらに図左面では縁辺に浅く小さい整形の痕を見る。同じ面の一部に黒褐色の付着物。

石錐 (図IV-23-20~26 図版92-1)

9点出土、硬質頁岩を使用。石錐を転用したとみられる26を除くと調整を施した例はない。両面両縁に細部調整を加えた尖端(23・26)は2点のみで、錯向剝離状の加工(21)やほぼ片面整形だけの例(25)が見られる。尖端部に折面のあるもの(20・24・25、20は両縁)が3点あり、折断(あるいは折れた素材の利用)によって簡易な細部調整を補う様子が窺われる。5点では打面側に尖端を作っており(21・24・25)、折面の利用と合わせて厚く鈍い尖端を特徴づける。尖端の摩滅するもの(20・22~24)が5点。基部は加工のないもの(25)、折面(20・24)あるいは細部調整(21・23)のあるものなど一様でない。

籠状石器 (図IV-24 図版92-2)

9点出土、いずれも硬質頁岩製。縦長の素材の打面を端部に配したもの(28・29)と横長剥片の打面を石器の側面に置くもの(27・30)がともに見られる。石器の端には背面(28・29)・腹面(30)あるいは両面(32~34)に刃づけが施されるが、素材の縁辺を残したいいわゆるトランシェ様石器(27・35)も2点あり一様でない。両縁の整形も背面(32)・錯向剝離状(29・30)・両面(31)など各種ある。基部は打面が放置されるか(28・29)軽度の整形が加わるくらいで、両端を直線形に整えたものは31のみ。石器の腹面を調整する例(31・33~35)があることは確認できるが、背面では先行剝離面から区別して確実に調整と判断されるのは34左縁の例がある程度で、少なくとも整美なものではない。結局側縁のほぼ全体にわたる整形と直線形の一端という以上の斉一性は認めにくい。比較的大型の剥片石器でありながら顕著な礫面を残した遺物のない点に素材の選択が反映しているかも知れない。なおH-9出土の遺物(図版105-1)のように端部の縁辺が摩滅しているものはなかった。

搔器 (図IV-25-36~44 図版93-1)

片面細部調整で作った弧状の刃部をもつ石器という基準で硬質頁岩製品11点を認めた。例外なく背面に刃部を作る。縦長剥片の末端に刃付けた搔器(40)は2点のみで、幅広い素材の末端から側縁にかけて急角度の刃をつけた類(36・37)・同じく横長の素材末端に角度の小さい刃部を設け腹面の打摺付近に調整の入る類(38・39)各2点、中央付近で幅の広がる素材の側縁に刃をつける類(41~44)5点と搔器の典型からは違いのものが主体となる。41~44のようなものを搔器と呼ぶことには抵抗もあるが、この種の狭い打面をもつ剥片(腹面側へ湾曲したものが目につく)の背面左縁に凸形の刃部を設けた石器はP-7などでも出土し(図III-88-1)、それが貝殻沈線紋土器期の剥片石器の一類型であるのは事実らしい。なおH-5(図III-37-5・6)で出土している横長の素材の側縁に短かい刃をつけた類は包含層では見出されていない。また搔器に調整を加えた石筥の類は今回の調査では出土していない。

削器 (図IV-25-45、図IV-26・27、28-74~78 図版94)

118点出土しており、ほとんどが硬質頁岩製であるが1点だけ玄武岩製かと思われるものがある。剥片の側縁に刃付けた狭義の削器(46~69)と、横長の剥片の末端を刃部とする横形削器(45・70~78)とがともに見られ、前者が90点、後者は28点と少ない。残り1点は横長剥片の打面付近が刃部となる例外的なものである。素材にはしばしば大きな面積で礫面が取り込まれており(53・60・62・63・66・71など)、半数強の65点に何らかの形で礫面が認められる。また素材の打面が保存される88点のうち礫打面(49・53・55・60・64・69・71・73・74・76)が21例、平坦打面(48・50・62・58・67・70・72)が38例で合わせて約3分の2を占めている。礫を素材とする石核からの剥片剝離作業のうちでも比較的初期に生じる剥片が削器の素材に充てられることが多いのかも知れない。

両面細部調整の刃部は延べ13例と少なく、多くは背面(延べ92例)か腹面(延べ49例)に刃づけが

なされる。狭義の削器では背面刃部延べ73例に対して腹面37例と背面がかなり優勢で横形削器も背面19例に腹面12例と同様の傾向がある。狭義の削器では単一の刃部を有するもの(46・53・63・65・67・69)が61点を占め、背面右縁(47・52・67、24例)・同左縁(49・51・53・69、17例)・腹面右縁(46・48・50、9例)・同左縁(8例)の順に少なくなる。また27点は両縁に刃部を備えており(54・62・64)、背面両縁(54・56)10例・腹面両縁(58)3例・背腹右縁(59・64)2例・同左縁(55・60・61)5例・両面細部調整の刃部を含むもの(57・62)7例の構成である。横形削器の刃部が複数になるのは6例、打面側(45・78)か末端の刃部と同じ面の側縁(74)に刃づけを行う。2つの刃部の一方が凸形、他方が凹形ないし直線形を呈するもの(61など)が11点あり、一端の尖った半月形のもの(56・58・77・78)を含む。

刃部以外の部位に何らかの連続細部調整を加える例は狭義の削器で39点、横形削器で9点を数え、主に背面の整形(45・58・63・65・67・75・76)と腹面の部分的な調整(55・57・61・63・78)が認められる。主面の全体を調整した例は77の1点だけで、概して整った調整を受けない石器であると言える。なお遺構出土の削器には縁辺が摩滅したのが見られたが(図Ⅲ-19-5、Ⅲ-37-12)、包含層の出土品では確認されていない。

石匙(図Ⅳ-29-85~101 図版95-1)

31点を確認、全て硬質頁岩製遺物。大半は縦型石匙に属するもので、寸詰まりの87・90は例外的な存在である。背面に顕著な礫面を残した例がないのは薄手で癖のない素材が選ばれたことを示すものか。片縁に刃のつくもの(85・86・89・93、7点)より両縁が刃部となるもの(88・91・92・94~101、17点)が多い。6点ある背面調整品のうち5例(93~97)、4点ある両面調整品の全ては当然ながら両縁の全体にわたる連続細部調整が施される。片縁だけにある刃部は凸形、また両縁にあるときは一方が凸形、他方が直線形か凹形に作られる傾向がある。腹面調整品はないので両面調整の遺物を除いた27例で素材の使い方を観察でき、2例(86・92)を除いて打面側に対向する抉りを設けている。もう一方の端部は特に加工のない場合(85・86・91、6例)、整形された2縁が交差して尖る場合(87~90・93~96・100、11例)、丸みを帯びた整形が加わる場合(92、2例)がある。抉りのある側の端部を菱形に整形する類(98~100)は遺構出土の類例からみて貝殻沈線紋土器期のもの、また腹面右縁の浅い細部調整を打面として背面を調整した93は早期末前期前葉のものとみられる。

石匙形石器(図Ⅳ-29-102~113 図版95-2)

27点出土、いずれも硬質頁岩製。縦長の剥片の打面付近を挟った例(102~109)が23点と主流で末端を挟る例(110・111)は2点のみ。礫面のない薄い剥片が使われ、分厚い113は例外的。石匙の形を意識したように左右非対称形の素材が好まれる傾向がある。連続した微細な剝離痕が主に凸形の縁辺に認められるが(103~106・108・109・111)、全く微細剝離痕のない遺物もあるのでこれは製作の痕跡ではなく使用痕か損傷らしい。

挟入石器(図Ⅳ-28-79~84 図版93-2)

17点出土、硬質頁岩製である。素材はかなり薄いもの(84)から厚手の剥片(83)まで一様でないが、背面に礫面を取り込む例(81・82)が7点あって目につく。比較的に明瞭な挟りが1ヵ所作られる類(79~82)は14点を占め、腹面に刃づけする例(79・82、8点)と背面を挟る例(80、4点)が主で両面細部調整による挟り(81)は2例のみ。残る3例はごく浅い挟りが複数並ぶもの(83・84)。83・84では背面・腹面の挟りがともに見られ、挟り内には硬いものに押しつけて用いた使用の痕とも考えられる微細な剝離痕が多い。しかし他の例ではほとんど微細剝離痕が見られない。なお7点の遺物に挟り以外の整形ないし刃づけが認められるが(79・81~83)規則性を見出しがたい。

未分類剥片石器 (図IV-30~32 図版96・97)

剥片石器のうちでは最も多く448点に達する。大半は硬質頁岩製品であるが玄武岩・黒曜石・珪岩といった稀な石材がこの分類に集まる傾向があつて注意される。各個の観察も終えていないのでここでは調整の有無によって大別し、それぞれ代表的と思われる遺物数点を紹介するとどめる。

1) 非調整品 (114~134): 背面・腹面ともに顕著な調整を受けないものは非常に多く、336点と未分類剥片石器の約82%を占める。114・115は石錐形に整形された石器である。基部の湾入が深い114はⅢb 1層出土で早期中葉のもの。116は急角度の細部調整で両縁を整形した石錐に近いもの。しかし尖端は扁平である。132は打面側の両面左縁を整形したもの、やはり石錐に近いが機能部は短い。117・118は端部に筧状石器に似た直線形の刃部をもつが側縁の整形はない。117・119は搔器に近いもの。前者は筧状石器とも考えられ、幅広い平坦打面をそのまま残す。後者は主に腹面に刃部を設け、一部は両面細部調整となる模様。120~122・124はほぼ直線形の整形をもち削器に近い類。細部調整の連続する範囲が短い (120・124) か細部調整自体がごく浅い (121・122)。123、背面左縁に細かい挟りが連続し鋸歯縁石器とも呼ぶうものであるが類例に乏しい。もう一方の側縁にも両面に浅い整形が見られる。125~130は周縁の広い範囲を整形してほぼ線対称形に作った類で、石錐・石槍などの未製品を含むものと思われる。127・129など削器との区別に難もあるが器軸の存在が明瞭である。131は両縁をかなり大きく整形した遺物、あるいは筧状石器に近いものかも知れない。133・134は腹面の一部に深い細部調整を加えただけの石器。133は打痕の調整を意図したものか。

2) 背面調整品 (135~138): 背面だけに広範な調整の施されたものは18点と少なくいずれも硬質頁岩製。136は石槍ないし横形削器に近いもの、横長の素材を用いる。背面の調整の後で腹面の打面側・末端側それぞれの中央付近に対向する浅い挟りを加えている。137・138は縦長素材、非対称形の輪郭をもちおそらく石匙の断片である。腹面右縁に入れた浅い細部調整を打面として背面を調整した138は早期末前期前葉の石匙である可能性が高い。135も腹面に比較的急角度の浅い細部調整が連続し、側縁ではこれを打面として背面の調整が行われるが深く入らずに終わっている。筧状石器に類するものであろうか。

3) 腹面調整品 (139・140): 腹面だけを調整した未分類剥片石器は11点、背面調整品よりさらに稀となる。赤井川産とみられる黒曜石を用いたもの (139) と玄武岩製品 (140) 各1点、他は硬質頁岩製。139は背面に礫面、また腹面右縁には素材の礫打面の一部と思われるものが残っている。腹面右縁寄り (打面側) を調整し全体を線対称形に整形する。140はやはり背面に礫面が残り、折れた後も破片の一つには折面から腹面に細部調整を加えている。H-4床面の出土品と接合しており貝殻沈線紋土器期のものとみて差し支えない。

4) 両面調整品 (141~150): 53点を認め、玄武岩製品 (147) 2点、黒曜石・珪岩 (145) 製各1点、他は硬質頁岩製。141~144は概ね二等辺三角形に整形されたもので石錐の未製品を含んでいる可能性が高い。142はおそらく横長の素材を用いるもの。143の背面には礫面が観察される。145・147は石槍に近い紡錘形の石器、後者の腹面尖端寄りに見える大きい剝離面は素材剥片の主剝離面らしく、おそらく横長の素材。調整は大振りの平坦な剝離痕を残し、周縁の両面に浅い整形。背面にやや深く入る整形があるのは折れた後の加工らしい。146は両縁が平行する石剣様の遺物。148は両縁に小さい挟りが連なって鋸歯縁を形成している。挟りは調整とは概ね別個に浅い細部調整 (主に背面) で施したものである。149は背面中央に礫面を残しており、背面はあまり調整していない疑いがある。背面下部にはやや深く入る平行した細長い剝離痕が注意を引くが部分的。150は分厚い両端のある石器、図中の右上端寄りには急角度の微細な剝離痕が集中する。

b. 石核 (図版98)

53点を認め、全て硬質頁岩製品である。観察・図化の余裕がなかったので来年度の報告書に改めて内容を記載する予定である。

磨製石器群 (図IV-33~36 図版99・100)

包含層出土の磨製石器群は107点で、石器等の出土点数の約0.6%を占めるに過ぎない。大多数は蛇紋岩・泥岩と思われる石材を用いているが頁岩 (1点)・輝緑岩 (4点)・流紋岩 (3点) などを使用した遺物もいくらか含まれており、細片では剥片石器群・礫石器群との区別を徹底できない部分がある。分類ごとの出土点数では磨製石器 (51点)と擦切残片 (31点)が多く、未分類磨製遺物 (16点)・研磨石材 (9点)は少ない。

a. 磨製石器

磨製石斧 (図IV-33・34 35~168~174 図版99)

出土点数は50点、接合の結果最大に見積もって42個体が得られている。素材を整形する方法の違いによってほぼ3つの類別と分類不明のものにわけて述べることにする。

151は扁平な円礫を素材にほとんど整形を行わずに刃をつけた唯一の例である。両刃に近く凸刃、やや偏刃。主に図の右面に研磨によって礫の凸部を取り去った痕が見られる。泥岩製。

152~168は擦切技法によって得た整った形の素材を用いる擦切石斧。39個体確認できるうちの29個体までが蛇紋岩製、材質不明1個体。石材と擦切技法との強い関連を窺うことができる。両縁の整形の状況がわかる21個体のうち擦切折断の痕が両側面にある (160・163~166) のは10個体で、一方の側面だけを擦切折断したとみられるもの (152・154~159・167・168、12個体)の方が少し多い。これは後述するように研磨石材の分割の方法に由来する特徴である。刃部の残っている20個体のうち19個体は片刃、両刃はやや疑わしいものが1例あるに過ぎない (157)。刃縁の形状は凸刃 (152~158・160~166・168) 19個体・円刃 (167) 1個体。刃面の研ぎ出しは顕著でなく、明瞭な鋸を形成することは稀である (152)。偏刃のものは14例、うち片刃の偏刃が13例あるが、刃面の湾曲が弱い方の主面 (図の左面) に向かって左へ偏る例 (152~155・158・160・162・165・166) が10個体と明らかに多い。素材の端部が元来器軸に斜交しているために偏刃が多く誘導されるのではないかと疑いをもたれるが、むしろ素材端部の偏りに逆らって偏刃を形成したであろうと思われる例も見られ (165・167)、かなり意図的に、おそらくは利き腕の問題などに関連して規則的な偏刃が作られているのではないと思われる。

素材の周縁に剝離を加えて整形しているもの (171) は1点のみ。頁岩製で片刃、円刃。H-4床面出土の基部と接合しており、貝殻紋線紋土器期のものである。

169・170・172~174は素材の整形法が不明のもので10個体ある。輝緑岩製4個体、蛇紋岩製・流紋岩製各2個体、泥岩製・材質不明各1個体。刃部の残る5個体はいずれも片刃、4点は凸刃で3点が偏刃である (169・170・172・174)。定角式に近い三味線形断面の基部 (173) が3個体ある。

使用の痕跡については観察が徹底できていないが、160・166の両側面と基部は黒ずんでいて他の部分と明らかに異なり、おそらく着柄の痕跡であろうと思われる。出土点数にして10点、疑わしいものまで含めると20点が火を受けて変色している。

b. 擦切残片 (図IV-35-175~179 図版100)

出土点数31点の全てが蛇紋岩製である。両縁に擦切溝があるものは2点のみで、他は片方の側面だけを擦切折断している(175~179)。前者の1例では一方の擦切折面が研磨され、他方は研磨がない。おそらく一時に両縁の折断を行ってはいないのであろう。磨製石斧の素材とは考えがたい小さな残片も多いので、素材の分割ではなく整形だけを目的に擦切折断を行なう場合があったものと思われる。どちらかの端が折面となっている擦切残片が多く、擦切折断に際して折れる場合が多いのかも知れない。火による変色は疑わしいものを含めて10点で観察できる。

c. 研磨石材 (図IV-36 図版100)

9点出土しており、蛇紋岩製7点、泥岩製・材質不明各1点。周縁に刻彫を加えて整形した例が1点ある(182)。182・184は研磨が部分的にしか加えられないもので、遺跡へ搬入される時点での石材の加工状態を示しているのかも知れない。擦切溝は4例に認められ、確認できる範囲では両面に各1条のみで、一方の縁に寄せて切るものが2例(180・183)、中央に切るもの1例(182)。溝のない遺物も縦に分割する限り3個以上の素材を得られるとは思えない(182・184・185)。おそらく1個の研磨石材を2つに分割する場合が多く、そのため片縁だけに擦切溝のある磨製石斧が優勢なのであろう。擦切残片の項で記したように素材両縁の折断が別の機会に行なわれているらしいのを見ると、規格的な素材を量産する意図は希薄で、必要に応じて一つのものを二つに分ける作業を繰り返しているという印象を受ける。

礫石器群 (図IV-37~44 図版101~104)

礫石器群の大半は礫(角礫1,874点・円礫688点)であり、礫石器は出土点数で437点を占めるに過ぎない。材質は多様であるが礫石器では器種に応じて特定の岩石が選ばれる傾向が比較的に明瞭である。

a. 礫石器

包含層出土の石皿は1点であり、H-4の石皿と接合して既に説明したので(図III-32-53)、それ以外の5器種と未分類礫石器について述べる。

たたき石 (図IV-37-186~193 図版101)

出土点数は30点、接合して29個体。輝緑岩製(10例)が多く流紋岩(7例)・珪岩(2例)・硬質頁岩(1例)などが見られる。素材は珪質岩片を用いたものが1例(193)ある以外は円礫である。長手の円礫を用いた類(186~190)は12個体、一端が細くなる形のもの(186・187・189)7例を含み、主面に集中する敲打痕(図版105-2)の見られる類(186・187、4個体)と側面ないし端部だけに打撃の加わる類(188~190、8個体)に分かれる。他に扁平な素材の側面ないし端部に機能部のある例(191、4個体)、手頃な塊状の素材の端部が側面を敲打する例(192・193、6個体)が認められる。193の上端にはごく狭いが敲打痕を切る研磨面があり、砥石とするべきかも知れない。

すり石 (図IV-37-194~197 図IV-38・39 図版101・102)

出土点数は95点、接合の結果最大81個体が確認される。材質は不明のものが26個体と多いが、判断できるものでは輝緑岩製が48個体と全体の6割を占め、他に安山岩製(6個体)・流紋岩製(1点)・玄武岩(?)製(1点)が少数ある。細片以外は比較的容易に扁平な楕円形の素材を使う類(194~197)と長手で厚手の礫を素材とする類(201~217)とに区別でき、前者が18個体、後者が58個体と約1対3の比率で認められる。

扁平なすり石は全ての例で主面に平滑なすり面を形成しており、両主面に観察できる例が12個体、片面のみすり面となるものが2個体。この平滑なすり面には深い窪みを作らず散在ぎみの敲打痕が重複していることが多く(194・197~200、図版105-3)、11個体で確認できる。概してすり面に先行するように見受けられ、おそらく使用の痕跡ではなくすり面を形成するための加工痕であろうと思われる。石器の側面には細かい敲打痕混じりのすり面を見る場合があり(194・195・197・198、8個体)、6例では両側面に観察される。このほか端面ないし側面に敲打痕が集中する場合がしばしばあるが(195~198、5個体)、それを全く欠く例もあるので(199)たたき石との複合の結果ではないかという疑いが残る。ただし側面ではすり面と敲打痕とを明確に区別できないことが多い。

長手のすり石は例外なく側面ないし稜上に帯状のすり面を備える。このすり面はザラザラした感触で光沢のないものが多く、連続しない剝離痕をしばしば周囲にともない(203・208など)、条痕が認められない(図版105-5)。扁平なすり石の側面に見られるものに近く、おそらく主にすり面に垂直な方向の加撃によって形成されるものと思われる。この帯状のすり面が1ヵ所しかない例(201~207・211・213)18個体に対して2ヵ所(210・214・215・217)・3ヵ所(216)にある例はそれぞれ10・8個体。同じ位置に隣あって2条のすり面が生じている例(212・214~217、10個体)があることからみて、別に複数ヵ所の機能部が必要なのではなく、おそらく使用のためにすり面が幅広くると狭い稜線を求めて機能部の転移が行なわれたものと考えられる。従ってすり面に沿って見られる連続した剝離(206、2例)は、狭い機能部を再生するために意図的に加えられたものの可能性がある。帯状のすり面に隣あう主面には扁平なすり石のものに似た平滑なすり面が形成されることが多く(205・207~215・217、38個体)、やはり散在ぎみの敲打痕と重複することが普通である(205・209・210・213・214、図版105-4、15個体)。しかし扁平なすり石のものに比べると一般に軽微な印象を与え、また主面全体ではなく側面のすり面に接するように偏って形成される傾向がある。22個体までは両方の主面にすり面が見られ、片面だけの例(4個体)は少ない。なお帯状のすり面も時にかなり平滑になっている場合があり(201・215、図版105-6)、幅の狭くなったすり面にめだつ。幅が狭いのすり面の平滑な201は石材も特殊(流紋岩)で、あるいは石鋸とするべきかも知れない。このほか18個体で集中した敲打痕が多様な部位に見られる(209・217など)。特に端面に打撃の加わる例が目につく(204・210・213・214・216、12個体)が、それを全く欠いた例もあるので(202・203・206・207・211・212・215、8個体)やはりたたき石との複合が問題となる。

礫石(図IV-40・41 図版103)

172点と礫石器の中で最も多い出土点数。しかしこれには比較的脆い岩石を多用することが相当影響しているはずで、点数自体はそれほど意味をなさないと思われる。また定形性の低い石器の性格から破損の認定が難しく、完形個体を基準とした記述・計数は徹底しがたい。ここでは幾つかの例を紹介し、主に素材と機能部の多様性を示すにとどめる。材質は流紋岩が主流で(152点)、稀に輝緑岩(4点)・硬質頁岩(2点)・材質不明(9点)が少数ある。なお実測にあたっては主要な研磨面と思われるものを任意に選び、横切断面図に表れるその研磨面の湾曲が最も強くなるよう遺物を据えて図化した。

218~220は円礫の主面を研磨した例。219の素材はすり石に多用される輝緑岩の扁平な円礫で、折れたすり石を作り直している可能性がある。221もおそらく円礫素材だが、火を受けてか表面の非常に荒れた礫を利用している。

222~238・240はほとんど摩滅していない部位を広く含むことからみて礫の破片を素材としているらしいもの。222~225・237は比較的厚みのある礫片を使い、224には部分的に円礫の表面が残る。222・223

は主に主要な研磨面が1ヵ所ある例。224・225、凹湾した顕著な研磨面が鞍状に隣あって形成される。239も小さな研磨面の切り合いが多い。224・237には側面にも研磨が施される。226～231・238はやや厚いが平坦な素材を使い、226～228では湾曲の緩い研磨面が両方の主面に設けられる。229は図の左縁に短いが突出した研磨面があり、石鋸とすべきかも知れない。230、集中した敲打によって両面に2～3ヵ所に分かれた窪みを設け、これを切って研磨面を作る。231には左傾した大小の溝状の研磨痕が多く見られる。238は接合の結果大きな板状に割った素材が復元されているが、それをさらに分割してから砥石に用いているらしい。232～235は扁平な円礫片を素材とし、特に232・233は割れ面を機能部にあてたもの。236も非常に扁平、研磨が進み素材の割れ面は部分的に残るのみである。240は側面だけに凹凸の多い研磨面がある珍しい例。周縁は主に図化した面に剝離を加えて半円形に整形したものらしい。

239・241～243は研磨が進み素材について判断しづらい。239は円礫かその破片が素材らしく、小さい剝離面の切り合いが多い。240には224・225に似た鞍状の研磨が見られる。242・243、やや薄いが振れた多角柱状のもの、ともに遺物の長軸に対して左傾する広い溝状の研磨面を含む。

石鏃 (図IV-42-244～252 図版103)

33点出土、接合の結果最大27個体を確認。ただし248では左側の破片に折れた後の研磨が確認でき、破片が独立の石器として扱われたことを示すようなので、個体数の確定には問題が含まれている。材質の内訳は流紋岩製24個体、輝緑岩製・泥岩製各1個体、不明2個体で砥石の石材選択と近いことが窺われる。

素材の点では扁平な円礫を利用するもの(244・246・249・250、4個体)と薄く割れた礫片を素材とするもの(246～248・251・252、22個体)に大別され、それぞれに連続する剝離を機能部に加えて調整した類(248・249・252)とその形跡のない例(244～247・250・251)とが認められる。機能部の調整の有無を確認できる遺物は19個体、うち調整を施すものは4個体で片面の加工による例(248・249)と両面加工(252)が各2個体。なお円礫素材で機能部を薄くしたものは1例(249)のみ。

機能部は1ヵ所(245～249、9個体)・2ヵ所(244・251、2個体)・3ヵ所(252、1個体)の例が確認され、機能部の2辺が鋭角に交差する遺物(251・252)を3例得ている。なお主面に研磨面をもつ石鋸(245・248・250～252)は12個体、機能部以外研磨しない例(7個体)を上回り、うち両面を研磨するものが7個体、片面のみの例4個体を数える。なお磨製石斧・擦切残片には焼けた痕跡をもつ例が目立ったが、それらと関連が深いと思われる石鏃には火を受けたことの明瞭なものがない。

石鏃 (図IV-43・44 図版104)

出土点数は82点、接合して80個体。材質は流紋岩製のものが43個体と半数強、輝緑岩製(16個体)がこれに次ぎ、他に片岩製(9個体)・泥岩製(3個体)・玄武岩・頁岩・軽石製(各1個体)がある。材質不明のものは6個体。本書では対向する挟りの中央を結んだ線(図の横方向)に測った遺物の径を長さと呼んでいるが、ほぼ完形とみられる71点のうち53点は長さが幅を上回る類(256～274)、17点が幅が長さを上回るもの(275～283・285)であった。流紋岩・輝緑岩を主体とする石材の選択はどちらも変わりが無い。このほか挟りの2対あるものが1点存在する。

薄く割れた礫片(割れ面が他の面より新鮮なもの)を素材とする例が71点中4点あるが、他の67点は扁平な円礫を用いている。このうち礫の側縁が折れている例(264)が7点あり、長さが幅を上回る類に限って認められる。細長い素材を求めた結果側縁の折れた礫が選ばれたか、意図的に折ったかのいずれかであろう。挟りを作る手法は一様でなく、71点のうち片面に剝離を加えて挟る例(276)10点、2つの挟りを別の面に加工する鉤向剝離状の例(256～258)4点、一方に両面、他方に片面の打ち欠きを施す例(259～263・272・276～280)26点、対の両方を両面加工する例(264～271・274・282・283)25

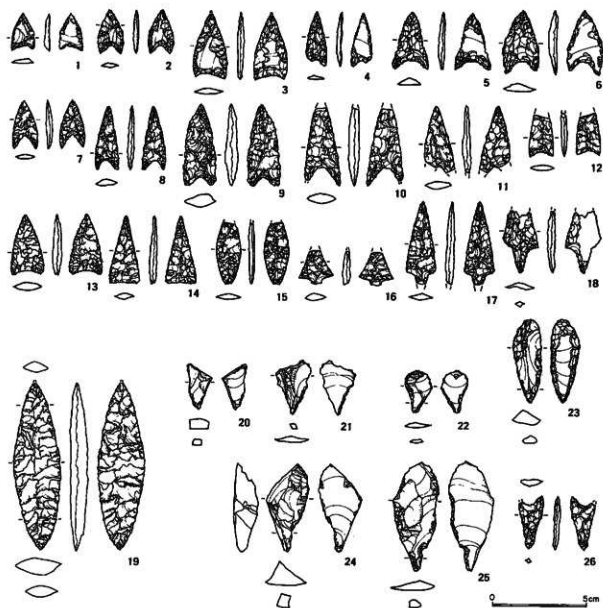
点を認める。なお以上のうち4点は折面を打面として剥離を行っており(263・273)、端部の折れた礫を素材にしたものと思われる。また折断によって一方の挟りを作っているらしいもの(275)が1点見られ、284にもその可能性があるが、もし破損品であるとすれば今回出土したものの中では異例に大きい石錘ということになる。挟りの技術に関しても細長い類(256~274)と幅広い類(275~283・285)の間に顕著な違いはない。なお挟りのない縁辺にも剥離を加えた遺物(273・274・285)が完形品のうちに4点ある。

他の器種と複合する例は6例、たたき石(270、2個体)・砥石(264・271・272、4個体)との複合が見られる。凹凸が多くて砥石とは思えないが表面が摩滅し擦痕の見えるもの(274)が2個体、焼けた痕跡のあるもの6個体を認める。

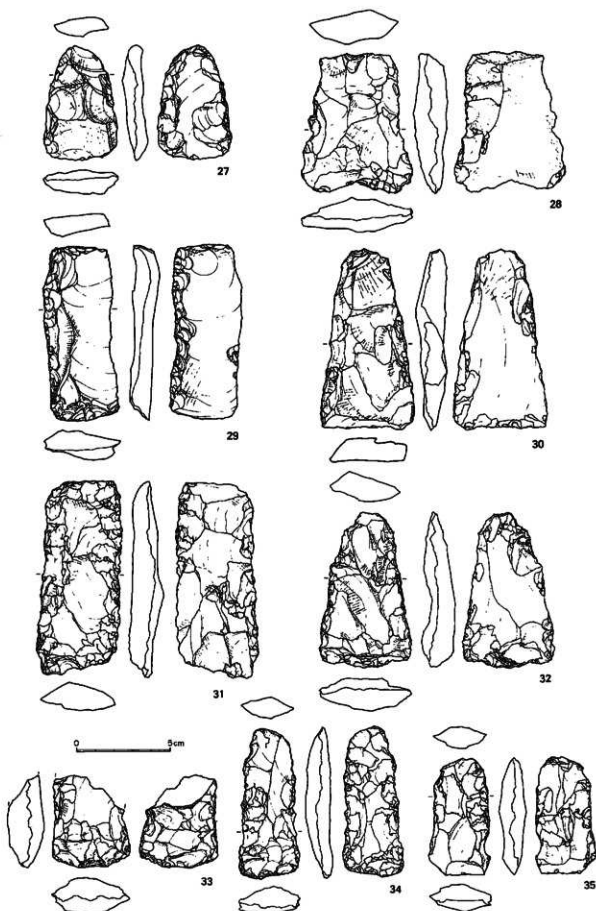
未分類礫石器(図IV-42-253~255)

出土点数24点を未分類礫石器とし、接合を経て最大23個体を数える。石錘かと思われるが折れていて不確定なものが14個体、やはり石錘らしいが挟りが明確でないもの4個体、たたき石か石錘だが決定の困難なもの(253)2個体と多くは石錘関連の遺物である。253は最大幅の部分に両縁から大きな打ち欠きが入り、細い方の端部寄りには両面に敲打痕を見る。安山岩製。

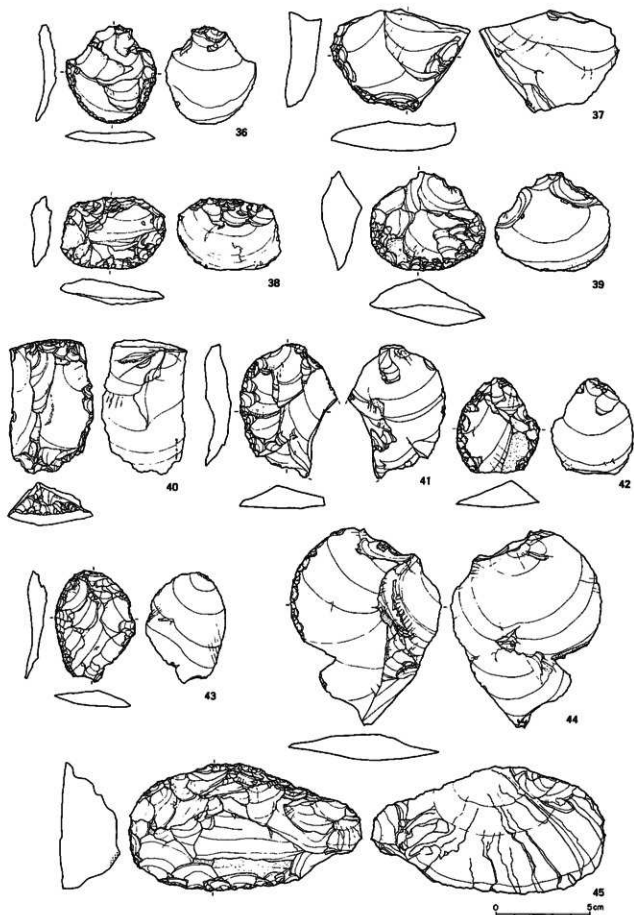
また6器種の礫石器以外のものと思われる遺物は2個体ある(254・255)。254はおそらく一種の横長剥片で、側面に見える連続した剥離面がこの剥片の打面となっているらしいが、このような急角度の剥離痕をもつ遺物は上記の礫石器の中には見られない。安山岩製。255は棒状の遺物で不明瞭ながら研磨を受けているらしく、稜線が1条見られる。焼けて破損したようで部分的に赤く変色。材質は不明である。石製品とすべきかも知れない。



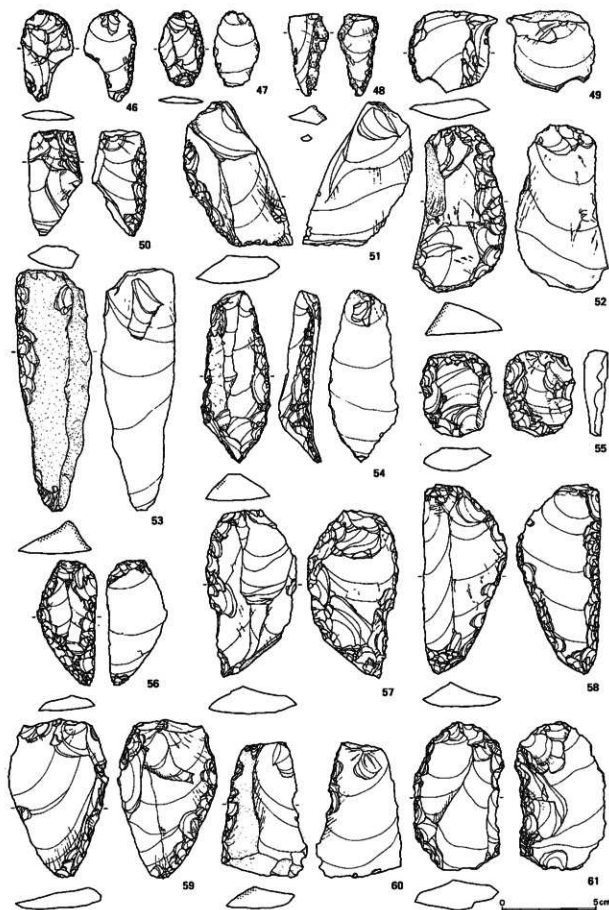
図Ⅳ-23 石鏃・石槍・石錐



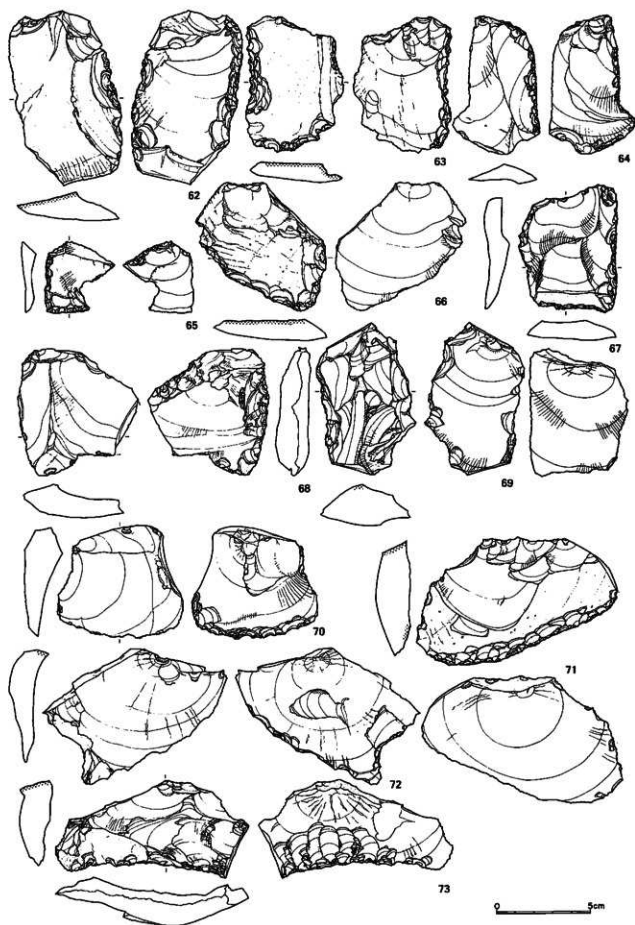
図Ⅳ-24 寛状石器



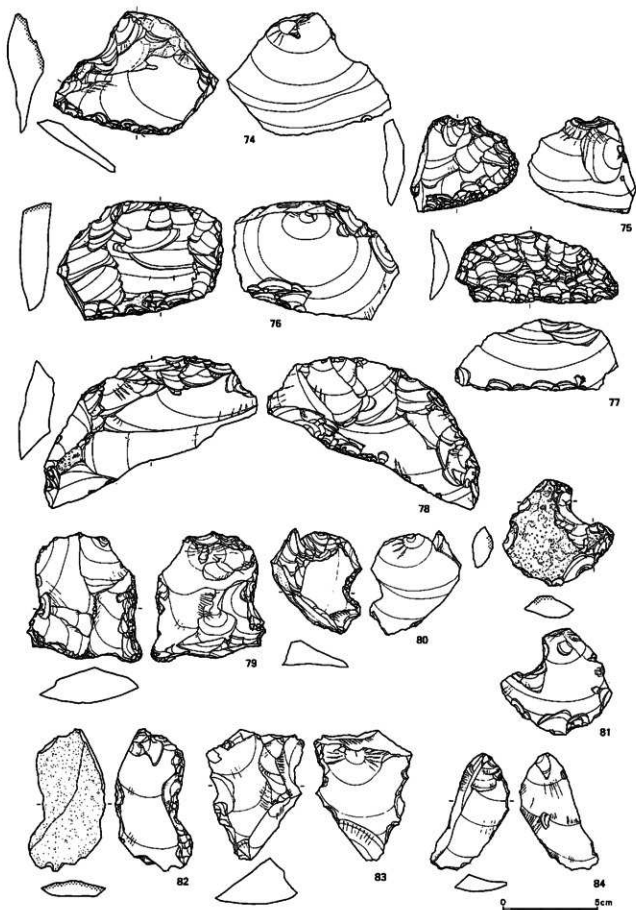
図IV-25 搔器・削器 (1)



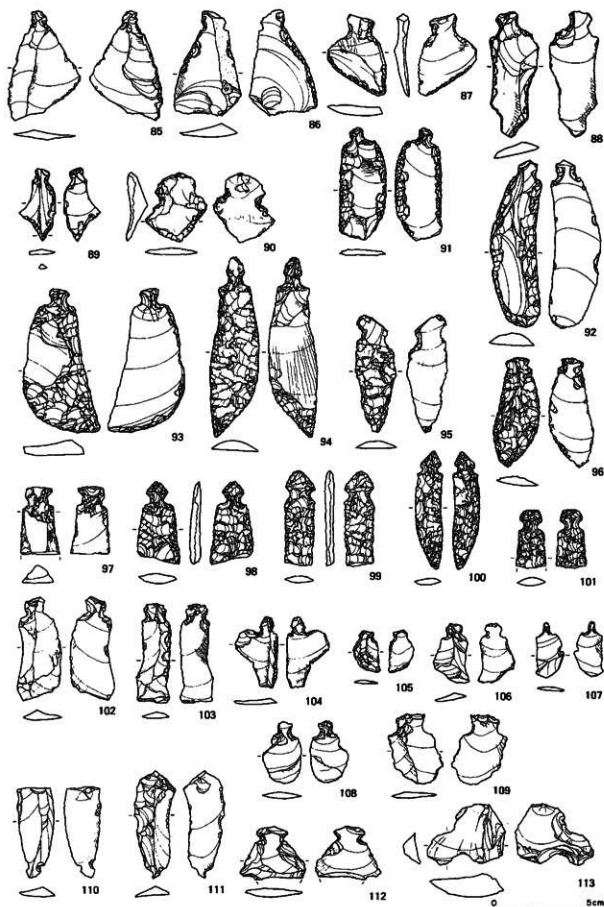
図IV-26 削器(2)



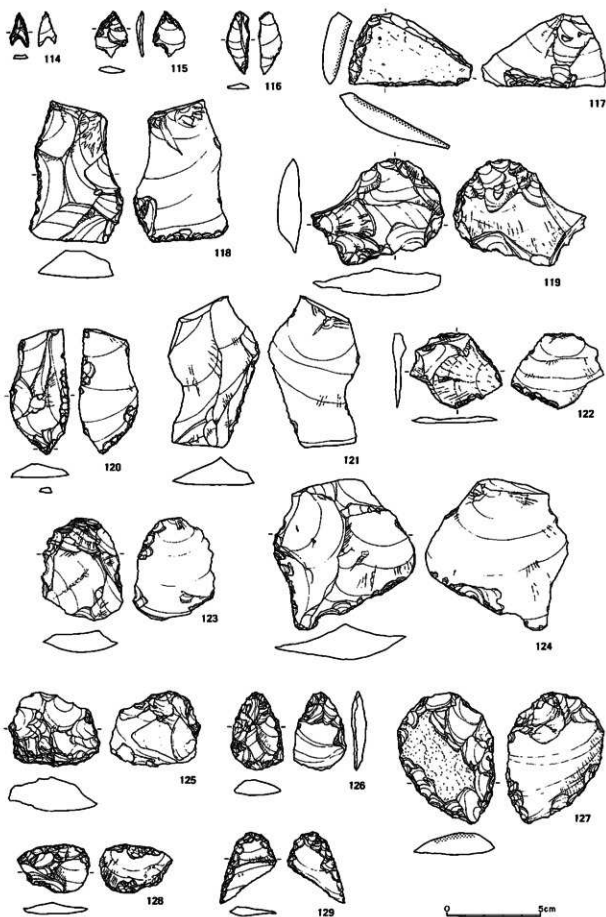
図IV-27 削器(3)



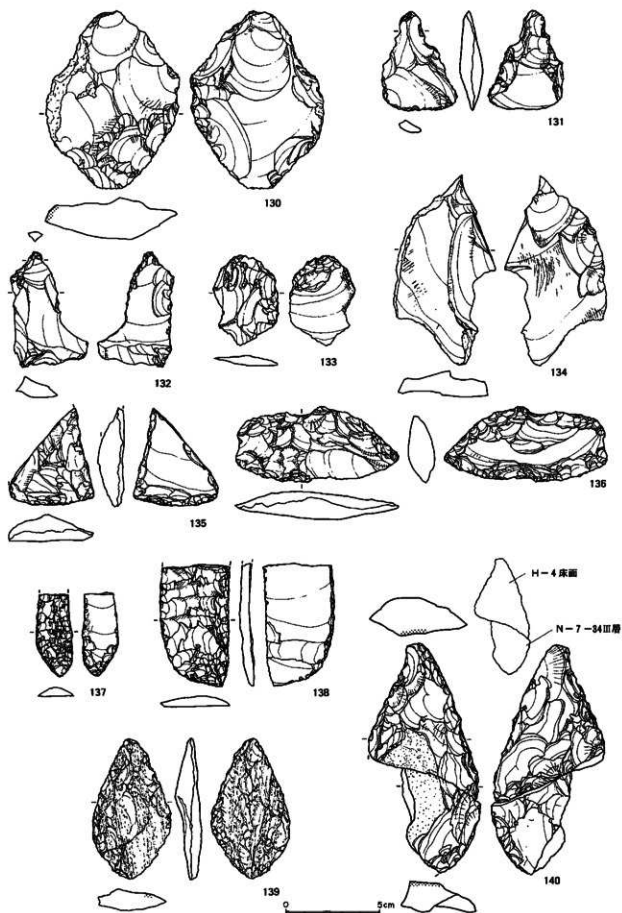
図Ⅳ-28 削器(4)・抉入石器



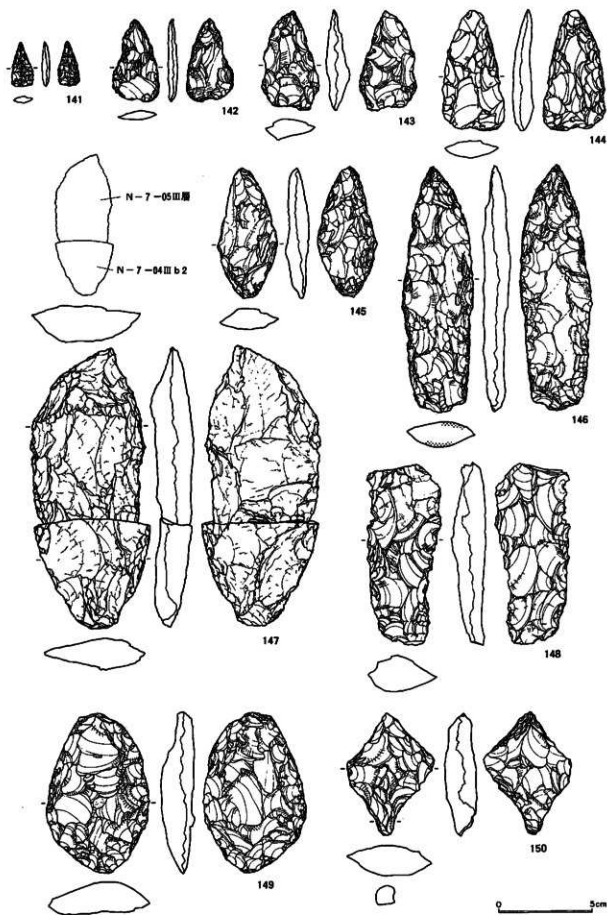
図Ⅳ-29 石匙・石匙形石器



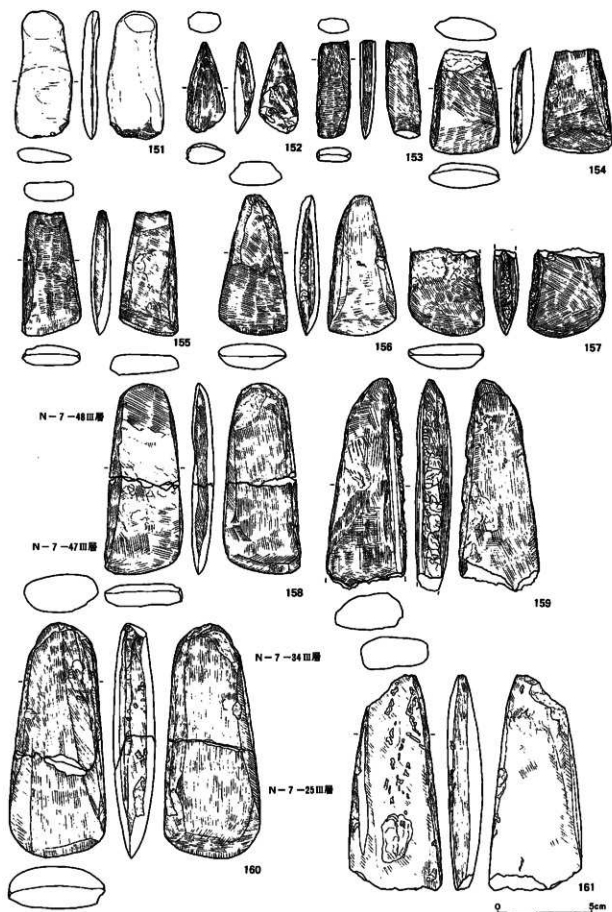
図IV-30 未分類剥片石器(1)・非調整品



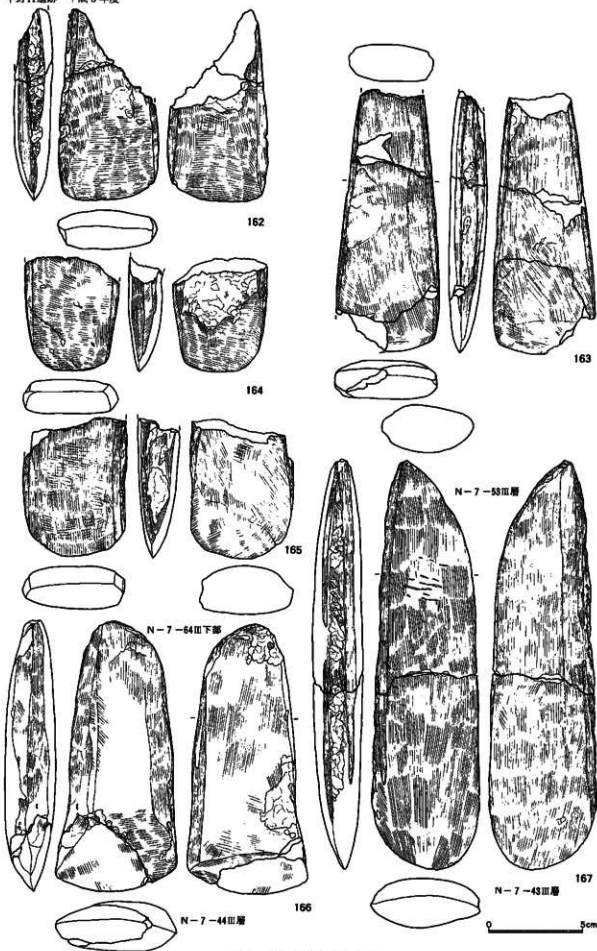
図IV-31 未分類剥片石器(2)・非調整・背面調整・腹面調整品



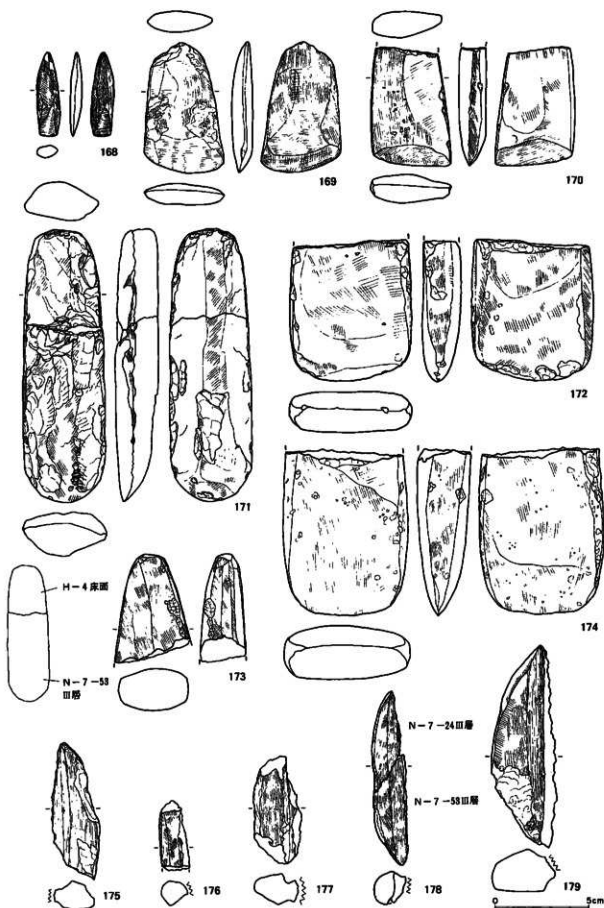
図IV-32 未分類剥片石器(3)・両面調整品



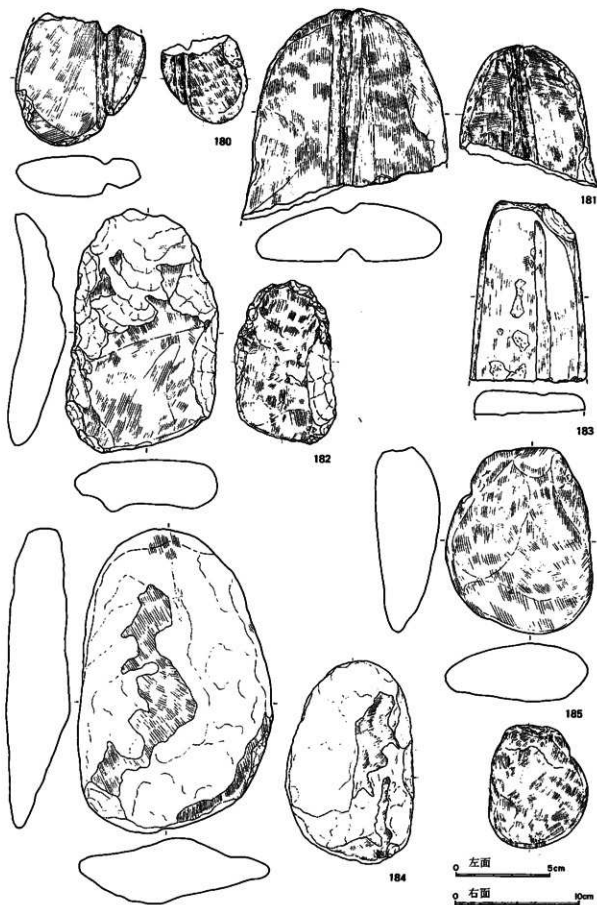
図IV-33 磨製石斧（1）



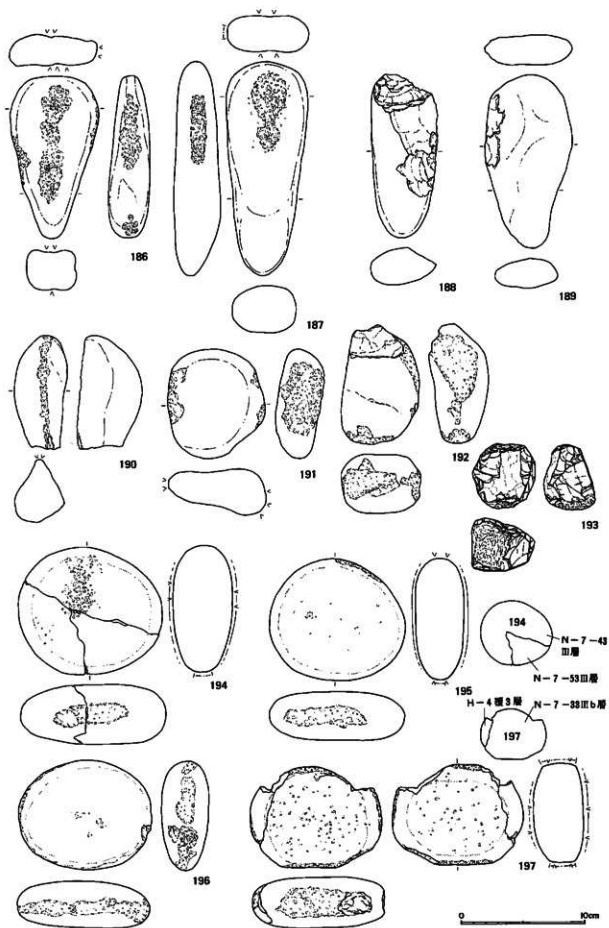
図IV-34 磨製石斧(2)



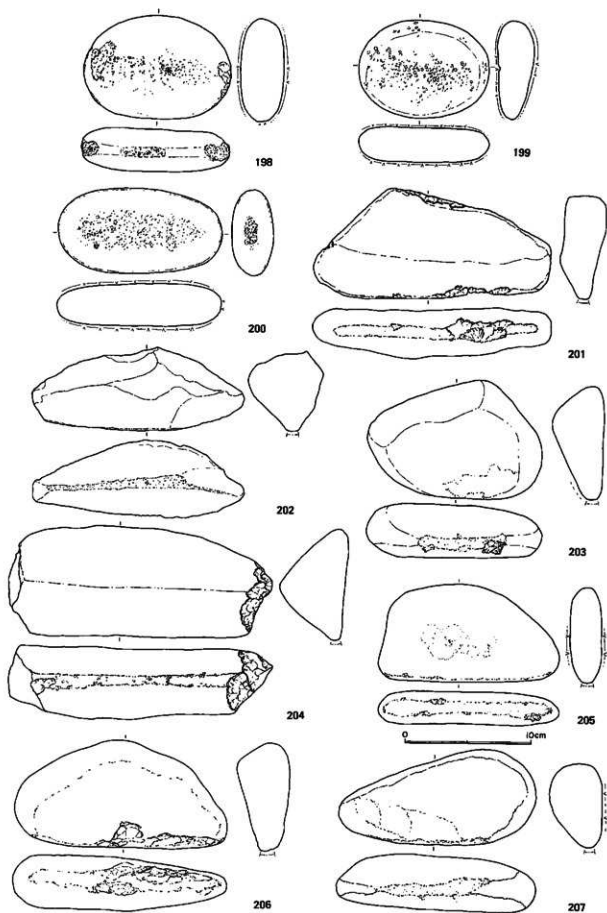
図Ⅳ-35 磨製石斧(3)・擦切残片



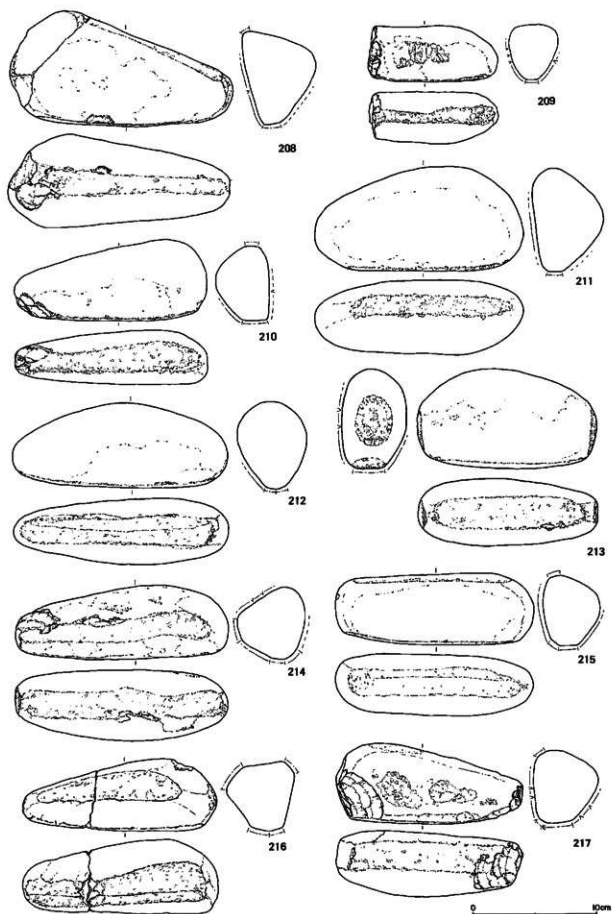
図Ⅳ-36 研磨石材



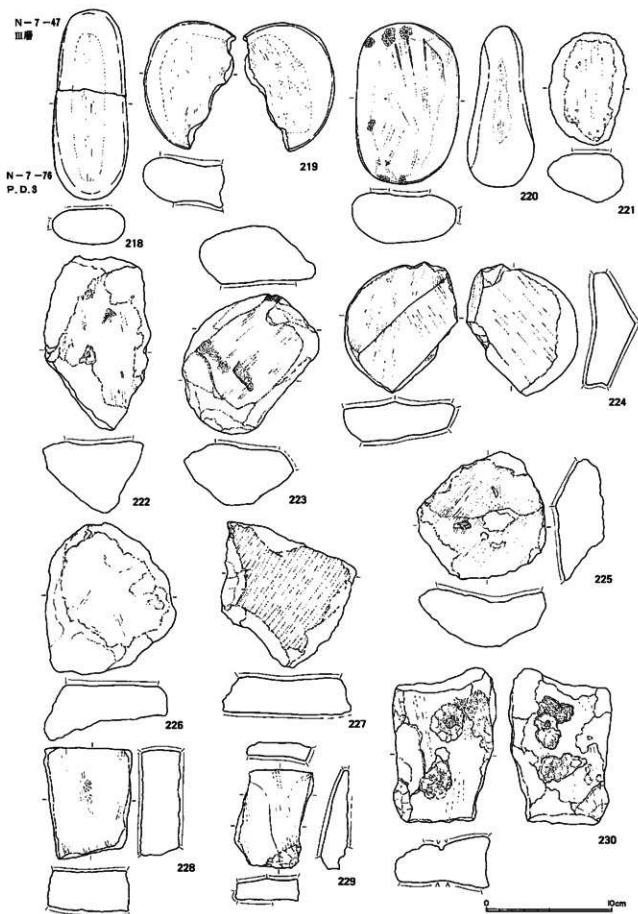
図Ⅳ-37 たたき石・すり石 (1)



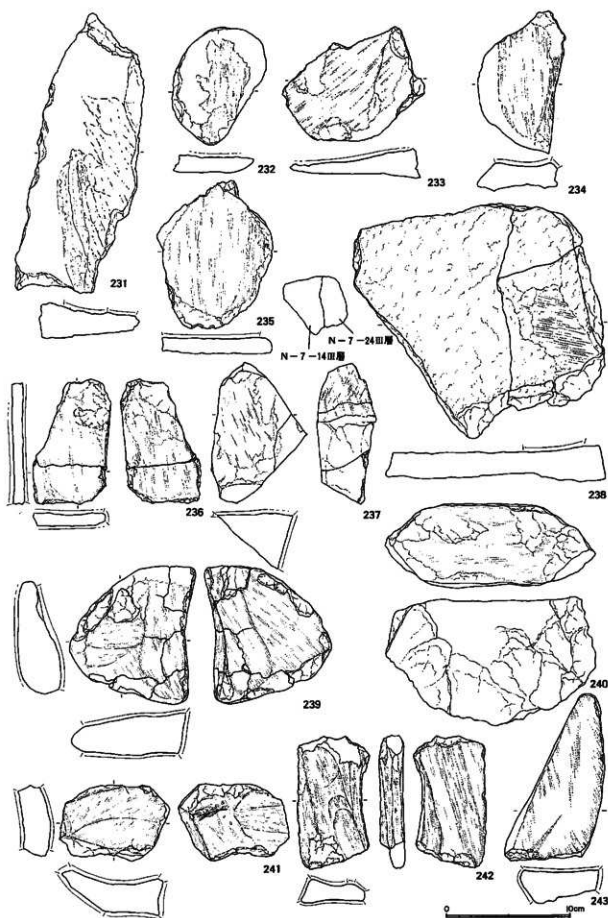
図Ⅳ-38 すり石(2)



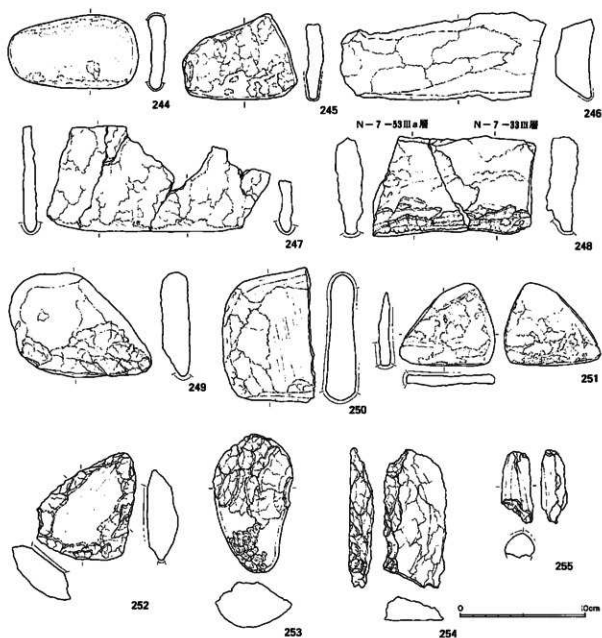
図Ⅳ-39 すり石 (3)



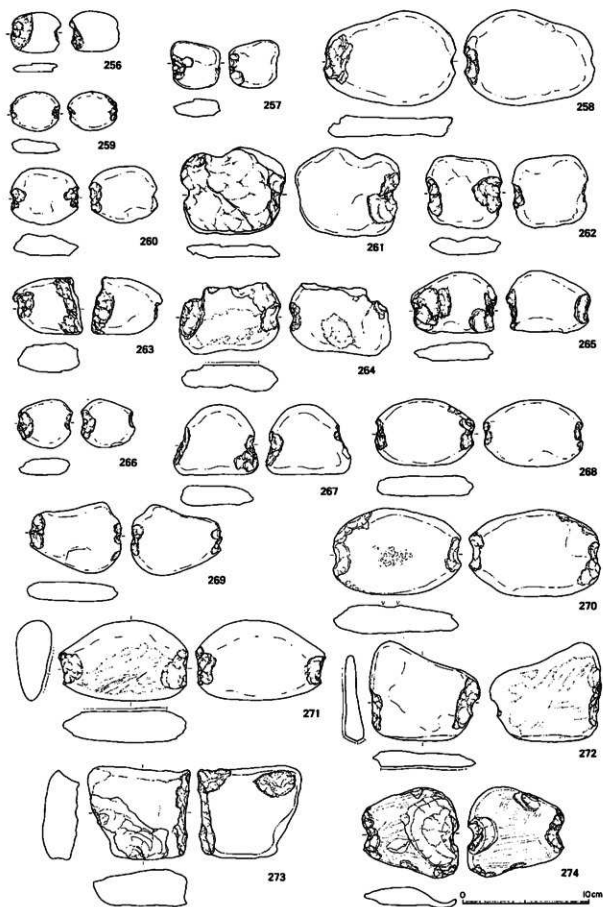
図IV-40 砥石 (1)



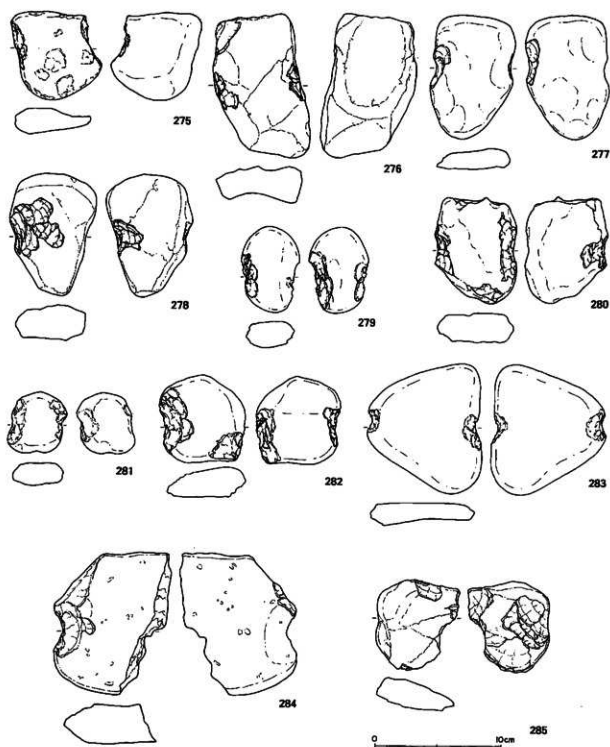
図IV-41 砥石 (2)



図Ⅳ-42 石鋸・未分類礫石器



図IV-43 石錘 (1)



図Ⅳ-44 石錘(2)

3 土・石製品 (図IV-45・46 図版106)

図IV-45は、丸みを帯びた三角形の下半部といった形状の小型の土製品である。上部が欠失しており断定はできないが、恐らく土偶の一部と思われる。

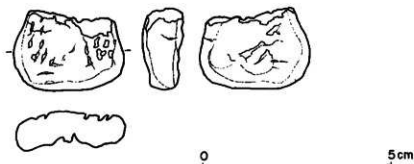
色調は橙灰色で、焼成良好。胎土には石英質を主体とする砂粒が含まれている。繊維の含有は殆ど認められない。裏面中央部に残された粘土紐の接合状況から判断して、粘土が比較的軟らかい段階で、径7~8mmの粘土紐を渦巻状に巻いて板状の原形をつくり、手早く側縁部を三角状にまで整えたものらしい。表裏の調整はやや粗く、器表の左下部や裏面の中央下方などに整形時の爪痕も残されている。器表の中央部はやや厚く突出しており、裏から粘土を押し出して、意図的に下腹部の膨みを表現したことも考えられる。この部分には左上方から右下方への擦痕がみられ、この膨らみの両側には側縁に沿って縦方向に、先端を薄く削った工具による、2~3列の刺突列が施文されている。

現存の左側縁部上端には、一旦くびれたものが再び外へと張出す変換点かとも思われる様相がみてとれ、ここから腕に相当する部分がつづいていたかも知れない。原田昌幸氏のご教示によれば、本例は青森県三沢市根井沼(1)遺跡出土の縄文早期前葉の土偶(田島, 1988)に類似するといわれ、欠失部に低い頭部や短めの両腕が表現されていた可能性が高いようだ。

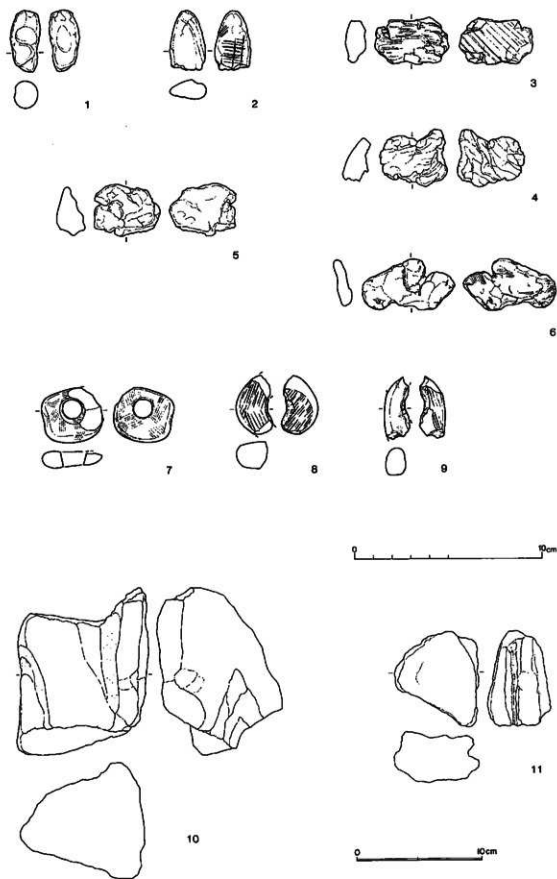
図IV-46-1~6はいわゆる焼成粘土塊である。焼成粘土塊はN-7-33~55区にかけての一帯に分布する傾向が認められた。いずれも焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。1は、丸棒状の粘土塊の中央部を指で挟んで凹ませたもの。2はやや扁平な砲弾状の形態を呈し、弾頭部分はいくぶん内凹、他端は欠損している。器面の縁に沿って幅4mm程度の浅い溝がみられ、裏面には横、縦と加えられた調整痕が残されている。3は隅丸方形のやや扁平なもの。全体に亀裂が多く、裏面には斜位の調整痕がみられる。4~6は不整形を呈する焼成粘土塊で、土器製作時の残片的な所産と思われる。

7~9は有孔石製品。7は片面から大きめの貫通孔を穿ったもので、孔壁は滑沢。器表面の一部が剥落している。8はほぼ円形の有孔石製品の破片。やや厚く両面を平滑に研ぎだしたあと、周縁が丸く調整されている。9も両面を扁平に調整したあと、周縁を研磨・調整したもので、現存部の形状から推定して、楕円状の石の上半部に穿孔が加えられたものらしい。

10, 11は自然礫の一部に使用や加工の痕跡かと思われる状態を認めるものだが、必ずしも人為による結果とは断定できず、明瞭には石器と認定できなかったものである。10は図の正面に縦方向のやや幅広の凹みが2条みられ、右側辺などの一部に磨耗痕らしき平坦な痕跡を留める部分もある。11は多孔質の軽石の側縁に縦の浅い溝状の凹みがみられるもので、単条の有孔砥石として使われたこともあった可能性が考えられるもの。



図IV-45 土偶



図Ⅳ-46 その他の遺物

V ま と め

1 遺構

本年度の調査で発見された遺構については、本文中のII、III章で詳述されているので、ここでは住居跡を中心に、(1)住居跡の新旧、(2)住居跡の上屋構造、(3)H-4の生活空間、について検討することとする。遺跡全体の調査が未了のため、遺跡の全体像は把握しえない部分があり、一つの見通しを述べるにとどめたい。次年度以降の調査結果によって詳細な検討がなされるものと思う。

(1)住居跡の新旧について

地形、住居跡の分布、遺物の出土状況などから住居跡が調査未了地区に広がるものと予想される。これを前提にして、またH-1が、本年度発見された14軒の中で最も古い時期のもの（縄文時代早期前葉）であることから、ほかの13軒の縄文時代早期中葉（貝殻文土器期）の住居跡について検討する。これらには重複関係にあるもの、住居跡間が相接近しているものがあり、出土土器の接合状況やさらにわずかではあるが土器の文様などに新旧の要素が認められることから、何軒かのまとまりをもつ新旧関係が考えられる。(i)重複する住居跡はH-7とH-8、H-13とH-14で、それぞれH-8→H-7（旧→新）、H-13→H-14という新旧関係がある。(ii)出土遺物の接合、同一個体の出土状況などから、H-3→H-6→H-9、H-10→H-4→H-9、H-3→H-5、H-3、H-6、H-13→H-5、という新旧関係が認められる。(iii)平面形はH-3、H-12はほぼ隅丸方形、H-11、H-6はほぼ隅丸長方形、H-9は五角形状で、他はほぼ台形状のものである。(iv)長軸方向は、H-3、H-12はほぼ北西-南東、H-6、H-11はほぼ西南西-東北東、H-2、H-4、H-14はほぼ北北西-南南東、H-5、H-7はほぼ南西-北東、H-8、H-10、H-13はほぼ南-北である。平面形と長軸方向が新旧関係に直接関わるかどうかは明瞭でないが、同時性をもつ蓋然性は高い。(v)出土土器を見ると、床面出土土器でその住居跡に確実に伴うものと思われるものはH-4出土のもの（図III-25-1）を除いてほとんどない。従って覆土出土の土器の、口縁部の文様帯の変化に注目し、おおよその新旧を考えるざるを得ない。これによると、H-4床面出土土器やH-7・8覆土出土土器の中に、他出土の土器よりも新しい要素が見られるという。またH-6出土土器にはH-3出土土器よりもより新しい要素があるという。(vi)H-6とH-11は、平面形、長軸方向、掘り込み状の炉跡が付設されるという共通性が濃厚に見られる。以上の七つの検討事項を総合的に考え、その新旧関係をまとめると以下のように想定される。

H-3、H-12→H-6、H-11→H-8、H-10、H-13→ $\begin{matrix} \text{H-2, H-4, H-14} \\ \text{H-5, H-7} \end{matrix}$ →H-9
H-2、H-4、H-14とH-5、H-7の新旧は不明である。

これらから、共存する住居跡は2～3軒で、平面形が隅丸方形のものより古く、隅丸長方形→台形状→五角形状という変化を読み取ることが可能である。

ところが、H-3については、調査中に、X-2との関係によって、H-5、H-2よりもH-3が新しいという調査担当者の見解が提示されており、またH-9に関しても、揚げ土状の砂質土が覆土上に見られるため、H-9を13軒の住居跡の中で最も新しいとする事に異議が出されている。上記の新旧関係は一つの見通しであり、H-3、H-9の調査結果をふまえて、次年度以降の調査の中でさらに検討を加えていきたい。

(2)住居跡の上屋構造について

上屋構造を想定するための柱穴状小ピットが14軒の住居跡で検出されている。柱穴状小ピットの検

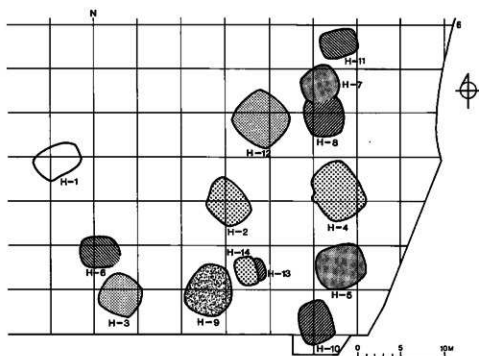


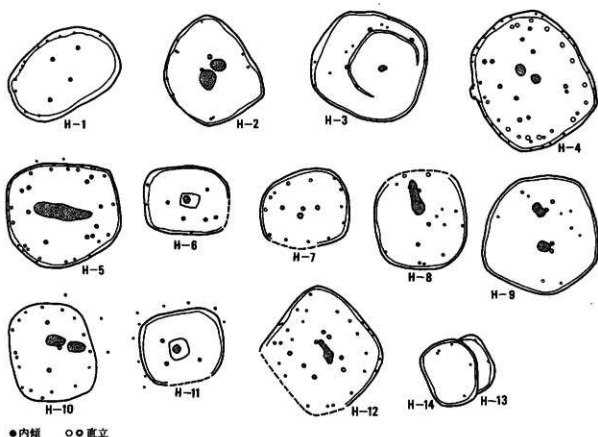
図 V-1 住居跡の新旧関係図



図 V-2 柱穴状小ピットの位置と傾き (1)

出位置には、①焼土周辺または床面中心付近にあるもの ②壁際または壁際より内側の床面にあるもの ③壁面にあるもの ④壁外にあるもの というまとまりが認められる。各住居跡の柱穴状小ピットの検出位置を見ると、H-1:①+③ H-2:①+③ H-3:①+③ H-4:①+②+③ H-5:①+②+③ H-6:①+③ H-7:①+② H-8:①+② H-9:①+② H-10:①+②+④ H-11:①+④ H-12:①+②+③ H-13・14:② という関係が見られる。これは①:①+③ ②:①+②+③ ③:①+② ④:② ⑤:①+②+④のように模式図化することができる(図V-1)。今、上屋構造の斜め材に注目すると④斜め材を壁面に建てるもの ⑤斜め材を壁外に出すもの に大別することができる。①と②は斜め材の支え柱があるかどうかの違いで、④に該当する。壁外に柱穴状小ピットを有するのは⑤のみであるが、①と②も本来的には壁外に斜め材を出していたものと思われ、①、②、⑤は⑤のものであろう。④にはH-1・2・3・4・5・6・9・12の8軒があり、⑤にはH-7・8・10・11・13・14の6軒がある。

次に主柱穴を見ると(H-4・5・7・8・10・12については建て替えが行われていると考えられるので、最終生活面で検出された柱穴状小ピットで検討する)、H-13・14では主柱穴は見られない。H-2、H-7は基本的に1本柱と思われる。H-8、H-9、H-10は2本柱、H-1、H-5、H-6、H-11、H-12は4本柱、H-3とH-4は6本柱と思われる、H-3については6角形状に配列しているかと思われる。柱穴状小ピットの検出状況で注意を引くのは⑤最終生活面と構築面でそ



図V-3 柱穴状小ピットの位置と傾き(2)

れぞれ検出されたもの ⑤焼土と重複しているもの があることである。これらは建て替えが行われたことを示していると考えられる。⑥にはH-2・4・5・7があり、⑦にはH-8・10・12がある。H-4は北西-南東間約3m、北東-南西間約2mの6本柱から、北西-南東間約3.2m、北東-南西間約2.7mのものへと拡大して建て替えが行われているようである。ともに長軸方向を中心線としている。H-5は東西間約3.2m、南北間約2.5mの4本柱から、柱間はほとんど変わらないが中心線が若干北側にずれて建て替えが行われているようである。壁外にも柱穴状小ピットがある。また壁面中のものに重複するものがあり、二回以上の建て替えが行われていることも考えられる。H-7では2本柱から1本柱へ、H-10は1本柱から2本柱へ、H-12は2本柱から4本柱へ建て替えが行われたものと思われる。H-2とH-8については建て替えが行われているようであるが不明瞭な部分が多い。

床面積は④5㎡未満のもの ⑤10㎡~17㎡のもの ⑥20㎡~26㎡のものがあり、⑥に属するH-3・4・5・9・12は斜め材を壁面に建て、H-9以外は4本柱以上のものである。④に属するものはH-13・14で斜め材を壁外に出す。また⑥は斜め材、主柱とも一定しない。

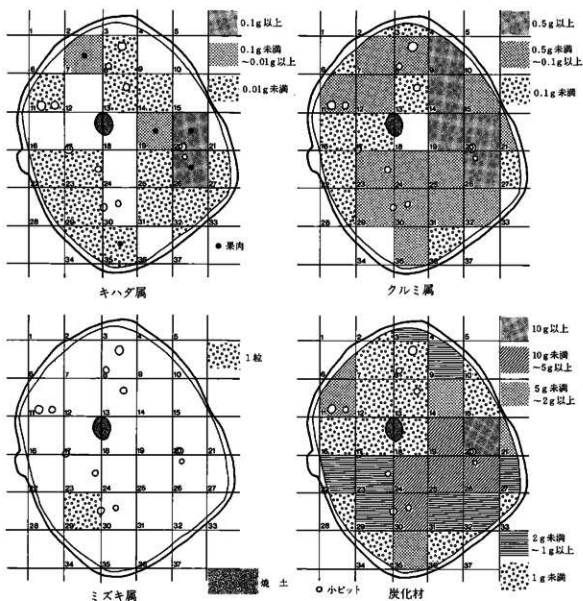
(3)H-4の生活空間について

H-4の構築面と最終生活面の間に堆積する土を1mメッシュによる小グリッド毎にすべて取り上げ、植物遺体の検出を行う。この結果については「VI 中野A遺跡から発掘された縄文時代早期の炭化植物種子」吉崎昌一に詳述されている。ここではこの結果をもとに作成した検出重量別分布図から、H-4の生活空間について考えることにする。

検出された植物遺体はキハダ属、クルミ属、ミズキ属で、また炭化材も検出されており、その出土量(重土)別に作成した分布図は図V-4である。キハダ属は、果肉付破片も検出されているが(検

出比率は約18%である。)、大半が種子破片である。これらは長軸中心線の両側で検出されている。東側の方がより多く検出されているが、とくに南東側（小グリッド19・20・26）に多い。逆に検出されなかったのは、小グリッド12・16・17・18・24・30の焼土付近とその西側である。クルミ属はほぼ全体的に検出されているが、とくに長軸中心線の東側（小グリッド9・14・19・20・26）でより多く検出されている。また焼土周辺とその西側（小グリッド16・17・18・13）では検出量が微量である。ミズキ属は小グリッド29で検出されただけである。炭化材は屋根材を想定させるようなものではなく、散布したものと考えられる。床面全体に広がっているが、とくに焼土の東・南側（小グリッド19・20・24・25・26・30）でとくに多く検出されている。逆に焼土の西・北側（小グリッド7・8・12・13・16・17・18）では微量の検出量である。これから検出量のとくに多いところは小グリッド19・20・26。逆に空白部分と微量のところは小グリッド16・17・18である。この差異は何を語っているのだろうか。

キハダ属、クルミ属、ミズキ属の植物遺体が当時の生活の中で何に利用されたものか、いかなる理



図V-4 H-4出土の植物遺体と炭化材分布図

由によって残されたものかは明らかではない。とくに注目されるのはキハダ属であるが、これについては薬用、あるいは食用に供されたのではなからうかと言われている。それでは、植物遺体の残存が濃密な小グリッド19・20・26周辺は当時の調理場、食事場所という、日常生活の中でもより日常的な空間と想定することができるであろうか。それに対して分布濃度の稀薄なところと空白なところなどのような生活空間を想定することができるだろうか。

遺構調査によって西壁の北寄りに0.6m×0.4mの段状の張り出し部が検出され、出入口ではなからうかと考えたが、それを積極的に証明するものは発見されなかった。しかしながら、今、この空白部分あるいは分布稀薄部を出入口への通路部分と考えるとどうだろうか。残念ながら、出入口と想定される張り出し部分と植物遺体の分布の関係を示したものはなく、この空白あるいは稀薄部分が通路に当たるという積極的な根拠はない。ただ人が頻繁に歩くところは散布状態が稀薄になるであろうという事は充分推測される事である。今後このような事例を集積することによって出入口を想定することも可能になるものと思われる。出入口が確定されたならば、その周辺の地形や季節風などを考慮に入れ、通年居住か、あるいは季節的な居住かを考えることも可能であろう。また生業と広場との関係を考える資料を提供することになるとともに、集落の全体像をも明らかにできるかも知れない。

2 遺物

(1)土器(図V-5~9)

本年度の調査では、早期中葉の貝殻文土器(I群B類)を主体として、早期前葉に位置づけられるとみられる土器群(I群A類)、前期(II群)、晩期(III群)の土器が13,879点出土した。ここでは早期の土器群について、その特色をまとめることとする。

1) I群A類土器について

H-1の床面、覆土と周辺の包含層のIII層中から出土した。H-1出土のものは、覆土出土の2点(B類土器)を除き、すべてがA類土器であった。包含層では、B類土器に混在していた。破片はH-1の復元土器(図III-5-1)も合せて52点が確認できた。胎土に繊維を含む土器で、詳細に観察すると、石英砂の混入、焼成、色調等に共通点がみとめられた。この様な点から、これら52点の破片は一個体分のものであると考えられる。器形、文様構成、胎土から判断して、日計式押型文土器(笹津1960)に伴う縄文の施文された土器に関連するとみられるものである。このような土器は、青森県鴨平(1)遺跡(青森県教委 1983)、同見立山(2)遺跡(八戸市教委 1989)、同和野前山遺跡(青森県教委 1984)、同売場遺跡(青森県教委 1985)、同史跡根城跡(八戸市教委 1986)、岩手県大新町遺跡(盛岡市教委 1983)、同一本松熊の沢遺跡・穴口遺跡(武田 1982)、宮城県座敷乱木遺跡(石器文化談話会編 1978、1981)、同松田遺跡(宮城県教委 1973、1982)、同下川原A遺跡(白石地域文化研究会 1982)で出土が報告されている。このうち本遺跡のように押型文を伴わず、単独で出土しているのは、鴨平(1)、和野前山、座敷乱木遺跡である。このうち和野前山の資料は、縄文、沈線の施文、口唇部の形状に類似点がみとめられた。鴨平(1)遺跡、見立山(2)遺跡の資料を実見する機会があったので、やや詳しく観察結果を記しておきたい。

本遺跡の土器は深鉢形で、乳房状尖底をなすとみられる。底部からやや開いて、鈍角に立ち上がる器形のもので、胴部には屈曲はほとんどみとめられない。口縁部は直立気味である。口縁は、口唇上を指頭でやや間隔をあけて斜めに押圧して、小波状につくられている。RとLの原体による斜行縄文が浅く施され、羽状縄文を構成する部分がある。複数の平行沈線文による文様帯が、口縁部と胴部の2段に施されている。沈線はヘラ状工具をやや傾け浅く施す部分と、まっすぐに立てて、細く線状に施される部分があり、幅は一定せず間隔は不揃いである。

鴨平(1)遺跡の資料は、深鉢形で、底部は丸味を帯びた砲弾状尖底である。胎土には繊維が多量に混じり、長石、石英等の砂粒も混じる。口縁部は小波状である。指頭で斜めに押圧して形成されたと思われる。縄文は3種類の2段の原体で、ほぼ全面に羽状縄文が施されている。縄の撚りが緩いためか粘土面の状態によるものか明瞭ではないが、圧痕が浅く、無節にみえる部分もある。平行沈線文は口縁部に限られ、複数施されるが、間隔は不揃いである。見立山(2)遺跡の資料は小型の平縁の深鉢形で底部は欠損しているが尖底とみられる。胎土に繊維が多量に混じる。2段のRLとLRの原体による羽状縄文が底部付近まで施されている。口縁部には沈線文が浅く施されている。

以上のように、胎土、結束の無い羽状縄文、複数の平行沈線による文様帯は共通し、特に鴨平(1)の資料とは、底部の形状は異なるものの、縄文、沈線の浅い施文、小波状縁の形成のしかたは酷似し、全体の焼成も類似していた。本遺跡の資料との非常に強い関連性がうかがえる。

日計式押型文は道内では、函館市白石町で出土が報告されているが(相原 1978・信藤 1983)、詳細は良くわかっていない。本遺跡の資料が、押型文に伴う縄文が施文された土器群に対比しうるものであるとすれば、貝殻文土器群以前に位置づけられるもので、日計式土器群のなかでも、最も古い資料に対比しうる可能性もある(相原 1982)。

2) I群B類土器について

本類は前回の調査では中野III群土器(函館市教委 1977)として報告された土器群に含まれるもので「物見台式」に相当するものである。報告(江坂 1950)によれば、物見台式は以下のようなものとして捉えられている。きわめて緩やかな波状口縁あるいは平縁で、口縁部の一部に三角形の小突起を付して、波状口縁効果としているものがある。文様は貝殻腹縁文と沈線文の複合した三角形、菱形、方形等の幾何学文様を口縁部から胴部上半に施文したものが多く、口縁部の三角形の頂点や沈線上の適当な場所に刺突文が施される。裏面に縦位に短い貝殻腹縁文が施され、その下位には若干の間隔をあけて篋状工具の先端部のようなもので施文されたと考えられる爪形文が連続して施文される。今回報告のB類土器は、文様要素、構成に、共通する要素はあるものの、いわゆる「物見台式」にはみられない特徴をもつものも出土した。例えば器形では口頸部がキャリバー状にくびれるものがみられ、底部の形状は、砲弾型の尖底のもの、平底、丸底のものである。文様要素では、貝殻腹縁部による押し引き文、連続波状文が単独あるいは他の要素と組合されて施文されるものや、全面に条痕文の施されるもの、鋸歯状沈線文などがある。文様構成ではクランク状の線による区画文、点对称文様のもの、また幾何学的文様構成をとらずに、口縁部の狭い範囲に文様が展開するもの、垂下する文様のものは、従来の内容にはみられない。

キャリバー状の器形のもの(a種)は、今回の調査ではややまとまって出土している(1~15)。文様を意図したとみられる条痕文が施されるもの(44)、押し引き文や連続波状文が施文された土器(47・48)など、前回の調査でみられなかったものや、断片的にしか得られなかった資料も追加された。

土器片総数 13363点 口縁部破片総数 507点

	a種	b種	c種	d種	e種	f種	g種	総個体数
個体数A	14	47	64	3	3	2	84	217
個体数B	15	6	25	2		3	31	82
計	29	53	89	5	3	5	115	299

注：個体数A：破片から識別した個体数 個体数B：復元個体数 単位：個

表V-1 分類別個体数

B類土器に類似の資料は、近年東北地方で増加している。青森県では、千歳(13)遺跡(青森県教委 1975)、蟹沢遺跡(三宅 1979)、表館遺跡(青森県教委 1975)、亮場遺跡(青森県教委 1985)、表館(1)遺跡(青森県教委 1990)、田面木平遺跡(八戸市教委 1988)等に良好な資料がある。千歳(13)ではキャリパー状の器形のものが比較的まとまって出土しており、頸部のくびれ、底部の形状の相違から物見台式に後続するものとして千歳式(杉山 1975)を設定している。表館遺跡の資料は1個体であるが文様帯が口縁部と胴部の2段に構成されるもので、c種(32)に類似のものである。表館(1)遺跡では、物見台式期の住居跡の床面から、キャリパー状の器形のもので、口頸部にくびれない器形のものが共に伴っている。

道内では、隣接する中野B遺跡で断片的資料が得られているほか、吉吉町出土として紹介されているもの(山内 1967)がある。この資料は口縁部を欠くものであるが、垂下する帯状の文様帯のあるものである。また噴火湾岸では伊達市南稀府5遺跡(大沼 1981)、稀府川遺跡(北海道埋蔵文化財センター 1991a)からそれぞれ1個体ずつ出土している。稀府川のもので、キャリパー状の器形のもので幾何学文様と垂下する文様が施文されている。道内では中野A遺跡を除き断片的な出土例があるだけである。前回の資料同様、今年度のI群B類土器もまとまった、非常に良好な資料といえる。

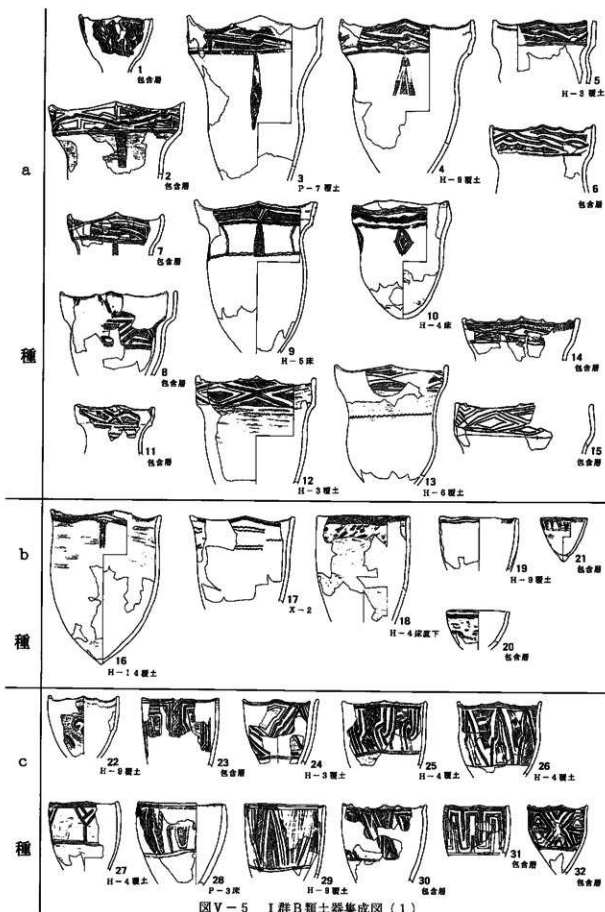
B類土器は無文土器と有文土器に分けられ、有文土器は幾何学的文様構成をもつa種、c種と、明瞭な文様構成をもたないb種の3種類に集約され、これらの土器が本遺跡の特徴を示すものと考えられる。器形、文様要素、文様構成を中心にその概略をまとめることとする。

器形について

今回出土した口縁部破片総数は507個あり個体総数は299個体を識別できた。これらの分類毎の内訳は表V-1に示した。B類土器では無文土器(g種)が全体の約40%近くを占める。復元個体についても同様の割合である。有文土器では、主に腹縁文で幾何学的な文様が構成されるc種、a種が多く、d～f種は少ない。明瞭な文様構成をもたないb種は、口縁部破片数は比較的多いものの、復元個体数では少ない値を示している。次にa～c種、g種の、器形と文様帯との関係についてみていくこととする。

a種(1～15)：口頸部がキャリパー状にくびれる器形のもので、すべて波状口縁であった。小さな山形の突起状の波頂部のあるもの、緩やかな山形の波頂部のあるもので、その両端に副突起をもつものが多くみられる(復元個体では15個体中、10個のものに存在した)。口縁部は直立気味かやや反するものが主で、極だって内湾するものはみとめられない。器高がわかる資料は少ないが、口縁文様帯は1点を除いて(1)、ほとんどが器高の3分の1以下とみられ幅の狭いものである。口縁部の幅の広いものは前回の報告(函館市教委 1977)に一例みとめられる(第51図-6)。頸部はくびれの強いものと弱いものがみられる。胴下半部は丸味を帯び、やや張り出すものもある。文様帯は口縁部に限られるものは少なく(5)、胴部上半に波頂部から垂下する文様や、胴部を部分的、あるいは一周する沈線文が施されているものが多い。29個体のうち波頂部下位まで破片が残存するものでは1個体(5)を除き、すべてにいずれかの文様がみとめられた。また、胴部上半部に口縁部と類似の文様が施文される例(8)もある。

b種(16～21)：胴部から直線的に立ちあがるもの、開き気味に立ちあがる器形のもので、口縁部が極わずかにくびれるものもある。平縁のものと、緩やかな波状口縁のものがあり、後者では両端に小さな副突起をもつものがある。文様帯は口縁部の狭い範囲に限られるか、波頂部に対応する位置に部分的に縦位・横位に文様を配するものが通例である。b種の文様帯はa種の胴部文様帯に対応するも



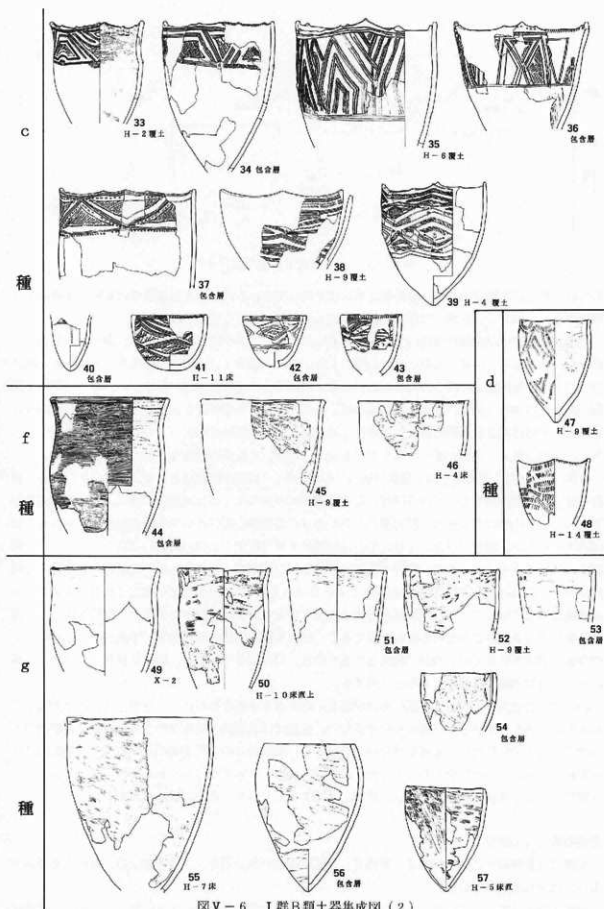
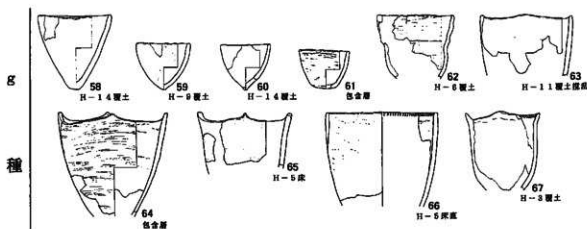


図 V-6 I 群 B 類土器集成図 (2)



図V-7 I群B類土器集成図(3)

のとみられる。f種(44~46)は条痕文がほぼ全面に施される点で、文様要素ではb種とは異なった特徴のあるものだが、器形、口縁部の狭い範囲への施文に共通の要素がみられる。

c種(22~43)；口縁部は直線的に立ちあがるものが多く、やや開き気味のもの、頸部がわずかにくびれるものがある。平縁のものと波状口縁のものとがあり、後者には山形波頂部のものと緩やかな波状口縁のもの、不規則に波打つ口縁のものがある。波頂部の両端に副突起のあるもの、波頂部間に小突起のあるものとみられる。文様帯は胴部半ば、あるいは胴下半部付近にまで達する幅広い範囲のものである。c種は物見台遺跡の報文にみられる第三図1、2の資料に類似のものである。d種は押し引き文、連続波状文で文様が描かれるものであるが、器形、文様帯の範囲などは本種に共通する。

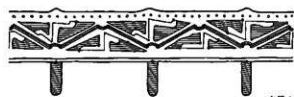
g種(49~67)；平縁のものと波状口縁のものがある。115個体確認できたが、波状口縁の占める割合は低く、復元されたものでは5個体、破片で明瞭にわかったものは数個体である。緩やかな波頂部をもつもの、山形の小さな突起の波頂部のものがあり、波頂部の両端に小さな副突起のあるものも1個体みとめられた。器形は頸部がくびれて、口縁部がやや外反するもの、直線的に立ち上がるもの、胴部から開いて立ちあがるもの、内湾するものがある。口縁部がくびれるものでは胴部がやや膨らむ傾向がみられる。口縁部の作り出しを意識したかとみられるもので、縄の圧痕が施文されているもの(62)はa種に類似の器形である。又口縁部内側に施文されるもの(66・67)は少なく、復元個体では5個体、破片では9個体にみとめられただけである。67はb種に類似の器形のものであるが、この様に、口縁部が意識されるもの、内面に施文されるものは、口唇部を平坦にし、角形に整形するという特徴があり、有文土器の口唇部の整形と共通する。

底部の形状は尖底と平底と丸底のものがある。底部のみの破片は47点あったが、尖底部が欠損しているものが多く、形状を知り得るものは少ない。尖底には乳房状と砲弾状のものがある。乳房状のものでは、先端の作り出しが顕著ではないものが多く、砲弾形との中間形状のものが多。先端部は小さな粘土塊をはりつけ成形したとみられ、接合面で剝離しているものがみとめられた。平底のものは5個体あった。文様のあるものでは、底面にも施文されている。丸底に近いものもある。

文様要素と施文部位

文様は貝殻腹縁圧痕文、沈線文、刺突文、貝殻腹縁部の押し引き文、連続波状文、条痕文を単独あるいは組合せて施文される。

貝殻腹縁圧痕文は、文様帯では沈線文による下書きの文様を繰取り、あるいはなぞる様に、沈線文



文様1



文様2



文様3



文様4



文様5



文様6



文様7



文様8



文様9



文様10



文様11



文様12



文様13



文様14



文様15



文様16



文様17

図V-8 文様模式図

に重ねて施文される。腹縁庄痕文のみで文様の描かれることは稀である。最終的区画内や、帯状の文様帯では充填文として施される。口唇の内外面角に、短く縦位に施されたり、口縁部内側には10mm以上の長めのものが斜位・縦位に施される。腹縁庄痕文は湾曲しているものは少なく、直線的なものが多くみられる。

沈線文は文様の一番最初に施文される。沈線文だけで文様が描かれるものは少ないが、部分的に腹縁庄痕文が省略される例は多くみられる。鋸歯状沈線文は胴部では、短く途切れるものを横位に施す例や器面を一周させる例がある。上下の文様帯を2条単位の縦位・斜位の線で繋ぐ例もみられる。区画内の充填文として、ところどころに施文されるものもある。

刺突文は腹縁文、鋸歯状沈線文の両端、その上に等間隔で施されるもの、波頂部や、文様の交差、入り組む部分に施されるものが一般的にみられる。区画内の腹縁庄痕文による充填文に重ねて施されるものや、刺突文のみが充填文として施文される例もある。文様帯の区画線に重ならず、文様帯間の無文部や胴部に施されるものもみられる。刺突文が単独で施文されるものでは、刺突文列が口縁部をめぐめるものや波頂部から垂下されるものがある。波状口縁のものでは、波頂部下を意識し、口縁部・胴部の文様の交差する部分を内面から指頭で押し小突起状にするもの、小さな粘土塊を張り付けるものが比較的多くみられ、この部分には他と区別して大きな刺突文が加えられる場合がある。

押し引き文、連続波状文が施されるものはごく少ない。押し引き文のみで鋸歯状の文様が描かれるもの、横位に密に施文されるものが数個体ある。区画内の充填文として施される例や口縁部内側に施文される例もみられる。連続波状文で文様が描かれるものは、胴半ばまで波状の文様が描かれるものと、口縁部に部分的に施文されるもの、a種の胴部に何段か施文されるものがみられた。

条痕文は器面調整のものと文様効果を意図したものとに分けられる。分様要素としての条痕文は、横位あるいは斜位に密に施文されている。これらの土器の場合、内面にみられる調整痕とは明瞭に区別される。

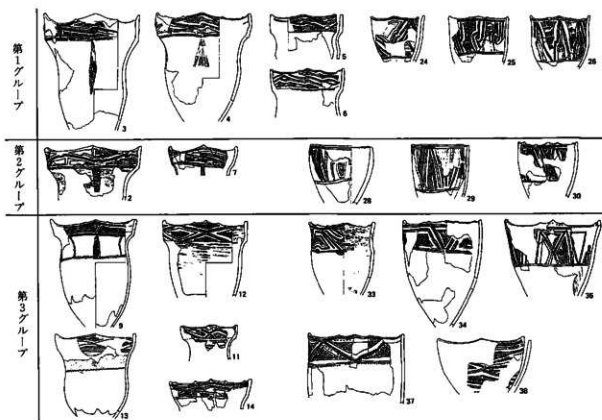
このほか、爪形庄痕が口縁部の内側に部分的に列をなして施されているものが比較的多くみられた。庄痕は、腹縁庄痕文などが口唇角に施文されているものに限られる傾向がある。外側角に施文されているもので、その下位にかすかな爪形庄痕がみられるものがあった。口唇角への施文の際に偶然に残ったものではないだろうか。等間隔で、内面を一周すると思われる例(5)があったが、文様効果を意図した可能性がある。

文様構成について

文様1～17はa・c種にみられる文様を展開模式化したものである。

文様1～7は主にa種にみられる文様である。文様1～4は波頂部間から斜めにクランク状や直線を配して、波頂部下で文様に変化するように、文様帯を大きく三角形に区画するもので、点対称の構成をとるものである(2～7)。文様1・4では、区画内をさらに、一筆書き的な対称の三角形に分割している。文様1・3は斜めの線は短い弧線で繋がれている。文様3の様に当初は上下の区画文に連結したものが文様1の様に変化し、上下の区画から独立したものとみられる。文様2はあらかじめ波頂部間に帯状の区画をし、その中を斜めに区画するものである。文様1・4にみられる、三角形の区画の半分が展開するような構成になっている。

文様5は波頂部に三角形の中心的な文様を配し、台形の文様と組合せる構成のもので(8・9)、b種にも同様のものがみられる(34)。文様14にみられる2段の文様帯の上段に対応できると思われる。文様6は区画内が再分割されず、帯状の文様となっているが、波頂部下位は意識されている(10)。



図V-9 I群B類土器集成図(4)

文様7は波頂部で「X」字状に交差する様に施文し、三角形、菱形の文様を横位に展開させる構成のもの(12・13・15)で、波頂部下で文様を交差させて台形・方形を組合せる例も同じモチーフと思われる、a種(11)、b種(36)にみられる。文様7のような波頂部下で交差させる文様は、物見台遺跡の報告の第三図-1に類似する。文様1~7には胴部文様として、垂下する帯状の文様、部分的あるいは一周する鋸歯状沈線文、垂下する文様と沈線文を組合せた文様がみられる。b種の文様はこれらの胴部文様に対応されよう。細長い帯状の文様は、口縁部文様帯の区画のみが残ったものであろう。

文様8~17は主にc類にみられるものである。文様8・9は波頂部からクランク状の線を配して、文様帯を区画する構成である。文様8はさらに上下からの弧線で繋ぐ文様のものである。a類土器のうち、幅広い文様帯をもつもの(1)に類似の構成のものがみられる。文様9は、文様1~4の文様を縦に配した構成になっている。文様10・11は区画の文様として「Y」字を組合せた文様を4か所に配している(27, 35)。文様5の波頂部の文様と類似のモチーフであろう。文様12は三角形に区画されるものである(28~30)が、文様9のクランク状の線が直線化したものと思われる。文様13はほかのものとはやや構成が異なるものである。「鉤の手」状の文様を繋げて、上下から帯状の文様を入り組ませる構成である(31)。文様12にみられる、斜に配される線が、上下の区画と繋がらずに、横に連結されたものといえるかもしれない。文様14は文様7のように、波頂部下で交差する文様を意図したものであろう。台形と三角形を組合せ、区画内を上下に再区画して、2段の文様構成となっている(32)。文様15は文様14の上段の文様のみが展開されるものである(33)。区画内にみられる、舌状の空間を形成する文様は比較的多用される特色のある文様である。文様16は文様15に類似の構成のものであるが、文様構成とは別に、円形刺突文列が、腹縁文、沈線文から離れて、独立して文様帯間の無文部、文様

帯下位にめぐられるという特徴がある(37)。この様な独立した刺突文列はa種にも類例がある(14)。文様17は文様7が多段化した構成のものとみられる。

以上の様にI群B類土器について、器形、文様要素、構成を中心にその特徴をみてきた。従来の物見台式に相当するc種をはじめ、キャリパー状の器形のa種、明瞭な文様構成をもたず、口縁部に細長く文様が展開するb種、貝殻腹縁部の押し引き文や連続波状文という、吹切沢式に多用される文様が施文されるd種など、多様な要素を持つ土器群で構成されている。

むすび

B類土器は多様な要素を持つ土器群であるが、大きくa・b・cの3種類に集約されるとみられる。これらは時間差を示すものではなく、同時期に組み合わせられて存在したと考えられる。文様構成・文様の系譜から3つほどのグループに分け、仮りに第1～第3グループとした。

第1グループ・文様帯の大きな区画が、クランク状の分様でなされるものである。a種では、波頂部間から斜めに配されるのが一般的で、全体の文様が三角形の点対称構成となる。c種では、a種の文様を縦に配したとみられる構成のものがあるが文様の意図は同じと思われ、文様展開の違いは、文様帯の幅の制約であろう。

第2グループ、クランク状の文様が、直線的な文様になるものである。文様構成は第1グループにみられる点対称となる。a種の土器(2)にみられる、三角形の一部に弧線で描かれる空間が形成される文様(文様1)は、クランク状文様の名残りであろう。

第3グループ、波状口縁のものでは、波頂部下、平縁のものでは、4ヵ所に、三角形、菱形等の中心的文様を配して、幾何学文様を組合せて文様が構成されるものである。波頂部を意識し、下位で文様が交差するように区画し、三角形等の文様を連結し展開させるものもみられる。c種ではこれらの様が多段化する例もある。

B類土器について、編年の位置づけ、前回の調査資料や道内外の資料との対比など、検討しなければいけない事項が沢山残っているが、次年度以降の調査で資料の追加が予想されるので、今後の課題としたい。

VI 自然科学的分析

1 液体シンチレーション¹⁴C年代測定結果

山田 治（京都産業大学理学部）

測定番号	遺跡名	採取地点・層序	試料	測定値
KSU-2171	中野A	H-1 3層	炭化材	7,700±350 y.B.P.
KSU-2172	中野A	H-4 床面下	炭化材	7,590±80 y.B.P.
KSU-2173	中野A	H-11 床面焼土 (HF-1)	炭化材	5,980±210 y.B.P.

*¹⁴Cの半減期は5,568年。y.B.P. はAD1950年を起点としてそれ以前の過去の年数を示す。

付記 ¹⁴C年代測定用の試料として提出した炭化材は、フローテーション作業によって得られた微細な破片を集めたもので、炭化材の量がほぼ満たされた遺構について、年代測定を依頼した。

2 炭化植物種子

(1) 試料の採取と分析の依頼について

竪穴住居床面の土壌、土壌やTピットの墳底付近の土壌、屋外の焼土など、遺構に関連する土壌はできるだけ採集し、フローテーション作業を行った。採集した試料は全部で137件を数えた。これらについて可能な限りフローテーション作業および大分類の仕分け作業を実施した。

時間的な制約から大分類にとりかかれなかった試料のうち36件については、(有)道南文化財研究所に炭化植物遺体の検出と同定を委託した。

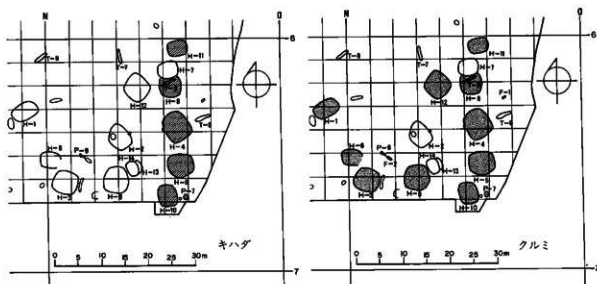
当センターで大まかな分類作業を済ませた試料46件については、北海道大学埋蔵文化財調査室の吉崎昌一・榎坂恭代の両氏に、試料の分析、炭化種子の同定をお願いし、上記36件の分析結果と合わせて学術的に解析していただき、次節に報告をご執筆いただいた。深く感謝申し上げます。

この82件の同定結果を、各遺構ごとにまとめたものが表VI-1、2である。

床面を1mメッシュに区画して土壌試料を採集し、各区画における植物遺体の量的な分布など、良好なデータが得られたH-4については、V章1節で和泉田が、竪穴住居の構造や空間利用とも合わせ考えた追究を行っている。

ここでは、以上の経過を踏まえて、特にキハダとクルミにみられた分布の偏りについて、若干触れておきたい。図VI-1に示すように、クルミ殻片は、10軒の住居跡および焼土F-1、2、P-7、9の2基の土壌といった、Tピット以外の各遺構からほぼ満遍なく検出された。

一方、キハダは、5軒の住居跡とP-7、9の2基の土壌内から検出されたが、P-9を除いて、キハダが検出された遺構は、沢泊いに偏って分布していた。この偏在傾向が、より積極的な意義を有するものなのか、あるいは単なる偶然なのか、即断はできないが、クルミの広い分布状態と比べて、非常に興味深い現象と思われた。



図VI-1 キハダ属・クルミ属検出遺構分布図

(2) 中野A遺跡から発掘された縄文時代早期の炭化植物種子

吉崎 昌一 (北海道大学文学部)

1 炭化植物種子出土遺跡に関する基礎情報

遺跡の名称: 中野A遺跡

遺跡の所在: 北海道函館市中野町100番地1,2

遺跡の時代: 縄文時代早期 (貝殻紋段階)

遺跡の性格: 竪穴住居から構成された集落遺跡

調査主体: 北海道埋蔵文化財センター

調査担当: 高橋和樹 (北海道埋蔵文化財センター) ほか

事業名: 函館空港拡張工事用地内 埋蔵文化財発掘調査

調査期間: 1991年7月15日～同年10月25日

2 遺跡と遺物

遺跡は、津軽海峡に面して標高50m前後で発達している海岸段丘を浅くえぐって流下する小河川、宮の川の右岸から発見された。この地点は、現在の海岸線からは1.2kmほど離れている。発掘調査の結果、竪穴住居が14軒、土壌が10箇所、その他に焼土や遺物集中地点などが確認されている。竪穴住居は、すべて縄文時代早期中葉と見られる貝殻紋尖底土器群に属するが、竪穴住居の切断関係ほかの理由で、地点により若干の時間的な差を持つことが判明している。

発掘された遺構の攪乱されていない地区で、肉眼でも明瞭に炭化物の存在が認められる部分、とくに竪穴住居の床面に関連する層準を中心に土壌が採取され、フローテーション法による炭化物の抽出が実施された。土壌の採取された遺構、層準並びにそこから検出された炭化植物の概略は、表VI-1, 2に示しておく。表のサンプル採取区欄に使用されているアルファベット略号は、Hが竪穴住居、Fが焼土、TがいわゆるTピット、Pが土壌をあらわしている。また、同欄に使用されている用語で「床下」とあるのは、竪穴住居が新設された時の床面を意味するという。通常、竪穴住居は、人が居住して時間が経過するにしたがい、床面上に有機物の多く含まれる薄い土層が複数枚堆積していく。その各層は、それぞれ生活面一床面である。この場合においては、発掘担当者は竪穴住居の掘り込み面とその後に最初に形成された有機物の多い生活床面との間の層準を、便宜的に「床下」という表現で扱っている。したがって、「床下」の層準から出土した種子は、その竪穴住居が形成された初期の段階のものとして扱えることになる。

3 出土した炭化植物種子

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. 図VI-2 1～4b

炭化材を除いて、出土した炭化植物としてもっとも多かったのはキハダ属であった。この遺跡からは、キハダは種子だけではなく「果実」の形で検出されている。図VI-2 1～3は果実の形で出土した資料の一部である。1は、H-4-19床下からほぼ完形のキハダ果実。長さ7.7mm、幅7.4mm。ほぼ球形。同様の完形資料は、H-4-20からも1粒検出されている。果肉付きの果実破片は、H-4の床面層準に最も多く普遍的に分布し、そのほかにH-5、H-8、H-10などからも散漫に出土する。2,3はそうした果実破片の資料である。2は、半割になったキハダ果実で、その資料の右半分には4aに示してあ

表Ⅵ-1 1991年度函館市中野A遺跡出土炭化植物遺体表

試料 番号	サンプル採取区 (遺構・層位)	土壌体積 (ℓ)	キハダ属 (g)	キハダ種子 の状況	ミズキ属 (粒)	クルミ属 (g)	炭化材 (g)
122	H-1 3層	2.9				>0.01	0.42
123	H-1 5層	33.7					4.26
75	H-2 焼土 F-1	28.0					0.79
76	H-2 焼土 F-2	10.5					0.15
80	H-2 F-1 周辺	15.3					0.25
119	H-2 HP-4 覆土	2.8					>0.01
86	H-3-1 床	0.5					>0.01
92	H-3-7 床	18.0				>0.01	
94	H-3-9 床	20.4					0.17
96	H-3-11 床	2.6					>0.01
97	H-3-12,13 床	13.3				0.01	0.42
98	H-3-14 床	17.0					0.20
100	H-3-16 床	14.0			1	>0.01	0.84
103	H-3-19,20 床	12.6				0.10	0.78
104	H-3-21 床	13.5				0.01	0.95
106	H-3-23 床	21.0				0.08	3.14
110	H-3-27 床	10.9				0.01	0.85
111	H-3-28,31 床	11.0				0.01	0.71
112	H-3-29 床	29.5				>0.01	2.53
113	H-3-30 床	8.0				0.01	1.05
118	H-3 HF-1 焼土	1.0					0.08
71	H-3 HP-9 4層	1.7					0.09
46	H-5 焼土 1	7.8				0.05	0.05
53	H-5 焼土 (8)	7.0				0.04	0.07
60	H-5 焼土 (15)	10.0	>0.01	種子破片		0.17	1.04
72	H-6 HP-1 覆土	8.4				>0.01	0.19
84	H-8 焼土	17.0	>0.01	種子破片			0.07
115	H-8 焼土	37.5	>0.01	果肉付き破片		0.25	0.45
134	H-9 焼土 F-1	5.0				>0.01	
67	H-10 焼土 1	23.0				0.15	0.45
78	H-10 焼土 1	16.5	>0.01	果肉付き破片		>0.01	0.19
68	H-10 焼土 2	21.5				0.01	0.24
128	H-11 焼土	0.9					
121	H-11 HP-1	24.2	>0.01	種子破片		0.19	
124	H-11 HP-1	2.3					0.13
116	H-12 焼土	9.8				>0.01	>0.01
77	F-1 焼土	5.0				>0.01	0.05
131	F-2 (半截)	18.5				>0.01	0.73
136	F-2 脇 焼土	1.1				0.12	0.05
74	P-7 覆土 5層	10.5	0.03	果肉付き破片		0.50	1.68
132	P-9 半截残 1・2層	7.7	>0.01	果肉付き破片		0.24	0.24
125	T-1 覆土 最下層	2.5					0.24
126	T-2 14層	0.8					0.08
82	T-3 17層	6.0					0.36
81	T-5 18層	3.0					0.07

表VI-2 1991年度函館市中野A遺跡H-4出土炭化植物遺体表

試料 番号	サンプル採取区 (遺構・層位)	土壌体積 (ℓ)	キハダ属 (g)	キハダ種子 の状況	ミズキ属 (粒)	クルミ属 (g)	炭化材 (g)
5	H-4-2 床下	1.5				0.03	0.45
6	H-4-3 床下	5.5				0.02	1.31
7	H-4-6 床下	3.3				>0.01	2.25
8	H-4-7 床下	17.5	0.03	果肉付き破片		0.46	0.35
9	H-4-8 床下	22.9	>0.01	種子破片		0.24	0.28
10	H-4-9 床下	20.8				1.00	1.34
11	H-4-10 床下	3.2					0.32
12	H-4-11 床下	17.2	>0.01	種子破片		0.24	2.18
13	H-4-12 床下	17.2				0.22	0.42
14	H-4-13 床下	27.3	>0.01	種子破片		0.06	0.93
15	H-4-14 床下	34.0	>0.01	種子1粒		1.00	2.75
16	H-4-15 床下	22.2				0.10	0.12
17	H-4-16 床下	14.8				0.01	0.30
18	H-4-17 床下	15.2				0.08	0.26
19	H-4-18 床下	28.8					0.60
20	H-4-19-1 床下	47.7	0.06	果肉付き破片		0.36	3.67
21	H-4-19-2 床下	37.1	>0.01	果肉付き破片		0.19	4.60
22	H-4-20 床下	35.4	0.11	果肉1, 種子1		2.02	10.65
23	H-4-21 床下	5.2				0.15	3.67
24	H-4-22 床下	18.8	>0.01	種子破片		>0.01	1.29
25	H-4-23 床下	14.5	>0.01	種子破片		0.25	1.22
26	H-4-24 床下	38.5				0.39	7.07
27	H-4-25 床下	30.8	>0.01	種子破片		0.19	7.11
28	H-4-26 床下	46.6	1.27	果肉付き破片		1.59	5.63
29	H-4-27 床下	8.8	>0.01	種子破片		0.08	1.73
30	H-4-28 床下	18.9	>0.01	種子破片		0.01	0.47
31	H-4-29 床下	35.4	>0.01	種子1粒		0.29	1.88
32	H-4-30 床下	44.0				0.18	5.88
33	H-4-31 床下	31.5	>0.01	種子破片		0.12	1.70
34	H-4-32 床下	31.0	>0.01	種子破片		>0.01	1.84
35	H-4-33 床下	10.8	>0.01	種子破片			0.38
36	H-4-34 床下	13.9	>0.01	種子破片			0.16
37	H-4-35 床下	39.5	>0.01	果肉付き破片		0.27	3.65
38	H-4-36 床下	11.1				0.01	0.96
39	H-4-37 床下	2.5	>0.01	種子1粒		0.06	0.04
40	H-4 焼土1	9.5				0.27	1.33
127	H-4 床	1.5				>0.01	0.18
合計		784.4 [†]	1.47 [‡]			9.89 [§]	78.97 [¶]

るようなキハダ種子が付着している状態が観察される。3は、種子の脱落した痕跡を残す果肉破片。4aは拡大したキハダ種子。一端のやや尖る偏卵形で、断面は薄い楕円形。種子表面には特有のアバタ状構造が見られる。長さ4.1mm、幅2.2mm、厚さ1.4mm。4bはその部分拡大。付表には果肉付き種子あるいは果肉破片といったキハダの出土状況を考慮して検出量の単位を粒数で記入せず、重量で示しておいた。

ミズキ属 *Cornus* L. 図VI-2 5

ミズキ属の小堅果と思われるものがH-3とH-4それぞれ1粒ずつ出土している。やや扁平な球形で、縦に入る浅い溝がある。図示した資料はほぼ上面から撮影したもの。一見、在来種の南瓜のような形態といってもよい。径3.8mm。

ミズキ属の仲間が北海道に分布するものとしては、ゴゼンタチバナ *Cornus canadensis* L. とエゾゴゼンタチバナ *Cornus suecica* L. が知られている。前者は北海道全域、後者は北海道東部の平地の針葉樹林中に生育している。果実は赤熟しともに食用になる。ここから出土した資料はそのどちらの種類であるのか決定できない。

クルミ属 *Juglans* L. 図VI-2 6

焼けたクルミ属の内果皮破片が、H-1, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11の各堅穴住居中から普遍的に出土している。

4 若干の問題提起

北海道においては、これまで縄文時代早期中葉の植物遺体は、ほとんど報告されていない。この遺跡の資料は、その点でも興味深いものである。

我々が種子の分析を実施した先史時代遺跡の中で縄文時代のものは、どの遺跡をとり上げても堅果類細片の出土がごく普通に見られる。その堅果類としてはクルミが最も多い。これらの現象から見ても、クルミが彼らの食料のうちに占めている重要性については、説明するまでもないだろう。ただし、それらがどのような形で処理され、食用とされたのかについては、残念ながら、まだ、はっきりした資料がない。現在我々の周囲で通常食用とされているものは俗称カシグルミといわれるベルシャグルミやシナノグルミで、破殻して内果皮に包まれた食用部分を取り出すことは容易である。しかし、野生のクルミは殻が厚く破殻しづらい。とくに大量の処理がむづかしい。こうした事情から大胆に推理することが許されるなら、中野A遺跡にも見られた縄文時代の遺跡の炭化した内果皮の破片のあり方は、ひょっとすると彼らのクルミ処理工程に関係する可能性が考えられるのではないかな。今後の資料の増加と脂肪酸分析などによる器具類との関係を検討する必要があるだろう。

キハダも遺跡から出土例の多い種子である。アイヌ語ではこの植物の果実を *sikerpe* (*sikérpe*)、北海道在住の和入方言ではシコロの実といっている。現在はさほど利用されていないが、少し前までアイヌ民族は、秋になるとこの果実を大量に採集するのが常であったという。この果実には甘いものと苦いものがあり、甘いものは生食することも稀ではなかった。採集した果実は、乾燥して保存、冬期になってコンブ (*Laminaria Lamour.*) やササゲマメ (*Vigna sinensis* Endl.) を一緒に煮てどろどろになったところにこれを混ぜ、それが煮える頃にモチアワ (*Setaria italica* Beauv.) を一つかみ入れる。さらにこの中にオオウバユリ (*Cardiocrinum glehni* Makino) の鱗茎を入れてごった煮にする。この料理を *Sikérpe-rataskep* あるいは単に *sikérpe* といっていた。また、海獣の油を煮立てた中にオオウバユリの団子とギョウジャニンニク (*Allium victorialis* L.) とこの乾燥果実を入れたものは大変なご馳走であったという。そのほか、乾燥したこの果実を半日煮てつぶし、凍らしたサケ

(鮭)のスジコ(魚卵)を入れてかき回しておく。これとは別に凍ったサケをあらかじめ細かく切って塩湯でゆがいたものを準備し、これにキハダの実とスジコで作ったソースをかけて食べていた例も知られている。そのほか薬用としても利用されていた。

キハダは、食用以外にも宗教儀礼上にとって重要な素材であった。アイヌ民族は、キハダは金、ミズキは銀、ハンノキは銅に相当するランクの貴重なものであるとしていた。それで、最も位の高い尊い神に捧げる木幣は、キハダで制作していたと伝えられる。例えば、北海道東部の美幌では、クマ送りの時にだけこのキハダで作った木幣が捧げられていた(以上民俗例については知里：1953による)。

つまりアイヌ民族にとっては、キハダは食用としても宗教儀礼にとってもきわめて重要な意味があったといってよい。たしかに、考古学的な見地からだけ見れば、このような宗教儀礼の伝統が、いつ、どのような形で成立し、変容したかは明確であるとは言えない。だが、こうした民俗事例の残っていることから考えれば、キハダのようなある特定の樹種利用が、古くからいろいろな目的で伝統的に人々の生活に利用されていた可能性は否定できないであろう。つまり、北海道の先史時代遺跡から出土するキハダは、決して人間以外の原因がもたらした偶然の所産であるとは言えないのである。

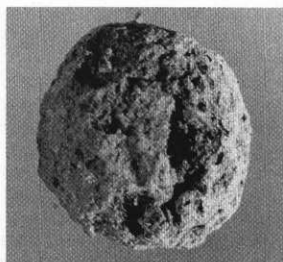
謝 辞

この様な興味ある資料を収集し、調査の機会を作って下さった北海道埋蔵文化財センターならびに調査担当者高橋和樹氏始めスタッフの方々には感謝したい。また、種子分析の過程では、北海道開拓記念館の山田悟郎氏と北海道大学埋蔵文化財調査室の椿坂恭代氏に大変お世話になった。山田氏には堅果類に関する情報で御教授願ったし、椿坂氏には分析作業と写真撮影で大いに御面倒をかけた。深くお礼を申し上げておきたい。

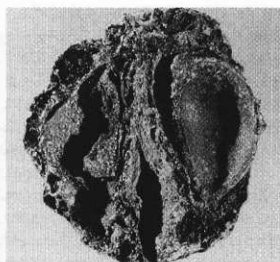
引用文献

知里真志保

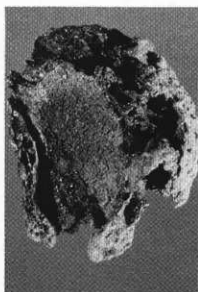
1953：『分類アイヌ語辞典 第1巻 植物篇』 日本常民文化研究所 彙報第64 日本常民文化研究所刊 394p.



1. キハダ属の果実



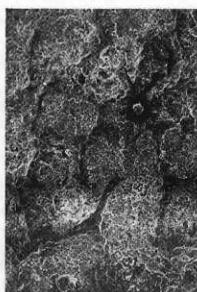
2. キハダ属の半割になった果実



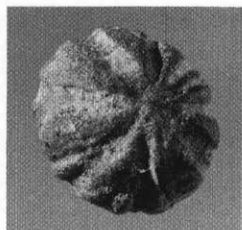
3. キハダ属の割れた果実片



4a. キハダ属の種子



4b. 4aの拡大 ×100



5. ミズキ属



6. クルミ属内果皮片

図Ⅵ-2 出土炭化植物種子

3 中野A遺跡の土壌に残存する脂肪の分析

中野寛子、明瀬雅子、長田正宏（駒澤大学総合科学研究所）

中野益男（帯広畜産大学生物資源化学科）

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

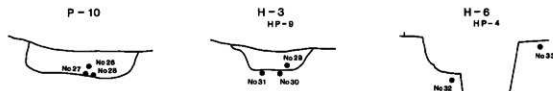
最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと⁽¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子⁽²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子⁽³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生物植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて中野A遺跡から出土した土壌の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

縄文時代早期中葉の土壌P-10および竪穴住居跡床面から検出された土壌内外の土壌試料を分析した。土壌採取地点を図VI-3に示す。土壌P-10から採取した試料No.26は土壌覆土上部、試料No.27およびNo.28は土壌覆土3層の土壌である。この土壌からは頁岩製の石器（石匙、削器、刮片）8点が出土している。H-3竪穴住居跡の土壌HP-9から採取した試料No.29は土壌覆土3層、試料No.30およびNo.31は土壌底V層の土壌である。この土壌からは頁岩製の刮片2点が出土している。H-6竪穴住居跡の土壌



図VI-3 土壌試料採取地点

表VI-3 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
26	P-10 覆土上部	281.0	10.4	0.0037
27	P-10 覆土3層	313.0	7.4	0.0024
28	P-10 覆土3層	645.6	12.3	0.0019
29	H3HP-9 覆土3層	226.8	5.5	0.0024
30	H3HP-9 墳底V層	242.1	4.6	0.0019
31	H3HP-9 墳底V層	282.7	3.8	0.0013
32	H6HP-4 墳底V層	201.3	5.3	0.0026
33	H6HP-4 住居床V層	250.7	7.9	0.0032

HP-4から採取した試料No32は土壌底V層、試料No33は対照のため土壌脇住居床地山のV層の土壌である。土壌HP-4は土壌P-10およびHP-9より規模は小さく、頁岩製の切片1点が出土している。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料201g～646gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶液に1%塩化バリウムを全抽出溶液の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

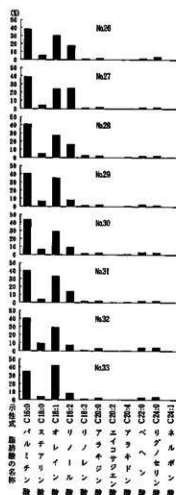
残存脂肪の抽出量を表VI-3に示す。抽出率は0.0013～0.0037%、平均0.0024%であった。この値は出土土壌を土壌基かどうか判定した北海道納内3遺跡の土壌試料の平均抽出率0.0032%⁽³⁾、宮城県棚枝遺跡の土壌試料の0.0030%⁽⁶⁾、兵庫県寺田遺跡の土壌試料の0.0016%⁽⁷⁾、出土遺物を要棺と判定した静岡県原川遺跡の土壌試料の0.0041%⁽⁸⁾に比べると、ほぼ同程度であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エチルエーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁽⁹⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を図VI-4に示す。残存脂肪から11種類の



図VI-4 土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

表 VI-4 土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No	コレステロール (%)	シトステロール (%)	コレステ ロール / シトステ ロール
26	4.47	16.71	0.27
27	4.35	14.05	0.31
28	5.56	25.42	0.22
29	4.34	15.20	0.29
30	8.29	11.01	0.75
31	7.27	12.02	0.60
32	5.33	13.04	0.41
33	5.02	18.75	0.27

脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸 (C16:0)、ステアリン酸 (C18:0)、オレイン酸 (C18:1)、リノール酸 (C18:2)、アラキジン酸 (C20:0)、ベヘン酸 (C22:0)、リグノセリン酸 (C24:0)、ネルボン酸 (C24:1) の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中での炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、試料No.33以外のすべての試料が同じ傾向を示した。すなわち、主要な脂肪酸はパルミチン酸で約38~44%分布していた。次いで多いのがオレイン酸で約25~33%分布していた。試料No.33では一番多いのがオレイン酸で約42%、次いで多いのがパルミチン酸で約35%分布していた。一般に考古遺物はパルミチン酸の分布割合が高い。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。またオレイン酸は主として動物性脂肪に分布割合が高いが、根、茎、種子などの植物性脂肪の一部に分布割合が高いものもある。一方、高等動物、特に臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸の分布割合はすべての試料が同じ傾向を示し、それら3つの脂肪酸の合計で約6~12%分布していた。この含有量は通常の遺跡出土土壌中のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸3つの合計の約4~10%と同程度で、特に多いというものではない。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸 (80:30:1) を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジーン-無水酢酸 (1:1) を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図VI-5に示す。残存脂肪から15種類前後のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールはすべての試料中で約4~8%分布してい

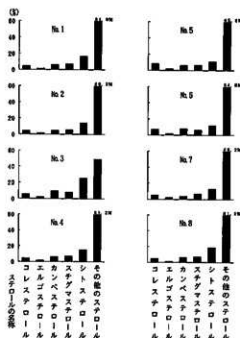


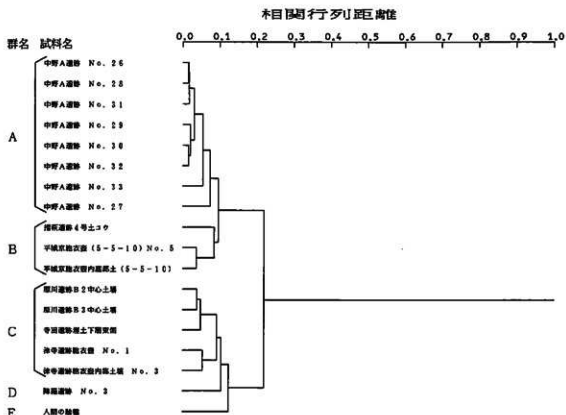
図 VI-5 土壌試料に残存する脂肪のステロール組成

た。この値は通常の一般的な植物腐植土中での分布量と同程度か少し高い。植物由来のシトステロールは約11～25%分布していた。この値は通常の遺跡出土土壌中での分布量よりも低いものである。クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンベステロール、スチグマステロールはカンベステロールが約4～10%、スチグマステロールが約6～8%の分布量で通常の遺跡出土土壌中でのそれと同程度であった。微生物由来のエルゴステロールは約2%分布していたが、人為的に微生物を添加した値に比べるとかなり低い割合であるため、積極的に何かを醸酵させたのではなく、土壌微生物による自然醸酵が若干あったものと思われる。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる^(12,13)。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表VI-4に示す。表からわかるように、対照試料である試料No.33住居床V層の分布比が0.27であるのに対し、試料No.30およびNo.31は分布比が0.6以上を示した。従ってこれら2試料を採取した土壌 HP-9には動物遺体が存在していた可能性がある。土壌 P-10の試料No.26～28の分布比は0.22～0.27で、対照試料No.33とほぼ同じ値を示した。従って土壌 P-10からは明瞭な動物遺体の存在が確認できなかった。土壌 HP-4の試料No.32の分布比は0.41で、対照試料よりも若干高い値を示しているため、この土壌 HP-4には動物遺体が存在していた可能性がある。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に出土土壌を再葬墓と判定



図VI-6 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

した摺蓐遺跡⁽⁶⁾、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した原川遺跡⁽⁸⁾、出土土壌を土壌墓と判定した寺田遺跡⁽⁷⁾、出土土器を袍衣壺と判定した平城京左京（外京）五条五坊十坪、同じく袍衣壺と判定した津寺遺跡⁽¹³⁾、竪穴住居跡の土壌に袍衣および臓器に類する遺物を埋納したと推定した陣箱遺跡の試料および人間の胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図VI-6に示す。すべての試料が相関行列距離0.07以内の近い距離で類似しておりA群を形成した。摺蓐遺跡と平城京袍衣壺試料は相関行列距離0.08以内でB群を形成した。原川遺跡と寺田遺跡、津寺遺跡の試料はC群、陣箱遺跡と人間の胎盤試料は各々単独でD、E群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.1以内にあり、互いに類似しているといえる。しかしヒト遺体や幼児埋葬および袍衣埋納のC、D群とA、B群は相関行列距離が0.2以上離れていた。このことから竪穴住居の土壌が幼児または通常のヒト遺体を埋葬したものである可能性は少ない。また竪穴住居跡の土壌群は津寺遺跡の袍衣壺のC群や人間の胎盤試料のD群とは系統樹を異にしているが、平城京の袍衣壺および摺蓐遺跡のB群とは相関行列距離0.1以内にあることから、骨または袍衣に類する臓器が埋納されていた可能性もある。

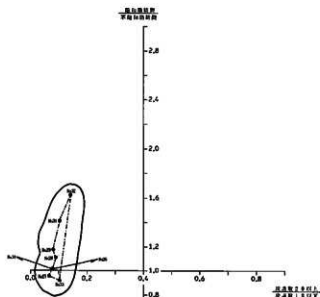
6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図VI-7に示す。図からわかるように、試料すべてが第2象限から第3象限にかけて分布した。この位置は植物腐植由来の脂肪と高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪とが混ざって残存している場合に近い所である。

7. 総括

中野A遺跡から出土した土壌の性格を判定するために、土壌内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸および脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、試料すべてには動物性脂肪が残存して



図VI-7 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

いたが、ヒト遺体の全部が埋葬されていた場合などのような明瞭な脂肪酸組成パターンではなかった。再葬墓土壌や陶器査と判定した試料とは類似度が高く、骨、臓器といった動物遺体の一部が存在していた可能性はある。しかし植物腐植土由来の脂肪が多く、脂肪酸組成パターンだけで動物遺体の一部か骨あるいは臓器かを判定することは困難であった。ステロール分析の結果は土壌 HP-9の試料No30およびNo31、土壌 HP-4の試料No32で動物遺体の存在を示唆していたが、土壌 P-10の試料については動物性脂肪が特に多いという結果ではなかった。

これらの成績から、土壌 P-10には動物遺体の痕跡しか認められなかったが、土壌 HP-9および土壌 HP-4には動物遺体の一部が埋納されていた可能性が高いことがわかった。しかし動物遺体の種類については、脂肪酸組成とステロール分析およびそれらの数理解析からだけでは判定できなかった。今後免疫反応によって動物種および臓器の種類を確定する必要がある。

参考文献

- (1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」, [Archaeo. Physika.], 10巻, 1979, pp260.
- (2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, [Nature], 292巻, 1981, pp146.
- (3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle: 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäßinhalte」, [Naturwissenschaften], 70巻, pp33.
- (4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, [歴史公論], 第10巻(6), 1984, pp124.
- (5) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「納内3遺跡の遺構群に残存する脂肪の分析」, [納内3遺跡]、北海道埋蔵文化財センター調査報告書、第60集、1988, pp141.
- (6) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「帯紋遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, [未発表]、宮城県教育委員会。
- (7) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏: 「寺田遺跡土壌基状遺構に残存する脂肪の分析」, [未発表]、兵庫県芦屋市教育委員会。
- (8) 中野益男、堀口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「原川遺跡の土器層に残存する脂肪の分析」, [原川遺跡Ⅰ-昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書]、第17集、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988, pp79.
- (9) M. Nakano and W. Fischer: 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, [Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.], 358巻, 1977, pp1439.
- (10) 中野益男、福島道広、中野寛子、中岡利泰、根岸 孝: 「残存脂肪分析法による原始古代の生活環境-とくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同一(第7報)」, [日本農芸化学会東北支部北海道支部合同秋期大会講演要旨]、1987, pp15.
- (11) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 源: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, [脂質生化学研究]、第26巻、1984, pp40.
- (12) 中野益男: 「真路遺跡出土土器に残存する動物油脂」, [真路遺跡-農村基盤総合設備事業能都東地区真路工区に係わる発掘調査報告書]、能都町教育委員会・真路遺跡発掘調査団、1986, pp401.
- (13) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子: 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, [ヘロカルウス遺跡]、北海道文化財研究所調査報告書、第3集、1987, pp191.
- (14) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した陶器査の残存脂質について」, [奈良市埋蔵文化財調査概要報告書-昭和63年度]、1989, pp5.
- (15) 中野益男、明瀬達子、長田正宏、中野益男、福島道広: 「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」, [未発表]、岡山県古代芸術文化財センター。
- (16) 中野益男、福島道広、中野寛子: 「陣箱遺跡の2号堅穴南壁中央の不定形土壌に残存する脂肪の分析」, [陣箱遺跡-大分県大野郡三重町所在の弥生時代後期住居跡の調査]、三重町教育委員会、1987, pp14.

4. 中野A遺跡の火山灰の対比と明赤褐色土の成因(予察)

1. はじめに

中野遺跡で函館市教育委員会(1977)は四枚の火山灰層を確認し、上位からP.D.1、P.D.2、P.D.3、P.D.4と呼称して、それぞれKo-d(駒ヶ岳火山灰d層)、Ko-e(駒ヶ岳火山灰e層)、銭亀沢層に対比した。P.D.4は不明火山灰とされた。五十嵐(1977)は、中野A遺跡で、上位からKo-白ハン、Ko-e、Os-白ハン、新発見火山灰、銭亀沢層、不明火山灰の6枚の細粒ないし粉状の火山灰を認めた。今年度の当センターの発掘調査でも、P.D.1からP.D.4に対比されるものが認められた。このうち、P.D.2とP.D.3を除けば発達は非常に悪い。

P.D.2は褐色のシルト質降下火山灰で層厚2cm±、断続的に産出する。P.D.3は明赤褐色土で層厚20cm±、遺跡内で広範囲に産出する。P.D.3は野外観察において、海綿骨針らしい白色針状物質を含むこと、遺物を含むこと、遺跡外の露頭では認め難いことから、火山灰でないことが予想された。ここでは、P.D.2とP.D.3について、鏡下で構成粒子を明らかにし、対比や成因について予察的に報告する。

2. 試料と試料の処理

N-6-67杭附近からP.D.2とP.D.3、住居跡H-3内からP.D.3(基底部)を採取した(図1・図III-12)。試料は以下の方法で処理し検鏡した。水洗→6% H_2O_2 ・10% HCl 処理→水洗→乾燥。P.D.2については、蒸留水で封じ込めたプレパラートを作成し偏光顕微鏡で検鏡した。P.D.3については、粒径1/4mm<のものを実体顕微鏡で検鏡した。次に、試料中の構成粒子の量比を定性的に表現した。

3. 結果と考察

結果を表1に示す。試料3(P.D.2)はほとんど全て火山ガラスから成り、僅量の長石を含む。この長石は直消光を示し、アルカリ長石と推定される。火山ガラスはバブルウォール型が多く、繊維状発泡型も認められる。このような特徴を有する火山灰は、町田ほか(1981)・町田ほか(1984)のB-Tm(白頭山-苦小牧火山灰)である。

試料5-1(P.D.3最上部)と試料5-4(P.D.3最下部)はよく似た鉱物組成である。5-1は海綿骨針を多く含んでいる。海綿骨針は白濁し、熱を受けたことを示唆している。5-4も粒径1/4mm>では海綿骨針を多く含む。重鉱物では角閃石が多く、輝石量を上回る。鉱物組成上、銭亀沢層の鉱物組成(佐々木ほか, 1970)と相異がない。H-3内のP.D.3も試料5-4とよく似た粒子構成であるが剥片を含み、岩片はroundedである。白濁した海綿骨針や剥片を含む点で、明赤褐色土であるP.D.3即ち銭亀沢層は火山灰ではなく焼土と推定される。岩片の形態が異なることがあるので、母材が異なるP.D.3があるものと思われる。

試料6-1と試料6-2は互によく似た粒子構成である。6-1には炭化植物片が多い。この面試料では、輝石が角閃石量より多く、P.D.3とは逆である。試料採取地点では、P.D.3の焼土母材とはいえないであろう。

4. まとめ

今回のP.D.2とP.D.3の構成粒子の検鏡結果から、両層の対比や成因は次のようにまとめられる。

- (1) P.D. 2はKo-eではなく、B-Tmである。
 (2) P.D. 3 (銭亀沢層) と呼ばれる明赤褐色土は、火山灰ではなく焼土であろう。

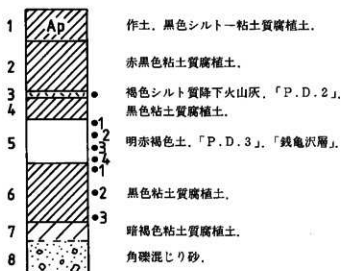


図1 試料採取地点の地質柱状図

表1 火山灰・土壌の構成粒子*

試料	石英	長石	黒雲母	角閃石	輝石	鉄鉱物	火山 ガラス	軽石	岩片	炭化 植物片	海綿 骨針	備考
3		-					+++					長石は直消光。
5-1	++	++		++	+		-	++	-	+	+	粒径 $\geq 50\mu\text{m}$ では海綿骨針頗る多い。
5-4	++	++	+	++	+			+++	+	-	--	粒径 $\geq 50\mu\text{m}$ では海綿骨針多い。岩片は angular。
6-1	+	+++		+	++	--		+	+	++	--	岩片は angular。
6-2	++	+++		+	++	--		+	+	-	--	岩片は angular。
H-3内 P.D. 3	++	+++	--	++	+	-		+	+	-	--	割片を含む。 岩片は rounded。

* : 細粒砂以上 (試料3は全粒徑) +++ : 頗る多い ++ : 多い + : 少ない - : 僅量 -- : まれ

引用文献

- 五十嵐八重子(1977): 函館空港遺跡周辺の表層地質と花粉分析, 「函館空港第4地点・中野遺跡」, 1289pp., 函館市教育委員会: pp. 1255-1267.
 佐々木龍男・片山雅弘・音羽道三・天野洋司 (1970): 渡島半島の火山灰について, 北海道農業試験場土性調査報告, 20, pp. 255-281.
 函館市教育委員会 (1977): 「函館空港第4地点・中野遺跡」, 1289pp.
 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981): 日本海を渡ってきたテフラ, 科学, 51, pp. 562-569.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984): テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—, 古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」, 984pp., 同朋舎: pp. 865-928.

(花岡正光)

あとがき

前章までに報告したように、中野A遺跡の平成3年度調査区では、主に縄文時代早期中葉の貝殻文尖底土器を伴う集落跡が見出された。調査した14軒の竪穴住居跡のうち1軒、H-1出土のI群A類土器は、早期前葉の日計式押型文土器に伴う縄文の施文された土器に比定される、より古いものであった。日計式に併行すると考えられる時期の土器は、道内では至って検出例が少なく、出土状況が明確に捉えられた例として貴重である。H-1は隅丸長方形プランで、炉址や整然たる柱穴などをもたない住居跡であった。

残る13軒の住居跡は、ほぼ物見台式土器の時期の所産であり、V章1節に和泉田が、昭和50・51年度の中野A・B遺跡検出の住居跡とも関連させて追究したように、形態や長軸方向、構造などに数軒単位のみまとまりが認められ、集落の変遷が想定できた。平成4年度予定の調査区に残されていると予想される住居跡とも合わせて、再度、集落の変遷の全容に迫りたいものと考えている。

今回の調査で出土した土器の主体はI群B類土器で、ほぼ物見台式土器の範疇で捉えられるものであったが、V章2節に遺跡が詳述したように、器形や文様にはかなりのバラエティーがあり、物見台式の標式的な土器や、先の調査における第III群土器とも必ずしも一致しない様相が認められた。I群B類土器は、第1グループから第3グループまでの類型を指摘できる幅のあるものであったが、現段階では、集落の変遷に伴う時間的な推移に照応するような、土器の型式学的な細分を見極めるまでには至っていない。近年、貝殻文線文系土器群の類例が、東北地方や関東で増加してきており、それらの細分や体系化など研究の進展も著しいものがある。それらの所見を学んで今後とも中野A・B遺跡の貝殻文尖底土器群の様相を追究していきたい。

出土の石器もまた多く、剥片石器や礫石器などに各種の器種がみられたが、特に礫石器の類や擦切磨製石斧などの豊富なことは特徴の一つに数えられよう。石器については、できるだけ多くの資料を掲載するよう努めたこともあり、全体的な傾向についてとりまとめる時間的な余裕がなかった。石器群の検討は今後の課題とした。

その他の遺物としては、恐らく北海道で最古と思われる土偶の出土が注目されよう。土製品では、先の中野B遺跡にみられた土器片鋳が、今回の中野A遺跡からも1点も発見されず、A・B両遺跡におけるこの差は注意されるべきかも知れない。

依頼した諸科学的分析のうち、H-3やH-6などの竪穴住居に伴う小ピット内の土壌試料の脂肪の分析結果では、胎盤とは一致しないが、動物の脂肪が検出されており、免疫学的な研究を進めれば、さらに明確な結論が導かれるとのコメントを得た。

また、遺構に伴う土壌試料のフローテーション結果では、VI章2節に報告をいただいたようにクルミ属やキハダ属、ミズキ属などの炭化種子が検出されている。とりわけクルミが各遺構から普遍的に見出されたのに対し、キハダが沢沿いの住居に偏って検出されたことや、キハダが果肉ごと炭化していた例が少なくなかったことなど、キハダの利用法と考えあわせて、今後の解明が期待される。

さらに、これまでは火山灰とみなされてきたP.D.3は、焼土であろうとの予察が打ち出された。P.D.3中には縄文前期前葉の春日町式・トドホッケ式土器や石片が包含されており、この赤褐色土の形成・堆積と遺物が包含された過程の追求のため、今後より詳しい土層の観察が必要とされよう。

時間的な制約のため、本報告書には不備や不足が少なくないものと反省しているが、函館空港整備事業に伴う中野A・B遺跡の発掘調査は今後さらに数年間を要するものであり、可能な限り、種々の追究を進めていきたいと思っている。

引用・参考文献

- 相原 淳一 (1978)「東北地方押型文文化に関する考察(1)」『山麓文化』第2号 白石地方文化研究所
 // (1982)「日計式土器群の成立と解体」『赤い本』創刊号
- 青森県教育委員会 (1975)『千歳(3)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
 // (1981)『表館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第61集
 // (1981)『新納屋遺跡(2)』青森県埋蔵文化財調査報告書第62集
 // (1982)『鴨平(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第72集
 // (1984)『和野前山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
 // (1985)『売場遺跡発掘調査報告書(第3次調査・第4次調査)』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
 // (1990)『表館(1)遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第127集
- 石本 省三 (1975)『函館空港第4地点遺跡』『北海道考古学』第11輯
- 江坂 輝彌 (1950)「青森県下北郡東通村、尻屋、物見台遺跡の調査報告」『考古学雑誌』第36巻第4号
- 大沼 忠春 (1951)『南稀府5遺跡』北海道文化財保護協会
- 河野 常吉 (1924)「音江村の環状石籬」『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』北海道庁
- 木村 有紀 西本 豊広 小谷 凱宜 (1988)「微細切片の3次元分布と属性分析」『国立歴史民族博物館研究報告』第21集
- 久保 泰他 (1983)『白坂』松前教育委員会
- 児玉作左衛門・大場 利夫 (1953)「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』8
- 佐川 正敏 (1979)「中野A遺跡A地点〔グループII〕371地区の土器」『函館空港中野遺跡』みやま書房
- 笹津 備洋 (1960)「青森県八戸市日計遺跡」『史学』33-1 三田史学会
- 市立函館博物館 (1955)『函館市梁川町遺跡』
 // (1973)『函館志海苔古銭』
- 白石地域文化研究会 (1982)「宮城県白石市下川原子A遺跡第1次調査報告」『赤い本』創刊号
- 信藤 祐仁 (1983)「押型文系土器出土遺跡」『考古遺跡・遺物地名表』柏書房
- 杉山 武 (1976)「第1群土器」『千歳遺跡(3)』青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
- 瀬川 秀良 (1974)「西桔梗遺跡と段丘形成について」『西桔梗』
- 瀬川 秀良 (1974)『日本地形誌一北海道地方一』朝倉書房
- 石器文化談話会編 (1978)『座敷乱木遺跡発掘調査報告書 I』石器文化談話会誌第1集
- 石器文化談話会編 (1982)『座敷乱木遺跡発掘調査報告書 II』石器文化談話会誌第2集
- 高橋 誠 (1986)「型式学的方法一貝殻紋文系土器」『季刊考古学』第17号
- 高橋 正勝 (1960)「日吉町百花園遺跡発掘報告」『青雲台史』No.1
 // (1967)「北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻文土器について」『石器時代』第8号
- 武内 収太 (1967)「函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告一函館空港1遺跡」
- 竹岡 俊樹 (1989)『石器研究法』言叢社
- 武田 良夫 (1982)「岩手県における押型文土器文化の様相」『赤い本』創刊号
- 田島一雄他 (1988)『根井沼(1)遺跡発掘調査報告書』三沢市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 田原 良信 (1979)「中野A遺跡発掘調査報告書」函館市教育委員会
- 地質調査所 (1984)「20万分の1地質図 函館及び渡島大島」
- 千代 肇 (1953)「北海道南部に於ける遺跡及び遺物の考古学的研究」
- 千代 肇 (1975)「函館空港第4地点遺跡」『考古学ジャーナル』No.105
- 千代 肇 (1980)「先史時代」『函館市史』通説編第一巻
- 長沼 孝編 (1988)『石川1遺跡』北埋調報45

- 名久井文明 (1982) 「貝殻文尖底土器」『縄文文化の研究』3
- 林 謙作 (1966) 「東北・北海道の貝殻文土器群」『北海道青年人類科学研究会会誌』6
- 西川 博孝 (1989) 「『物見台』と『吹切沢』—東北・北海道南部における貝殻紋系統土器末葉の編年—」『先史考古学研究』第2号阿佐ヶ谷史学研究會
- 函館市教育委員会 (1961) 『函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告書』
- 〃 (1972) 『函館市内埋蔵文化財対策調査概報』
- 〃 (1975) 『函館市湯倉団地建設用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 〃 (1977) 『函館空港第4地点・中野遺跡』
- 〃 (1981) 『見晴町B遺跡発掘調査報告書』
- 〃 (1987) 『豊原1遺跡』
- 〃 (1990) 『特別史跡五稜郭跡』
- 八戸市教育委員会 (1986) 『史跡根城発掘調査報告書Ⅷ』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 〃 (1988) 『田面木平遺跡1』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 〃 (1990) 『見立山(2)遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第38集
- 浜野美代子 (1990) 「土偶出現の時期と形態」『季刊考古学』第30号
- 原田 昌幸 (1987) 「縄文時代早期の土偶」『考古学ジャーナル』No.272
- 日吉町遺跡発掘調査団 (1971) 『函館市日吉遺跡発掘報告』
- 北海道農業試験場 (1985) (増刷) 『北海道の土壌』(60万分の1北海道土壌図説説明書)(財)北農会
- 北海道埋蔵文化財センター (1991a) 『牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡・谷藤川右岸遺跡』北埋調報68集
- 北海道埋蔵文化財センター (1991b) 『上清水4遺跡・共栄2遺跡・共栄3遺跡』北埋調報第70集
- 前野 英一 (1960) 「函館市湯川土師遺跡紹介」『青雲台史』No.1
- 松下 亘編 (1989) 『西股』北海道第4紀研究会
- 宮城県教育委員会 (1972) 「松田遺跡」『東北自動車道関係遺跡調査概報』宮城県文化財調査報告書第25集
- 〃 (1982) 「松田遺跡」『仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第88集
- 三宅 徹也 (1979) 「第4章 早期編」『螢沢遺跡』青森市螢沢遺跡調査団
- 盛岡市教育委員会 (1983) 『大館遺跡群 大新町遺跡』昭和57年度発掘調査概報
- 山縣耕太郎他 (1989) 「銭亀—女郎川テフラ」『地理学評論』62巻3号
- 山内 清男 (1967) 「日本遠古之文化」『先史考古学論文集』1 (新版)
- 吉崎昌一他 (1971) 「志海苔中世遺構の調査」『新しい道史』6—5

H-7

種別	土留	鏡片石留壁	透壁石留壁	鏡石留壁	その他	合 計	備 考
1 壁面延長 小計	105	105	0	0	0	105	
壁 上	105	0	0	0	0	105	
壁 下	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
合 計	105	105	0	0	0	105	

H-8

種別	土留	鏡片石留壁	透壁石留壁	鏡石留壁	その他	合 計	備 考
1 壁面延長 小計	105	105	0	0	0	105	
壁 上	105	0	0	0	0	105	
壁 下	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
合 計	105	105	0	0	0	105	

H-9

種別	土留	鏡片石留壁	透壁石留壁	鏡石留壁	その他	合 計	備 考
1 壁面延長 小計	105	105	0	0	0	105	
壁 上	105	0	0	0	0	105	
壁 下	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
合 計	105	105	0	0	0	105	

H-10

種別	土留	鏡片石留壁	透壁石留壁	鏡石留壁	その他	合 計	備 考
1 壁面延長 小計	105	105	0	0	0	105	
壁 上	105	0	0	0	0	105	
壁 下	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
合 計	105	105	0	0	0	105	

H-11

種別	土留	鏡片石留壁	透壁石留壁	鏡石留壁	その他	合 計	備 考
1 壁面延長 小計	105	105	0	0	0	105	
壁 上	105	0	0	0	0	105	
壁 下	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
合 計	105	105	0	0	0	105	

H-12

種別	土留	鏡片石留壁	透壁石留壁	鏡石留壁	その他	合 計	備 考
1 壁面延長 小計	105	105	0	0	0	105	
壁 上	105	0	0	0	0	105	
壁 下	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
合 計	105	105	0	0	0	105	

H-13

種別	土留	鏡片石留壁	透壁石留壁	鏡石留壁	その他	合 計	備 考
1 壁面延長 小計	105	105	0	0	0	105	
壁 上	105	0	0	0	0	105	
壁 下	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
壁 面	0	0	0	0	0	0	
合 計	105	105	0	0	0	105	

H-14

種別	土質		砂質土質				腐植土質				礫石土質				その他		合 計	備 考
	1部目	2部目	3部目	4部目	5部目	6部目	7部目	8部目	9部目	10部目	11部目	12部目	13部目	14部目	15部目	16部目		
種別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	200	
合計	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	200	

土質等

種別	土質		砂質土質				腐植土質				礫石土質				その他		合 計	備 考
	1部目	2部目	3部目	4部目	5部目	6部目	7部目	8部目	9部目	10部目	11部目	12部目	13部目	14部目	15部目	16部目		
P-1	種 土	20	20														20	
P-2	種 土	10	10														10	
P-3	種 土	10	10														10	
P-4	種 土	10	10														10	
P-5	種 土	10	10														10	
P-6	種 土	10	10														10	
P-7	種 土	10	10														10	
P-8	種 土	10	10														10	
P-9	種 土	10	10														10	
P-10	種 土	10	10														10	
P-11	種 土	10	10														10	
P-12	種 土	10	10														10	
P-13	種 土	10	10														10	
P-14	種 土	10	10														10	
P-15	種 土	10	10														10	
P-16	種 土	10	10														10	
P-17	種 土	10	10														10	
P-18	種 土	10	10														10	
P-19	種 土	10	10														10	
P-20	種 土	10	10														10	
P-21	種 土	10	10														10	
P-22	種 土	10	10														10	
P-23	種 土	10	10														10	
P-24	種 土	10	10														10	
P-25	種 土	10	10														10	
P-26	種 土	10	10														10	
P-27	種 土	10	10														10	
P-28	種 土	10	10														10	
P-29	種 土	10	10														10	
P-30	種 土	10	10														10	
P-31	種 土	10	10														10	
P-32	種 土	10	10														10	
P-33	種 土	10	10														10	
P-34	種 土	10	10														10	
P-35	種 土	10	10														10	
P-36	種 土	10	10														10	
P-37	種 土	10	10														10	
P-38	種 土	10	10														10	
P-39	種 土	10	10														10	
P-40	種 土	10	10														10	
P-41	種 土	10	10														10	
P-42	種 土	10	10														10	
P-43	種 土	10	10														10	
P-44	種 土	10	10														10	
P-45	種 土	10	10														10	
P-46	種 土	10	10														10	
P-47	種 土	10	10														10	
P-48	種 土	10	10														10	
P-49	種 土	10	10														10	
P-50	種 土	10	10														10	
P-51	種 土	10	10														10	
P-52	種 土	10	10														10	
P-53	種 土	10	10														10	
P-54	種 土	10	10														10	
P-55	種 土	10	10														10	
P-56	種 土	10	10														10	
P-57	種 土	10	10														10	
P-58	種 土	10	10														10	
P-59	種 土	10	10														10	
P-60	種 土	10	10														10	
P-61	種 土	10	10														10	
P-62	種 土	10	10														10	
P-63	種 土	10	10														10	
P-64	種 土	10	10														10	
P-65	種 土	10	10														10	
P-66	種 土	10	10														10	
P-67	種 土	10	10														10	
P-68	種 土	10	10														10	
P-69	種 土	10	10														10	
P-70	種 土	10	10														10	
P-71	種 土	10	10														10	
P-72	種 土	10	10														10	
P-73	種 土	10	10														10	
P-74	種 土	10	10														10	
P-75	種 土	10	10														10	
P-76	種 土	10	10														10	
P-77	種 土	10	10														10	
P-78	種 土	10	10														10	
P-79	種 土	10	10														10	
P-80	種 土	10	10														10	
P-81	種 土	10	10														10	
P-82	種 土	10	10														10	
P-83	種 土	10	10														10	
P-84	種 土	10	10														10	
P-85	種 土	10	10														10	
P-86	種 土	10	10														10	
P-87	種 土	10	10														10	
P-88	種 土	10	10														10	
P-89	種 土	10	10														10	
P-90	種 土	10	10														10	
P-91	種 土	10	10														10	
P-92	種 土	10	10														10	
P-93	種 土	10	10														10	
P-94	種 土	10	10														10	
P-95	種 土	10	10														10	
P-96	種 土	10	10														10	
P-97	種 土	10	10														10	
P-98	種 土	10	10														10	
P-99	種 土	10	10														10	
P-100	種 土	10	10														10	

表4 遺構の掲載土器一覧

建物番号	図番号	出土部位	同一個体出土遺構・発掘区	点数	遺構番号	図番号	出土部位	同一個体出土遺構・発掘区	点数	
H-1	5-a	礎5・礎4	M-7-86-96, N-7-05-14			24	床		1	
	b	礎3				25	床		1	
	c	礎土		45		26	床		1	
H-2	9-1	礎下	X-2, N-7-24-38	41		27	床		1	
	2	礎土		1		28	床		1	
	3	礎土	N-7-25	3		29	床		1	
	4	礎土		1		30	構断面		3	
	5	礎土		1		31	床		2	
	6	礎下	H-9, N-7-56	3		32	礎4		1	
	7	礎下		1		27-33	床		1	
	8	礎土	H-9	2		34	礎2		1	
	9	礎土		1		35	床		1	
	10	礎土	H-5, N-7-36+45-55	7		36	礎・礎1		3	
	11	礎土	N-7-45-44-53-54	12		37	礎1	N-7-56	4	
H-3	18-1	礎1	M-7-94, N-7-03-04-13-33			38	礎3		1	
		礎上	+34-35	11		39	礎重b		1	
	2	礎1・礎上	N-7-03	5		40	床		1	
	3	礎2	H-6, N-7-03-04-14	17		41	床下		1	
	4	礎1		5		42	礎3		1	
	5	礎1・礎2		6		43	床		3	
	6	礎1・礎2	H-9, N-7-03-04-13-14	13		44a	構断面	H-10, N-7-44-55-63-65		
	7	礎1	X-2, N-7-14	7		b	礎1			
						c	礎・礎1		21	
	6a	礎2	M-7-94, N-7-94-94		H-5	38-1	床底・床 礎1・礎3 重b	N-7-54-50-64		
	b	礎土	N-7-03-04-45-55	17		2	床		201	
	c	礎2					礎1・礎3			
	9	礎4	H-8, N-7-14	3						
	10	礎4		12						
	11	礎1		3						
	12	礎上		1			3	床底・礎1	N-7-15-44-64	50
	13	礎4	H-6	2			4	床底	N-7-84	27
	14	礎土		1			5	床底	N-7-13	5
	15	礎1	N-7-03	2			6	礎土	H-4, H-9, N-7-43-55	7
H-4	25-1	床		42		7	礎3	N-7-53	3	
	2	床・礎1		10		8	床礎		1	
	3	礎1・礎2 構断面	N-7-05-44-55-56-57 +55-56	25	H-6	9a	礎1	N-7-17-14	4	
	4	床・礎2 礎3・礎重b	N-7-34-44-53-64	55		b	礎		1	
	5	床・礎1 礎2・礎3	N-7-56	13		10	床礎		1	
	6	床底下 礎1・礎2 礎3	N-7-37-58			11	床		1	
		構断面		26		12	礎		1	
	7	床	N-7-56	13		13	礎1		1	
	8	床・礎1	N-7-49-55	13		14	礎3		1	
	9	床・礎1 礎3・礎 構断面	N-7-34	14		45-1	礎土		71	
	10	床・礎1		10		2	礎土	M-7-93, N-7-24-25	47	
	11	礎3		5		3	礎3	X-1	9	
						4	礎1	M-7-94	15	
	26-12a	床	N-7-56			5	礎1・2		5	
	b	礎2		3		6	礎1・2・3		5	
	13a	床	H-5, H-9, N-7-43-55	7		7	礎1		1	
	b	礎重b		1		8	礎2	H-3, H-9, M-7-94-94, N-7-03-04-45-55	17	
	14	床		3		9	礎土	H-3	3	
15	礎2		1	10		礎1		1		
16a	床	N-7-47-55		11	礎土		5			
b	床			12	礎2	M-7-95, N-7-5	5			
c	床			13a	礎2		1			
17	床		1	14	礎2		2			
18	床	N-7-33	2	15a	礎3		2			
19a	床・礎1	N-6-30, N-7-50-57		b	礎3		2			
b	礎1		14	16	礎1・礎3		2			
20a	礎2	N-7-48-50-66		17	礎3		2			
b	礎2		10	H-7	51-1	床・礎1・2・3	H-8, N-7-39-49-58-59	186		
21a	床直下					2	礎1・3	M-7-86, N-7-25-48-49-57-58	18	
b	床		3			3	礎1		1	
22	床	N-7-58-57	12		H-8	55-1	床直上		1	
23	礎3		1			2	床直上		1	
						3	床直上		1	
					4a	礎1	N-7-55-56-57			
					b	礎1・柱欠				

遺構番号	図番号	出土層位	同一層位出土遺構・発掘区	点数	遺構番号	図番号	出土層位	同一層位出土遺構・発掘区	点数
H-9	c	層土・覆1		12	H-10	58a	覆1・覆2	N-7-24	
	80-1	覆土・覆4	X-2, H-3, H-6, N-7-13-14-21-34-35	40		b	覆1		
	2	覆5	N-7-23-27-33-34-38 +43-44	47		c	覆2		
	3	覆4・覆5	H-6, M-7-84-94-95, N-7-04-05-13-24	26		d	覆1・覆2		12
	4	覆5・覆b	H-4	8		59	覆2		1
	5	覆4・覆5	H-6, N-7-04-05-24	20		60	覆2		1
	6	覆3・覆5	N-7-23	5		61	覆2		1
	7	覆2・覆4	P-3, N-7-23-24-25-33 +35-46	24		62	覆2		1
	8	覆4・覆5	H-6, N-7-13-56	15		63	覆2		1
	9	覆5		9		66-1	床面上	P-5, N-7-33	57
	10	覆4・覆5	M-7-84, N-7-34	5		2	覆土		1
	61-11	覆4・5	N-7-43-45-52	19		3	覆土	N-7-33-41-43-44	26
	12	覆4・5	N-7-15-24-33-34-37	23		4	覆土	N-7-15-43-53	6
	13	覆4・覆5	N-7-24・25	10		5	床面上		1
	14	覆4・覆5	N-7-34	6		6	覆土		1
	15	覆4		3		7	覆土		3
	16	覆5		2		8	床面上		1
	17a	覆4	N-7-04・25・33-43-44	35		9	覆土		1
	b	覆4				10	覆土	H-4, N-7-44-55-56-63-65	21
	18	覆2	H-3, H-6, M-7-84-94 N-7-05-04-45-55	17		11	床・P-13		1
	19	覆5	M-7-86, N-7-33	3		12	床・P-13		1
	20a	覆4				13	床		1
	b	覆4				14	床・P-13		1
	c	覆4・覆b		5		15	覆土		1
	21a	覆4				16	床		1
	b	覆5		2		17	覆土		1
	22a	覆5	P-3, N-7-33	6	H-11	70-1	床・覆土	N-7-58	12
	23	覆5		1		2	覆土	N-7-58-59	17
	24	覆5		1		3	覆土・覆土	N-7-58	6
	25	覆b		1		4a	覆土		
	26	覆5		1		b	覆土		
	27	覆b		1		c	覆土		
	28	覆5		1		d	覆土		9
	29	覆4		1		5	覆土		1
	30	覆b		2		6	覆土	N-7-58-59	4
	31	覆5		1		7	覆土	N-7-59	3
	32	覆2		1		8	覆土	N-7-59	3
	33	覆4		1		9a	覆土	N-7-59	
	34	覆5		3		b	覆土		5
	35	覆4		1		10	覆土	N-7-59-67	3
	36	覆b		1		11	覆土		1
	37	覆5		1		12	覆土	N-7-76	8
	38	覆5		1		13	覆土		1
	39	覆5		2		14a	覆土		
	40	覆5		3		b	覆土		
	41	覆4		1		77-14c	床		3
	62-42	覆2		1		15	床		1
	43	覆4		1		16	床		2
	44	覆4	N-7-24	3		17	覆土		1
	45	覆土		1		18	覆土		1
	46	覆5		1		81-1	床		3
	47	覆4		1		2	床	H-14, N-7-34	4
	48	覆5		1		3	覆土		2
H-13	49a	覆2	N-7-24	4		4	覆土		1
	b	覆5		4		5	床	N-7-34-35	3
	50	覆4		1		6	覆土		1
	51	覆4		1		7	床		1
	52	覆4		1		82-1	覆土	N-7-34	63
	53	覆5		1		2	覆土	H-6, N-7-15-24-34	23
	54	覆b		1		3	覆土	H-4, N-7-34-44	10
	55	覆4		2		4	覆土		6
	56a	覆4・覆b	N-7-33	4		5	覆土		17
	b	覆5		4		6	覆土	N-7-34	6
	57	覆4		2		7	覆土	N-7-44-4	4
						8	覆土		1
						9	覆土		1
H-14						10	覆土		1
						11	覆土	N-7-35-36-37	13
						12	覆土		2
						13	覆土		1

遺構番号	図番号	出土層位	同一個体出土遺構・発掘区	点数	遺構番号	図番号	出土層位	同一個体出土遺構・発掘区	点数
	14	層土		1		3	層1	N-7-33-43-44-53	8
	15	層土		1		4a	壁		
P-1	84-1	層1		30		b	壁5上面		
P-3	85-1	床	N-7-24-34	6		c	壁土上面		3
	2	床	M-7-94, N-7-33	13		5	壁5上面		1
	3a	床	H-9, N-7-33		P-8	89-2a	壁2	M-7-83, N-7-04-05-25 54-54	17
	b	床		6		b	壁2		
	4	床	N-7-13	2		c	壁2		
	5	床	M-7-97	2		d	壁2		
	6	床		18	T-6	1	壁土下		1
	7	床		5	T-7	1	壁土		1
	8	床	N-7-24	4		2	壁土		1
	9a	壁土				3	壁土		1
	b	壁6		2		4	壁土		1
	10	床		1	T-8	1	壁1		4
	11	床	H-9, N-7-24	3	X-1	99-1	壁b	M-7-83	3
	12	床		1		2	壁b		1
	13	床		4	X-2	103-1	暗褐色土	H-9, H-14, N-7-03-04-13 24-33-34	32
P-7	87-1	壁1		121		2	暗褐色土	H-3, N-7-13-14-25	20
	2	壁5上壁		9					

表5 遺構の掲載石器一覧

図番号	出土層位	種別	分厚	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	備考	図番号	出土層位	種別	分厚	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	備考
8-1	H-1-73	石	磨	硬質	54	22	9	6.4		-5	H-3-282	石	磨	硬質	79	38	13	26.1	
-2	H-1-89	石	磨	硬質	52	50	17	37.0		-6	H-3-281	石	磨	硬質	43	27	4	2.9	
-3	H-1-18	石	磨	硬質	80	35	9	26.1		-7	H-3-984	石	磨	硬質	63	47	17	35.5	
-4	H-1-11	石	磨	硬質	57	20	9	13.2		-8	H-3-287	石	磨	硬質	35	25	8	5.3	
M7-86-7	層1	石	磨	硬質	57	20	9	13.2		-9	H-3-484	石	磨	硬質	35	25	8	5.0	
-5	H-1-35	石	磨	硬質	54	25	7	10.9		-10	H-3-287	石	磨	硬質	41	28	10	10.1	
-6	H-1-91	石	磨	硬質	96	83	53	587.2		-11	H-3-287	石	磨	硬質	41	28	10	10.1	
-7	H-1-48	石	磨	硬質	19	21	5	0.9	打面折れ	-12	H-3-842	石	磨	硬質	23	21	7	8.1	
-8	H-1-48	石	磨	硬質	30	16	3	1.5	切子打面	-13	H-3-486	石	磨	硬質	29	20	3	1.3	
-9	H-1-49	石	磨	硬質	28	23	3	1.5	打面折れ	-14	H-3-486	石	磨	硬質	33	44	14	27.5	
-10	H-1-49	石	磨	硬質	28	19	2	0.7	切子打面	-15	H-3-486	石	磨	硬質	33	47	16	28.4	
-11	H-1-49	石	磨	硬質	28	28	6	4.1	切子打面	-16	H-3-145	石	磨	硬質	33	17	3	1.1	
-12	H-1-50	石	磨	硬質	33	38	8	8.8	切子打面	-17	H-3-545	石	磨	硬質	38	39	4	6.7	
-13	H-1-58	石	磨	硬質	30	17	4	1.1		-18	H-3-486	石	磨	硬質	40	24	4	2.9	
-14	H-1-62	石	磨	硬質	31	20	4	1.7		-19	H-3-178	石	磨	硬質	45	56	5	7.5	
-15	H-1-62	石	磨	硬質	50	84	18	64.5		-20	H-3-285	石	磨	硬質	63	50	10	38.8	
-16	H-1-65	石	磨	硬質	61	37	13	33.1		-21	H-3-210	石	磨	硬質	47	32	7	7.1	
-17	H-1-24	石	磨	硬質	62	80	25	95.8		-22	H-3-037	石	磨	硬質	27	31	6	3.7	
-18	H-1-28	石	磨	硬質	75	67	27	127.4		-23	H-3-215	石	磨	硬質	25	7	5	1.5	
-19	H-1-8	石	磨	硬質	53	22	8	16.7	少し白く風化	-24	H-3-374	石	磨	硬質	37	11	11	14.0	
-20	H-1-41	石	磨	硬質	136	102	25	275.4		-25	H-3-41	石	磨	硬質	37	11	11	14.0	
-21	H-1-40	石	磨	硬質	147	75	64	720.0		-26	H-3-541	石	磨	硬質	104	53	18	86.0	
-22	H-1-37	石	磨	硬質	120	97	48	770.0		-27	H-3-542	石	磨	硬質	72	45	12	18.2	
-23	H-1-45	石	磨	硬質	51	52	21	85.9		-28	H-3-112	石	磨	硬質	138	65	35	682.0	
-24	H-1-17	石	磨	硬質	95	81	45	511.0		-29	H-3-281	石	磨	硬質	71	65	55	401.2	
-25	H-1-40	石	磨	硬質	99	85	21	418.8	すり石を素材とするか	-30	H-3-447	石	磨	硬質	44	44	14.4	14.4	
-26	H-1-40	石	磨	硬質	97	73	12	115.3		-31	H-3-238	石	磨	硬質	85	45	43	197.5	
-27	H-1-47	石	磨	硬質	86	66	20	136.1		-32	H-3-175	石	磨	硬質	85	68	27	127.7	
-28	H-1-24	石	磨	硬質	14	57	58	118.6		-33	H-3-486	石	磨	硬質	77	63	17	72.3	石磨か
-29	H-1-28	石	磨	硬質	61	63	25	68.0	風化摩滅	-34	H-3-123	石	磨	硬質	55	38	12	30.3	
-30	H-1-31	石	磨	硬質	74	65	25	121.7		-35	H-3-585	石	磨	硬質	81	55	15	63.5	石磨か
-31	H-1-38	石	磨	硬質	72	61	18	83.7		-36	H-3-585	石	磨	硬質	140	81	24	175.3	風化摩滅
-32	H-1-49	石	磨	硬質	70	61	25	120.7	石磨か	-37	H-3-615	石	磨	硬質	120	78	27	141.7	
-33	H-1-19	石	磨	硬質	27	18	3	1.1		-38	H-3-258	石	磨	硬質	100	58	33	258.7	
-34	H-1-55	石	磨	硬質	53	33	12	15.5		-39	H-3-157	石	磨	硬質	73	70	29	186.9	
-35	H-1-475	石	磨	硬質	58	41	16	16.8		-40	H-1-2	石	磨	硬質	55	40	17	36.0	石磨か

図番	図名	層	分層	材質	長さ	幅	高さ	備考	図番	図名	層	分層	材質	長さ	幅	高さ	備考	
15-20-40	15-20-40	第2層	石版	焼灰	30	89	23	150.3	礎石と礎合	15-20-40	15-20-40	第2層	礎石	焼灰	73	56	25	87.8
15-20-41	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	30	22	2	0.8	切子行面	15-20-41	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	116	80	38	333.0
40	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	27	14	2	0.6	焼打面	40	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	103	81	40	354.4
41	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	19	15	2	0.5	切子行面	41	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	117	101	55	586.6
42	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	18	22	3	0.8	点打面	42	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	104	99	18	111.8
43	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	14	2	0.8	切子行面	43	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	126	99	17	130.3	
44	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	34	21	3	1.7	切子行面	44	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	147	106	22	780.9
45	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	17	7	2	0.2	平打行面	45	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
46	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	17	19	3	0.6	切子行面	46	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
47	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	17	23	6	1.4	焼打面	47	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
50	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	26	18	4	1.8		50	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
51	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	40	30	7	6.1		51	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
52	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	32	13	4	0.7		52	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
53	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	30	22	6	7.0		53	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
54	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	53	30	15	36.5		54	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
55	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	83	80	18	61.5		55	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
56	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	58	42	11	31.8		56	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
57	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	63	38	15	37.0		57	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
58	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	65	60	14	52.5		58	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
59	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	41	95	25	96.3		59	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
60	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	52	72	12	31.0		60	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
61	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	58	87	15	65.8		61	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
62	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	57	68	15	72.0		62	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
63	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	65	17	6	4.7		63	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
64	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	73	41	12	25.7		64	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
65	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	63	29	9	16.7		65	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
66	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	61	71	21	85.6		66	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
67	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	54	80	20	47.5		67	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
68	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	39	35	14	32.4		68	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
69	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	39	28	9	8.1		69	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
70	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	45	32	8	8.8		70	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
71	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	59	30	25	62.8	N7-34-200と礎合	71	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
72	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	41	35	8	12.1		72	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
73	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	47	58	18	39.4		73	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
74	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	58	38	10	19.5		74	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
75	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	70	73	15	84.7		75	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
76	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	68	68	15	46.8		76	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
77	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	46	87	24	111.3		77	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
78	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	40	59	15	36.4		78	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
79	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	32	75	22	57.5		79	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
80	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	60	54	25	74.7		80	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
81	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	52	42	22	61.5	N7-33-72と礎合	81	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
82	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	55	14	7	8.1		82	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
83	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	118	84	32	305.4	すり石を敷付とするか	83	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
84	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	115	52	28	180.1	229は礎石に改付か	84	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
85	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	90	72	35	290.1	すり石あるか	85	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
86	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	115	80	55	364.6	すり石あるか	86	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
87	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	222	80	143.8			87	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
88	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	111	84	63	705.0		88	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
89	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	135	30	33	223.4		89	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
90	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	210	108	32	854.9		90	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
91	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	70	81	9	40.5	砂留か	91	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
92	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	98	65	34	314.8	すり石を敷付とするか	92	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
93	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	116	87	47	500.2	たきた石と礎合	93	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
94	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	102	54	22	123.5		94	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9
95	15-20-41	第2層	銅片	焼灰	87	77	32	178.2		95	15-20-41	第2層	礎石	焼灰	232	300	48	314.9

図面番号	図面名称	層位	分類	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考	図面番号	図面名称	層位	分類	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
重-48-4	重-48-4	第5層	部分割削片石	硬質	30	19	5	2.5		重-49-4	重-49-4	第5層	部分割削片石	硬質	22	33	12	4.2	
-5	重-49-5	第5層	部分割削片石	硬質	30	21	5	3.2		-5	重-49-5	第5層	部分割削片石	硬質	100	70	31	543.4	
-6	重-49-6	第5層	部分割削片石	硬質	30	20	15	11.6		-6	重-49-6	第5層	部分割削片石	硬質					
-7	重-49-7	第4層	部分割削片石	硬質	29	23	4	2.1		-7	重-49-7	第4層	部分割削片石	硬質					
-8	重-49-8	第3層	部分割削片石	硬質	30	45	10	16.4		-8	重-49-8	第3層	部分割削片石	硬質					
-9	重-49-9	第1層	部分割削片石	硬質	75	45	17	52.2		-9	重-49-9	第1層	部分割削片石	硬質	120	85	45	350.0	
-10	重-49-10	第2層	石	硬質	34	67	39	136.8		-10	重-49-10	第2層	石	硬質	38	71	30	94.0	
-11	重-49-11	第2層	焼切片	硬質	85	46	25	134.9		-11	重-49-11	第2層	焼切片	硬質	20	14	4	1.0	
-12	重-49-12	第2層	焼切片	硬質	65	44	15	29.8		-12	重-49-12	第2層	焼切片	硬質	36	19	4	1.4	
-13	重-49-13	第2層	たたき石	硬質	104	74	47	474.8		-13	重-49-13	第2層	たたき石	硬質	25	21	7	2.1	
-14	重-49-14	第2層	すり石	硬質	157	80	46	810.0		-14	重-49-14	第2層	すり石	硬質	25	18	4	0.7	
-15	重-49-15	第2層	すり石	硬質	133	75	48	660.0		-15	重-49-15	第2層	すり石	硬質	33	17	8	1.5	
-16	重-49-16	第2層	石	硬質	113	54	11	67.9		-16	重-49-16	第2層	石	硬質	81	36	19	50.0	
重-47-11	重-47-11	第2層	石	硬質	130	83	52	288.2		-17	重-49-17	第2層	焼切片	硬質	87	75	17	86.9	
-18	重-49-18	第2層	焼切片	硬質	128	66	52	497.5		-18	重-49-18	第2層	焼切片	硬質	50	30	11	14.1	
-19	重-49-19	第2層	焼切片	硬質	113	110	28	325.5		-19	重-49-19	第2層	焼切片	硬質	74	37	14	49.9	
-20	重-49-20	第2層	焼切片	硬質	142	108	25	348.2		-20	重-49-20	第2層	焼切片	硬質	69	42	10	22.2	
-21	重-49-21	第2層	焼切片	硬質	135	72	47	364.4		-21	重-49-21	第2層	焼切片	硬質	51	46	7	12.4	
-22	重-49-22	第2層	焼切片	硬質	111	106	32	377.0		-22	重-49-22	第2層	焼切片	硬質	49	26	6	9.6	
-23	重-49-23	第2層	焼切片	硬質	108	72	52	268.4		-23	重-49-23	第2層	焼切片	硬質	45	43	14	25.5	
-24	重-49-24	第2層	焼切片	硬質	58	49	25	85.8		-24	重-49-24	第2層	焼切片	硬質	40	27	8	8.3	
-25	重-49-25	第2層	焼切片	硬質	114	80	21	233.2		-25	重-49-25	第2層	焼切片	硬質	37	29	11	8.7	
-26	重-49-26	第2層	焼切片	硬質	94	78	23	187.4		-26	重-49-26	第2層	焼切片	硬質	35	28	8	6.0	
-27	重-49-27	第2層	焼切片	硬質	93	54	19	93.9		-27	重-49-27	第2層	焼切片	硬質	47	43	14	25.6	
-28	重-49-28	第2層	焼切片	硬質	70	73	31	184.4		-28	重-49-28	第2層	焼切片	硬質	38	70	11	44.8	
-29	重-49-29	第2層	焼切片	硬質	87	67	30	229.0		-29	重-49-29	第2層	焼切片	硬質	30	36	5	2.8	
重-48-30	重-48-30	第2層	焼切片	硬質	75	64	30	156.7		-30	重-49-30	第2層	焼切片	硬質	69	26	8	13.6	
-31	重-49-31	第2層	焼切片	硬質	70	74	15	89.9		-31	重-49-31	第2層	焼切片	硬質	41	49	8	21.1	
-32	重-49-32	第2層	焼切片	硬質	75	61	27	135.1		-32	重-49-32	第2層	焼切片	硬質	49	31	22	30.6	
-33	重-49-33	第2層	焼切片	硬質						-33	重-49-33	第2層	焼切片	硬質	45	47	20	81.8	
-34	重-49-34	第2層	焼切片	硬質	81	76	18	131.0		-34	重-49-34	第2層	焼切片	硬質	54	33	15	138.0	焼付
-35	重-49-35	第2層	焼切片	硬質	69	69	24	143.7		-35	重-49-35	第2層	焼切片	硬質	74	24	15	34.5	
-36	重-49-36	第2層	焼切片	硬質	57	70	21	86.8		-36	重-49-36	第2層	焼切片	硬質	79	66	25	139.8	
-37	重-49-37	第2層	焼切片	硬質	64	21	92.1		-37	重-49-37	第2層	焼切片	硬質						
-38	重-49-38	第2層	焼切片	硬質	310	151	70	2155.0		-38	重-49-38	第2層	焼切片	硬質					
-39	重-49-39	第2層	焼切片	硬質						-39	重-49-39	第2層	焼切片	硬質					
-40	重-49-40	第2層	焼切片	硬質						-40	重-49-40	第2層	焼切片	硬質					
-41	重-49-41	第2層	焼切片	硬質						-41	重-49-41	第2層	焼切片	硬質					
-42	重-49-42	第2層	焼切片	硬質						-42	重-49-42	第2層	焼切片	硬質					
-43	重-49-43	第2層	焼切片	硬質						-43	重-49-43	第2層	焼切片	硬質					
-44	重-49-44	第2層	焼切片	硬質						-44	重-49-44	第2層	焼切片	硬質					
-45	重-49-45	第2層	焼切片	硬質						-45	重-49-45	第2層	焼切片	硬質					
-46	重-49-46	第2層	焼切片	硬質						-46	重-49-46	第2層	焼切片	硬質					
-47	重-49-47	第2層	焼切片	硬質						-47	重-49-47	第2層	焼切片	硬質					
-48	重-49-48	第2層	焼切片	硬質						-48	重-49-48	第2層	焼切片	硬質					
-49	重-49-49	第2層	焼切片	硬質						-49	重-49-49	第2層	焼切片	硬質					
-50	重-49-50	第2層	焼切片	硬質						-50	重-49-50	第2層	焼切片	硬質					
-51	重-49-51	第2層	焼切片	硬質						-51	重-49-51	第2層	焼切片	硬質					
-52	重-49-52	第2層	焼切片	硬質						-52	重-49-52	第2層	焼切片	硬質					
-53	重-49-53	第2層	焼切片	硬質						-53	重-49-53	第2層	焼切片	硬質					
-54	重-49-54	第2層	焼切片	硬質						-54	重-49-54	第2層	焼切片	硬質					
-55	重-49-55	第2層	焼切片	硬質						-55	重-49-55	第2層	焼切片	硬質					
-56	重-49-56	第2層	焼切片	硬質						-56	重-49-56	第2層	焼切片	硬質					
-57	重-49-57	第2層	焼切片	硬質						-57	重-49-57	第2層	焼切片	硬質					
-58	重-49-58	第2層	焼切片	硬質						-58	重-49-58	第2層	焼切片	硬質					
-59	重-49-59	第2層	焼切片	硬質						-59	重-49-59	第2層	焼切片	硬質					
-60	重-49-60	第2層	焼切片	硬質						-60	重-49-60	第2層	焼切片	硬質					
-61	重-49-61	第2層	焼切片	硬質						-61	重-49-61	第2層	焼切片	硬質					
-62	重-49-62	第2層	焼切片	硬質						-62	重-49-62	第2層	焼切片	硬質					
-63	重-49-63	第2層	焼切片	硬質						-63	重-49-63	第2層	焼切片	硬質					
-64	重-49-64	第2層	焼切片	硬質						-64	重-49-64	第2層	焼切片	硬質					
-65	重-49-65	第2層	焼切片	硬質						-65	重-49-65	第2層	焼切片	硬質					
-66	重-49-66	第2層	焼切片	硬質						-66	重-49-66	第2層	焼切片	硬質					
-67	重-49-67	第2層	焼切片	硬質						-67	重-49-67	第2層	焼切片	硬質					
-68	重-49-68	第2層	焼切片	硬質						-68	重-49-68	第2層	焼切片	硬質					
-69	重-49-69	第2層	焼切片	硬質						-69	重-49-69	第2層	焼切片	硬質					
-70	重-49-70	第2層	焼切片	硬質						-70	重-49-70	第2層	焼切片	硬質					
-71	重-49-71	第2層	焼切片	硬質						-71	重-49-71	第2層	焼切片	硬質					
-72	重-49-72	第2層	焼切片	硬質						-72	重-49-72	第2層	焼切片	硬質					
-73	重-49-73	第2層	焼切片	硬質						-73	重-49-73	第2層	焼切片	硬質					
-74	重-49-74	第2層	焼切片	硬質						-74	重-49-74	第2層	焼切片	硬質					
-75	重-49-75	第2層	焼切片	硬質						-75	重-49-75	第2層	焼切片	硬質					
-76	重-49-76	第2層	焼切片	硬質						-76	重-49-76	第2層	焼切片	硬質					
-77	重-49-77	第2層	焼切片	硬質						-77	重-49-77	第2層	焼切片	硬質					
-78	重-49-78	第2層	焼切片	硬質						-78	重-49-78	第2層	焼切片	硬質					
-79	重-49-79	第2層	焼切片	硬質						-79	重-49-79	第2層	焼切片	硬質					
-80	重-49-80	第2層	焼切片	硬質						-80	重-49-80	第2層	焼切片	硬質					
-81	重-49-81	第2層	焼切片	硬質						-81	重-49-81	第2層	焼切片	硬質					
-82	重-49-82	第2層	焼切片	硬質						-82	重-49-82	第2層	焼切片	硬質					
-83	重-49-83	第2層	焼切片	硬質						-83	重-49-83	第2層	焼切片	硬質					
-84	重-49-84	第2層	焼切片	硬質						-84	重-49-84	第2層	焼切片	硬質					
-85	重-49-85	第2層	焼切片	硬質						-85	重-49-85	第2層	焼切片	硬質					
-86	重-49-86	第2層	焼切片	硬質						-86	重-49-86	第2層	焼切片	硬質					
-87	重-49-87	第2層	焼切片	硬質						-87	重-49-87	第2層	焼切片	硬質					
-88	重-49-88	第2層	焼切片	硬質						-88	重-49-88	第2層	焼切片	硬質					
-89	重-49-89	第2層	焼切片	硬質						-89	重-49-89	第2層	焼切片	硬質					
-90	重-49-90	第2層	焼切片	硬質															

図番	品名	単位	分	材質	長さ	幅	高さ	備考	図番	品名	単位	分	材質	長さ	幅	高さ	備考
10-100	瓦葺								10-104	瓦葺							
10-101	瓦葺								10-105	瓦葺							
10-102	瓦葺								10-106	瓦葺							
10-103	瓦葺								10-107	瓦葺							
10-104	瓦葺								10-108	瓦葺							
10-105	瓦葺								10-109	瓦葺							
10-106	瓦葺								10-110	瓦葺							
10-107	瓦葺								10-111	瓦葺							
10-108	瓦葺								10-112	瓦葺							
10-109	瓦葺								10-113	瓦葺							
10-110	瓦葺								10-114	瓦葺							
10-111	瓦葺								10-115	瓦葺							
10-112	瓦葺								10-116	瓦葺							
10-113	瓦葺								10-117	瓦葺							
10-114	瓦葺								10-118	瓦葺							
10-115	瓦葺								10-119	瓦葺							
10-116	瓦葺								10-120	瓦葺							
10-117	瓦葺								10-121	瓦葺							
10-118	瓦葺								10-122	瓦葺							
10-119	瓦葺								10-123	瓦葺							
10-120	瓦葺								10-124	瓦葺							
10-121	瓦葺								10-125	瓦葺							
10-122	瓦葺								10-126	瓦葺							
10-123	瓦葺								10-127	瓦葺							
10-124	瓦葺								10-128	瓦葺							
10-125	瓦葺								10-129	瓦葺							
10-126	瓦葺								10-130	瓦葺							
10-127	瓦葺								10-131	瓦葺							
10-128	瓦葺								10-132	瓦葺							
10-129	瓦葺								10-133	瓦葺							
10-130	瓦葺								10-134	瓦葺							
10-131	瓦葺								10-135	瓦葺							
10-132	瓦葺								10-136	瓦葺							
10-133	瓦葺								10-137	瓦葺							
10-134	瓦葺								10-138	瓦葺							
10-135	瓦葺								10-139	瓦葺							
10-136	瓦葺								10-140	瓦葺							
10-137	瓦葺								10-141	瓦葺							
10-138	瓦葺								10-142	瓦葺							
10-139	瓦葺								10-143	瓦葺							
10-140	瓦葺								10-144	瓦葺							
10-141	瓦葺								10-145	瓦葺							
10-142	瓦葺								10-146	瓦葺							
10-143	瓦葺								10-147	瓦葺							
10-144	瓦葺								10-148	瓦葺							
10-145	瓦葺								10-149	瓦葺							
10-146	瓦葺								10-150	瓦葺							
10-147	瓦葺								10-151	瓦葺							
10-148	瓦葺								10-152	瓦葺							
10-149	瓦葺								10-153	瓦葺							
10-150	瓦葺								10-154	瓦葺							
10-151	瓦葺								10-155	瓦葺							
10-152	瓦葺								10-156	瓦葺							
10-153	瓦葺								10-157	瓦葺							
10-154	瓦葺								10-158	瓦葺							
10-155	瓦葺								10-159	瓦葺							
10-156	瓦葺								10-160	瓦葺							
10-157	瓦葺								10-161	瓦葺							
10-158	瓦葺								10-162	瓦葺							
10-159	瓦葺								10-163	瓦葺							
10-160	瓦葺								10-164	瓦葺							
10-161	瓦葺								10-165	瓦葺							
10-162	瓦葺								10-166	瓦葺							
10-163	瓦葺								10-167	瓦葺							
10-164	瓦葺								10-168	瓦葺							
10-165	瓦葺								10-169	瓦葺							
10-166	瓦葺								10-170	瓦葺							
10-167	瓦葺								10-171	瓦葺							
10-168	瓦葺								10-172	瓦葺							
10-169	瓦葺								10-173	瓦葺							
10-170	瓦葺								10-174	瓦葺							
10-171	瓦葺								10-175	瓦葺							
10-172	瓦葺								10-176	瓦葺							
10-173	瓦葺								10-177	瓦葺							
10-174	瓦葺								10-178	瓦葺							
10-175	瓦葺								10-179	瓦葺							
10-176	瓦葺								10-180	瓦葺							
10-177	瓦葺								10-181	瓦葺							
10-178	瓦葺								10-182	瓦葺							
10-179	瓦葺								10-183	瓦葺							
10-180	瓦葺								10-184	瓦葺							
10-181	瓦葺								10-185	瓦葺							
10-182	瓦葺								10-186	瓦葺							
10-183	瓦葺								10-187	瓦葺							
10-184	瓦葺								10-188	瓦葺							
10-185	瓦葺								10-189	瓦葺							
10-186	瓦葺								10-190	瓦葺							
10-187	瓦葺								10-191	瓦葺							
10-188	瓦葺								10-192	瓦葺							
10-189	瓦葺								10-193	瓦葺							
10-190	瓦葺								10-194	瓦葺							
10-191	瓦葺								10-195	瓦葺							
10-192	瓦葺								10-196	瓦葺							
10-193	瓦葺								10-197	瓦葺							
10-194	瓦葺								10-198	瓦葺							
10-195	瓦葺								10-199	瓦葺							
10-196	瓦葺								10-200	瓦葺							
10-197	瓦葺								10-201	瓦葺							
10-198	瓦葺								10-202	瓦葺							
10-199	瓦葺								10-203	瓦葺							
10-200	瓦葺								10-204	瓦葺							
10-201	瓦葺								10-205	瓦葺							
10-202	瓦葺								10-206	瓦葺							
10-203	瓦葺								10-207	瓦葺							
10-204	瓦葺								10-208	瓦葺							
10-205	瓦葺								10-209	瓦葺							
10-206	瓦葺								10-210	瓦葺							
10-207	瓦葺								10-211	瓦葺							
10-208	瓦葺								10-212	瓦葺							
10-209	瓦葺								10-213	瓦葺							
10-210	瓦葺								10-214	瓦葺							
10-211	瓦葺								10-215	瓦葺							
10-212	瓦葺								10-216	瓦葺							
10-213	瓦葺								10-217	瓦葺							
10-214	瓦葺								10-218	瓦葺							
10-215	瓦葺								10-219	瓦葺							
10-216	瓦葺								10-220	瓦葺							
10-217	瓦葺								10-221	瓦葺							
10-218	瓦葺								10-222	瓦葺							
10-219	瓦葺								10-223	瓦葺							
10-220	瓦葺								10-224	瓦葺							
10-221	瓦葺								10-225	瓦葺							

表6 包合層の掲載土器一覧 早期

(1)

図番号	発掘区	層位	同一層位出土土器・炭化物	点数	図番号	発掘区	層位	同一層位出土土器・炭化物	点数	図番号	発掘区	層位	同一層位出土土器・炭化物	点数
4-1	N-7-05-55 38-57-60	Ⅲ Ⅲb		16	7-33	N-7-04 N-7-27-37	Ⅲ下	M-7-04 N-7-36-47 H-6	21	9-74	N-7-47	Ⅲ		1
4-2	M-7-04-05 N-7-34-44 45 H-4、H-10	Ⅲ Ⅲ土	N-7-24-64	23	7-34	N-7-34-63 H-9	Ⅲ・炭 Ⅲ3-5		19	9-75	N-7-16	Ⅲ		1
4-3	N-7-34-44	Ⅲ・Ⅲb		11	7-35	N-7-13	Ⅲb上		4	9-76	N-7-45	Ⅲ		1
4-4	N-7-34-44 45-56-57 74	Ⅲ Ⅲa・b		25	7-36	N-7-55	Ⅲ		6	9-78	N-7-48	Ⅲ	H-11、N-7-59 -87	4
4-5	N-7-28	Ⅲ・Ⅲb		20	7-37	N-7-63	Ⅲb		2	9-79	N-7-45	Ⅲ下		1
4-6	N-7-13-36 37-39-44	Ⅲ Ⅲ下	N-7-57 H-13	23	7-38	N-7-44	Ⅲ下		1	9-80	N-7-24	Ⅲb		1
4-7	N-7-33-41 -43-44 H-10	Ⅲ土		28	7-39	N-7-34	Ⅲb上		1	9-81	N-7-59	不明		1
4-8	N-7-43-44 H-9	Ⅲ・Ⅲ	N-7-04-25 -33	35	7-40	N-7-54	Ⅲ		2	9-82a	N-7-13	Ⅲb上		6
4-9	N-7-55-56 -57	Ⅲ Ⅲa	N-7-46	14	7-41	N-7-44	Ⅲ下		1	9-82b	N-7-13	Ⅲ		1
5-10	N-7-44-45 -54-64	Ⅲ・Ⅲb Ⅲ下		21	7-42	N-7-50	Ⅲ		1	9-84a	N-7-06-08	Ⅲ		6
5-11	N-7-56-57 H-4 H-7、H-8	Ⅲ・Ⅲb Ⅲ土 Ⅲ1		11	7-43	N-7-33-34 -35-43-65	Ⅲ		7	9-84b	N-7-45	Ⅲ		1
5-12	N-7-56-56 -57	Ⅲ・Ⅲa Ⅲ下		23	7-44	N-7-05 H-6	Ⅲ Ⅲ2		8	9-85	N-7-63	Ⅲ		1
5-13	N-7-33-35 -45-75	Ⅲ		18	7-45	N-7-04	Ⅲ		4	9-87	N-7-44	Ⅲb		1
5-14	N-7-27-35	Ⅲ・Ⅲ下		35	7-46	N-7-25-53	Ⅲ・Ⅲa		6	9-88	N-7-24	Ⅲ		1
5-15	N-7-06-14 -25-27-28 -56	Ⅲ Ⅲb Ⅲ下	N-7-35-36 H-3、H-4	37	7-47	N-7-43	Ⅲ		8	9-89	N-7-25	Ⅲ		1
5-16	N-7-35-35 -56-57	Ⅲ・Ⅲb Ⅲb上	H-14	13	7-48	N-7-74	Ⅲ		4	10-90	N-7-63	Ⅲ		1
5-17	N-7-33-43 -45-54-55 H-14	Ⅲb Ⅲ土 Ⅲ土		14	8-49a	M-7-95 N-7-95	Ⅲ		10	N-7-04-05 N-7-35-36	Ⅲb上	P-9		17
5-18	N-6-75	Ⅲ		4	8-49b	M-7-96 N-7-96	Ⅲ		10-91	N-7-04	Ⅲ			5
5-19	N-7-14	Ⅲ		2	8-50a	M-7-85 N-7-85	Ⅲ		10-92a	N-7-44-47	Ⅲ・Ⅲ上			
5-20	N-7-15	Ⅲ		3	8-51	N-7-56-57	Ⅲ・Ⅲb上	H-4	12	92b	N-7-53	Ⅲb		
5-21	N-7-04-13 -16-34-35 -44-45-54 H-3 H-5 H-6、H-13 X-2 暗褐色土	Ⅲ Ⅲ土 Ⅲ土 Ⅲ1 Ⅲ2 Ⅲ土 Ⅲ土		64	8-52	N-7-24	Ⅲ		4	95c	N-7-44	Ⅲ		7
5-22	N-7-14	Ⅲ		2	8-53	N-7-24	Ⅲ		1	95d	N-7-43	Ⅲ		4
5-23	N-7-04	Ⅲ		4	8-54	N-7-43-53	Ⅲb		2	10-94	N-7-44	Ⅲ・Ⅲb		9
5-24	N-7-44-45 -64	Ⅲ Ⅲb		8	8-55	N-7-24	Ⅲb		1	11-97	N-7-56	Ⅲ	H-4、N-6-30 N-7-37	14
5-25	N-7-23-43	Ⅲ		7	8-56	N-7-53	Ⅲ	H-10、N-7-16 -43	6	11-98a	N-7-33	Ⅲ		
5-26	N-7-23-36 -38-39 H-9 H-14	Ⅲb Ⅲb Ⅲ土 Ⅲ土		100	8-57	N-7-37	Ⅲ		1	11-98b	N-7-33-45	Ⅲ		
5-27	N-7-33-43 -53	Ⅲa		5	8-58a	N-7-48	Ⅲ		3	98c	N-7-33	Ⅲb		
5-28	N-7-47-56	Ⅲ		6	8-58b	N-7-56	Ⅲ・Ⅲb		3	98d	N-7-43	Ⅲ		7
5-29	N-7-34-35 -44-45	Ⅲb		14	8-59a	M-7-44 N-7-44	Ⅲ Ⅲ	H-3、H-6 H-9	10-99a	N-7-55	Ⅲ			
5-30	N-7-67-96 N-7-15-25	Ⅲ Ⅲ		7	8-59b	N-7-04	Ⅲ	H-7-04-04 N-7-03	99b	N-7-03	Ⅲb上			
5-31	N-7-04	Ⅲ	M-7-95 N-7-36-47 H-6	21	8-59c	N-7-04	Ⅲ土		99c	N-7-24	Ⅲ			
5-32	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-59d	N-7-45	Ⅲ		17	10-100	N-7-37	Ⅲ		10
5-33	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-59e	N-7-45-55	Ⅲb上・Ⅲ		11	11-100	N-7-34	Ⅲ		11
5-34	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-60a	N-7-44-45	Ⅲb・Ⅲ		7	11-101	N-7-13	Ⅲb上		1
5-35	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-60b	N-7-45	Ⅲ		11-102	N-7-44-54 -55	Ⅲ			
5-36	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-61a	N-7-13	Ⅲ		3	11-103	N-7-44-54	Ⅲ・Ⅲa		2
5-37	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-61b	N-7-03	Ⅲ土		1	11-104	N-7-34	Ⅲ		1
5-38	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-62	N-7-45	Ⅲ		1	11-105	N-7-05	Ⅲ		2
5-39	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-63	N-7-57	Ⅲ		1	11-106	N-7-44-45	Ⅲ・Ⅲb		4
5-40	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-64	N-7-45	Ⅲ		1	12-107	M-7-97 N-7-16-18	Ⅲ		5
5-41	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-65	N-7-68	Ⅲ	H-11、N-7- 59	6	12-108	N-7-64	Ⅲ		3
5-42	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-66	N-7-44	Ⅲ		4	12-109	N-7-24	Ⅲ	H-9	3
5-43	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-67	N-7-43	Ⅲ		4	12-110	N-7-44	Ⅲb		1
5-44	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-68a	N-7-96	Ⅲ		4	12-111	N-7-34	Ⅲ		1
5-45	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-68b	N-7-96	Ⅲ		3	12-112	N-7-36	Ⅲ		1
5-46	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-69	N-7-05	Ⅲ		3	12-113	N-7-64	Ⅲb		1
5-47	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-70a	N-6-41	Ⅲ		2	12-114	N-7-75	Ⅲ・Ⅲ上		5
5-48	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-70b	N-6-41	Ⅲ		2	12-115	N-7-43-44 -53-54	Ⅲb上	H-2	12
5-49	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-71a	N-7-45	Ⅲ		3	13-116	N-7-35	Ⅲ		2
5-50	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-71b	N-7-44	Ⅲ下		3	13-117	N-7-06	Ⅲ下		1
5-51	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-71c	N-7-53	Ⅲ		3	13-118	N-7-55	Ⅲ		1
5-52	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-72a	N-7-45-55	Ⅲ		7	13-119	N-7-45	Ⅲ		2
5-53	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-72b	N-7-34	Ⅲ		1					
5-54	N-7-34-35 H-9	Ⅲ Ⅲ土		77	8-72c	N-7-53	Ⅲb		1					

(2)

図番号	発掘区	層位	同一層位出土 遺構・発掘区	点数	図番号	発掘区	層位	同一層位出土 遺構・発掘区	点数	図番号	発掘区	層位	同一層位出土 遺構・発掘区	点数
13-120a	N-7-47	Ⅲ			13-140	N-7-13	Ⅲ b 1		1	13-155	Ⅲ			
13-120b	N-7-47	Ⅲ		4	13-141	N-7-33	Ⅲ b 1		1	14-100a	N-7-58	Ⅲ・Ⅲ a		
13-121	N-6-50	Ⅲ		1	13-142	N-7-34	Ⅲ		1	14-100b	N-7-63	Ⅲ		
13-122	N-7-56	Ⅲ b		1	13-143	M-7-98・97			29	13-181	N-7-65	Ⅲ		8
13-123	N-7-44	Ⅲ		1	13-144	N-7-04	Ⅳ		3	13-182	M-7-52	Ⅲ		3
13-124	N-7-35	Ⅲ		1	14-144	N-7-56	Ⅲ		1	13-183	N-7-35	Ⅲ b		1
13-125	N-7-43	Ⅲ		1	14-145a	M-7-64	Ⅲ		1	13-184	N-7-34	Ⅲ		1
13-126	N-7-57	Ⅲ b		1	14-145b	M-7-64	Ⅲ		1	13-185	N-7-33	Ⅲ		1
13-127	N-7-55	Ⅲ b		1	14-146	N-7-24	Ⅲ		7	13-186	N-7-14	Ⅲ		1
13-128	N-7-23	Ⅲ b		1	14-147	M-7-94	Ⅲ b 2		1	13-187	N-7-54	Ⅲ b 2		1
13-129	N-7-24	Ⅲ b		1	14-148	N-7-15	Ⅲ		1	13-188	N-7-20	Ⅲ		1
13-130	N-7-56	Ⅲ b		1	14-149	M-7-94	Ⅲ・Ⅳ		2	13-189	N-7-45	Ⅲ		1
13-131	N-7-34	Ⅲ		1	14-150	N-7-43	Ⅲ		2	13-190	N-7-07	Ⅲ b		1
13-132	N-7-44・53	Ⅲ	N-7-33-43, P-7	6	14-151	N-7-56	Ⅲ		1	13-191	N-7-15	Ⅲ		1
13-133	N-7-43	Ⅲ		1	14-152	N-7-35・55	Ⅲ		3	13-192	N-7-05	Ⅲ		1
13-134	N-7-45	Ⅲ		1	14-153	N-7-14	Ⅲ		4	13-193	N-7-66	Ⅲ		1
13-135a	N-7-43	Ⅲ		1	14-154	N-7-04	Ⅲ b		1	13-194	N-7-23	Ⅲ b		1
13-135b	N-7-43	Ⅲ		3	14-155	N-7-25	Ⅲ		1	13-195	N-7-65	Ⅲ上		2
13-135c	N-7-33	Ⅲ		2	14-156	N-7-45・55	Ⅲ	H・2, H・5, N-7-36	7	13-196	N-7-36	Ⅲ上・Ⅲ		2
13-136	44・45	Ⅲ		2	14-157	N-7-26	Ⅲ		1	13-197	N-7-56	Ⅲ		1
13-137a	N-7-56	Ⅲ		1	14-158	N-7-37	Ⅲ		1	13-198	N-7-35	Ⅲ		1
13-137b	N-7-57	Ⅲ		6	14-159	N-7-66	Ⅲ		1					
13-137c	N-7-55	Ⅲ		2	14-160a	N-7-44	Ⅲ b		1					
13-138	N-7-48	Ⅲ		2										
13-139a	N-7-58	Ⅲ		2										
13-139b	N-7-78	Ⅲ上		2										

表7 包含層の掲載土器一覽 前期・晚期

図番号	発掘区	層位	同一層位出土 遺構・発掘区	点数	図番号	発掘区	層位	同一層位出土 遺構・発掘区	点数	図番号	発掘区	層位	同一層位出土 遺構・発掘区	点数	
16-1a	N-7-24	PD3			16-9	N-7-75	Ⅲ		1	16-22	N-7-64	Ⅲ		3	
	N-7-34	Ⅲ			16-10	N-7-24	PD3		1	16-29	N-7-72	Ⅲ		1	
1b	N-7-34	Ⅲ			16-11	N-7-25	Ⅲ		1	16-30	N-7-76	Ⅳ		3	
1c	N-7-34	Ⅲ			16-12	N-7-13	Ⅲ a		1	16-31	N-7-14・24	Ⅲ		5	
1d	N-7-24	Ⅲ			16-13	N-7-35	Ⅲ		2	16-32	N-7-83	Ⅲ		1	
1e	N-7-34	Ⅲ			16-14	N-7-03	Ⅲ		3	16-33	N-7-76	Ⅳ		2	
1f	N-7-34	Ⅲ		11	16-15	N-7-03・13	Ⅲ・Ⅲ a		3	17-34	M-7-45・53	Ⅲ		5	
16-2	N-7-34	Ⅲ		2	16-16	N-7-34	Ⅲ		2		・83・45	Ⅲ下1			5
16-3a	N-7-03	PD3			16-17	N-7-14	Ⅲ		2	17-35	N-7-33・54	Ⅲ		2	
3b	N-7-03	Ⅲ			16-18	M-7-73	PD3下		25	17-36	N-7-34	Ⅲ		4	
3c	N-7-04	Ⅲ			16-19	N-7-03・13	Ⅲ a		2	17-37	N-7-75	PD3		1	
3d	N-7-03	PD3			16-20	N-7-53	Ⅲ		1	17-38	N-7-64	Ⅲ		2	
3e	N-7-03	PD3			16-21	N-7-75	PD3		1	17-39	N-7-33	Ⅲ		2	
3f	N-7-23	PD3		8	16-22a	N-7-34	Ⅲ		1	17-40	N-7-75	Ⅲ		1	
16-4	N-7-15	Ⅲ		1	22a	N-7-34	Ⅲ		2	17-41	N-7-74	Ⅲ		1	
16-5	N-7-13	Ⅲ a		1	16-23	N-7-66	Ⅲ		1	17-42	M-7-41	PD2直下		3	
16-6a	N-7-24	PD3			16-24	N-7-75	Ⅲ		1	17-43	M-7-88	I		1	
6b	N-7-34	Ⅲ		5	16-25	N-7-75	Ⅲ		1	17-44	表層			1	
16-7	N-7-03	Ⅲ		1	16-26	N-7-03	Ⅲ		1						
16-8	N-7-03	Ⅲ		1	16-27	N-7-03	Ⅲ		1						

表8 包合層の掘削石器一覧

調査号	遺物番号	種別	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考	調査号	遺物番号	種別	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考	
調査22	N-7-52-140	石器	石	硬質	20	12	3	0.56		調査26	N-7-17-13	石器	陶器	硬質	35	52	48.9	
調査27	N-7-14-214	石b	石	硬質	23	14	3	0.73		調査28	N-7-52-34	石器	陶器	硬質	72	47	34.3	
調査28	N-7-30-18	石器	石	硬質	24	16	4	2.03		調査29	N-7-45-200	石器	陶器	硬質	78	51	61.7	
調査34	N-7-33-6	石器	石	硬質	18	11	3	0.61		調査32	N-7-54-2	石器	陶器	硬質	92	55	19.80.5	
調査35	N-7-36-26	石器	石	硬質	30	19	4	1.40		調査33	N-7-20-27	石器	陶器	硬質	71	55	11.42.0	
調査36	N-7-25-36	石b	石	硬質	33	19	5	2.14		調査34	N-7-35-350	石器	陶器	硬質	73	45	11.30.1	
調査37	N-7-25-38	石器	石	硬質	28	13	3	0.73		調査35	N-7-42-124	石器	陶器	硬質	37	36	7.7.9	
調査38	N-7-24-202	石器	石	硬質	21	12	3	1.00		調査36	N-7-34-814	石器	陶器	硬質	56	69	10.55.5	
調査39	N-7-24-401	石器	石	硬質	42	18	6	4.02		調査37	N-7-54-58	石a	陶器	硬質	58	56	12.41.0	
調査39	N-7-58-37	石器	石	硬質	41	19	5	3.28		調査38	N-7-13-2	石器	陶器	硬質	85	85	55.9	
調査41	N-7-94-1	石器	石	硬質	35	4	4	1.71		調査39	N-7-20-135	石器	陶器	硬質	79	49	21.72.4	
調査42	N-7-64-18	石b	石	硬質	22	13	3	0.84		調査40	N-7-52-188A	石器	陶器	硬質	59	80	37.7	
調査43	N-7-28-30	石器	陶器	20	12	4	1.92		調査41	N-7-84-137	石器	陶器	硬質	73	102	117.3		
調査44	N-7-40-2	石器	石	硬質	36	16	4	1.59		調査42	N-6-77-1	石器	陶器	硬質	78	90	14.68.8	
調査45	N-7-52-154	石器	石	硬質	33	12	3	1.14		調査43	N-7-52-35	石器	陶器	硬質	48	105	137.74.0	
調査46	N-7-97-94	石器	石	硬質	18	18	4	0.90		調査44	N-7-79-1	P-D-3	陶器	硬質	54	86	25.80.0	
調査47	N-7-49-5	石器	石	硬質	43	16	5	2.35		調査45	N-7-52-432	石器	陶器	硬質	50	37	11.31.1	
調査48	N-7-34-132	石器	石	硬質	21	13	4	1.42	横け	調査46	N-7-64-87	石器	陶器	硬質	82	90	15.96.9	
調査49	N-7-43-172	石器	石	硬質	88	25	8	18.77	河内黒色砂岩物	調査47	N-6-44-1	石器	陶器	硬質	40	85	8.27.0	
調査50	N-7-58-53	石器	石	硬質	24	13	8	1.70		調査48	N-7-44-315	石器	陶器	硬質	81	113	21.120.5	
調査51	N-7-43-23	石器	石	硬質	28	18	2	1.01		調査49	N-7-44-435	石器	焼入石器	硬質	70	59	19.78.4	
調査52	N-7-29-173	石器	石	硬質	32	19	3	0.71		調査50	N-7-30-29	石器	焼入石器	硬質	49	51	19.23.3	背面に磨痕あり
調査53	N-7-33-796	石器	石	硬質	44	15	8	4.19		調査51	N-7-64-180	石器	焼入石器	硬質	54	56	16.58.9	
調査54	N-7-13-47	石a	石	硬質	47	22	13	8.58		調査52	N-7-55-348	石器	焼入石器	硬質	75	48	12.33.3	
調査55	N-7-26-204	石器	石	硬質	37	24	5	5.92		調査53	N-7-56-458	石器	焼入石器	硬質	89	53	27.75.6	
調査56	N-7-25-198	石器	石	硬質	38	13	4	1.06	石を改作	調査54	N-7-40-49	石器	焼入石器	硬質	82	37	19.18.6	
調査57	N-7-37-114	石器	陶器	60	39	11	27.56		調査55	N-7-42-3	石器	石	硬質	58	37	6.83.3		
調査58	N-7-45-388	石b	陶器	73	58	10	87.87		調査56	N-7-25-29	石器	石	硬質	55	56	7.9.38		
調査59	N-7-25-88	石器	陶器	93	36	12	49.02		調査57	N-7-27-29	石器	石	硬質	43	39	5.5.35		
調査60	N-7-52-264	石b	陶器	95	49	14	62.17		調査58	N-7-25-42	石器	石	硬質	85	25	8.7.94		
調査61	N-7-44-775	石b	陶器	103	43	106	75.48		調査59	N-7-16-9	石器	石	硬質	38	19	3.1.93		
調査62	N-7-35-274	石器	陶器	83	146	16	94.69		調査60	N-7-34-22	石器	石	硬質	35	29	16.8.43		
調査63	N-7-45-5	石器	陶器	49	40	18	34.54		調査61	N-7-15-84	石b	石	硬質	59	27	4.8.80		
調査64	N-7-45-425	石器	陶器	79	52	12	30.12		調査62	N-7-43-3	石a	石	硬質	88	58	8.16.05		
調査65	N-7-40-54	石器	陶器	82	59	14	27.46		調査63	N-7-13-43	石a	石	硬質	73	39	13.22.87		
調査66	N-7-45-401	石器	陶器	52	48	5	14.1		調査64	N-7-52-229	石器	石	硬質	94	26	5.11.99		
調査67	N-7-25-177	石器	陶器	54	74	17	71.1		調査65	N-7-44-141	石b	石	硬質	61	31	5.6.36		
調査68	N-7-58-302	石器	陶器	59	58	10	23.5		調査66	N-7-15-128	石b	石	硬質	56	36	7.7.87		
調査69	N-7-54-121	石器	陶器	53	81	20	48.5		調査67	N-7-40-418	石器	石	硬質	53	50	19.4.95	背面に磨痕あり	
調査70	N-7-52-52	石器	陶器	72	45	20	70.8		調査68	N-7-13-340	陶器	石	硬質	43	32	8.5.42		
調査71	N-7-37-42	石器	陶器	71	53	14	42.4		調査69	N-7-34-219	石器	石	硬質	49	18	4.4.45		
調査72	N-7-14-137	石器	陶器	51	45	14	25.9		調査70	N-7-46-184	石器	石	硬質	81	15	4.3.87		
調査73	N-7-28-47	石器	陶器	59	43	9	18.1		調査71	N-7-37-17	石器	石	硬質	79	15	4.2.33		
調査74	N-7-45-1003	石器	陶器	84	79	14	86.1		調査72	N-7-43-33	石器	石	硬質	55	23	5.5.62		
調査75	N-7-58-52	石器	陶器	68	104	31	221.4		調査73	N-7-40-400	陶器	石	硬質	52	18	4.3.95		
調査76	N-7-13-127	石器	陶器	47	25	5	7.2		調査74	N-7-47-147	石器	石	硬質	37	22	3.1.97		
調査77	N-7-44-454	石器	陶器	39	24	4	3.9		調査75	N-7-34-152	石a	石	硬質	22	8	3.0.80		
調査78	N-7-24-348	石器	陶器	42	21	15	8.6		調査76	N-7-25-787	石器	石	硬質	31	18	3.1.44		
調査79	N-7-13-250	陶器	硬質	44	50	12	21.0		調査77	N-7-52-2835	石器	石	硬質	28	17	2.0.83		
調査80	N-7-43-105	石器	陶器	57	39	11	16.4		調査78	N-7-52-2835	石器	石	硬質	32	21	3.1.58		
調査81	N-7-25-3	石器	陶器	17	59	15	50.8		調査79	N-7-37-16	石器	石	硬質	37	29	5.2.97		
調査82	N-7-64-15	石器	陶器	68	51	19	80.0		調査80	N-9-935	石b	石	硬質	47	19	5.4.85		
調査83	N-7-37-30	石器	陶器	128	42	19	83.3		調査81	N-7-25-300	石器	石	硬質	56	22	6.5.08		
調査84	N-7-55-134	石器	陶器	89	36	17	50.8		調査82	N-7-34-518	石b	石	硬質	28	34	3.3.87		
調査85	N-7-47-20	石a	陶器	44	39	11	22.5		調査83	N-7-13-177	石a	石	硬質	38	39	14.12.87		
調査86	N-7-64-48	石器	陶器	58	35	9	17.6		調査84	N-7-54-804	石b	石	硬質	17	10	2.0.30		
調査87	N-7-43-94	石器	陶器	87	50	14	88.0		調査85	N-7-44-183a	石b	石	硬質	33	16	3.0.87		
調査88	N-7-14-88	石器	陶器	100	50	18	55.6		調査86	N-7-44-240	陶器	石	硬質	31	11	3.1.09		

図番号	建物番号	層位	分類	材質	長さm	幅m	高さm	備考	図番号	建物番号	層位	分類	材質	長さm	幅m	高さm	備考	
図001	N-7-25-25	瓦葺	未分類	硬質	87	59	14	45.59		図002	N-7-26-365	瓦葺	屋根石葺	化粧	43	17	6	4.14
図003	N-7-26-30	瓦葺	未分類	硬質	55	31	7	14.57		図004	N-7-25-25	瓦葺	屋根石葺	化粧	50	42	12	42.40
図005	N-7-14-51	瓦葺	未分類	硬質	79	48	15	55.78		図006	N-7-15-51	瓦葺	屋根石葺	化粧	82	41	14	63.38
図007	N-7-06-86	瓦葺	未分類	硬質	48	39	8	7.90		図008	N-7-4-303	瓦葺	屋根石葺	化粧	142	43	22	163.90
図009	N-7-13-086	瓦葺	未分類	硬質	53	42	10	25.78			N-7-52-82	瓦葺						
図011	N-7-28-2	瓦葺	未分類	硬質	84	75	19	81.82		図013	N-7-28-141	瓦葺	屋根石葺	化粧	72	64	21	182.80
図015	N-7-31-283	瓦葺	未分類	硬質	48	39	17	30.40		図015	N-7-28-35	瓦葺	屋根石葺	化粧	50	40	23	61.82
図019	N-7-43-439	瓦葺	未分類	硬質	40	28	8	8.10		図019	N-7-38-320	瓦葺	屋根石葺	化粧	87	87	28	236.6
図021	N-7-34-38	瓦葺	未分類	硬質	71	50	15	47.28		図021	N-7-45-46	瓦葺	屋根石葺	化粧	72	26	15	23.6
図023	N-7-44-858	瓦葺	未分類	硬質	37	25	7	5.58		図023	N-7-45-17	瓦葺	屋根石葺	化粧	31	13	12	9.3
図025	N-7-25-31	瓦葺	未分類	硬質	42	24	4	3.60		図025	N-7-25-18	瓦葺	屋根石葺	化粧	58	22	19	28.5
図027	N-7-35-35	瓦葺	未分類	硬質	87	70	21	124.3		図027	N-7-24-431	瓦葺	屋根石葺	化粧	90	20	17	35.2
図029	N-7-14-2	瓦葺	未分類	硬質	52	42	12	16.3			N-7-58-112	瓦葺						
図031	N-7-24-650	瓦葺	未分類	硬質	59	24	16	24.3		図031	N-7-25-88	瓦葺	屋根石葺	化粧	108	24	24	83.0
図033	N-7-15-31	瓦葺	未分類	硬質	47	32	6	7.3		図033	N-7-54-19	瓦葺	屋根石葺	化粧	70	88	23	134.6
図035	N-7-27-224	瓦葺	未分類	硬質	94	58	12	52.4		図035	N-7-45-238	瓦葺	屋根石葺	化粧	112	136	30	482.0
図037	N-7-13-1	瓦葺	未分類	硬質	48	36	13	18.9		図037	N-7-34-421	瓦葺	屋根石葺	化粧	128	78	23	247.2
図039	N-7-37-295	瓦葺	未分類	硬質	85	37	10	44.7		図039	N-7-37-372	瓦葺	屋根石葺	化粧	95	62	11	117.1
図041	N-7-25-31	瓦葺	未分類	硬質	43	19	5	4.7	石龜少	図041	N-7-54-102	瓦葺	屋根石葺	化粧	163	101	33	212.0
図043	N-7-37-33	瓦葺	未分類	硬質	64	35	5	18.1	石龜少	図043	N-7-34-238	瓦葺	屋根石葺	化粧	99	78	32	263.4
図045	N-7-58-37	瓦葺	未分類	硬質	74	37	12	27.8	赤井田川	図045	N-7-14-279	瓦葺	たき石	化粧	127	69	32	247.4
図047	N-4-282C	瓦葺	未分類	硬質	122	58	18	68.9		図047	N-7-18-159	瓦葺	たき石	化粧	160	85	37	241.4
図049	N-7-34-285	瓦葺	未分類	硬質	23	12	3	6.8		図049	N-7-18-138	瓦葺	たき石	化粧	139	63	33	277.4
図051	N-7-52-524	瓦葺	未分類	硬質	42	24	5	5.1		図051	N-7-42-136	瓦葺	たき石	化粧	155	80	23	254.1
図053	N-7-17-378	瓦葺	未分類	硬質	42	24	5	5.1		図053	N-7-15-94	瓦葺	たき石	化粧	89	51	39	201.5
図055	N-7-25-38	瓦葺	未分類	硬質	51	28	10	12.0		図055	N-7-25-22	瓦葺	たき石	化粧	86	76	34	300.4
図057	N-7-23-48	瓦葺	未分類	硬質	82	38	10	19.3		図057	N-7-25-260	瓦葺	たき石	化粧	93	74	33	241.4
図059	N-7-17-116	瓦葺	未分類	硬質	87	59	12	21.3		図059	N-7-25-23	瓦葺	たき石	化粧	52	44	37	127.7
図061	N-7-44-802	瓦葺	未分類	硬質	128	37	14	86.0	両端中央に古く割道	図061	N-7-42-113	瓦葺	すり石	化粧	102	118	46	299.0
図063	N-7-64-394	瓦葺	未分類	硬質	146	61	19	182.9			N-7-42-185	瓦葺						
	N-7-65-35	瓦葺									N-7-42-425	瓦葺						
図065	N-7-13-443	瓦葺	未分類	硬質	82	40	18	56.0		図065	N-7-42-228	瓦葺	すり石	化粧	95	107	38	600.5
図067	N-7-34-846	瓦葺	未分類	硬質	85	58	18	81.2		図067	N-7-25-45	瓦葺	すり石	化粧	86	105	39	543.0
図069	N-7-43-48	瓦葺	未分類	硬質	83	45	17	35.5		図069	N-7-25-45	瓦葺	すり石	化粧	81	103	39	513.0
図071	N-7-25-39	瓦葺	屋根石葺	化粧	67	30	7	20.87			N-7-25-290	瓦葺						
図073	N-7-54-36	瓦葺	屋根石葺	化粧	47	20	10	9.75		図073	N-7-14-322	瓦葺	すり石	化粧	115	80	33	525.4
図075	N-7-15-78	瓦葺	下葺	化粧	50	19	7	12.84		図075	N-7-34-456	瓦葺	すり石	化粧	71	102	28	228.6
図077	N-7-45-418	瓦葺	屋根石葺	化粧	54	41	12	26.1	掛け赤土	図077	N-7-42-319	瓦葺	すり石	化粧	85	130	33	473.4
図079	N-7-45-127	瓦葺	屋根石葺	化粧	65	31	10	34.07	掛け赤土	図079	N-7-28-133	瓦葺	すり石	化粧	88	138	33	474.0
図081	N-7-18-38	瓦葺	屋根石葺	化粧	74	29	13	44.85	掛け赤土	図081	N-7-42-40	瓦葺	すり石	化粧	84	168	55	553.0
図083	N-7-27-17	瓦葺	屋根石葺	化粧	47	40	12	37.82		図083	N-7-77-4	瓦葺	すり石	化粧	94	139	41	728.0
図085	N-7-47-48	瓦葺	屋根石葺	化粧	100	40	11	67.25		図085	N-7-14-181	瓦葺	すり石	化粧	88	208	51	1,486
	N-7-48-2	瓦葺							図087	N-7-29-63A	瓦葺	すり石	化粧	75	142	34	453.8	
図089	N-7-44-802	瓦葺	屋根石葺	化粧	100	44	18	121.18		図089	N-7-42-1	瓦葺	すり石	化粧	87	170	42	745.0
図091	N-7-45-181	瓦葺	屋根石葺	化粧	153	51	22	183.0	両端・端部に黒色付物	図091	N-7-28-31	瓦葺	すり石	化粧	76	157	42	705.0
	N-7-34-145	瓦葺							図093	N-7-13-427	瓦葺	すり石	化粧	161	88	37	1,229	
図095	N-7-15-15	瓦葺	屋根石葺	化粧	115	48	18	134.88		図095	N-7-27-17	瓦葺	すり石	化粧	102	145	40	231.0
図097	N-7-56-1	瓦葺	屋根石葺	化粧	102	54	19	117.83		図097	N-7-45-4	瓦葺	すり石	化粧	85	152	44	587.6
	N-7-56-40A	瓦葺							図099	N-7-45-4	瓦葺	すり石	化粧	82	189	38	1,189	
図101	N-7-53-194	瓦葺	屋根石葺	化粧	138	35	19	200.36		図101	N-7-54-19	瓦葺	すり石	化粧	96	170	54	822
	N-7-55-182	瓦葺							図103	N-7-28-126	瓦葺	すり石	化粧	78	142	51	880	
	N-7-52-187	瓦葺							図105	N-7-44-546	瓦葺	すり石	化粧	55	108	53	714	
図107	N-7-25-12	瓦葺	屋根石葺	化粧	59	50	12	75.00	掛け赤土	図107	N-7-36-403	瓦葺	すり石	化粧	54	180	47	680.0
図109	N-7-13-443	瓦葺	屋根石葺	化粧	73	54	22	121.14		図109	N-7-42-48	瓦葺	すり石	化粧	58	155	58	619.4
図111	N-7-44-2	瓦葺	屋根石葺	化粧	141	13	27	327.0	両端・端部に黒色付物		N-7-42-417	瓦葺						
	N-7-64-139A	瓦葺	下葺						図113	N-7-12-104	瓦葺	すり石	化粧	60	148	52	940	
図115	N-7-42-45	瓦葺	屋根石葺	化粧	216	35	27	470.0		図115	N-7-47-43	瓦葺	底石	化粧	150	61	28	40.18
	N-7-52-77	瓦葺								N-7-76-1	P-D							

